

松山市文化財調査報告書20

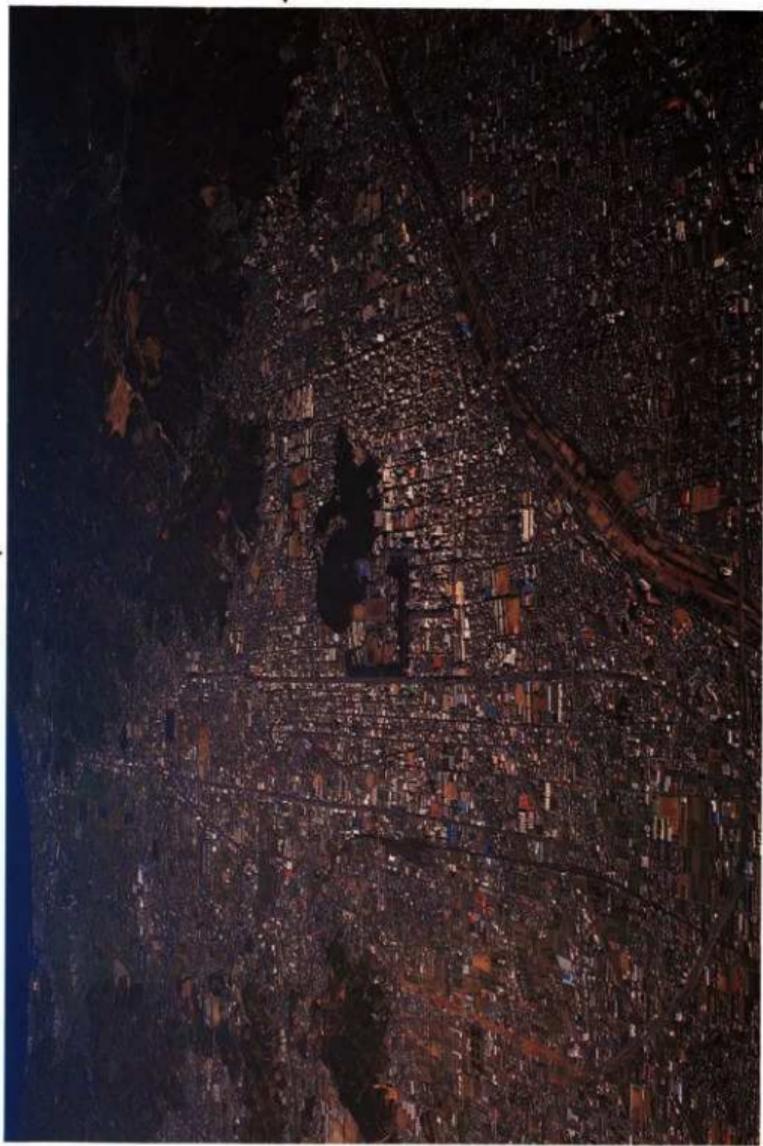
松山市道後城北遺跡群

# 松山大学構内遺跡

— 第2次調査 —

1991

松 山 大 学  
松 山 市 教 育 委 員 会  
松山市立埋蔵文化財センター



巻頭図版1 道後城北遺跡遠景（南より）

## 序

このほど、松山大学構内の遺跡調査に係る調査報告書が、本調査の関係者の方々のご尽力のご協力によって刊行される運びとなりましたこと、まことに、ご同慶の至りです。

松山大学の本校キャンパスは、松山平野の北部で松山城城山のすぐ北に位置して、愛媛大学城北キャンパスの文京遺跡および松山北高校遺跡に接しております。この辺り一帯は、「道後城北遺跡群」と呼ばれ、縄文後期から中世にかけての遺跡が密集する地域でありまして、かつて、多くの平形銅剣が出土し、また、弥生時代における松山平野の主要な集落の一つであったことが明らかにされている地域であるといわれております。

今回の調査は、松山大学の教室棟新築工事に伴い、平成元年11月から平成2年2月までの間、松山市教育委員会および松山市立埋蔵文化財センターによって行われたものであります。この調査によって、弥生後期から古墳時代にいたる各時期における典型的な住居址が検出されて、これらの時期における集落遺跡であることが確認されたそうです。これらは、道後城北遺跡群の集落構造解明のための好資料となるとともに、松山平野における弥生時代から古墳時代にいたる竪穴式住居址研究の基礎資料および集落研究の基礎資料を提供するものとなりましたほか、縄文後期から弥生時代、さらに中世にいたるまでの各時期の上器多数の出土によって、松山平野における弥生上器の基準資料を得ることができ、さらには、瀬川内の交流・交易研究の一助もなり、総じて松山平野に係る歴史的解明と考古学研究に多くの寄与するところがありましたようで、その成果に敬意を表し、拍手をおくるとともに、調査に協力させて頂きました本大学としましても、その甲斐があったものと、密かに喜んでいる次第であります。

私は、考古学には、全くの素人でありますので、話が科学の世界を飛び出すのですが、万葉集に収められているあの有名な「熟田津に舟乗りせんと月待てば……」の作者である額田王は7世紀の中頃・古墳時代の末期を生きた人ですので、もし、熟田津が、いわれるように、松山に近い海辺の船着き場であったといたしますと、あるいは、僕の兵を連れた彼女が、このたびの調査によって明らかになった、小川のほとりに並ぶ住居の傍を訪れたかも知れないなどというロマンをも感じています。

終わりにりましたが、今回の調査に携わられた関係者の方々、とくに調査の指揮に当たられた方および分析を担当された方に対し、そのご労苦をねぎらい、また、謝意を表する次第であります。

平成3年3月31日

松山大学長  
神森 智

## 序

松山城の北側一帯には県下を代表する弥生遺跡で知られる道後城北遺跡が存在致しております。この城北遺跡は、松山大学を始め松山北高等学校、愛媛大学、市立東雲小学校、同東中学校、日赤病院などがある文京地区を中心にした広範囲にその集落展開がなされていることと合わせ、愛媛大学、南海放送、道後今市の各遺跡からは縄文後期の土器発見により城北遺跡の上限がこの時期まで遡ることが解かってきました。また遺跡の性格としても明治42年の道後今市遺跡からの平形銅剣10数口発見や昭和63年2月の祝谷六丁場遺跡からの平形銅剣出土があり、これらにより城北遺跡には銅剣を持つ有力集団の存在性と合わせその集団居住地域の調査も重要であります。

本遺跡の調査では、弥生期の住居跡、弥生から古墳期にかけて変遷期の住居跡、古墳期の住居跡が発見され、住居跡としては数段階に時期区分されるもの大きく分けて古墳期のものが中心的に構成されていることが解かりました。

これらは東面の弥生の生活に対し、西面の本大学城は古墳期の生活へ集落展開する様相が示されました。また、出土物の分析からその時期区分を含め他地域との交流の背景が解かるなど今回の調査からはその他多くの成果を得ました。

このような貴重な成果が得られましたのも松山大学の埋蔵文化財に対するご理解と、ご協力の賜物であります。また調査指導いただいた愛媛大学下條信行教授のほか、ご協力いただいた関係各位に厚くお礼申し上げる次第であります。

本書が学術、教育文化の向上、文化財保護、さらに今後の調査研究の一助にご利用いただければ幸いです。

平成3年3月31日

松山市教育長  
池田尚郷

## 例 言

1. 本書は、松山市教育委員会（松山市立埋蔵文化財センター）が平成元年11月～平成二年2月に実施した松山市文京町松山大学講義棟新設に伴う事前調査の報告書である。
2. 遺構の実測は、梅木謙一の責任のもと、宮内慎一が中心に行ない、愛媛大学、松山大学の学生他の援助を受けた。遺構の撮影は梅木謙一、宮内慎一、大西朋子が行なった。
3. 遺構は呼称を略号化して記述した。竪穴式住居：SB、溝：SD、土壇：SK、自然流路：SR、ピット：SP、掘立柱建物：掘立である。
4. 遺物の実測・製図、遺構の製図は、梅木謙一、宮内慎一、水口あいを、緑尚美、岡根なおみ、工藤賢稔、高橋恒、山本土、栗林千恵、白石聖子、瀬戸恭子、藤井宏枝、藤沢真美、森田晶子が行った。遺物の撮影は、大西朋子が担当した。
5. 遺構図の縮尺は、竪穴式住居址は1/60で統一し、他は縮分値をスケール下に注記した。遺物図は、弥生式土器・土師器・須恵器1/4、石器1/3、土製品1/2、ガラス製品等大を原則とし、他は縮分値をスケール下に記した。
6. 本書に使用した方位はすべて磁北である。
7. 本書にかかわる遺物・記録類は、松山市立埋蔵文化財センターで収蔵保管している。
8. 本書の執筆は、梅木謙一、宮内慎一、池田学、相田則美、山之内志郎が分担執筆した。執筆者名は各章の初めに記し、必要に応じ節・項・文末にも記載した。関連資料の調査は、相原浩二、武正良浩が行った。浄書は、小笠原善治、水口あいを、藤沢真美、大森薫が担当した。
9. 科学分析では、奈良国立文化財研究所肥塚隆保氏にガラス製品を、福岡市埋蔵文化財センター本山光子氏に赤色顔料の鑑定・分析を頂いた。記して感謝申し上げます。
10. 付論では、愛媛大学教授下條信行先生より玉稿を頂いた。記して感謝申し上げます。
11. 本書の編集は梅木謙一が行い、田城武志、宮内慎一、水口あいをの協力を得た。

# 本文目次

I	調査に至る経過	
1	調査に至る経過	1
2	調査組織	2
II	遺跡の概要	
1	遺跡の立地	3
2	歴史的環境	3
III	調査の概要	
1	調査の経緯	12
2	層位	13
3	遺構と遺物	19
(1)	竪穴式住居址	19
1)	弥生時代	19
2)	古墳時代前期	51
3)	古墳時代中期	54
4)	古墳時代後期	69
(2)	孤立柱建物址	75
(3)	溝・自然流路址	76
(4)	土壌	76
(5)	その他の遺構と遺物	76
4	小結	79
IV	科学分析と保存処理	
1	古代松山平野の赤色顔料—弥生時代編(1)—	104
2	松山大学構内遺跡出土の鉄器処理	106
V	考 察	
1	松山平野の弥生後期土器—編年試案—	107
2	道後平野における古墳時代の集落内祭祀	119
3	松山平野の竪穴式住居址(I)—平面形態変遷の予備考案—	125
4	道後城北遺跡群の変遷—立地とその画期—	129
VI	松山大学構内遺跡2次調査の成果と課題	135
VII	付論 松山平野と道後城北の弥生文化—西瀬戸内の村外交流—	137

# 挿 図 目 次

第1図	第1次調査地土層図(縮尺1/20) .....	1
第2図	松山大学構内遺跡周辺的主要遺跡分布図(縮尺1/25000) .....	5
第3図	松山大学構内遺跡周囲の遺跡分布図(縮尺1/16000) .....	7
第4図	現地説明会 .....	12
第5図	調査区位置図(縮尺1/4000) .....	13
第6図	調査地区割図(縮尺1/600) .....	14
第7図	西壁土層図(縮尺1/40) .....	15
第8図	遺構配置図(縮尺1/200) .....	17
第9図	S B 2 測量図(縮尺1/60) .....	19
第10図	S B 3 測量図(縮尺1/60) .....	21
第11図	S B 3 炉測量図(縮尺1/20) .....	22
第12図	S B 3 出土遺物実測図(1)(縮尺1/4) .....	23
第13図	S B 3 出土遺物実測図(2)(縮尺1/3・1/2) .....	24
第14図	S B 4 測量図(縮尺1/60) .....	25
第15図	S B 4 出土遺物実測図(縮尺1/4) .....	26
第16図	S B 7 出土遺物測量図(縮尺1/60) .....	29
第17図	S B 7 測量図(縮尺1/60) .....	31
第18図	S B 7 炉測量図(縮尺1/20) .....	31
第19図	S B 7 出土遺物実測図(1)(縮尺1/4) .....	34
第20図	S B 7 出土遺物実測図(2)(縮尺1/4) .....	35
第21図	S B 7 出土遺物実測図(3)(縮尺1/4) .....	36
第22図	S B 7 出土遺物実測図(4)(縮尺1/4) .....	37
第23図	S B 7 出土遺物実測図(5)(縮尺1/4) .....	38
第24図	S B 7 出土遺物実測図(6)(縮尺1/4) .....	39
第25図	S B 7 出土遺物実測図(7)(縮尺1/4) .....	40
第26図	S B 7 出土遺物実測図(8)(縮尺1/4) .....	41
第27図	S B 7 出土遺物実測図(9)(縮尺1/4) .....	42
第28図	S B 7 出土遺物実測図(10)(縮尺1/4) .....	43
第29図	S B 7 出土遺物実測図(11)(縮尺1/4) .....	44
第30図	S B 7 出土遺物実測図(12)(縮尺1/4) .....	45
第31図	S B 7 出土遺物実測図(13)(縮尺1/4) .....	46
第32図	S B 7 出土遺物実測図(14)(縮尺1/4) .....	47

第33図	S B 7 出土遺物実測図 (15) (縮尺 1/4) .....	48
第34図	S B 7 出土遺物実測図 (16) (縮尺 1/4) .....	49
第35図	S B 7 出土遺物実測図 (17) (縮尺 1/4・1/1) .....	50
第36図	S B 10 測量図 (縮尺 1/60) .....	51
第37図	S B 10 出土遺物実測図 (縮尺 1/4) .....	53
第38図	S B 1 測量図 (縮尺 1/60) .....	54
第39図	S B 1 カマド測量図 (縮尺 1/20) .....	55
第40図	S B 1 内 S P 12 測量図 (縮尺 1/20) .....	56
第41図	S B 1 出土遺物実測図 (1) (縮尺 1/4) .....	58
第42図	S B 1 出土遺物実測図 (2) (縮尺 1/4・1/2) .....	59
第43図	S B 6・S B 15 測量図 (縮尺 1/60) .....	60
第44図	S B 6 出土遺物実測図 (縮尺 1/4・1/2) .....	61
第45図	S B 11 測量図 (縮尺 1/60) .....	62
第46図	S B 11 出土遺物実測図 (縮尺 1/4) .....	63
第47図	S B 12 測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/60・1/4) .....	64
第48図	S B 13・S B 14 測量図 (縮尺 1/60) .....	65
第49図	S B 13 出土遺物実測図 (縮尺 1/4・1/3) .....	66
第50図	S B 14 出土遺物実測図 (縮尺 1/4) .....	67
第51図	S B 16 測量図 (縮尺 1/60) .....	68
第52図	S B 5 測量図 (縮尺 1/60) .....	70
第53図	S B 5 出土遺物実測図 (縮尺 1/4) .....	70
第54図	S B 5 カマド測量図 (縮尺 1/20) .....	71
第55図	S B 8 測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/60・1/4) .....	72
第56図	S B 9 測量図 (縮尺 1/60) .....	73
第57図	S B 9 カマド測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/20・1/4) .....	74
第58図	掘立 1 測量図 (縮尺 1/30) .....	75
第59図	溝・ピット・包含層出土遺物実測図① (縮尺 1/4) .....	77
第60図	溝・ピット・包含層出土遺物実測図② (縮尺 1/4・1/3・1/2) .....	78
第61図	竪穴式住居址の変遷図 (縮尺 1/800) .....	85
第62図	松山平野の弥生後期土器Ⅰ式 (縮尺 1/8) .....	09
第63図	松山平野の弥生後期土器Ⅱ-2式(1) (縮尺 1/8) .....	11
第64図	松山平野の弥生後期土器Ⅱ-2式(2) (縮尺 1/8) .....	13
第65図	松山平野の弥生後期土器Ⅲ式 (縮尺 1/8) .....	14
第66図	松山平野の弥生後期土器編年(試案)図 (縮尺 1/12) .....	15

第67図	道後平野における滑石製模造品出土遺跡分布図 (縮尺1/180,000) ……	121
第68図	道後城北遺跡群の遺構・遺物分布図 (縮尺1/50,000) ……	133
第69図	松山平野の主要遺跡群 (縮尺1/180,000) ……	139
第70図	松山平野の石杵・石鎌 (縮尺1/2) ……	143
第71図	松山平野の大形石包丁 (縮尺1/2) ……	145
第72図	松山平野の貝製腕輪 (縮尺1/2) ……	147

## 図 版 目 次

巻頭図版	1	道後城北遺跡遠景 (南より)
図版 1.	1	松山大学構内遺跡全景 (南より)
	2	調査区全景 (北東より)
図版 2.	1	遺跡遺存状況 (北東より)
	2	西壁土層 (東より)
図版 3.	1	遺構検出状況 (東より)
	2	遺構検出状況 (北東より)
図版 4.	1	S B 2 [左] S B 3 [右] 遺物出土状況 (南西より)
	2	S B 3 (南より)
図版 5.	1	S B 3 断面土層 (南東より)
	2	S B 3 土柱穴 (南より)
図版 6.	1	S B 7 遺物出土状況 [遠景] (東より)
	2	S B 7 炭検出状況 (東より)
図版 7.	1	S B 7 遺物出土状況 [近景] (南西より)
図版 8.	1	S B 7 (東より)
	2	S B 7 炉 (北東より)
図版 9.	1	S B 10 遺物出土状況 (北東より)
	2	S B 10 (南東より)
図版 10.	1	S B 1 遺物出土状況 (南西より)
	2	S B 1 (南西より)
図版 11.	1	S B 1 内 S P 12 遺物出土状況 (南より)
	2	S B 1 内 S P 12 (南西より)
図版 12.	1	S B 4 [上] S B 13 [右] S B 14 [左] (東より)
	2	S B 14 遺物出土状況 (東より)
図版 13.	1	S B 11 [右] S B 12 [左] (東より)
	2	S B 6 [左] S B 15 [右] (北東より)

- 図版14. 1 SB5 (南より)  
 2 SB5カマド① (南より)
- 図版15. 1 SB5カマド② (南より)  
 2 SB5カマド断面 (南より)
- 図版16. 1 SB9 (北西より)  
 2 SB9カマド (西より)
- 図版17. 1 SB9カマド横断面 (西より)  
 2 SB9カマド縦断面 (南より)
- 図版18. 1 SB7出土遺物 (1)
- 図版19. 1 SB7出土遺物 (2)
- 図版20. 1 SB7出土遺物 (3)
- 図版21. 1 SB7出土遺物 (4)
- 図版22. 1 SB7出土遺物 (5)
- 図版23. 1 SB7出土遺物 (6)
- 図版24. 1 SB7出土遺物 (7)
- 図版25. 1 SB7出土遺物 (8)
- 図版26. 1 SB7出土遺物 (9)
- 図版27. 1 SB10出土遺物  
 2 SB1出土遺物 (1)
- 図版28. 1 SB1出土遺物 (2)  
 2 SB13出土遺物
- 図版29. 1 SB14出土遺物  
 2 SB8出土遺物  
 3 SB9出土遺物
- 図版30. 1 第VI層出土遺物  
 2 第V層出土遺物
- 図版31. 1 SB6出土遺物 (216・217) SB1出土遺物 (209)  
 C3区出土遺物 (257) SB3出土遺物 (12) SB9出土遺物  
 (No.1、No.2) [左：処理前、右：処理後]

# 表 目 次

表 1	松山大学構内遺跡周辺の試掘一覽	9
表 2	松山大学構内遺跡周辺出土遺物(調査外)一覽	9
表 3	松山大学構内遺跡周辺の発掘調査一覽	10
表 4	竪穴式住居址一覽	86
表 5	竪穴式住居址付設の壁体溝一覽	86
表 6	竪穴式住居址の炉・カマド一覽	87
表 7	溝一覽	87
表 8	自然流路址一覽	87
表 9	土塚一覽	87
表10	S B 3 出土遺物観察表(土製品・石製品・鉄製品)	88
表11	S B 4 出土遺物観察表(土製品)	88
表12	S B 7 出土遺物観察表(土製品・石製品・鉄製品)	89
表13	S B 10 出土遺物観察表(土製品)	97
表14	S B 1 出土遺物観察表(土製品・石製品・鉄製品)	98
表15	S B 6 出土遺物観察表(土製品・鉄製品)	99
表16	S B 11 出土遺物観察表(土製品)	100
表17	S B 12 出土遺物観察表(土製品)	100
表18	S B 13 出土遺物観察表(土製品・石製品)	100
表19	S B 14 出土遺物観察表(土製品)	101
表20	S B 5 出土遺物観察表(土製品)	101
表21	S B 8 出土遺物観察表(土製品)	102
表22	S B 9 出土遺物観察表(土製品)	102
表23	溝・ビット・包含層出土遺物観察表(土製品・石製品・鉄製品)	102
表24	松山平野における弥生時代の竪穴式住居址出土のガラス玉一覽	103
表25	松山平野の赤色顔料分析一覽	105
表26	松山大学構内遺跡出土の鉄製品処理一覽	106
表27	松山平野における弥生後期土器の主要出土遺構一覽	118
表28	道後平野における滑石製模造品出土一覽	123
表29	松山平野の竪穴式住居址の平面形態	127
表30	道後城北弥生遺跡の概要一覽	131

# I 調査に至る経過

梅木 謙一

## 1. 調査に至る経過

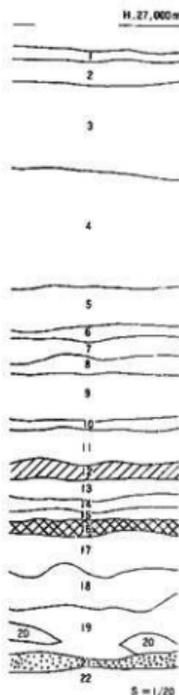
1989(平成元)年5月、学校法人松山大学(理事長神森智)より同校構内(松山市文京町4番10号他)に新設校舎を建設するに当って、当該地の埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化教育課(以下、文化教育課)に提出された。

松山大学構内は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地の「67 樋又遺物包含地」内に当り、周知の遺跡として知られている。同包含地内では、これまで縄文時代後期～古墳時代までの集落関連遺構が確認されており、特に同地域は弥生時代の松山平野に於て、主要な集落地帯として存在していたことが近年の調査で明らかになっている。松山大学構内に於ても既に1987年11月に、構内東北部の7号館建設の際に文化教育課により発掘調査が行なわれ、弥生時代と中世の遺物包含層を確認している(第一次調査、第1図)。

これらのことより、当該地に於ける埋蔵文化財の有無と、さらには遺跡の範囲やその性格を確認するために、1989年8月に文化教育課は試掘調査を実施した。

試掘調査の結果、弥生土器・須恵器を含む遺物包含層(二層)とビット・自然流路址を検出し、当該地に弥生～古墳時代の集落関連遺跡があることを確認した。

この結果を受け、文化教育課・松山大学二者は発掘調査についての協議を行った。発掘調査は、弥生時代および古墳時代の道後城北遺跡群の北西部域の集落構造解明を主目的とし、松山市立埋蔵文化財センターが主体となり、松山大学の協力のもと1989年11月26日に開始した。



第1図 第1次調査地土層図

- |                 |                     |
|-----------------|---------------------|
| 第1層 アスファルト及び砂土  | 第14層 黒褐色粘土+暗茶褐色粘土   |
| 第2層 暗灰色粘質土      | 第15層 暗褐色粘砂          |
| 第3層 茶褐色粘質土      | 第16層 暗茶褐色粗砂+粘質土(弥生) |
| 第4層 暗茶褐色粘質土     | 第17層 暗茶褐色粘砂(粘土含む)   |
| 第5層 暗褐色粘質土      | 第18層 灰茶褐色粘砂         |
| 第6層 暗褐色粘質土      | 第19層 灰色砂            |
| 第7層 暗褐色粘質土      | 第20層 灰白色砂           |
| 第8層 暗褐色粘質土      | 第21層 暗茶褐色粘質土(縄文?)   |
| 第9層 暗褐色粘質土      | 第22層 暗褐色粘質土         |
| 第10層 暗褐色粘質土     |                     |
| 第11層 暗褐色粘質土     |                     |
| 第12層 暗褐色粘質土(中沢) |                     |
| 第13層 暗褐色粘質土     |                     |

## 2. 調査組織

調査地	松山市文京町4番10号、4番2号、清水町2丁目14番3号
遺跡名	松山大学博内遺跡(第2次調査地)
調査期間	野外調査 1989年11月26日～1990年2月28日 室内調査 1990年3月1日～1990年8月31日
調査面積	2,300㎡
調査委託	学校法人 松山大学理事長 神森 智 松山大学財務担当理事 比嘉 清松 財務部 部長 武市 幸雄 財務部 課長 有馬 俊彦
調査主体	松山市教育委員会前教育長 平井 亀雄 教育長 池山 尚郷
調査総括	松山市教育委員会文化教育課 課長 渡部 忠平 松山市立埋蔵文化財センター 所長 森脇 將 " 調査係 係長 西尾 幸則 " " 主任 田城 武志 " " 主事 栗田 正芳
調査担当	" " 調査員 梅木 謙一 " " 調査員補 宮内 慎一

## 調査作業員・整理作業員・協力者

宮脇 和人、古屋 明寿、梅本 正則、古田 智宏、亀山 健一、岸 武弘、扶川 博、  
江藤 賢徳、浜山 哲大、藤村 英樹、志賀 夏行、高橋 恒、原田 英則、山本 圭、  
鎌田 謙二、渡部 竜二、亀山 泰昌、佐藤 榮治、上木 秀富、堅田雄一郎、永岡 淳、  
林 亨、藤永 国博、真木 隆行、森田 利恵、松本美知子、仙波 豊子、河本美代子、  
黒田 令子、水口あをい、緑 尚美、小坂ゆかり、西野 貴子、相原 洋子、栗林 千恵、  
白石 聖子、瀬戸 恭子、藤井 宏枝、藤沢 真美、森田 晶子、清水建設株式会社四国支  
店 松山営業所

なお、発掘調査にあたって、下條信行・宮本 一夫(愛媛大学)、定森秀夫(財・京都文化博物館)、  
山崎博之(福岡市埋蔵文化財センター)、南博史(財・古代学研究所)、室内調査にあたっては、上  
原真人・肥塚隆保(奈良国立文化財研究所)、石野博信・寺沢薫(奈良県立福原考古学研究所)、水  
口薫(財・京都文化博物館)、本山光子(福岡市埋蔵文化財センター)他、多くの先生方に、数々の  
貴重なご指導、ご教示を頂いた。また、奈良国立文化財研究所、福岡市埋蔵文化財センタ  
ーの各機関には、資料調査に際しご配慮を頂いた。記して感謝申し上げます。

## II 遺跡の概要

山之内志郎

### 1. 遺跡の立地

松山平野を含む高縄半島は、瀬戸内海中央付近で北に突出しており、その西側を西部瀬戸内、東側を中部瀬戸内と呼んでいる。松山平野は、高縄半島中央部を南北に走る高縄山地に源を発した河川が、伊予灘に流れ出て形成した沖積平野である。その松山平野の中でも、高縄山地の南端部にあたる御幸寺山と、その南の分離独立丘陵である勝山（城山）に挟まれ東西に開けた平野部を、道後城北地区と呼んでおり、文京遺跡のほか数多くの遺跡（道後城北遺跡群）が立地している。松山大学構内遺跡（第2図1・第3図1）は、この地区のやや西よりの標高約25.5mに立地している。

本遺跡を含む道後城北地区は、2つの河川によって形成された扇状地堆積物で成り立っている。一つは、高縄山地に源を発した永谷川が、やがて丸山川になり北から南へと平野部に流れ出る付近に形成した小規模な扇状地であり、もう一つは、東から西へと流れる石平川の旧流路によって形成された大規模な扇状地である。本遺跡は、この扇状地に於ける扇端部と呼ばれる、伏流水が豊富な地域に位置しているため、水稲耕作と集落としての土地利用に最適地で、早くにこの地が開かれたことが発掘調査によっても裏付けられている。それは、文京遺跡第11次調査において、縄文時代後期における野外炉が確認されたことから、この時期から既に安定した地形を保っていたことが推定される。また同遺跡第6・8次調査で確認されている小河川は、文京遺跡北部を横断するように東から西へ流れていたものと推定され、その北の河岸段丘上に本遺跡が立地し、集落が営まれていたと推定される。〔愛媛大学-1989〕

地質学的に高縄山地は、中世代の領家帯貫入岩類の松山型花崗閃緑岩が大部分を占めているのに対して、勝山（城山）は白亜紀の和泉層群のレキ岩に瀬戸内系火山岩類が貫入している。

### 2. 歴史的環境（第3図、表1～3）

本遺跡周辺には文京遺跡をはじめとして、道後城北遺跡群と総称される数多くの遺跡が存在する。その中で近年発掘調査された遺跡を中心に概説していきたい。

#### 旧石器時代

当地域のみでなく、松山平野全体においても、これまで旧石器時代の明確な遺構は見られていない。ただナイフ形石器をはじめとした少量の石器が、他の時代の包含層から出土したり、表採されているにすぎない。

## 遺跡の概要

丸山遺跡(E)は丸山川の左岸、標高約120mの位置に存在し、表面採集資料として細石刃や細石核等を含む細石器が16点余り報告されている[長井1986]。ただし遺構に伴わないため、不明な点が多い。

### 縄文時代

これまでに古くから知られた遺跡に、道後冠山遺跡(37)、土居窪遺跡(13)、土居の段遺跡(I)などがあり、これらの遺跡からは少量の後期の上器が出土している。また晩期後半の突帯文土器が出土した大瀨遺跡(栗田1989)に続く時期の土器が、本遺跡の北東にあたる南海放送遺跡(4)[西尾1989]から出土している。

文京遺跡第8次(29)、9次調査(30)において、後・晩期の包含層から土器が出土している。また第11次調査においては、同遺跡で初めて明確な後期の野外炉が確認された。このことは前述した通り、この付近に安定した地盤をもち、その上に住居が立地したことをうかがわせるものである。

### 弥生時代

前期前半の遺跡は、文京遺跡第4次調査において円形竪穴住居跡から壺、甕が出土している。その他には、出土状況は不明であるが、御幸寺山東麓遺跡(N)から綾杉文が描かれた壺や、持田遺跡(K)からは木葉文壺が出土している。前期の後半になるに従い、扇状地から丘陵地への遺跡の分布の広がりがみられる。これまで文京遺跡を中心とした集落が、やがてこれまでみられなかった丸山川の河岸段丘部へも進出し始める。これは水稲耕作のための、未開発地域への進出とみて良いであろう[下條1989]。前期末から中期末にかけては、遺跡の分布が遺跡群内全域にわたってまんべんなく拡がりをみせ、これまでに道後今市遺跡(14~21)、道後姫塚遺跡(36)、土居窪遺跡(13)などの遺跡が知られる。また丸山川右岸の丘陵谷間に立地する祝谷六丁場遺跡(5)[宮崎1989]は、中期中葉を中心として後期まで続く遺跡で、中期後半の凹線文の段階から後期後半には、その中心が文京遺跡へ移る(古代学-1988)。後期後半には本遺跡から南西にあたる城西の地域一すなわちカキツバタ(38)[松山市-1986]、若草町遺跡(2)及び、丸山川河岸段丘上の祝谷六丁目遺跡において壺棺墓群(9)[松山市-1986]が検出されている。

道後城北遺跡群における特徴的な資料としては、一つに分銅形土製品があげられる。本県出土の39点中24点がこの地域から出土している。その内訳は平成2年9月現在、祝谷六丁場遺跡12点、祝谷大地々田遺跡1点、御幸寺山東麓遺跡1点、文京遺跡第1次調査1点、同遺跡第3次調査6点、同遺跡第4次調査1点、同遺跡第10次調査1点、道後鷺谷遺跡1点(7)の合計24点である(註1)[谷若1989]。中には朱の染布が施されているものもあり、護符としての使用の可能性が考えられる。

そのほか青銅製品として平形銅剣と鏡があげられる。まず平形銅剣が道後一万遺跡(A)から10本出土したのをはじめとして、道後樋又遺跡(B)8本、道後公園山麓遺跡(C)3本、



- |               |           |          |          |
|---------------|-----------|----------|----------|
| ㊸ 文京遺跡 (愛媛大学) | ㊹ 祝谷六丁場遺跡 | ㊺ 道後湯月遺跡 | ㊽ 樽味立派遺跡 |
| ㊻ 三島神社古墳      | ㊼ 福音寺遺跡   | ㊽ 来住庵寺遺跡 |          |

第2図 松山大学構内遺跡周辺の主要遺跡分布図

## 遺跡の概要

祝谷六丁場遺跡1本というように、半径1km以内の地域に4ヶ所で22本発見されており、全国でも珍しい密集地域として注目を浴びている。

また鏡も文京遺跡第10次調査において舶載鏡片が出土したり(愛媛大学-1990)、若草町遺跡においても「見日之光長母忘君」の銘文を刻んだ重圈日光鏡が、わが国で初めて出土している。この鏡が壱棺墓にともなうものかどうか、現在整理中である。

### 古墳時代

古墳時代には平野部の背後の丘陵に、数多くの古墳群(第3図)が分布している。祝谷古墳群、御幸寺山古墳群、常行寺古墳群、桜谷古墳群、石手・伊佐爾波古墳群などがあるが、今後の詳細な分布調査が望まれる。

この時代の集落は本遺跡で確認されているほか、文京遺跡より東の地域にも立地しているようである。

### 古代

湯ノ町廃寺(R)や内代廃寺(Q)から、白鳳期の瓦が出土しており(吉本1986)、米住廃寺と並ぶ松山平野最古の寺院として、今後周辺地域の詳細な調査が望まれる。

### 中世

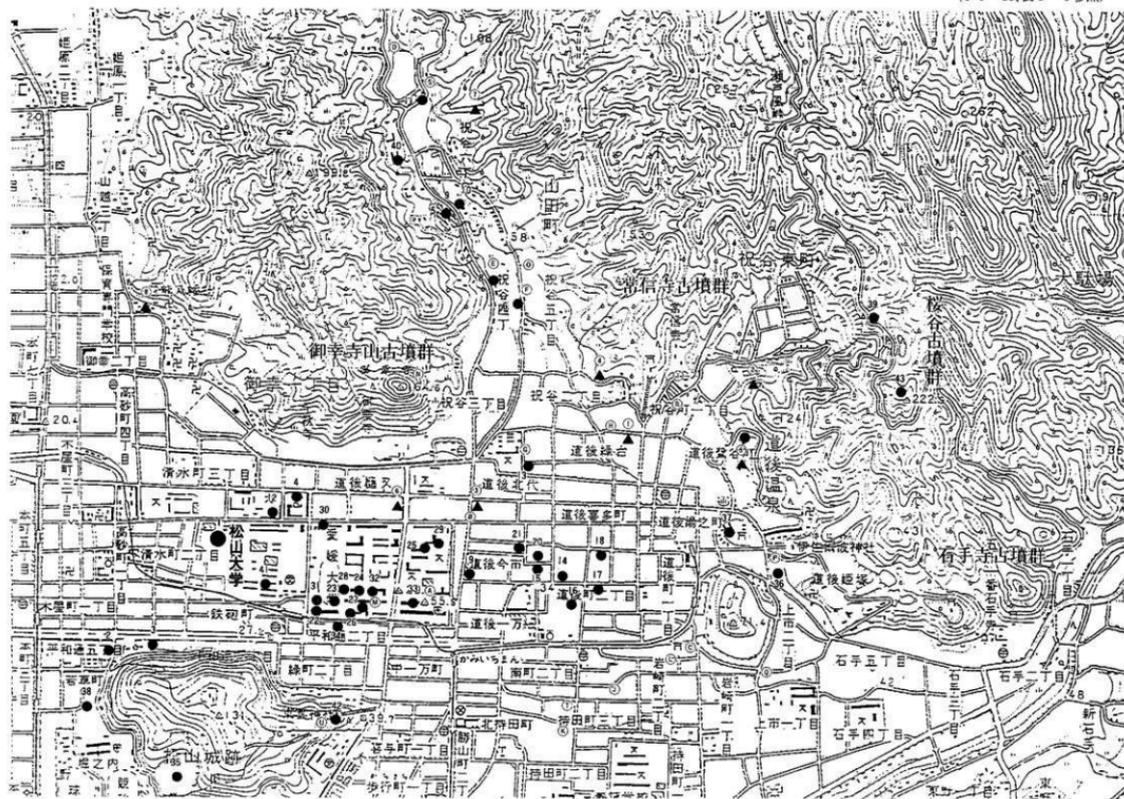
湯築城(L)は14Cに河野氏によって築かれた平山城で、以後250年間にわたって領国を支配した。その後安土・桃山時代においても小早川、福島氏の居城として栄えた。

### 〔註〕

祝谷六丁場遺跡の出土点数は整理中に確認した1点を含めて12点とする。

### 【文献】

- 愛媛大学埋蔵文化財調査室1989『文京遺跡第8・9・11次調査』  
長井数秋 1986『丸山遺跡』『愛媛県史 資料編 考古』愛媛県史編さん委員会  
栗田茂敏 1989『大洲遺跡』『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』松山市教育委員会  
西尾幸則 1989『道後城北RNB遺跡』『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』松山市教育委員会  
下條信行 1989『古代史復元4 弥生農村の誕生』講談社  
宮崎泰好 1989『祝谷六丁場遺跡』『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』松山市教育委員会  
古代学協会四国支部 1988『松山市道後城北の弥生遺跡をめぐって』(シンポジウム資料)  
松山市史料編纂委員会1986『松山市史料集第二巻 考古編Ⅱ』  
谷若倫郎 1989『分銅形土製品にみる地域相』『花園史学10号』花園大学  
愛媛大学埋蔵文化財調査室 1990『文京遺跡第10次調査』  
吉本 弘 1986『湯之町廃寺』『内代廃寺』『愛媛県史 資料編 考古』愛媛県史編さん委員会



(資料調査・作制 相原浩二)

第 3 図 松山大学構内遺跡周囲の遺跡分布図(縮尺 1/16000)

## 松山大学構内遺跡周辺の遺跡一覧（資料調査・表作成 相原浩二）

## 一 凡 例

- (1) 一覧表に使用した資料は、1990年7月時点のものである。
- (2) 試掘調査については、松山市教育委員会が実施したものに限った。
- (3) 試掘調査・本格調査の面積は申請(対象)面積である。
- (4) 遺構・遺物欄では一部を略号で記入した。  
遺構欄＝堅穴：堅穴式住居址、周溝：周溝状遺構、掘立：掘立柱建物址、柱：柱穴址  
遺物欄＝縄：縄文土器、弥：弥生土器、土：土師器、須：須恵器。
- (5) 実施及び期間は調査の開始時の年・月を示す。
- (6) 主体欄の略記は以下である。県教委：愛媛県教育委員会、県埋文：即愛媛県埋蔵文化財調査センター、市教委：松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター。
- (7) 番号欄のナンバーは、「第3 関松山大学構内遺跡周辺の遺跡」中のものを指す。

●表1 松山大学構内遺跡周辺の試掘調査一覧

番号	所在地	面積(m <sup>2</sup> )	縦深(m)	包含層	遺構	遺物	実施	主体	備考
①	道徳館南1324-1	778	34.5			土・灰	'87.4	市教委	
②	祝谷東町乙256-12, 13	190	64.5	○		弥	'89.9	"	
③	道徳北代1271-3	763	30.5	○		土	'89.7	"	
④	道徳館南9-29	199	40.0	○	四脚土庫	赤・灰・赤瓦	'89.6	"	
⑤	道徳堂南乙427, 886	1,628	54.5	○	溝・柱	土・灰	'89.22	"	試掘地誌
⑥	道徳館北1219-8	601	28.5	○	溝	銅・弥	'90.5	"	
⑦	祝谷6丁目1277地	3,742	70.0	○	土庫・溝・柱	弥・土・灰	'90.7	"	
⑧	御宇2丁目259-1	267	22.0	○		土・灰	'90.4	"	

●表2 松山大学構内遺跡周辺出土の遺物(調査外等)一覧

番号	遺跡名	所在地	時期	遺物	主体	備考
A	遺構一方調査出土地	道徳今市4-10	弥 生	平形銅剣101	市教委	①・②・③
B	道徳館又副掘出土地	道徳館又	"	平形銅剣 8口	"	①・②・③
C	道徳両月副掘出土地	道徳両月	"	平形銅剣 3口	"	①・②・③
D	祝谷山田池	祝谷3丁目	"	弥生		
E	" 丸山	祝谷6丁目1025	弥生	田石器・赤土 銅石杖・磨石刀・漆器・弥生	愛媛大学	①・②
F	" 本村	祝谷3丁目	弥 生	弥生		
G	道徳北代	道徳北代10, 11, 12	縄文・弥生			
H	" 緑白	道徳館南10, 11	弥 生	弥生		①
I	土屋ノ後	祝谷1丁目10	縄文 ~	井口土器・弥生		①
J	岩崎町	岩崎町2丁目7-8	弥 生	弥生		
K	持田町	持田町1-4丁目	"	弥生		
L	道徳公園	道徳公園内	縄文 ~	縄文・陶器		
M	愛媛大学工学部	文京町3丁目	弥 生			
N	御幸寺東庭	祝谷3丁目	"	弥生・分銅型土製品・漆器		①
O	祝谷アイリ山	山川町	"	弥生		
P	伊波瀬神社	祝谷町	弥 ~ 古	弥生・銅鏡		
Q	内代観寺	上市2丁目	F4 風	杉平瓦		
R	瀬ノ町福寺	道徳	"	杉平瓦・軒丸瓦		
S	長谷造神	山川町	弥 生	弥生	愛媛大学	③
T	持田造神	持田町4-4-23	"	弥生		
U	麻栗神社古墳	丸ノ内	古 墳			

遺跡の概要

●表3 松山大学構内遺跡周辺の発掘調査一覧

番号	遺跡名	所在地	時代	遺構
1	松山大学構内遺跡第2次調査	文京町4	縄-中	竪穴・竪立・土・溝・柱
2	若草遺跡	石町18	弥-近	倉庫基・土蔵基・周溝・柱
3	松山城北郭遺跡	平越通4丁目1-6	江 戸	石垣基礎石
4	道後城北RNR (南海放送) 遺跡	道後通又6-24	縄文-	溝・柱
5	祝谷六丁場遺跡 (山新堂)	祝谷6丁目1122(他)	弥生-	竪穴・溝・工房跡
6	祝谷大池・川遺跡 (海教委)	祝谷4丁目964	弥-古	
7	道後賢谷遺跡	道後賢谷5-32	弥-中	
8	祝谷大池・川遺跡 (清徳文)	祝谷4丁目983-1, 984	弥生-	溝
9	祝谷六丁場遺跡 (泉理文)	祝谷6丁目1184-3	弥生-	
10	丸山遺跡	祝谷6丁目1181	弥生-	
11	長谷遺跡	祝谷6丁目300-1	弥-近	
12	松山園人遺跡 (現、松山大学構内)	清水町3-2	(縄)弥-中	
13	上栗原遺跡	道後北13-13-15	縄-古	
14	道後今市遺跡1次	道後町2丁目	弥-古	土塼・桑石造
15	" 2次	道後今市995他	弥-中	竪立・土塼
16	" 3次	道後町2丁目4	弥-中	竪穴・溝・基
17	" 4次	道後町2丁目810	弥-古	竪穴・竪立・土塼・礎石
18	" 5次	道後町3丁目1005-1	弥-中	竪穴・土塼・木積基
19	" 6次	道後今市1053-1	弥-古	竪穴・柱
20	" 7次	道後一乃999号	弥-古	竪穴・竪立・土塼・溝
21	" 8次	道後今市1065-5	縄-古	溝
22	文京遺跡1次 (愛媛大学)	文京町3	弥-中	竪穴・土塼・溝
23	" 2次 "	文京町3	弥-古	竪穴・竪立・溝・柱
24	" 3次 "	文京町3	弥生-	竪穴・柱・土塼基
25	" 4次 "	文京町3	弥生-	竪穴・竪立・土塼・河川・柱
26	" 5次 "	文京町3	弥生-	竪穴・柱
27	" 6次 "	文京町3	弥-古	河川・溝
28	" 7次 "	文京町3	弥-古	竪穴・竪立・溝・竪堀跡
29	" 8次 "	文京町2-5	縄-弥	土塼・河川・柱
30	" 9次 "	文京町3	縄-中	溝
31	" 10次 "	文京町3	縄-中	
32	" 11次 "	文京町3	縄-中	土塼・溝・柱
33	文京遺跡 (赤十字)	文京町1	弥生-	溝・柱
34	平越通9遺跡	平越通9-2-13	弥生-	
35	松山城二ノ丸 (1-3次)	丸の内4	江 戸	大井戸・倉院跡・御殿跡
36	道後船場遺跡	道後船場118-2	古-中	竪穴・溝
37	道後冠山遺跡	道後冠之町4-53	縄-弥	
38	方キツバタ遺跡	若草町2-11	弥-古	
39	三輪御山古墳	祝谷町東丁215-4	古墳-	
40	祝谷六丁場遺跡	祝谷6丁目1248他	弥生-	竪穴・竪石造
41	松山北校遺跡 (1-3次)	文京町4-1	弥生-	竪穴・溝・柱
42	笠置神社遺跡	丸之内町72-1 笠置神社内	弥生-	土塼
43	飯谷遺跡	道後飯谷	弥-古	竪穴石造・土塼基・竪穴石造

①『松山市史料集第1巻 考古編』松山市1980 ②『松山市史料集第2巻 考古編II』松山市1986 ③『愛媛県史資料編 考古』愛媛県1986 ④『松山市埋蔵文化財調査年報I』松山市1987 ⑤『松山市埋蔵文化財調査年報II』松山市1989 ⑥『愛媛県立松山北高等学校遺跡埋蔵文化財調査報告書』1982愛媛県教育委員会・松山北高等学校 ⑦『道後今市遺跡』愛媛県埋蔵文化財調査センター1986

歴史的環境

遺物	面積(m <sup>2</sup> )	期間	主体	備考	番号
鏡・土・須・ガラス土・石器・鉄器・粘漆器・石燈丁・刀子	2,300	1969, 11	市教委		1
弥・土・須・陶器・銅鏡	9,199	1969, 1	市教委	弥生中	2
弥	250	1987, 10	市教委	⑤	3
鏡・弥・須・石器	300	1988, 11	市教委	⑤・⑥	4
弥・土・須・陶器・石器・木器・分銅製土製品・銅鏡	6,200	1987, 11	市教委	給岡土器⑤・⑥	5
弥・須	200	1988, 1	市教委	⑤・⑥	6
弥・土・石器(人産物)製品	300	1987, 5	市教委	⑤・⑥	7
弥	(280)	1988, 6	市教委	⑤・⑥	8
弥・須	(130)	1988, 6	市教委	⑤・⑥	9
弥・陶器	(28)	1988, 6	市教委	⑤・⑥	10
弥・須・陶器・石器・内陶磁器	(40)	1989, 10	市教委	⑤	11
弥・陶器	80	1987, 2	市教委	概要本書にて	12
鏡・弥・石器・木器	30	1982, 11	日本考古学会	②・③	13
鏡・弥・土・須・手づくね・石燈丁・石鏡・磁石	900	1981, 11	県教委・市教委	②・③・④	14
弥・土・須・陶器・石器・鏡	800	1982, 9	市教委	②・③・④	15
弥・土・須・陶器・土鏡・石器・石器・鏡器・銅鏡	2,400	1982, 7	市教委	②・③・④	16
弥・土・須・陶器・銅器・瓦器・手づくね・石灯・鉄器	1,230	1983, 8	市教委	②・③・④	17
弥・土・須	531	1981, 6	市教委	②・③・④	18
弥・土・須・石燈丁・石鏡	531	1986, 7	市教委	報告書近刊	19
弥・土・須	283	1990, 2	市教委	市教委	20
鏡・弥・土・須	378	1990, 9	市教委	市教委	21
弥・分銅製土製品・粘漆器・石燈丁・石器・石鏡・磁石・土玉	318	1975, 8	市教委	②・③・④	22
弥・須・粘漆器・石燈丁・石鏡・磁石	750	1980, 7	市教委	②・③・④	23
弥・分銅製土製品・粘漆器・石燈丁・石器・石器・鉄器・土玉	950	1982, 1	市教委	②・③・④	24
弥・分銅製土製品	1,800	1982, 6	市教委	②・③・④	25
弥・石燈丁	160	1984, 11	市教委	②・③・④	26
弥・土・須・石器	160	1986, 1	愛媛大	②	27
弥・粘漆器・石燈丁・石器・石鏡・磁石・土鏡	99	1987, 8	市教委	②	28
鏡・弥	142	1987, 11	市教委	②・③	29
鏡・弥・石器・青磁	654	1988, 1	市教委	②・③	30
弥	62	1988, 9	市教委	報告書近刊	31
鏡・弥・鉄器	85	1989, 8	市教委	②	32
弥	85	1976, 12	市教委	市教委	33
弥	(80)	1984, 11	市教委	②	34
土・陶磁器・古鏡	110	1984, 9	市教委	②	35
弥・土・須・石器		1978, 6	県教委	②・③・④	36
鏡・弥	600	1963	市教委	①・②・③	37
弥・土・石燈丁	(100)	1981, 10	市教委	②	38
鉄器・内陶磁器・瓦器・人骨	50	1981, 11	市教委	市教委	39
弥・石器・瓦器・人骨	500	1976, 6	市教委	②・③	40
弥・銅鏡・土玉	500	1974, 11	県教委	②・③・④・⑤	41
弥・銅製土器	500	1973, 3	市教委	②・③・④	42
弥・土・須・鉄器	700	1989, 8	市教委	②・③	43

⑧「一般県道「宮沢-松山線」埋蔵文化財調査報告書Ⅰ」愛媛県埋蔵文化財調査センター1989 ⑨「文京遺跡8・9・11次調査-文京遺跡における縄文時代遺跡の調査-」愛媛大学法文学部考古学研究室・愛媛大学埋蔵文化財調査室1990 ⑩「一般県道「宮沢-松山線」埋蔵文化財調査報告書Ⅱ」愛媛県埋蔵文化財調査センター1990 ⑪「道後城北の弥生遺跡をめぐって」1988 古代学協会四国支部

### Ⅲ 調査の概要

梅木 謙一・宮内 慎一

#### 1. 調査の経緯

調査地は、大学構内の北西部にあたり、調査対象面積は2,300㎡である。当地は、1989年夏まで、講堂（加藤会館）として使用されていた。このため、遺物包含層及び地山の大半が削平されており、遺跡の堆存状況は良好といえるものではなかった。調査区北東隅では、田プールの基礎が残されたままであった。基礎は、地山に達しており除去せず廃土置き場として使用した。よって、最終的な発掘調査面積は1920㎡余りとなった。以下、調査工程を略記する。

1989年11月26日より重機により表土剥ぎ作業を開始した。上記のごとき施設の掘り方を含め、多くの近現代の開発痕と客土があり、これ等の除去に苦慮する。さらに、表土及び攪乱土はすべて大学敷地外に搬出したため、表土の剥ぎ取り作業に4日間（11月26日～11月30日）を要することになった。

12月1日より作業員を増員し本格的な調査を開始する。北半部に残る包含層を人力で掘り下げ、月末までに遺構検出を完了する。

1月 竪穴式住居址を中心に調査を行なう。月末に、調査区南側を8×47mの広さで拡張する。19日、大学関係者を対象とする説明会を実施する。参加者60名（第4図）。



第4図 現地説明会

## 層 位



第5図 調査区位置図

2月 SB7号住居址の出土遺物の測量・取り上げを中心に調査を行なう。14～16日、下條信行先生、定森秀夫、田崎博之、南博史の各氏に調査指導を乞う。28日、遺構の測量図が完了する。29～30日、出土遺物・調査用具等を撤去する（野外調査終了）。

3月～9月 3月5日より6月30日の間、大学構内の事務所にて遺構図の浄書、遺物の洗浄・実測等の整理作業を行なう。7月1日より8月31日の間、松山市立埋蔵文化財センターにて報告書に関する整理作業を行なう。この間、奈良国立文化財研究所・同埋蔵文化財センター、奈良県立橿原考古学研究所、財京都市府文化博物館、東大阪市教育委員会、福岡市埋蔵文化財センター他にて資料調査を行なう。

## 2. 層 位(第7図)

本調査地の基本層位は、第I層表土、第II層灰褐色シルト（砂多し）、第III層暗黄褐色シルト、第IV層暗茶褐色シルト、第V層淡黄色シルト、第VI層黒褐色シルト、第VII層黄色シルト、第VIII層礫層である。第I層は近現代の造成による客土で地表下80～90cmを測る。第II層は調査区北西部を除く（攪乱のため消失）ほぼ全域でみられ、厚さ10～30cmの堆積で6C後半～12C代の須恵器と土師器を包含する。第III・IV層は10～30cm、第V層は5～10cmの堆積である。第III・IV層は検出地点に限られ、検出地点では、第V層上に第II層が堆積する状況であった。第III～V層は弥生土器・土師器の破片と6C後半～7C前半の須恵器片を包含している。第VI層は、調査区南西隅の旧地形（第VIII層上面）の落ち込み地点で検出され、堆積は20～80cmを測り、縄文土器（晩期）、弥生土器（前期・後期）、土師器の小破片を少量包含する。第VII層は無遺物層であり、粘性が弱い。第VIII層は石手川系の礫層群である。

## 調査の概要

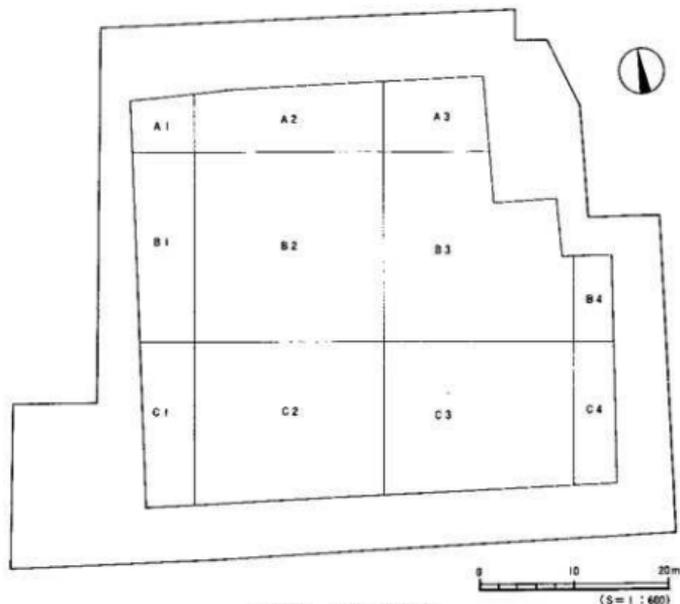
遺構は、第Ⅴ層上面、第Ⅵ層上面、第Ⅶ層上面で検出した(第8図)。

第Ⅴ層上面では6C後半～7C前半の須恵器小片を含む溝一条(SD16)、自然流路址1条(SR1)を検出した。第Ⅶ層上面では竪穴式住居址1棟(SB8・7C後半)を、第Ⅶ層上面では竪穴式住居址15棟、掘立柱建物址1棟、土塚11基、溝17基、柱穴358基を検出した。ただし第Ⅶ層上面検出の遺構は、その深さから考えると、本来は第Ⅵ層以上の層から掘りこまれた可能性が高いものばかりである。

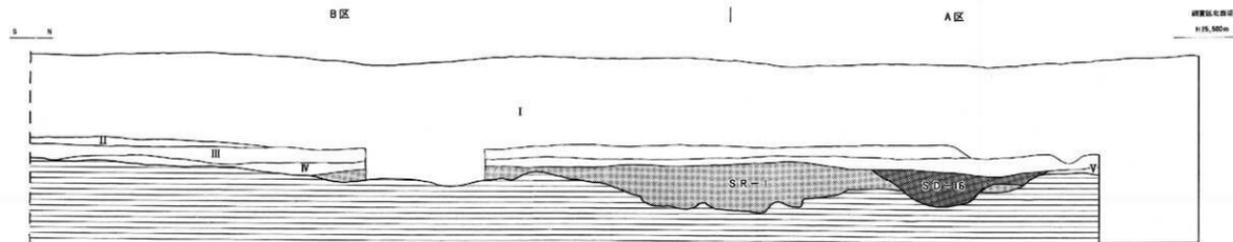
これ等のことより各層は出土遺物・検出遺構から判断すると、第Ⅱ層は中世初頭、第Ⅲ層～第Ⅴ層は古代、第Ⅵ層は古墳時代中期までに堆積したものと判断される。

また、調査地の南東地点と北東地点の第Ⅱ層下面及び、第Ⅶ層上面の標高を比べると、第Ⅱ層下面では25～30cm、第Ⅶ層上面では50～60cm南東地点が高い。第Ⅱ層下面は水平化が進んでおり平坦な土地となっていることが知れる。さらには、遺構の埋土上面に第Ⅱ層が検出される場合もあり、当地は第Ⅱ層堆積前、即ち中世以前に耕地整備された可能性が高い。

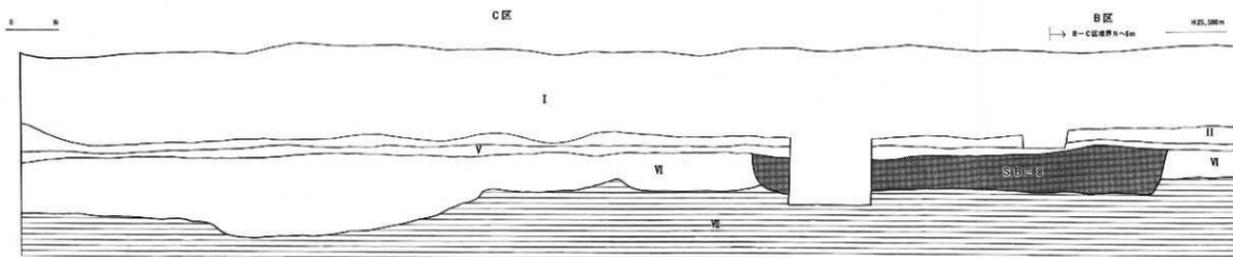
なお、調査にあたり調査地区内を20m四方のグリッドにわけた(第6図)。



第6図 調査地区割図



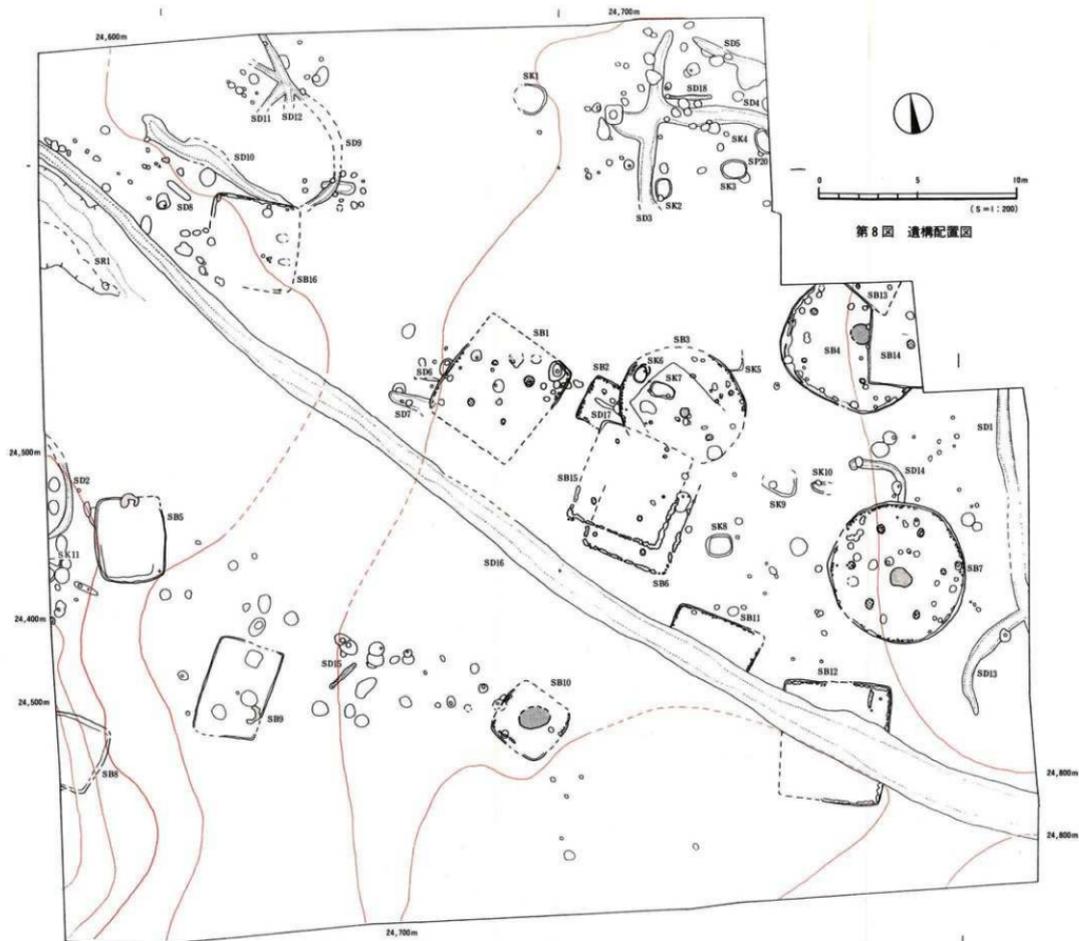
土層図



I 表土、II 灰褐色シルト、III 暗黄褐色シルト、IV 暗茶褐色シルト、V 淡黄色シルト、VI 黒褐色シルト、VII 黄色シルト



第7図 西壁土層図 (縮尺1/40)



第8図 遺構配置図

### 3. 遺構と遺物

#### (1) 竪穴式住居址

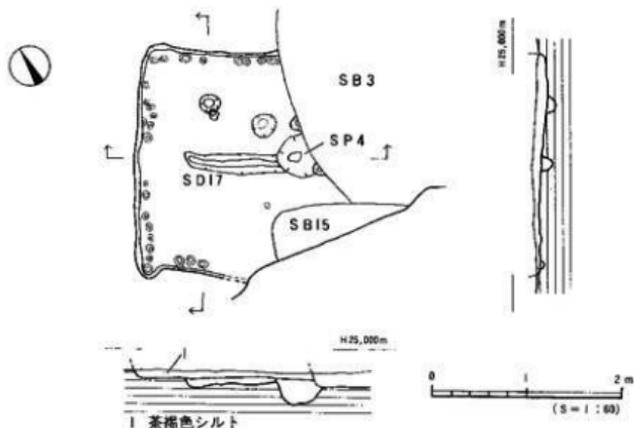
##### 1) 弥生時代

弥生時代の住居址は4棟(SB2・3・4・7)である。いずれも第Ⅷ層上面で、調査区南東部に集中して検出された。平面形は、円形(3棟)と長方形(1棟)の二種類があり、大型住居はいずれも円形であった。SB2とSB3は、住居址の一部が重複しており、SB2が古くSB3が新しい。

##### SB2号住居址(第9図、図版4-1)

調査区中央B3区に位置する。住居址の東半部はSB3とSB15に切られ、さらに攪乱を受けて破損している。平面形は、長方形を呈するものとする。規模は、北東-南東2.25m、壁高10cmを測る。床面は比較的堅く、南壁近くが高く、北へ緩やかに傾斜しており比高差8cmを測る。壁体に沿って径7~14cm、深さ2.5~14cmの小ピットが不規則な間隔で一列に並ぶ。この他、床面にて小溝1条(SD17)とピット6基を検出したが、本住居址に伴うものであるかは判断できなかった。主柱穴及び炉は未検出である。埋土は、茶褐色シルト層である。遺物は、埋土中に土器細片が数点含まれていたが、時期決定に有効な資料となりえるものではない。

時期：SB3号住居址に切られていることより後期前半以前のものと見えよう。



第9図 SB2測量図

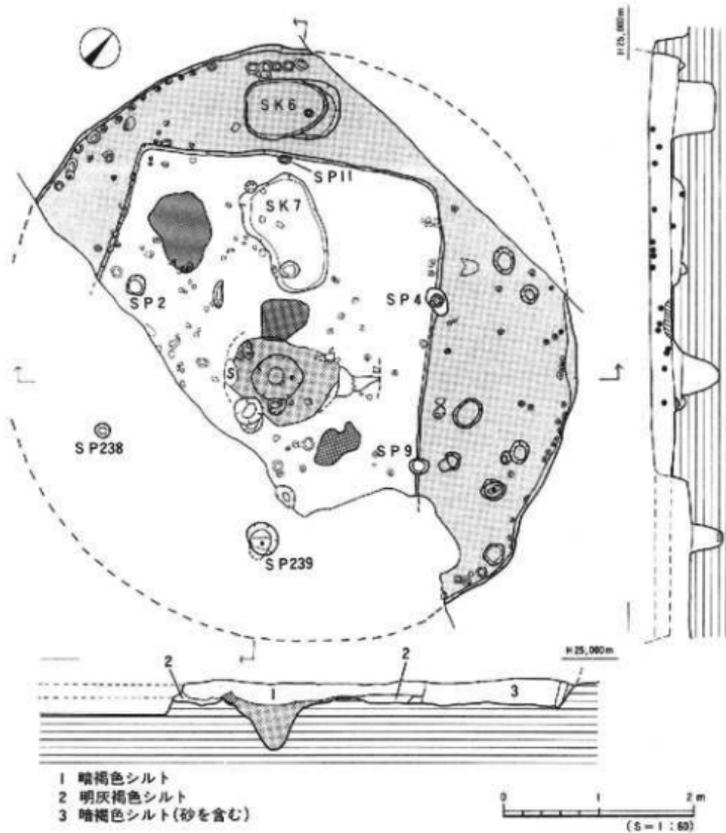
## 調査の概要

### S B 3号住居址(第10図、図版4・5)

調査区中央やや東B3区に位置する。SB2を切り、SB15に切られている。北東部及び南東部は攪乱により破損している。平面形は、円形を呈するものとする。規模は、東-西6.2m、壁高25cmを測る。壁体に沿って幅80-150cm、厚さ20cmの造り付けの高床部(ベッド状遺構)を検出する。高床部は暗褐色シルト(砂を多く含む)で貼られ、堅く締まっていた。主柱穴は、SP2、11、4、9、239、238の6本である。柱穴は径13-35cm、深さ4(+α)-29.5cm、柱穴間は1.6-1.8m測る。SP11(図版5-2)、4、9は、高床部を切る状況で検出された。

炉は(第11図、図版5-1)、住居址のほぼ中央に位置し、不整形な円形状を呈する。規模は1.2×0.9m、深さ50cmを測る。炉の外周には、幅20-40cm、高さ6-9cmの地山削り出しによる高まり(土堤)がある。炉内の埋土は大きく三層に分層される。埋土の大半を占める⑤・⑥層は濃褐色シルトで炭をわずかに含み、粘性が強い。⑤層の上部には角礫の小片が数点含まれている。④層は濃黒褐色シルトで粘性の強いものである。平面形(上面)が円形を呈している。③層は明灰褐色シルトで炭が多量に含まれている。③層は、北西及び東の炭(灰)の集積部に続く。

本住居址床面からは、炉の他に壁体内側に小ピット、土壇2基(SK6、7)、凹地、ピットを検出した。壁体内側の小ピットは、壁体に沿って1列に並ぶ。小ピットは、径4-16cmで、深さ2-14cmを測り、間隔は不均等である。土壇2基は、いずれも床面からの掘り込みである。SK6は、北側の高床部除去後に検出されたものである。隅丸長方形を呈し、長軸80cm、短軸60cm、深さ40cmを測る。北東部にはテラスをもち、二段掘りとなっている。床面より小ピットを検出したがSK6との関係は不明である。SK7は、高床部と炉及び炭(灰)集積部の中間に位置する。隅丸長方形状を呈し、長軸120cm、短軸60cm、深さ15cmを測る。SP3は、本土壇埋沈後のピットである。両土壇中からの遺物の出土はない。SK7と西側高床部の中間に平面形が楕円形(85×63cm、深さ4.5cm)で、断面形が皿状を呈する凹地を検出した。人為的な掘り方は検出できず、柔らかい砂を含む土が埋もれていた。遺物の出土はない。ピットは小ピット(径10cm前後)と主柱穴と同規模のピットの二種を検出した。前者の小ピットは、各ピット間に関連性を確認することはできなかった。後者のピットは、東側高床部除去後に検出されたものである。SP8の基底部には礎石に転用したと思われる石斧(第13図10)が1点出土しているが、他のピットには遺物の出土はなかった。本住居址の埋土は炉に近い床面に明灰褐色シルトに黄色シルト(第Ⅶ層)が混じる土層が部分的に見られたが、大半は暗褐色シルトである。出土遺物は、暗褐色シルト中(下部)より土器片が数点まとまって出土している。また、北側高床部の除去の際、床面上より体部下半が完存する甕形土器1点(第12図7)が出土した。甕形土器はやや凹んだ地にすえられた状況で出土した。



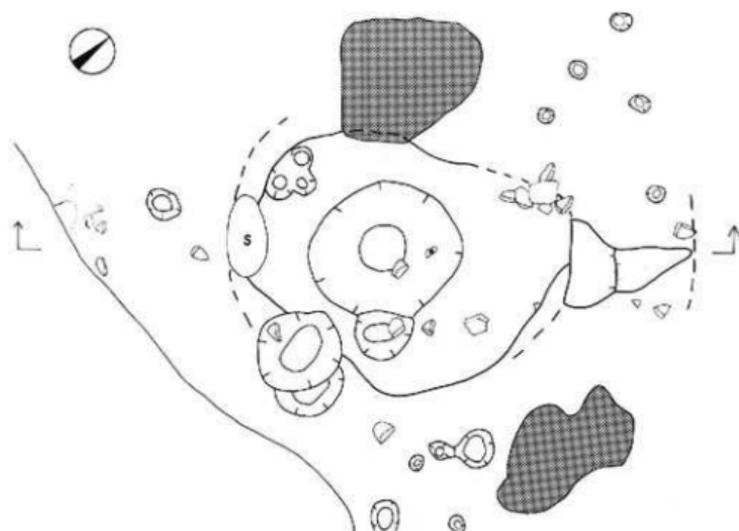
第10図 SB3測量図

出土遺物 (第12・13図)

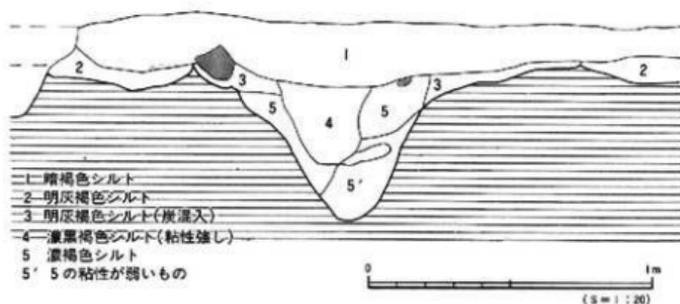
甕形土器 (7) 7は中形品の胴下半部片である。底部はわずかにくびれ、若干の上げ底を呈する。内面はケズリで、外面は細かいタテ刷毛目調整である。

壺形土器 (1~3) 1は口縁部小片である。口縁端部は強いヨコナデにより上方に拡張させる。2は長頸壺である。頸部は長く伸び、わずかに外反する口縁部をもつ。内外面とも細かい刷毛目調整で、口縁部のみヨコナデにより仕上げられる。内面の頸部下端にはシボリ痕がわずかに看取される。3は肩部が張り、安定した平底がつくものである。肩部内面には

調査の概要



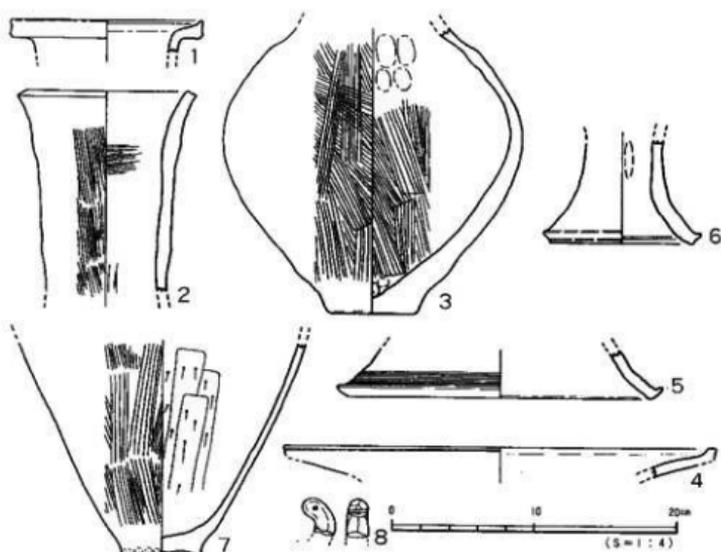
H 25,000m



第11図 SB3炉測量図

指頭痕が顕著に残る。内外面とも荒いタテ刷毛目調整である。

高坏彩上器 (5・6) 5・6は脚部片である。5は脚端部を拡張し、下端部に沈線文5条(擬凹線文)をもつ。脚端面は拡張するが、ナデによる凹みはない。小片にて、沈線文帯以外の施文の有無(例えば矢羽根透かしなど)は判断できなかった。6は脚端部が拡張され



第12図 S B 3出土遺物実測図(1)

ないものである。端面に凹線文状のナデ凹みをもつ。裾部内面に1条の太い沈線が巡る。

器台形土器(4) 4は器台の受部と考えられるものの小片で、受端部を一部欠く。現存では端部の拡張は上方だけであるが、下端部で擬口縁が確認できることより下部にも拡張されていたようである。端部上面は面取りされ、端面には現存部で1条の沈線文が看取される。受部上面には赤色顔料が付着する(P119)。

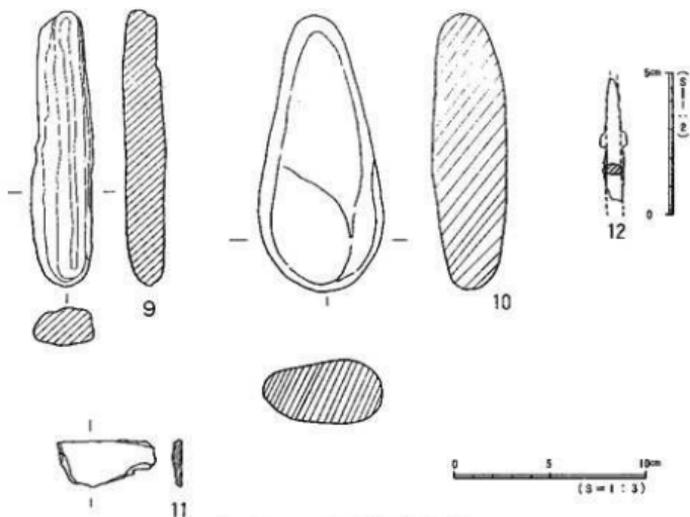
石器(9~11) 9は石器製作に関する工具(棒状打欠具)である。全長14.4cm、厚さ2cm、重さ146gをはかる。石材は、結晶片岩である。10は、住居地の柱支えの礎石として転用された砂岩質の石斧である。全長14.6cm、重さ524.4gをはかる。11は粘板岩質の砥石である。

鉄鏝(12) 12は鏝の茎の1部であろう。残存長4.4cmである。

勾玉(8) 8は土製勾玉である。覆土の上部で検出されており住居を覆う第Ⅴ層の遺物である可能性が高いものである。

時期：甕形土器7は出土状況より、本住居が経営されていた時期を具体的に示す好資料といえる。甕形土器にくびれの上げ底が、壺形土器に長頸壺が、高環形土器の脚部に擬凹線文があることより、埋没時期は後期前葉であろう。さらに、長頸壺の頸部の伸びが長いことで前葉でも新しい時期に比定できよう。

調査の概要



第13図 SB3出土遺物実測図(2)

SB4号住居址(第14図、図版12-1)

調査区東端中央部B3区に位置する。住居址東半部はSB13及びSB14に切られ、さらに攪乱により破損を受けている。平面形は、円形(隅丸多角形状)になるものと考えられる。規模は北西-南東7m、壁高8cmを測る。床面は中央部がやや高く、壁体に向かって緩やかに傾斜している(比高差5cm)。支柱穴は、SP3~7の5本を検出した。しかし、柱穴の検出状況より東北東に1本あるものと考えられ、柱穴は6本であった可能性が高い。柱穴は径25~30cm、深さ5~15cmで、柱穴間は2.5~3.0mを測る。

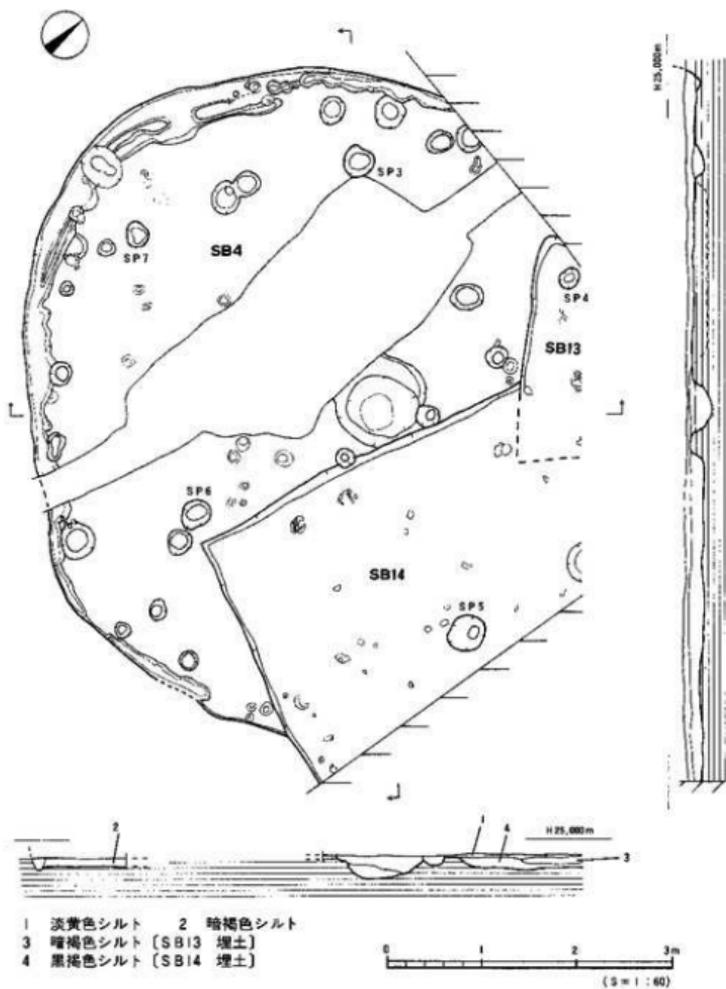
壁体溝は、北東部では二重に巡っており、南側部においては溝が跡切れた状況で検出された。平面形は住居中央部側の壁が波状を呈し、断面は逆台形状を示す。なお溝底は凹凸が著しい。規模は幅15~30cm、深さ5~15cmを測る。

炉址は、住居中央部に位置する。東壁部はSB13に切られ、西壁部は攪乱により破損している。平面形は楕円形で、長軸1m、短軸0.9m、深さ25cmを測る。炉址内には、炭化物の堆積が認められた。

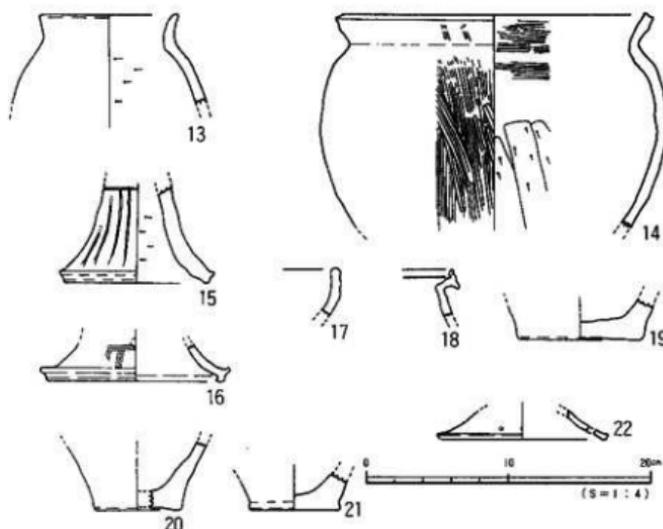
この他、床面にはビットが多数検出されたが、その性格は不明である。

本住居址の埋土(大半が攪乱で除去されている)は暗褐色シルト一層である。

遺物は、壁体溝付近で弥生土器の破片が数点出土した。



第14図 SB4測量図



第15図 SB4出土遺物実測図

## 出土遺物 (第15図)

甕形土器 (18・20・21) 18は口縁部片である。口縁端は粘土紐の貼り付けにより上方に拡張させる。端面には凹線文を施す。20・21は底部片である。20はわずかに上る上げ底で、21はわずかにくびれる平底である。

壺形土器 (13・19) 13は短頸壺である。口縁部はわずかに外反し端部は丸く仕上げる。内面は板カキである。19は人形壺の底部である。

鉢形土器 (14) 14は肩部が張り、胴部最大径が口径を凌ぐ中形品である。頸部内面には稜がなく、口縁端部は面取りするか拡張はしない。調整は、内面は胴上半部以下はケズリで、口縁部・頸部下3cm程はヨコ刷目調整である。外面はタテ刷毛目調整で、口縁部(外面)のみタテ刷毛目後ヨコナテ調整が行なわれる。

高環形土器 (15~17) 17は環部片である。口縁部は直立し、外面に幅広で浅い二条の凹線文を施す。15・16は脚部片である。15は広がりの小さい裾部をもち、脚端部は強いヨコナテが行なわれる。このため、脚端部の内・外面及び端面には凹線文状の起伏がある。施文は、脚上部に一条のヨコ方向の沈線文、この沈線文と脚端部間に矢羽根状の沈線文が施される。色調は淡褐色(黄色っぽい)で、焼成も良く他の土器片と全く違う様相を呈する。16は裾部が大きく広がり、脚端部が拡張される。施文は円孔が穿たれ、円孔と脚端部間にヨコとタテの

沈線文を組み合わせた文様が施される。沈線文は極細で、5条で一組となる。外面に赤色顔料が塗れる。

蓋形土器：壺用(22) 22は口径11.6cmで、小～中形壺に使用される蓋形土器である。小川孔が2孔穿たれており、2孔1組になるものと思われる。

時期：鉢形土器14の口縁部形態や内面調整は後期前～中葉(占)の特徴をもち、出土遺物に大きな時期幅がないことより、埋没時期は後期前～中葉(占)である可能性が高い。

#### S B 7号住居址(第16～18図、図版6～8)

調査区南東部B3～C3区に位置する。住居西側に配水管設置に伴う掘り方が幅50cmで南北に走っている。平面形は円形を呈し、規模は南北7.1m、東西6.9m、壁高28cmを測る。本住居址の覆上は黒褐色シルトである。この覆上の上には、第V層淡黄色シルトが堆積していた。このことは、本住居址が第V層堆積前(古代以前)にすでに削平されていた事を示すものである。主柱穴は、SP1～6の6本であり正六角形に近い配列となる。主柱穴は円形もしくは楕円形を呈し、径25～40cm、深さ20～30cm、柱穴間は2.2～2.5mを測る。SP1の塚中下部にて粘土塊を確認した。この粘土は、柱穴の側壁に沿って検出されるものが多く、柱を固定するために詰められたものと考えられる。また、主柱穴の外側に逆時計回りの位置にて、六角形に配置する柱穴(SP7～11、1本未検出)があり、主柱穴すえかえによる建て替えが行われた可能性を示す。床面は平坦で比較的堅い。壁体の内側には径4～17cm、深さ2～13cmの小ピットがあり、不均等な間隔で壁体に沿って廻廻する。

址は(第18図、図版8-2)、住居址中央部(やや南より)に位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸1.1m、短軸0.8mで、深さ20cmを測る。構造は、北東部の45×70cmのテラス部とこのテラス部より8cm下がった36×28cmを測る落ち込み部からなる。落ち込み部には扁平な石があり、この石の上に焼けて表面が荒れた異形の鉢形土器(第30図111, 図版22)が口縁部を上にして出土した(図版6-2)。テラス部には、小ピットが7基検出された。また、炉址の南東部に接して炭(灰混り)が45×115cmの範囲で検出された。炭直下の床面が焼けていない事から炉からかき出した炭(灰)と考えられる。埋土は黒褐色シルト1層であるが、部分的に砂が多く混じる地点もある。

遺物の出土状況は、壁体から約50cmの間と、中央部では出土量が少なく、ドーナツ状に遺物が分布する。完形に近い大きな破片は床面に接して出土することが多い。住居址南東部では、完形に近く、特徴のある土器とガラス玉が集中して出土している(第16図)。また、木炭片は、いずれも床面より浮離した状態で出土している(図版6-2)。接合作業では床面密着の遺物と浮離した遺物が接合されたり、1m程離れた遺物が接合されるケースもあった。

遺物は、住居址上部が削平されている事もあるが、小形品(器高約10cm以下)を除くと完形品が1点も出土していない(P117参照)。

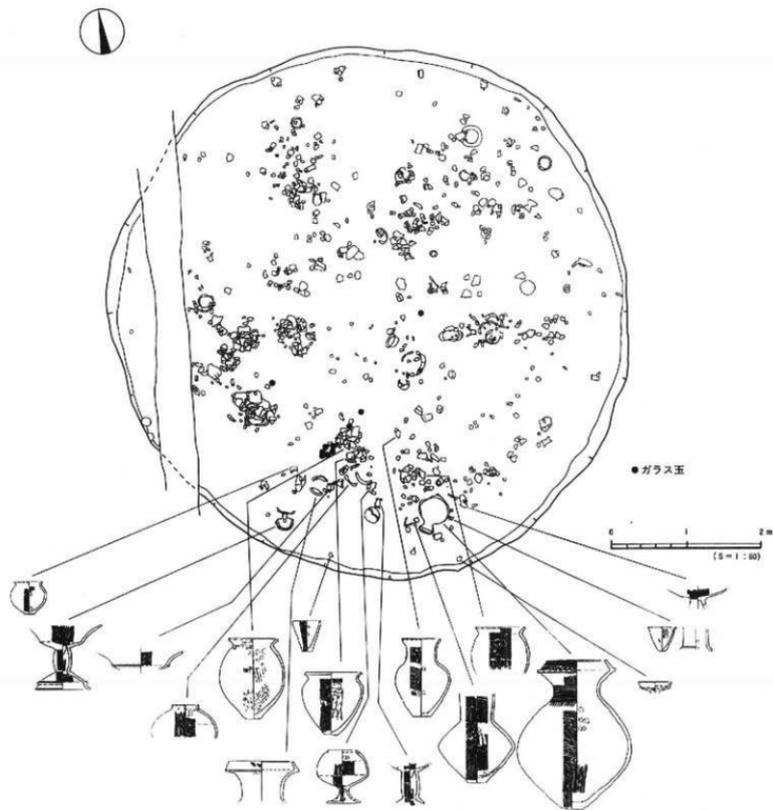
## 出土遺物 (第19~35図、図版18~26)

甕形土器 (23~53) く字状口縁部を有する甕形土器群で、胴部の張り、底部の形態により大きく三つに分類できる。A類 (23~28) : 胴部の張りが弱く、胴部最大径は胴部中位やや上であり、口径を凌ぐものである。底部はやや厚みのある平底を呈することが多い。調整は内外ともに刷毛目調整である。口径20cmを越える大形品はこのタイプである。23の外面には板ナデ痕が(図版18、P82 ㊦9参照)、26の外面部上部には叩き痕が(図版26-右上)看取される。甕形土器における叩き痕看取例は、一点だけであった。B類 (29~36) : 胴部が強く張るものである。器高が伸びず鉢形土器に似るものあり。底部は平底か、わずかに上げ底のものがつく。口縁部は胴部より器壁がやや厚く、口縁端部は強いヨコナデにより拡張ぎみに仕上げられる。口径15~20cmの中形品が多い。C類 (37~39) : 胴部がわずかに張り、最大径は胴部上位にあるものである。胴部最大径は口径と同じか、わずかに小さくなるものである。底部はくびれの上げ底である。小形品に限られる。39は、口縁端部が細く尖りぎみに仕上げられたこともあり胴部径が口径を凌ぐことになる。40~43はいずれも小片であり、流れ込み品の可能性が高いものである。44~53は底部片である。44・45は平底で、46~53は上げ底のものである。

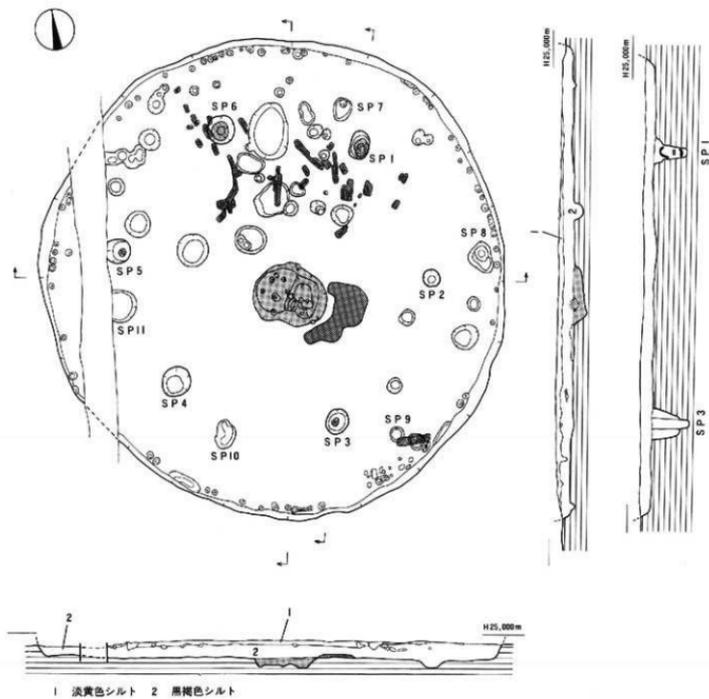
壺形土器 (54~102) 複合口縁壺、長頸壺、短頸壺、台付無頸壺がある。

複合口縁壺 (54~66) 複合口縁接合部(以下、口縁接合部と記す)により二分類できる。

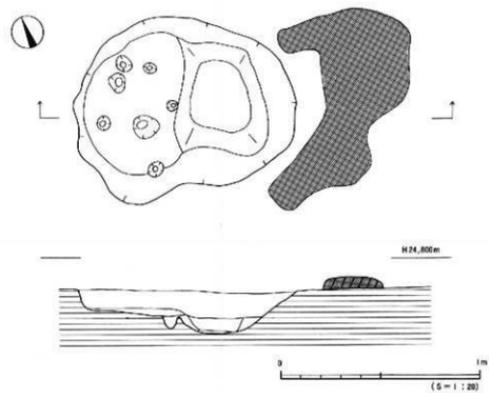
I類 : (54~58) 口縁接合部が「く」字状を呈するものである。明瞭な稜を持つもの54・55と稜が鈍く丸みのあるもの56~58がある。54・55・58は長頸で広口口縁に拡張部がつくものである。58は拡張部の貼り付けが1.65cmと短い。拡張部には櫛描沈線文が施される。56・57は短頸でわずかに開く口縁に拡張部がつくものである。拡張部は強いヨコナデにより端部が直立して立ち上がる。頸部に櫛描きによる沈線文、拡張部に櫛描きによる横沈線文と「山形文」状の施文を施す。II類 : (59~63) 口縁接合部が「コ」字状に仕上げられたものである。59・60は接合部の張り出しが短いものである。59は拡張部がわずかに外反し、櫛描きの横沈線文と荒い波状文が施される。60は2分の1の残存である。口縁拡張部は内湾ぎみに作られるが、端部はわずかに外反する。頸部はヘラ描沈線文、肩部は櫛描き板状工具の木目による押圧文が施される。口縁拡張部には横沈線文(擬凹線文)と斜格子目文が施される。61~63は接合部が長くタガ状に突出するもので拡張部は外反して立ち上がる。61は小片で接合部端面に二条の太いヘラ描沈線文(擬凹線文)と拡張部に山形状の櫛描文を施す。62・63は胴部が強く張り筒状の頸部に、大きく開く口縁部がつき拡張部を作るものである。62は頸部と胴部の境に断面三角形の凸帯を1条施す。63は頸部下半と拡張部に櫛描横沈線文と斜格子目文を施す。64~66は複合口縁の頸部~肩部にかけての破片である。頸部副境に凸帯を貼り付け64はナデ凹みを、66は刻目を施す。



第16図 SB7出土遺物測量図



第17図 SB7測量図



第18図 SB7測量図

広口壺 (67・68) 67は中形品の破片である。口縁端部がわずかに肥厚され、端面は強いヨコナデが施され凹線文風に見える。68は大形品で水平に近く開く口縁部である。口縁端はわずかに拡張され、ヘラ描沈線文(擬凹線文)が二条施される。

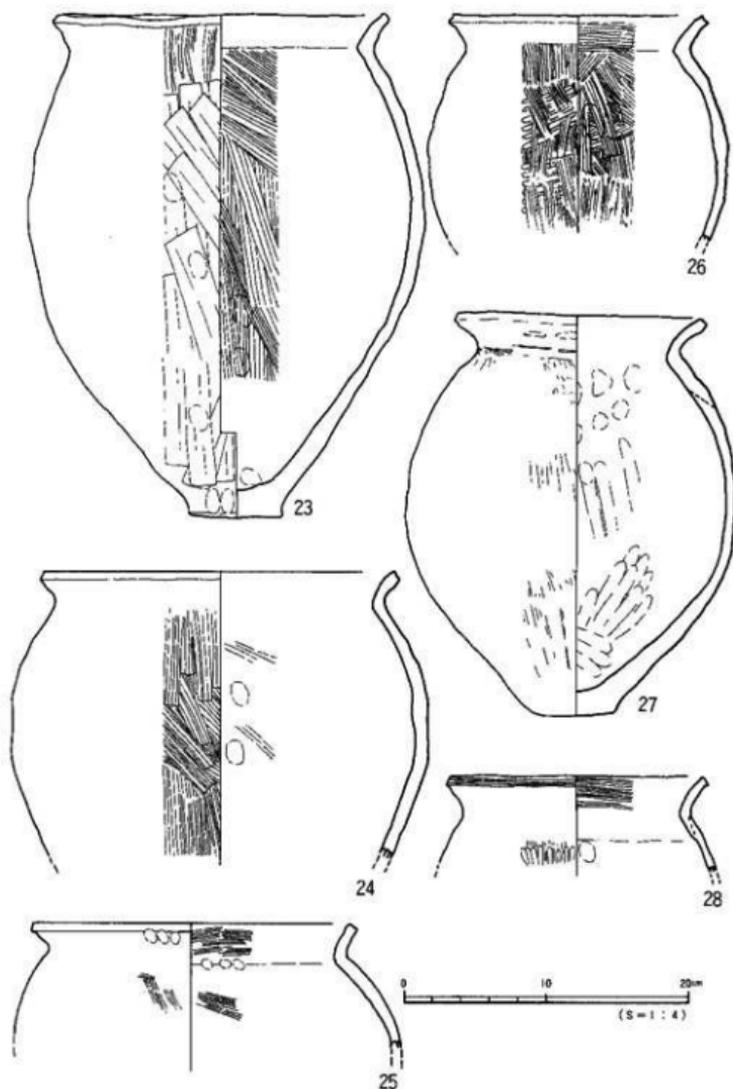
長頸壺 (69~88) 頸部形態より二分類できる。I類 (69~84) : 直立ないしやや外傾する頸部にわずかに外反・外傾する口縁部がつくものである。II類 (85~88) : 内傾する頸部にわずかに外反する口縁部がつくものである。胴部形態は、I類は肩部が張るものと丸みをおび胴中位が張るものがあり、特に頸部が細く長頸化の著しいものは胴中位が張りだし扁平な胴部を呈する。II類では肩部が強く張り、口縁が細く丸く仕上げられる。調整は刷毛目調整が主体 (80・84・85他) で、刷毛目後荒いヘラ磨きを行なうものもある (69・73)。なお、70は胴部上半の外面に粗い左上がりの印き痕がある。調整は総じて内面は胴上半に指押さえ痕 (69・80) と指によるナデ上げ痕 (70・84・88) が見られることが多く、胴部下半は刷毛目調整がされる。78にはヘラ削り痕が見られる。また、板ナデ調整をするものがある (85)。施文は、I類のみに見られ肩部及び頸部一帯に文様帯がありヘラ描沈線文とヘラ状工具による刺突文、断面三角形の凸帯文が施される。69・78の刺突文は全周しない。

短頸壺 (89~94) 短く内傾する頸部に外反する口縁部がつくもの89~91 (I類) と、くびれて直立ないし外傾・外反する口縁部がつくもの92~94 (II類) がある。I類: 89は完形品で、外面刷毛目、内面胴下半はヘラケズリ調整が行われる。口縁端部はナデにより僅かに拡張され、ヘラ状工具による太い沈線文(擬凹線文)が施される (90も同様)。肩部には板状工具の木口による「ノ」の字状の押圧文が施される。91の外面はタテ刷毛目調整がされ、内面胴上半部に板状工具による横方向のナデが行なわれる。II類: 92は口縁端部が強いヨコナデにより跳ね上げ風に仕上げられる。93は胴部中位が強く張るものである。頸部下端に小円孔が穿たれ、2ヶが1組となり2組が施される。94は長球形の胴部に直立する短い口縁部がつくものである。調整は外面が板状工具によるナデ調整 (図版26) で、内面は胴下半部がケズリである。93・94とも口縁端部が面取りされる。

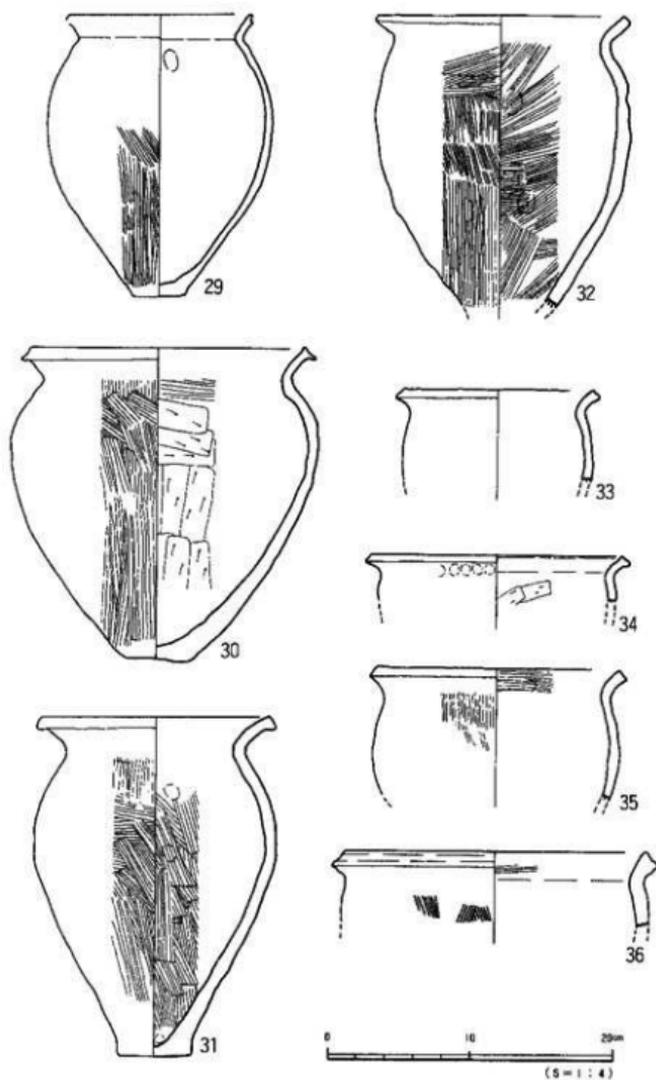
無頸壺 (95) 脚台付の無頸壺である。胴下半部に屈曲部をもち、内湾・内傾して口縁部にいたる。口縁部には小円孔があり、対応するように1ヶ1組が穿たれる。外面は丁寧なヘラ磨きが施される。脚部は1部欠損するものの、径1.2cmの円孔が4ヶ穿たれる。仕上げが丁寧で色調も他の上器よりも白っぽくやや様相が異なる。

底部 (96~102) 97~100は人形の壺形土器の底部片である。やや大きめの平底で、わずかにくびれ、丸みをもって突出するものである。96は中形品の体部片で、厚みのある平底をもつ。101・102は小形品でくびれの上げ底を呈する。くびれ部は指頭痕がみられる。

調査の概要

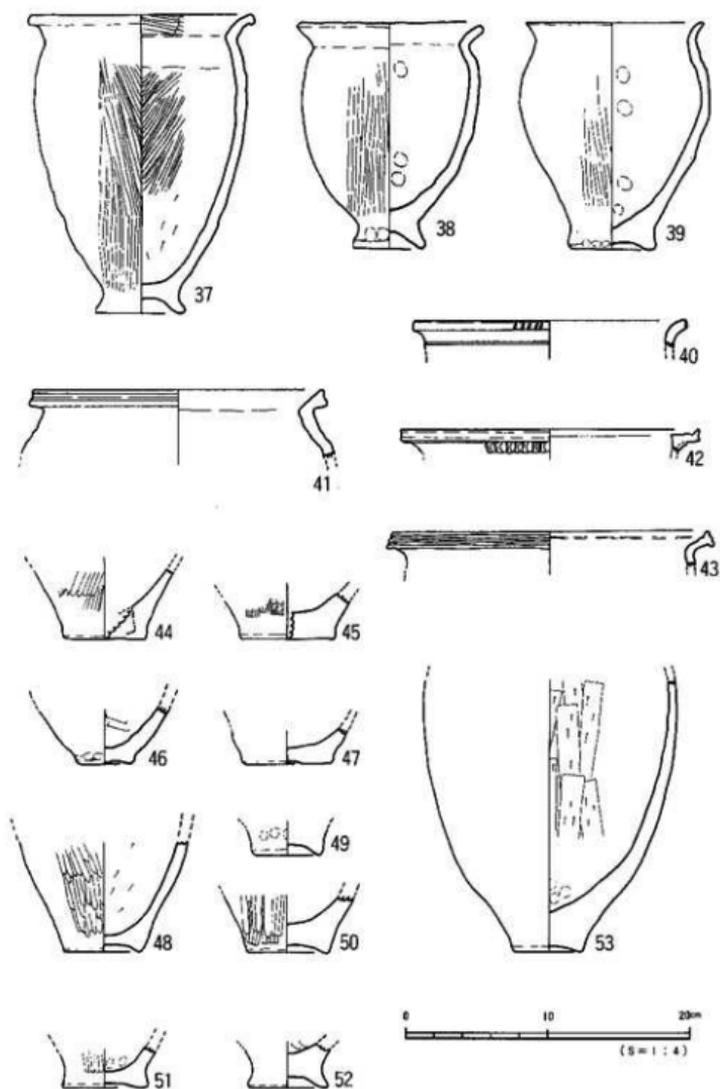


第19図 SB7出土遺物実測図(1)

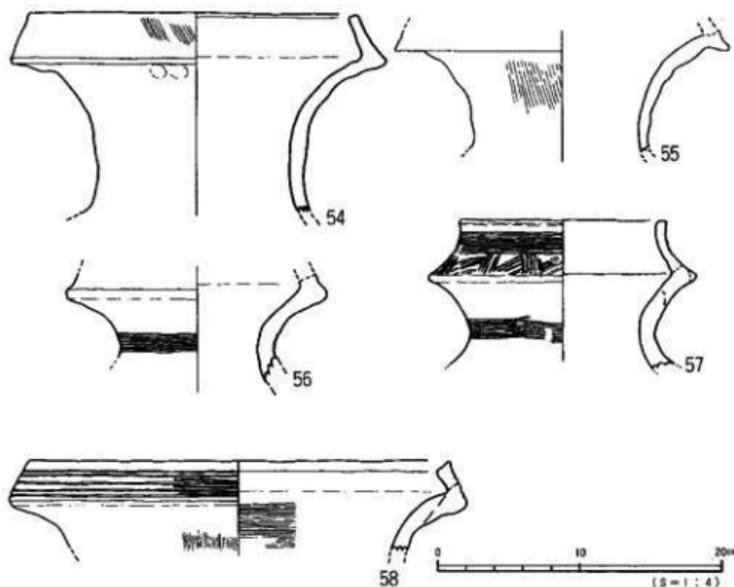


第20図 SB7出土遺物実測図(2)

調査の概要



第21図 SB7出土遺物実測図(3)



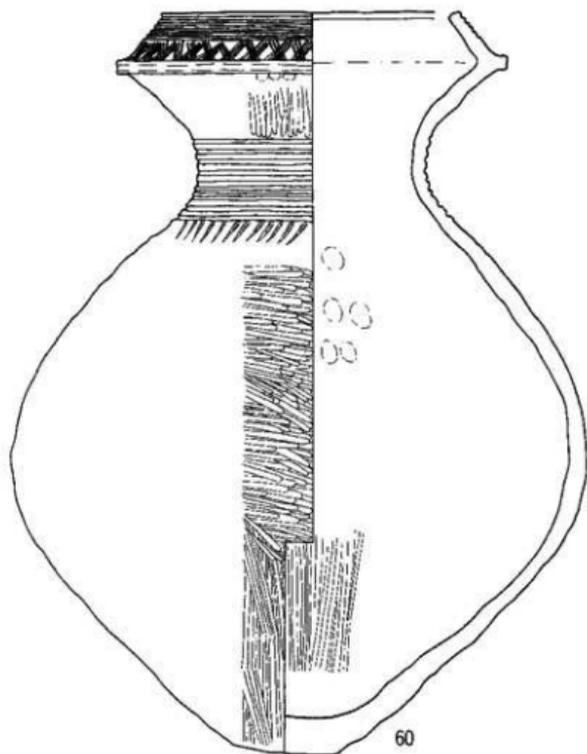
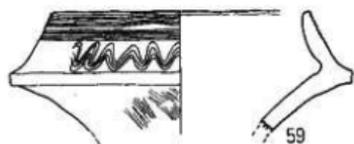
第22図 SB7出土遺物実測図(4)

鉢形土器 (103~124) 器高が20cmを越える大形品(103)、10~20cmの中形品 (104~111・123・124)、10cm未満の小形品 (112~121) がある。

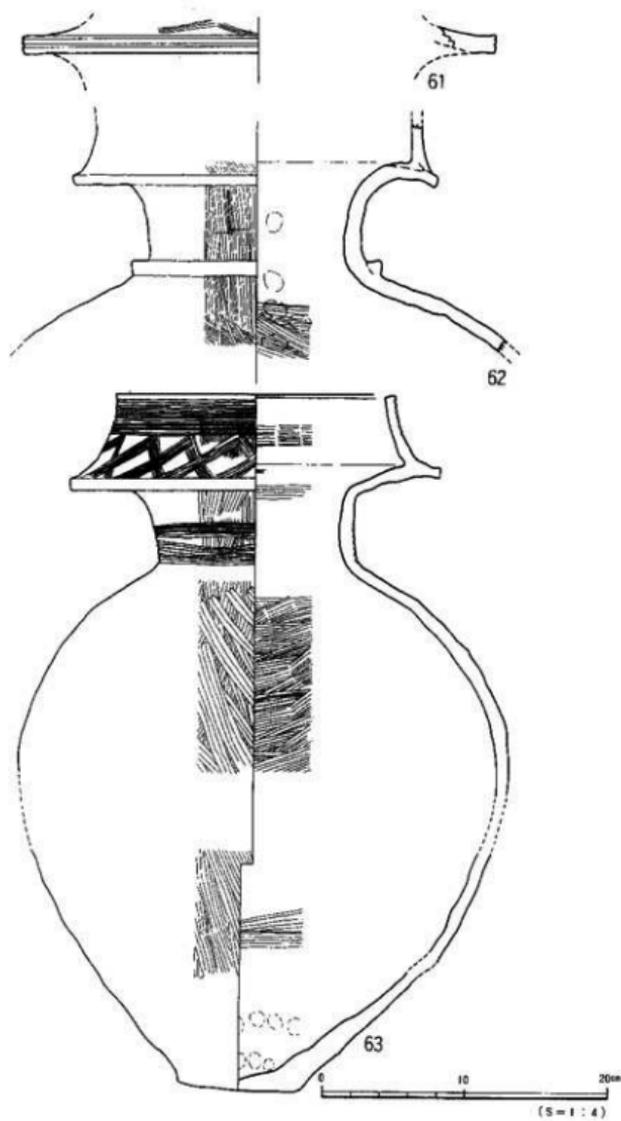
鉢形土器大形品 (103) 103は器高値・口径値がほぼ同じ値を示す。肩部が強く張り、胴部最大径(胴部)は口径値を凌ぐ。口縁端は強いヨコナテによりやや拡張される。底部は平底である。

鉢形土器中形品 (104~111・123・124) 104・105・107は器高値が口径値に迫るものである。107は胴部最大径が口径を凌ぐ、104・105はくびれの上げ底を呈する。106・108~111は口径値が器高値を大きく凌ぐもので、胴部最大径値は口径値を下回るものである。111の底部は丸みをおびた平底である。口縁端部は「コ」の字状で、105だけが先細りで丸く仕上げられる。123、124は胴部下半~底部の破片である。器体に比べ大きめのくびれの底部を持つ。

調査の概要

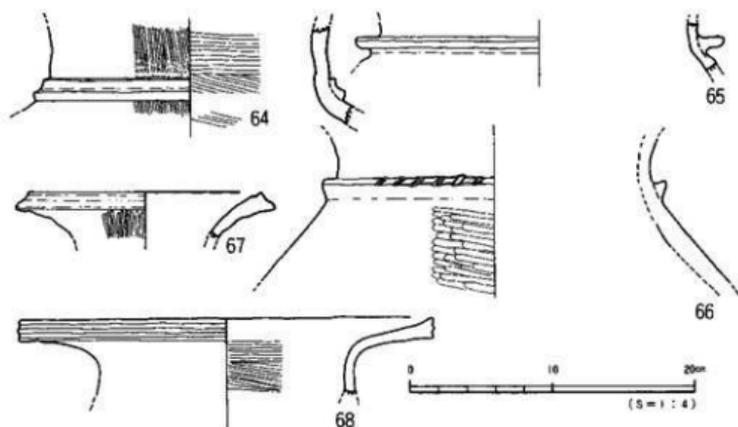


第23図 SB7出土遺物実測図(5)



第24図 SB7出土遺物実測図(6)

調査の概要



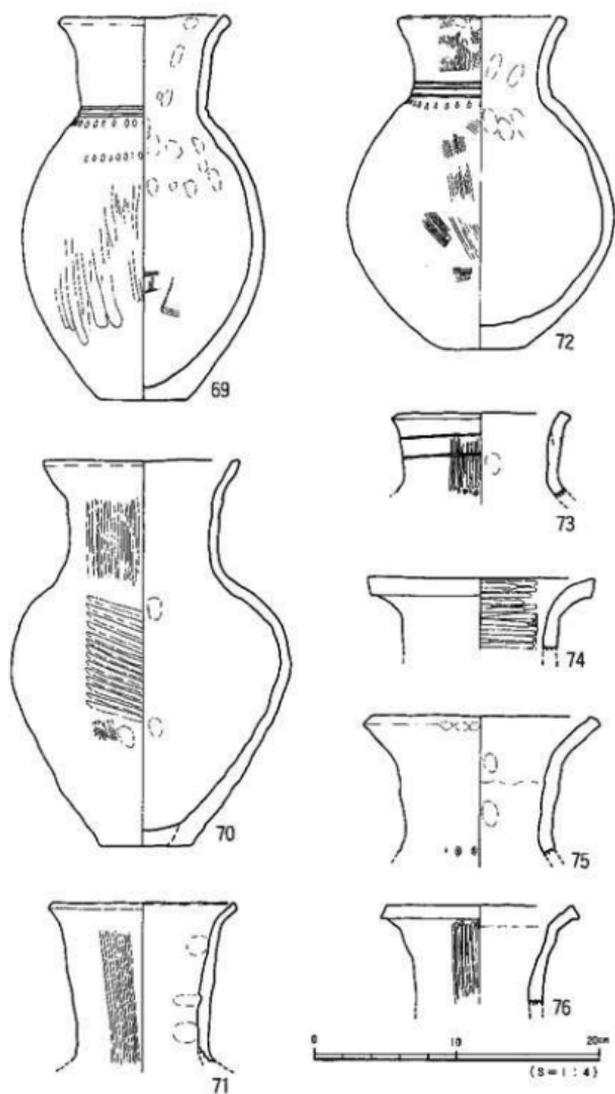
第25図 SB 7出土遺物実測図(7)

鉢形上器小形品 (112~121) 112は103の小型品である。口縁端部と口縁内面はヨコ刷毛目調整である。113は111の小型品である。114は105の小型品であるが、底部は平底である。115~121は直立ないし外傾して立ち上がる口縁をもつものである。115~117は器高値が口径値を凌ぐものである。厚めの平底に外傾して立ち上がる口縁部を持つ。口縁端部は丸くおさまられる。118は口径値が器高値を大きく凌ぐものである。くびれの上げ底の底部に外傾して立ち上がる口縁部を持つ。口縁端部は先細りし丸くおさまる。119・120は平底で直立する口縁部をもつものである。口縁端部は水平で「コ」の字状に仕上げる。121は細片で櫛状波状文が3組施される。

鉢形上器脚部 (122) 122は台付鉢の脚部片である。器壁が厚く、くびれの上げ底を呈する。

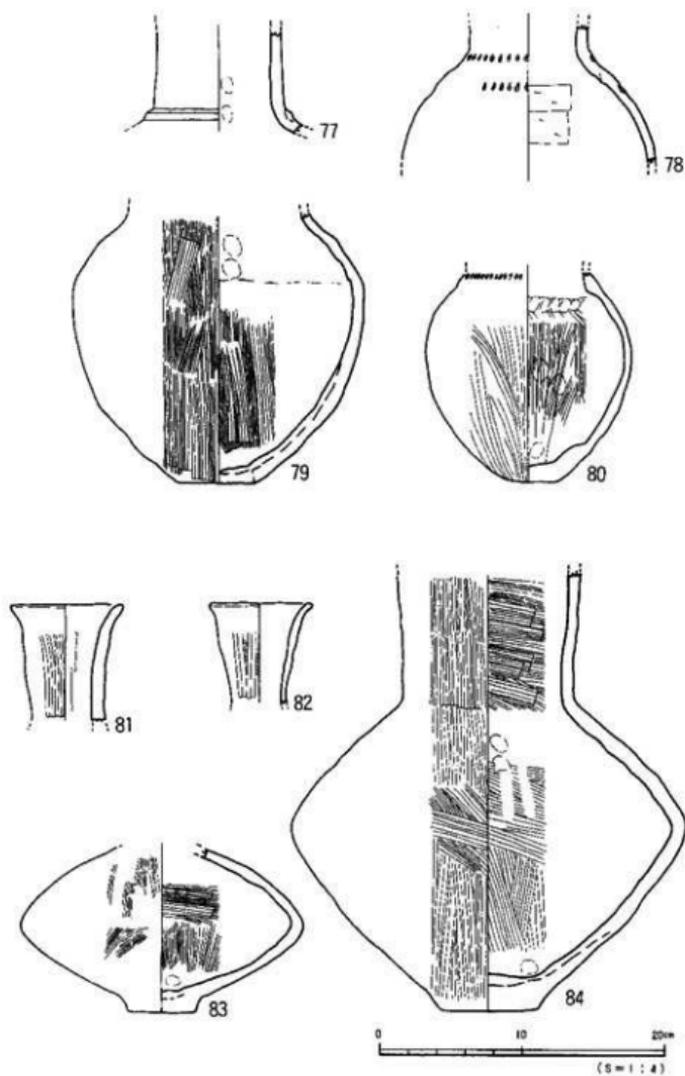
高坏形土器 (125~149) 完形品はなく器形がはっきりとしない。坏部は、口縁部~屈曲部の深さの値をa、屈曲部~坏底部の深さの値をbとすると、 $a < d$ のもの(坏I類)、 $a < b$ のもの(坏II類)がある。125~127・129(坏I類)である。口縁部は、わずかに外反し口縁端部が「コ」の字状に仕上げられる。128・135は坏II類である。口縁端部は細く丸く仕上げられる。147・149は坏III類である。I・II類に比べ坏部が深いものである。

脚部は柱が傾斜するもの(脚A類)と柱が直立して筒状になるもの(脚B類)、柱がなかぶくろみでエントシス状を呈するもの(脚C類)がある。A・B類の裾部はゆるやかに開くもので、C類は途中で肩接する有段のものである(147)。129~131・132・140~143は脚A類で129・131は内面柱部上端に未貫通の小円孔が穿されている(図版26-左下)。

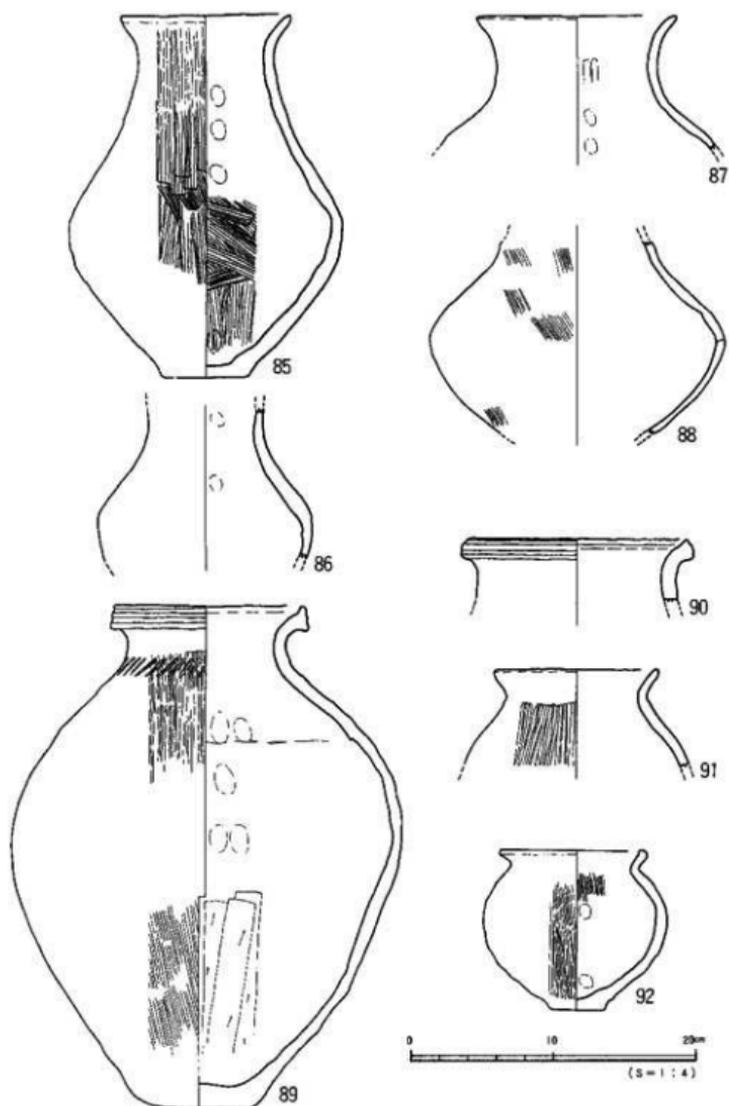


第26図 SB 7出土遺物実測図(8)

調査の概要

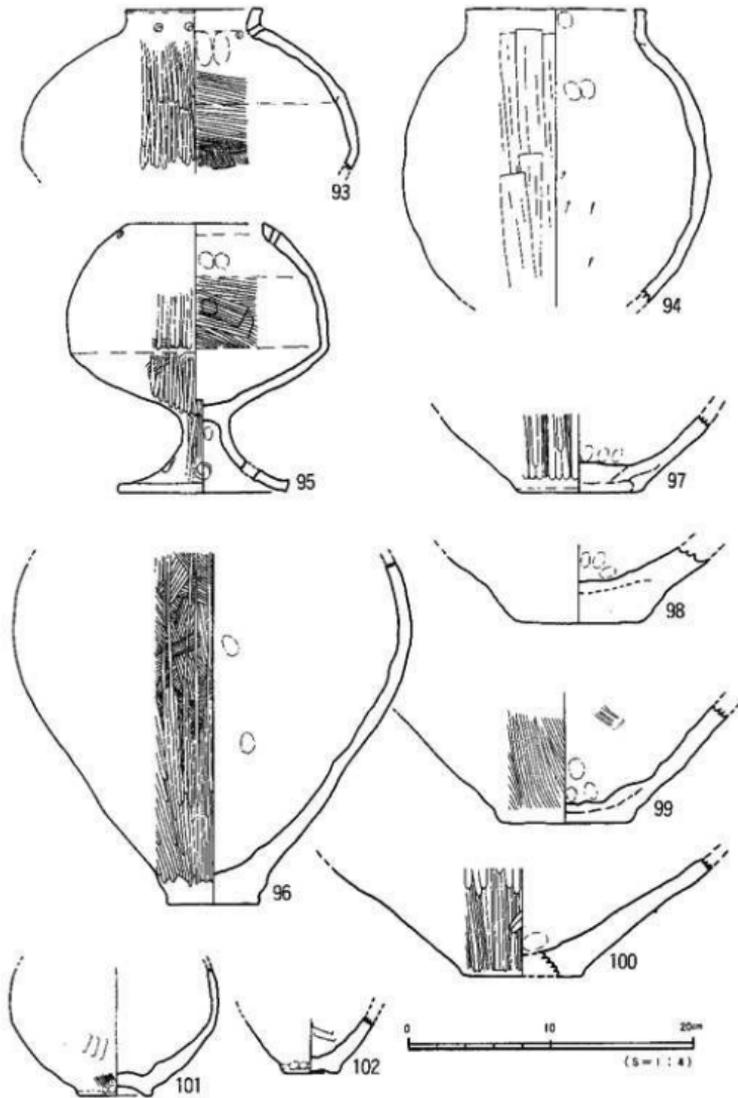


第27図 SB7出土物実測図(9)

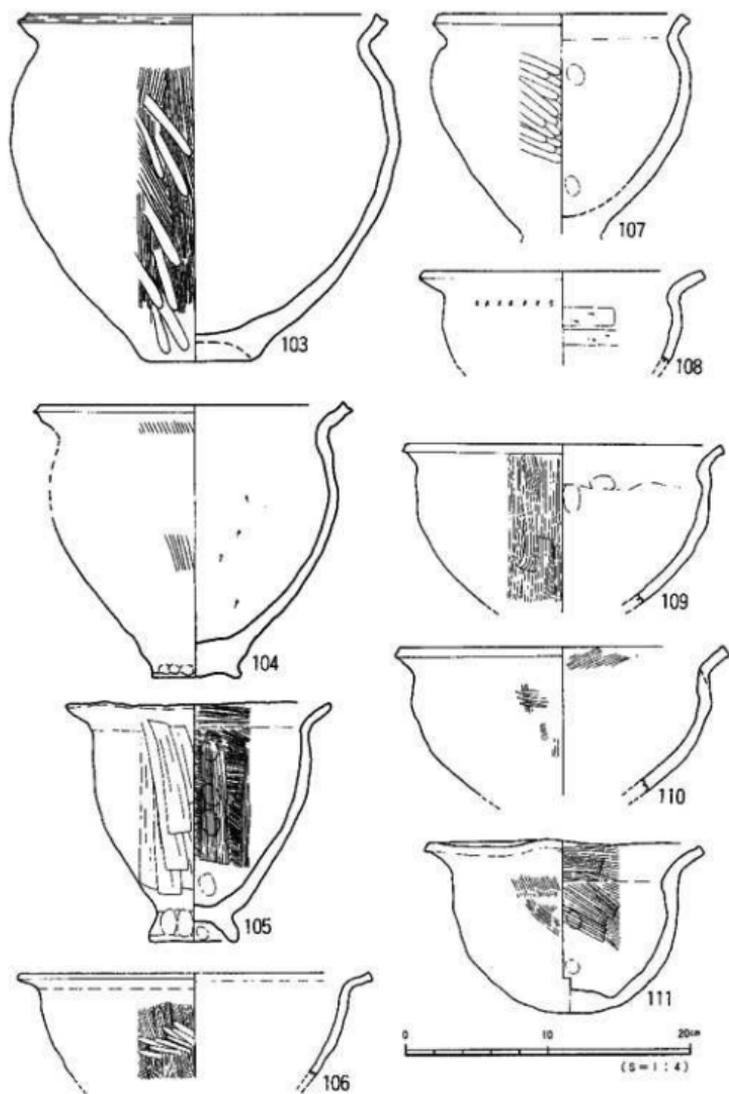


第28図 SB7出土遺物実測図(10)

調査の概要

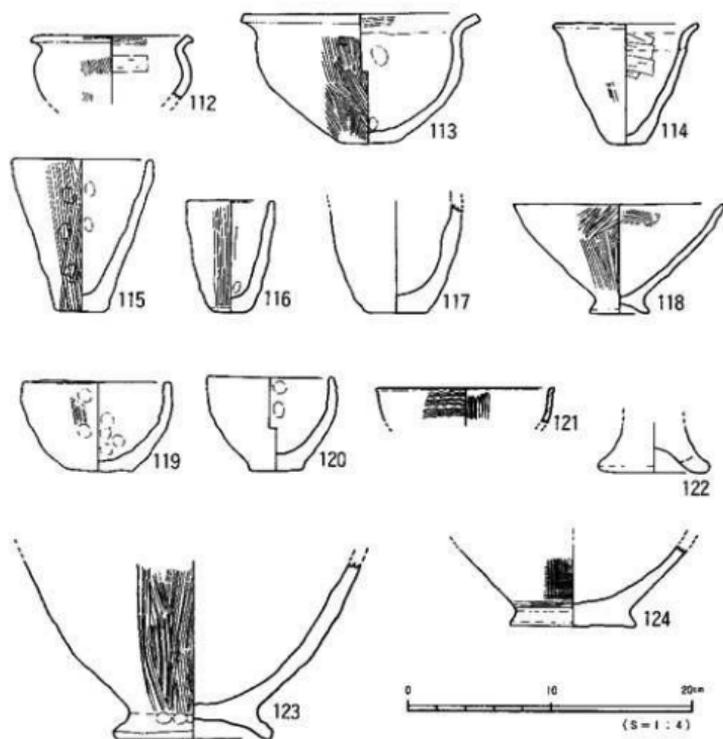


第29図 SB7出土遺物実測図(II)



第30図 S B7出土遺物実測図(12)

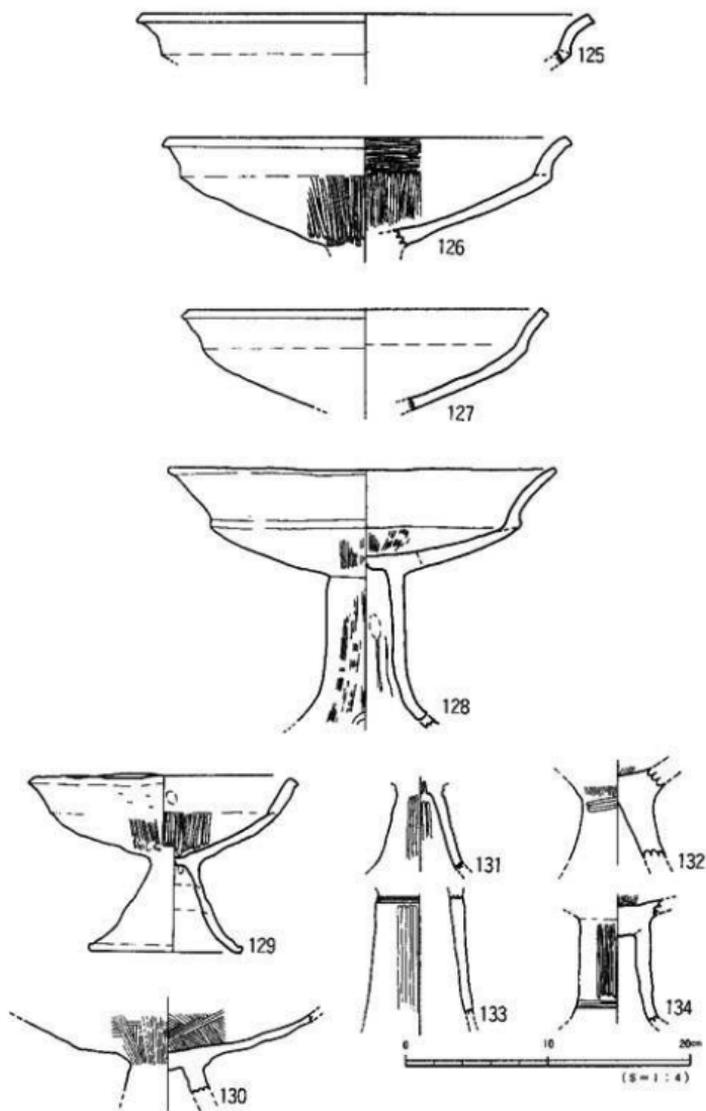
調査の概要



第31図 SB7出土遺物実測図(3)

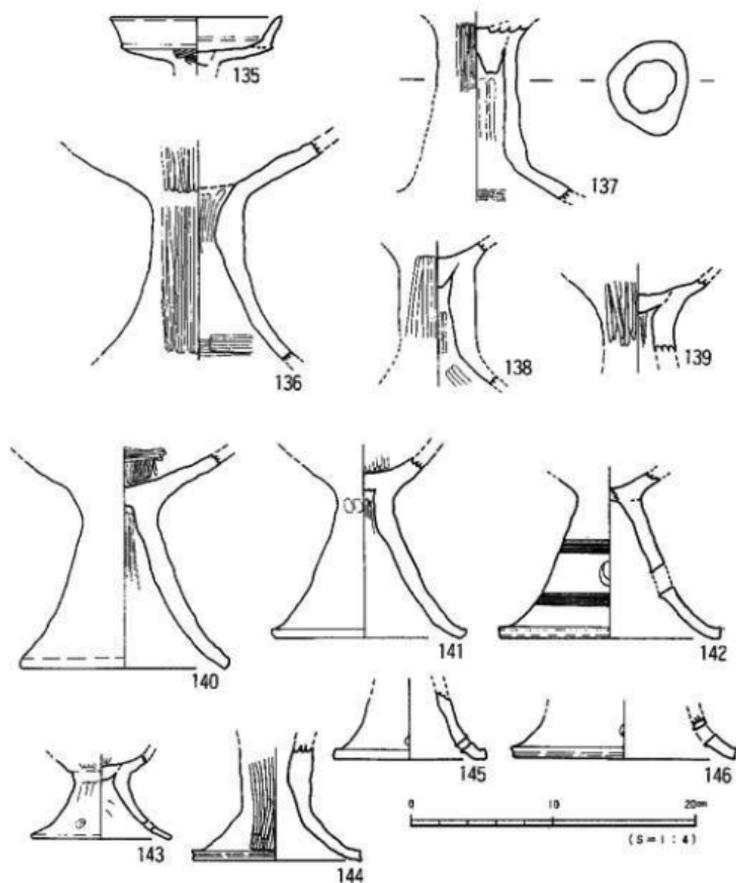
128・133・134・137~139・144は脚B類である。148は脚C類である。坏部と脚部の接合方法は128・130・131は坏底部に差し込んで接合されるものであり、137~139・141・143は坏部と脚部を同時に作り坏底部を充填して作るものである。147・148は脚部と坏部を接合した後に坏底部を充填する接合方法を取る。134・135・140・142の接合方法は判断しかねる。調整は刷毛目後粗いヘラ磨きが行なわれているものが多い。内面は、柱部はナデもしくは未調整でシボリ痕がみられるものもある。裾部内面はナデ調整が行なわれる。施文は133・134・142は細いヘラ描沈線が施される。脚部には円孔をもつものもある(128・142・143・145・146)。149は坏部の屈接部に凸帯を貼り付け、上面が強くナデられ「M」字状を呈する。内面には、荒いタテヘラ磨きを行なう。

遺構と遺物



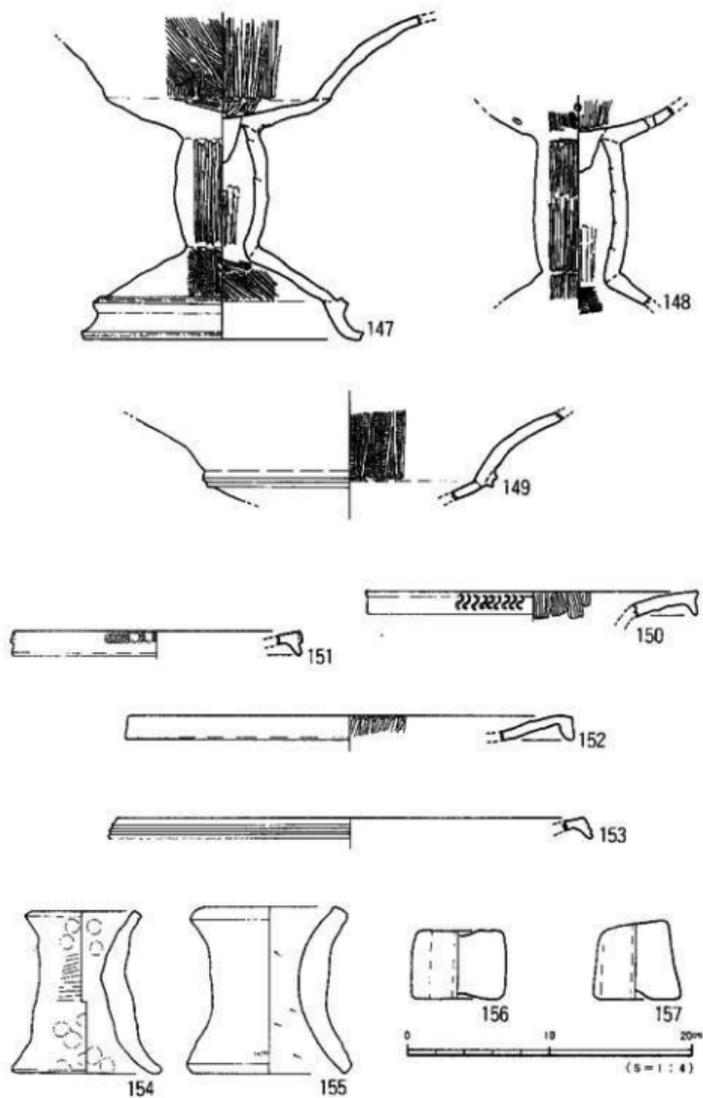
第32図 SB7出土遺物実測図(14)

調査の概要



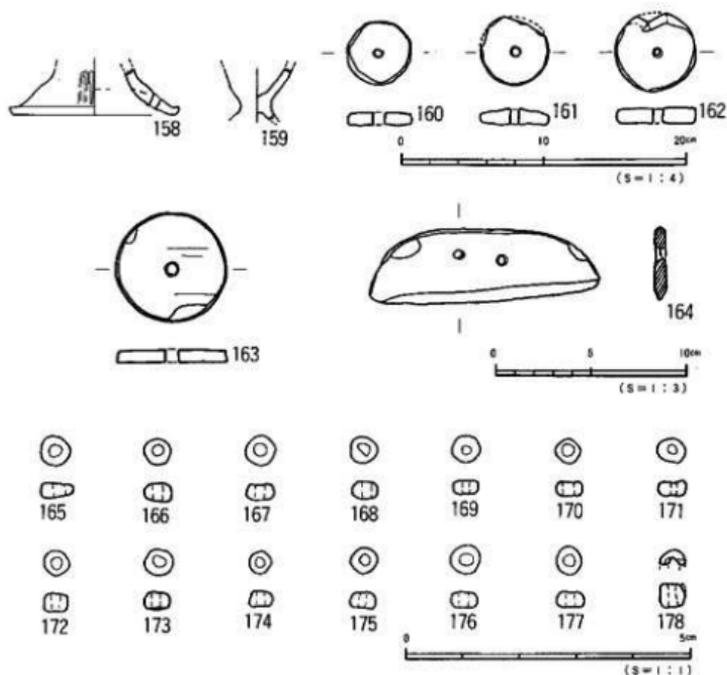
第33図 S B7出土遺物実測図(19)

器台彩土器(150～153) 150～153はいずれも受部の小片である。大きく開いた受部の口縁部は、口縁端が貼り付けにより下垂される。拡張された口縁端面には、へら描の沈線文(153)、半截竹管文(150)、円形浮文と櫛描波状文(151)が施される。151には口縁部上面にも櫛描の直線文と波状文が施されている。



第34図 SB7出土遺物実測図(10)

調査の概要



第35図 SB7出土遺物実測図(17)

支脚形土器(154~157) 中空・柱状の体部に上下が開くもの(154・155)と中実のもの(156・157)がある。154・155は外面が刷毛目調整で内面は155は削りが行なわれている。156・157は3~4cm幅で面をなしている。調整はいずれもナデである。

蓋形(壺用)土器(158) 158は小片である。復元口径11.4cmであり、小形の壺形土器用である。裾部に小円孔が穿たれる。外面はヘラ磨きである。

ミニチュア(159) 159は蓋形土器ないし鉢形土器のミニチュア品である。くびれの上げ底で外面はナデである。

紡錘車(160~163) 160~162は土製品である。法量は、直径4.4~5.5cm、厚さ0.8~1.1cm、重さ21~42.3gである。円孔は、焼成前穿孔で径6.5~7.5mmを測る。163は石製品である。径5.7cm、厚さ0.7cm、重さ41.6gで、石材は頁岩である。

石庵丁 (164) 164は直線刃外湾形である。法量は $12 \times 3.9$ cm厚さ0.6cm、重さ50.3gであり、鉾を2ヶ有する。

ガラス玉 (165-178) 165-178は直径が0.3-0.6cmのガラス小玉である。色調は、ブルーである。このうち、ガラス小玉片178は科学分析を行った現在、分析中。P103参照

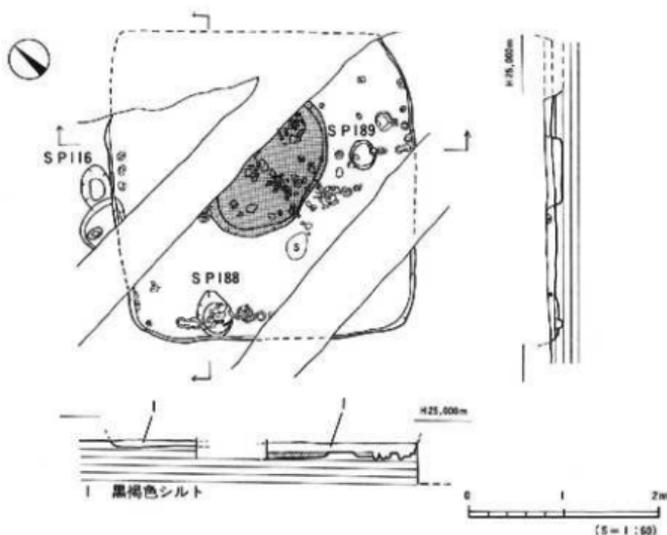
時期：中形の甕形土器の平底化や、複合口縁壺の存在、鉢形土器小形品の多様化、高坏形土器坏部の口縁部の外反化等は、後期中葉の特徴を示すものである。遺物の維存はよく、良好な状況での出土であることより、本住居址の廃棄・埋没時期は後期中葉に比定されよう。

## 2) 古墳時代前期

古墳時代前期の住居址は1棟 (SB10) である。第Ⅶ層上面で検出した。

SB10号住居址 (第36図・図版9)

調査区南半中央部C2区に位置する。住居址の半分以上が攪乱を受け破損している。平面形は隅丸方形で、規模は北西-南東3.2m、壁高10cmを測る。床面はほぼ平坦で堅く、壁体に沿って径5.5-13.5cm、深さ3-8.5cmの小ピットが南西隅及び南側で検出された。炉は住居址中央部に位置する。平面形は楕円形で、長軸160cm、短軸110cmで断面は皿状に凹み、中央部が最も深く8cmを測る。炉址からは、炭と壺形土器 (第37図182) が出土した。炉址内を除



第36図 SB10測量図

くと遺物は、東・南壁付近に集中して出土した。本住居址の主柱穴は未検出である。また、本住居址は1号掘立柱建物址（P75参照）を切って設置されている。

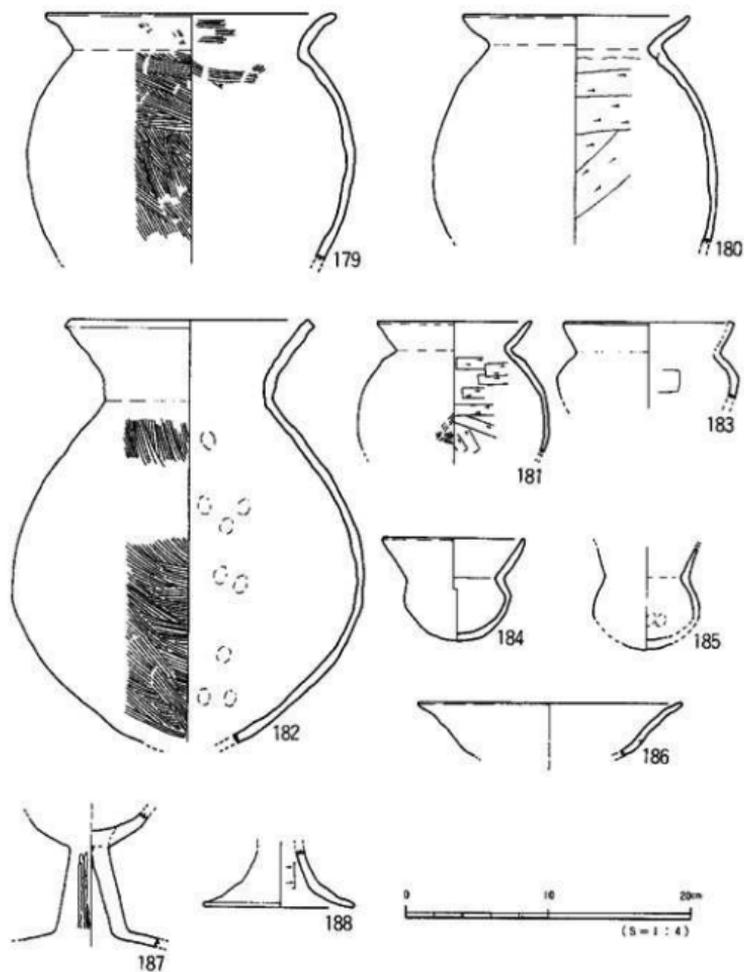
#### 出土遺物（第37図、図版27-1）

変形土器（179～181） 179はやや肩の張る胴部に、強く外反する口縁部をもつ中形品である。内面は頸部屈曲部下端以下はへらないし板状工具によるケズリが行なわれる。外面は細く粗い刷毛目調整である。口縁端部は丸く作られる。180は肩の張りの弱い胴部に内湾してひらく口縁部をもつ中形品である。頸部屈曲部には弱い稜をもつ。内面は頸部屈曲部下端以下はケズリが行なわれる。外面は板状工具による調整である。口縁端部は丸く仕上げるが、わずかに丸みを帯びた面をなす部分もある。181は180の形状に似るが外面はナデ調整、口縁端は内傾し丸みを帯びる。

壺形土器（182～185） 182は大形品で、なで肩で胴部中位に最大径をもち、ゆるやかに外反するやや長めの口縁部をもつ。口縁端部は面取りを行なう。内面は指頭痕が顕著である。外面は細く粗い刷毛目調整である。183は肩部の張る胴部に内湾ぎみに立ち上がる短い頸部をもつ。口縁内面は器壁が剥がれ落ちている。口縁端部は内側にわずかに肥厚される。内面はマメツしているがケズリ痕を看取した。184・185は小形丸底壺である。184は肩部が張り、内湾して立ち上がるやや長めの口縁部をもつ。口縁端は細く丸く仕上げる。口径が胴部径を凌ぐ。185は胴部最大径が胴中位にあり、口縁部はやや短い。胴径が口径を凌ぐ。

高坏形土器（186～188） 186は坏部片である。肩曲部は丸みを帯び、不明瞭な稜線がわずかにつく。口縁部はわずかに外反する。187・188は脚部片である。187は坏部をわずかに残しており、外傾する柱に大きくひらく裾部をもつ。柱内面の上部（天井部）に小円孔が穿たれる。188はゆるやかにひらく裾部をもつ。裾部は上位は厚く、端部は細く丸く仕上げられる。

時期：本住居址出土遺物は、小形丸底壺の形態等により、古墳時代前期（新）に時期比定ができよう。遺物は雑存もよく、出土状態も良好なことより、本住居の廃棄に伴うものである可能性は高い。よって、本住居址は古墳時代前期（新）に廃棄・埋没したものと考えられよう。



第37図 SB10出土遺物実測図

3) 古墳時代中期

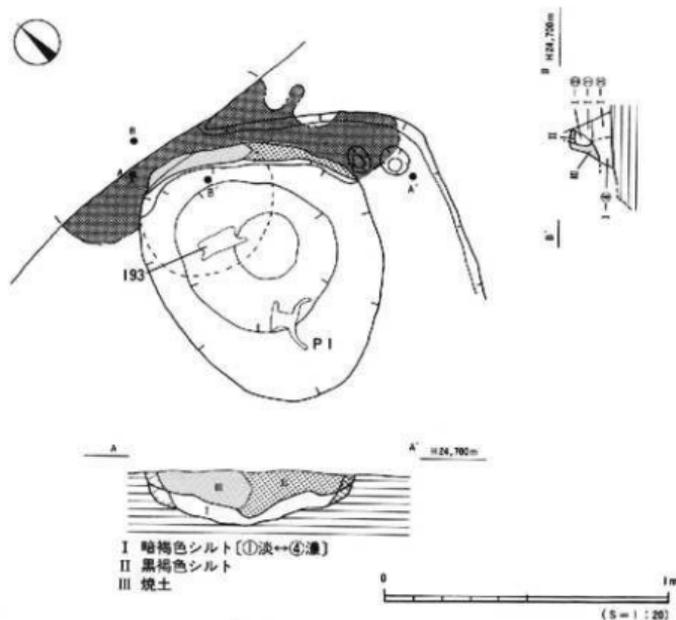
古墳時代中期の住居址は8棟(SB1・6・15・11・12・13・14・16)である。いずれも、第Ⅶ層上面で検出した。

SB1号住居址(第38図、図版10・11)

調査区中央やや北B2区に位置する。北隅及び南隅は攪乱を受け破損している。平面形は(隅丸)方形を呈する。規模は北東-南西5.7m、北西-南東5.3m、壁高15cmを測る。床面は平坦で堅く締まっている。壁体に沿って径3~14cm、深さ6~12.5cmの小ピットが一列に並



第38図 SB1測量図

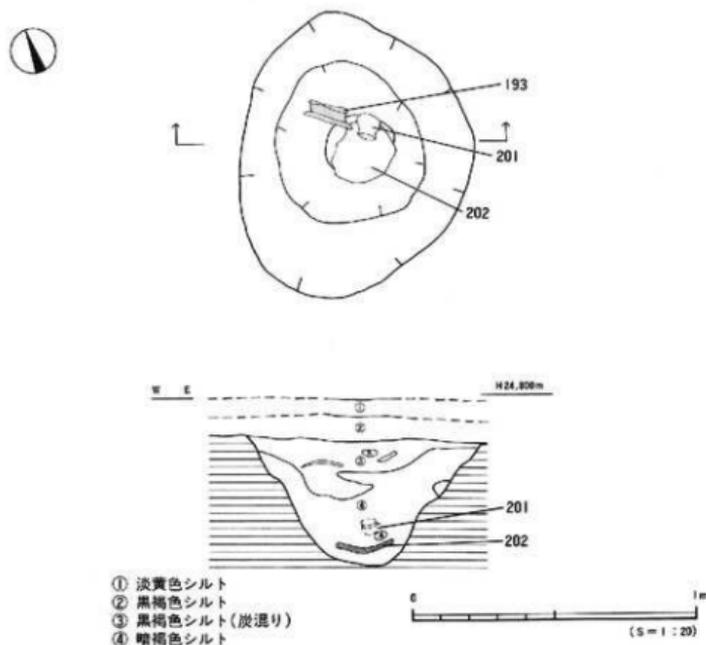


第39図 SB Iカマド測量図

ぶ。主柱穴は、SP 2、5、7、234の4本であり、柱穴の規模は径30～50cm、深さ25～40cmを測る。柱穴間は2～2.3mである。住居址中央やや南で焼土塊を検出した。平面形は不整形円で、断面は皿状を呈する。規模は径30cm、深さ10cm（最深部20cm）を測る。墳中の埋土はすべて焼土であった。

カマド（第39図、図版11）住居址東隅に位置する。攪乱により上部及び北側部が削平されているため残存状態は悪く、燃焼部の一部を検出したにとどまった。カマドは造り付けであり、住居址北壁をカットして煙道を設置していたことを確認した。カマドは暗褐色土を掘り凹めた後、黒褐色土（II層）で火床及び袖部基盤をつくり、その上部に粘土（III層）を少量用い袖部及び燃焼部内壁を作り上げている。黒褐色土（II層）には炭が混入しているため、炭の掻きだししない部分的なカマドの造り替え（補修）が行なわれた可能性が高い。焼土化した粘土（III層）の南側では円形状に焼土の小塊が分布しており（第39図の波線部分）、燃焼部内部の範囲を現しているものと思われる。出土遺物は、焼土小塊の分布域の中央南において二重口縁の壺形土器の口頸部が出土した（第41図193）。この壺形土器は口縁部の一部が焼

調査の概要



- ① 淡黄色シルト
- ② 黒褐色シルト
- ③ 黒褐色シルト(炭混り)
- ④ 暗褐色シルト

第40図 SBI内SPI2測量図

土分布面で検出され下層の暗褐色土に埋められた状態で検出された（検出時は、やや口縁部が傾斜していた）。この壺形土器は黒ずんでおりさらに器表面の雑存が悪い。出土状況及び雑存状況からするとこの壺形土器は燃焼部の支脚に使用された可能性が高い。いま一つは、第38・39図P1で高坏の完形品である。P1はカマド直上で、ヨコだおしの状況で出土した。雑存状況が悪く、遺物取り上げ時消失したため実測図は未掲載である。

SPI2（第40図、図版11）カマド直下にある。検出面は住居址床面である。カマドに伴う焼土分布域の北東縁と本土壇の北東縁の位置は一致する。

平面形は不整円で長軸1.0m、短軸75cmで、深さ45cmを測る。断面形は下場がやや不明瞭ではあるが逆台形状を呈する。掘り方上場より15～20cm下った位置で掘り方の傾斜角度がやや鋭角に変わる。

土壇の埋土は、下部は砂を多く含む暗褐色シルト（第40図④層）で、中～上部は炭を含む黒褐色シルト（第40図③層）である。この中～上部層はカマドの下部層にあたる。遺物は、床面に壺形土器底部片（第41図192、図版11-2）が据え置かれた状態で出土し、その上に挙

大の円環1点と小型丸底壺1点(第42図201)が重なって出土した(図版11-1)。埋土の下部層からは、この他に遺物の出土はない。上部層であり、かつカマドの下部層からは先述の壺形土器(第41図193)と土器細片数点と小石1点が出土した。

出土遺物 (第41・42図、図版27-2・28-1)

壺形土器(189・190) 189は復元完形品である。短く内湾して立ち上がる口縁部に球形の体部、丸底の底部がつくものである。口縁端部はわずかに面取りを行なう。内面は上半部はヘラ削りの後ナテ調整を行なう。190は口縁部片である。内湾して立ち上がり、口縁端部は内方にやや肥厚させ内側に稜がつく。

壺形土器(191~194) 191は短く外傾して立ち上がる口縁部に、肩部の張る脛をもつものである。口縁端部は丸く仕上げる。内面はヘラケズリが頸部屈曲部まで達する。192は球形の胴部に直立する短い頸部と内湾ぎみに立ち上がる口縁部をもつ大形品である。胴部上半は強いナテ上げ、下半は弱いヘラケズリである。193は短く外反する頸部に、内湾して立ち上がる短い口縁部をもつ中形品である。口縁部境に粘土紐を貼り付け、二重口縁風に仕上げる。口縁端部は内側にわずかに肥厚し、内側に稜を作る。体部内面は、粘土接合痕と指頭痕が顕著に残る。194は小形品で、扁平の体部に外傾する口縁部をもつものである。口縁部境には稜がなく、口縁部はわずかに内湾する。口縁端部は丸く仕上げる。外面は全面刷毛目調整である。

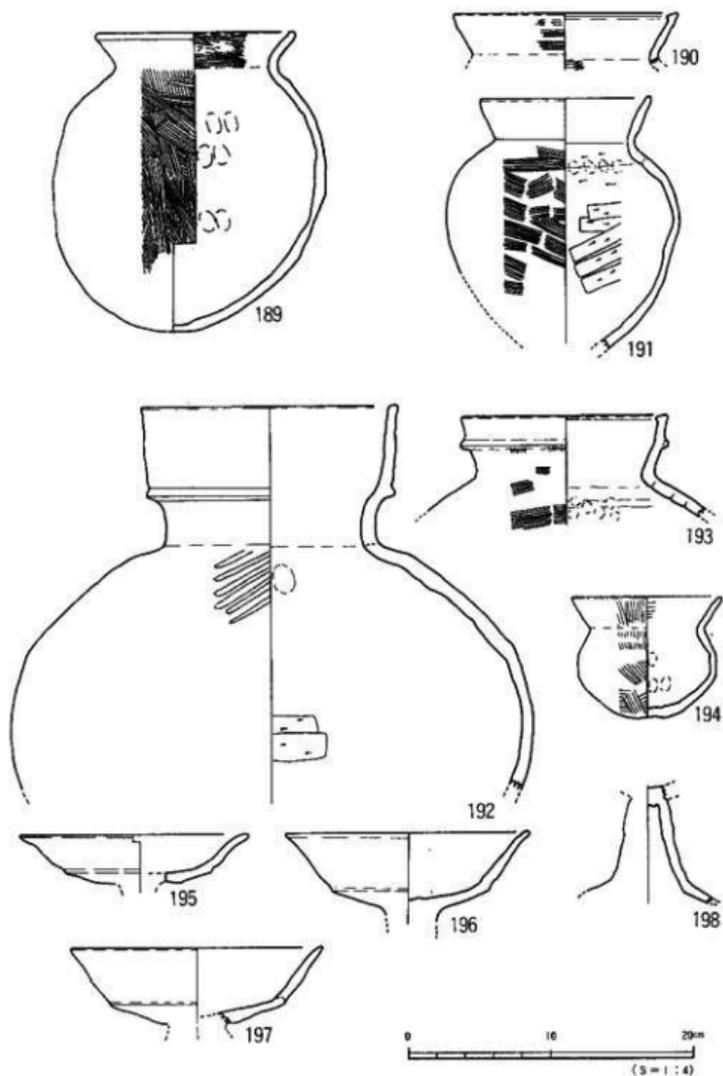
高環形土器・環部(195~197) 195~197いずれも屈曲部にわずかながら稜をもち、内湾ぎみに外反する体部にわずかに外反する口縁部をもつ環部片である。マメツが著しく調整は不明だが、196の内面の一部で磨き痕を看取した。

高環形土器・脚部(198~200) 198・199は外傾する柱に、ゆるやかに外反する裾部をもつ。裾部はやや短く中位が厚く、端部を細く丸く作る。柱と裾部の境(外面)には板状工具の小口痕を残す。200は裾部が大きく開き、内面の柱と裾部境に稜をもつ。

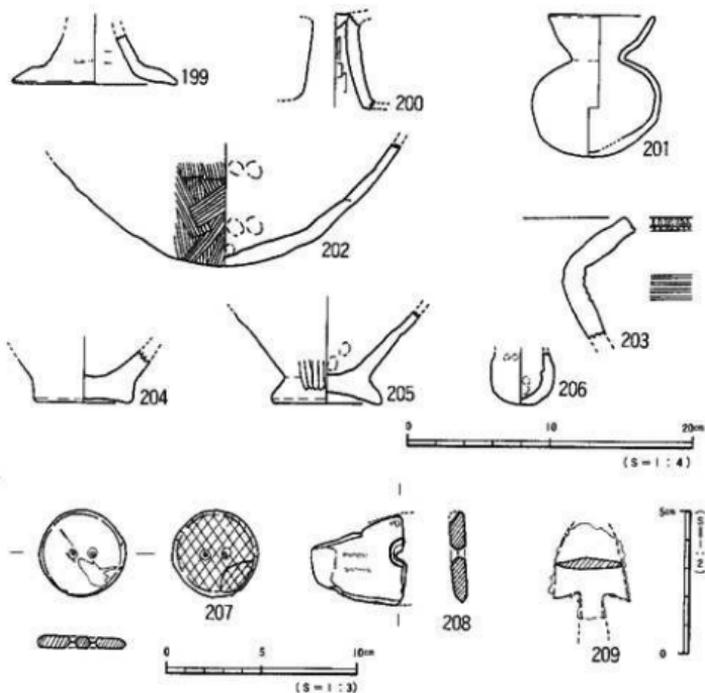
S P 12の遺物(201・202) いずれも壺形土器である。201は小型丸底壺の完形品である。球形の体部にやや長めの口縁部をもつ。口縁部は内湾して立ち上がる。口縁端部は丸く仕上げる(部分的にわずかに小さい面をもつ)。頸部内面には稜がつかない。体部はやや変化しているが脛部がやや張る。器表面はマメツしており調整は不明である。胎上は精製され器壁は薄く作られる。202は大形壺の底部片である。底部は完存する。外面は粗い刷毛目調整で、内面は指頭痕が顕著である。

弥生土器(203~205) 覆土中に破片として出土した。203は弥生前期の大形壺の口縁部破片である。口縁端部にヘラ描沈線文4条を施す。なお、頸部沈線文帯で最下位の沈線文の下部は削り出し凸帯風に施されている。204は中形壺の底部片で、わずかに上げ底を呈する。205は鉢の底部である。大きくくびれ、上げ底を呈する。204・205は弥生後期前一中葉のものである。

測定の概要



第41図 SBI出土遺物実測図(1)



第42図 SBI出土遺物実測図(2)

ミニチュア (206) 206は残高3.6cmのミニチュア品(手捏ね品)である。

有孔円板 (207) 207は、円孔を2ヶ穿つ双孔円板である。法量は、 $4.8 \times 4.5$ cm、厚さ0.6cm、重さ19.6gで、石材は滑石である。片面に細沈線で斜格子目文を施す。

石庖丁 (208) 208は、杏仁形の石庖丁片である。石材は緑色片岩である。

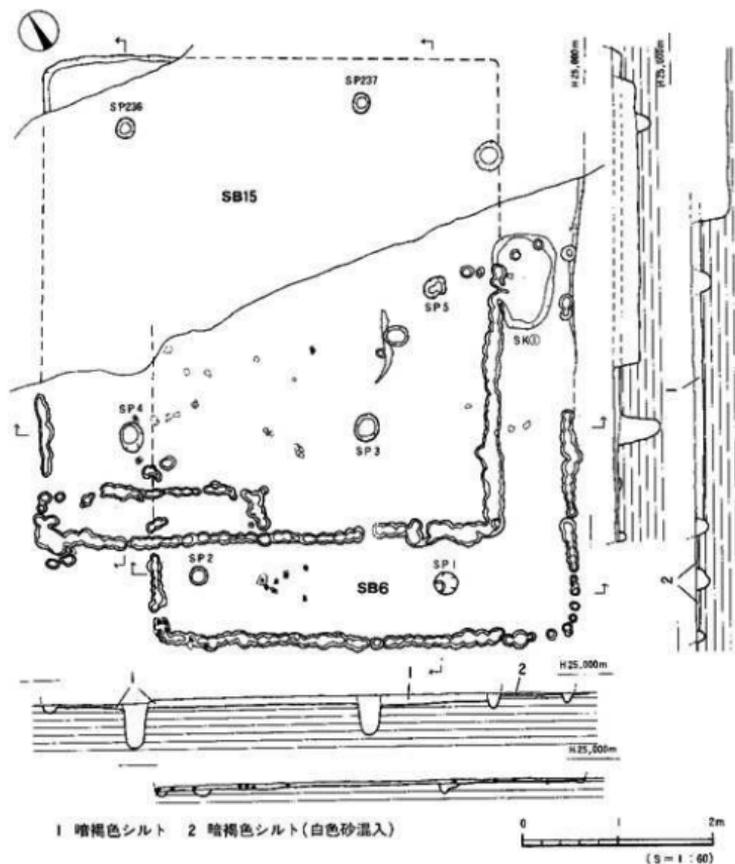
鉄鏃 (209) 209は鉄鏃で、頸部より浅い逆刺を有するものである。全長は3.5cmである。

時期：二重口緑壺の形態等より出土遺物は古墳時代中期のものとする。出土品は雑存状況もよく、床面出土品であることより、本住居の廃棄・埋没時期も古墳時代中期に比定されよう。

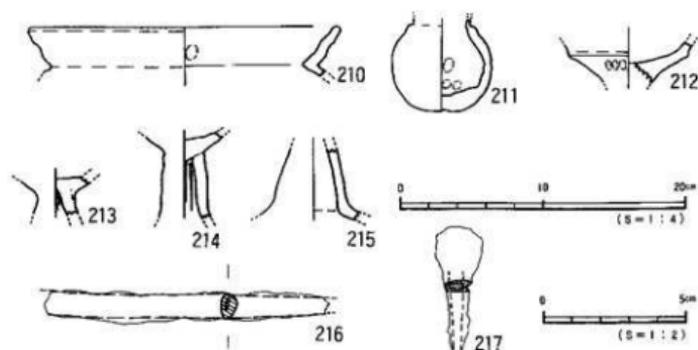
## 調査の概要

### SB6号住居址(第43図、図版13-2)

調査区中央B3区に位置する。SB15に切られ、北壁東側は掘乱を受け破損している。検出面より床面までは最深で6cmであり、ほとんどの地点で床面が露出した状況であった。平面形は方形(南北がわずかに長い)で、北北西-南南東4.5m、北北東-南南西5.0mを測る。壁体は北隅で確認され6cmを測る。壁体溝に相当する位置に小ピット列を確認した。小ピットは径5~21cmで、深さ2~14cmである。小ピットは東壁中央部では未検出であり、南



第43図 SB6・SB15測量図



第44図 S B6出土遺物実測図

隅ではピット列が途切れる。SP 1、2、5が主柱穴と考えられる（北東隅の1基は攪乱で消失）。柱穴の規模は径20～25cm、深さ5～10cmである。柱穴間は、SP 1-2間2.6m、SP 1-5間3.1mである。床面は平坦で堅く踏みしめられている。埋土は暗褐色シルトで締まっていた。遺物は小片が数点ある。床面埋土の検出状況と遺物の出土状況より本住居は暗褐色シルトを貼り付けた貼り床構造であった可能性がある。本住居内では、住居址北東部に土塊（SK①）を検出した。SK①は、1×0.6mの楕円形を呈し深さ15cmを測る。

本住居址周辺には同様な遺構がないことから考えるとSK①は、本住居址に伴う可能性が高いが、遺物の出土がなく性格は不明である。

本住居址出土遺物は第44図であるが、いずれも小片である。

#### 出土遺物（第44図）

甕形土器（210） 210は中形品の小片である。わずかに内湾する口縁部は、端部が丸みをもつ。

壺形土器（211） 211小形品である（ミニチュアか）。内面に指頭痕が顕著にみられる。

高坏形土器（212～215） いずれも小破片である。212は組み合せ式のものであり、坏底部に擬口縁を看取する。213・214は、内面にシボリ痕を残す。215は、柱がややふくらみ、大きく開く裾部をもつ。

鉄器（216・217） 216は刀子であろう（鏝の茎の可能性もある）。全長9.9cmで、厚さ0.6cmである。217は鉄鏝で、主頭鏝に属するものである。全長4.4cmである（図版31）。

時期：出土遺物は、少量ではあるが、床面に密着していることより本住居址の廃棄時を知れるものと考えられる。よって、本住居址の廃棄・埋没時期は中期後半に比定されよう。

## 調査の概要

### S B 15号住居址(第43図、図版13-2)

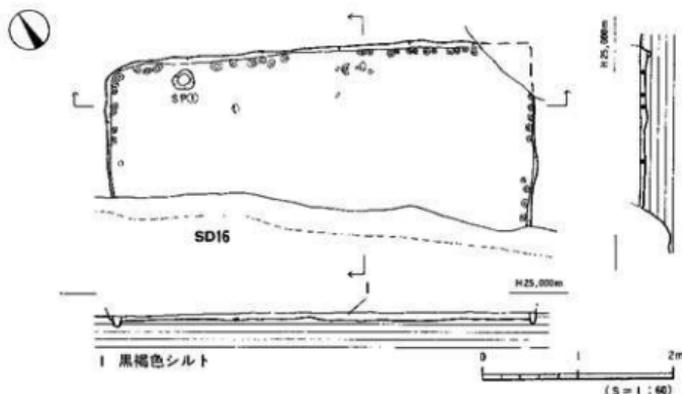
調査区中央B3区に位置する。S B 6を切り、住居址北半部及び上部は擾乱を受け破損している。S B 6同様、住居址の基底部しか残っていない。平面形は方形を呈する。規模は北東—南西5.1m、北西—南東4.9mを測る。壁高は北隅で10cmを測る。主柱穴は、四本でS P 236、237、3、4、である。柱穴間は2.6~3.3mを測る。壁体は確認できなかったが、S B 6同様小ピット列を検出した。小ピットは径6~25cmで深さ3~15cmである。わずかに残る暗褐色シルト(白色砂)と床は強く締まっており、出土遺物も小片が数点あるだけで、S B 6と同様な状況を示す。本住居も貼り床構造であった可能性が考えられる。本住居址の東隅には、小ピットが「L」字状に並んでおり、何らかの屋内施設を設置している。小ピットは径5~16cm、深さ2~6cmを測り、長方形(壁体を含め)を呈する。施設規模は0.6×2.5mである。出土遺物はなく、床面の状況は周囲の床面と差異なく性格は不明である。

本住居址の出土遺物は、土師器の小片が数点あるが時期決定に有効な資料ではない。

時期：S B 6を切ることで、出土遺物は小片であるがS B 6のものと大差のないものであることより、本住居址の廃棄・埋没時期は古墳時代中期後半と考えている。

### S B 11号住居址(第45図、図版13-1)

調査区南東部C3区に位置する。北東隅及び南半部は擾乱を受け破損している。S D 16に切られる。平面形は、方形もしくは長方形を呈するものと考えられる。規模は東西4.5m、南北2.0m、壁高8cmを測る。床面は平出で強く、床面に第四層の礫が現われている。壁体に沿って径5.8~11.0cm、深さ2.0~6.0cmの小ピットが不規則に一列に並ぶ。

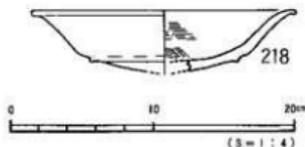


第45図 S B 11測量図

床面にて径20cm、深さ6cmのピット（SP①）を検出したが、本住居址に伴うものかは判断に難しむ。本住居址の出土遺物は、床面上より数点の破片が出土した。

出土遺物（第46図）

高坏形土器（218） 218は坏部片で約2分の1の残存である。屈曲部は段を明瞭に残す。坏上部は内湾して立ち上がり、口縁端部は大きく外反し、口縁端部は丸く仕上げられる。外面はナデ（一部磨きか）、内面は刷毛目調整後ナデもしくはヘラ磨きを施す。



第46図 SB11出土遺物実測図

時期：高坏形土器が胴曲部に段を残しており、古墳時代中期後半に時期比定を考える。高坏形土器片は床面出土品で残存も2分1であり、摩滅も少ないことより、本住居に伴うものと考えられる。よって本住居の廃棄・埋没時期は古墳時代中期後半に比定されよう。

SB12号住居址（第47図、図版13-1）

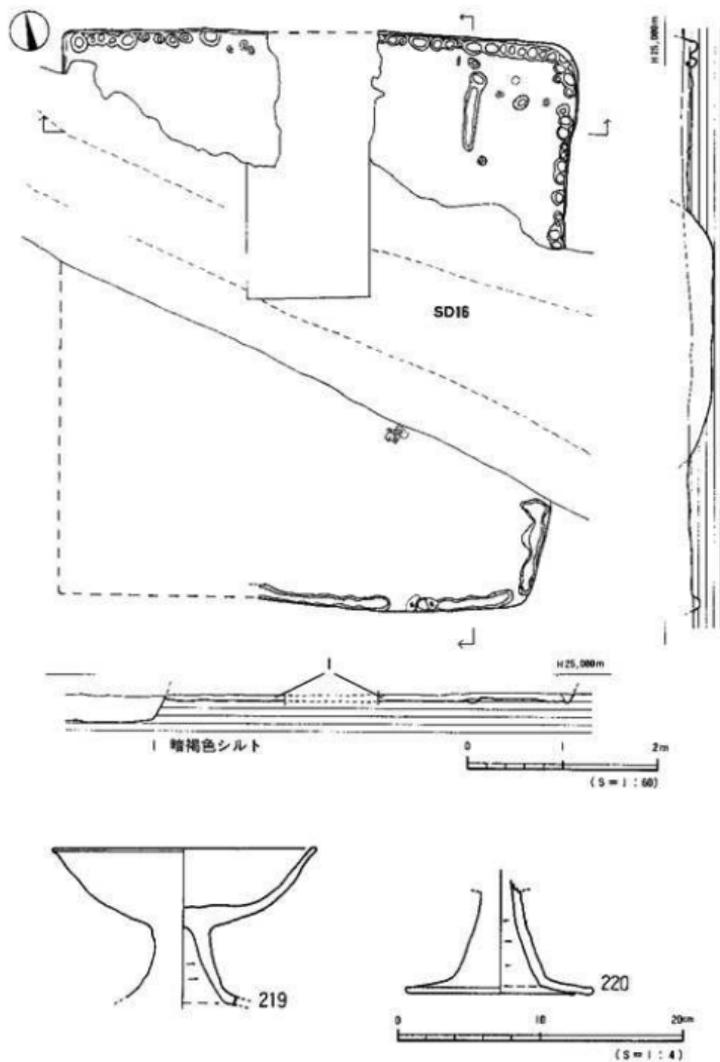
調査区南東部C3区に位置する。北壁中央及び南西コーナーは掘削を受け破損している。住居址中央部を北西-南東にSD16がはしる。平面形は長方形（方形に近い）を呈し、南北6.1m、東西5.4mを測る。残存する壁体は北壁で8cmを測り、南壁では検出できなかった。床面は平坦で比較的堅く、第四層の裸層が床面に現われている。壁体に沿って径7~21cm、深さ3~11cmの小ピットが通っている。床面北東部で幅15cm、長さ80cm、深さ5cmの断面「V」字状の溝を検出した。この小溝の溝床は一部が凹凸になっている。遺物は南半部で高坏形土器の坏部を床面に検出した。坏部は床面に埋没した状態で出土した。坏部取り上げ後床面を精査すること同地点がわずかに凹地となった。同地点に当住居址の主柱穴がすえられている可能性もある。その他、遺物は、破片が数点埋上中より出土している。

出土遺物（第47図）

高坏形土器（219・220） 219は裾部を1部欠く。坏部はゆるやかに立ち上がる体部にわずかに外傾する口縁部をもつ。口縁端部は丸く仕上げる。脚部はやや短めの柱に大きく開く裾部をもつ。柱内面はヘラケズリである。内面の柱と裾部の境に稜をもつ。坏・脚部ともナデ仕上げである。220は脚部片である。大きく広がる裾部をもつ。裾部はやや湾曲する。柱上端部は擬口縁がみられ、脚部が差し込み式であったことが判る。柱内面はケズリで、裾部境に稜をもつ。調整はナデと荒いヘラ磨きが行なわれる。

時期：高坏形土器の坏部屈曲が不明瞭であり古墳時代中期後半のものとする。高坏形土器は、出土状況より本住居の廃棄時に伴うものである可能性が高く、本住居址の廃棄・埋没時期は、古墳時代中期後半に比定されよう。

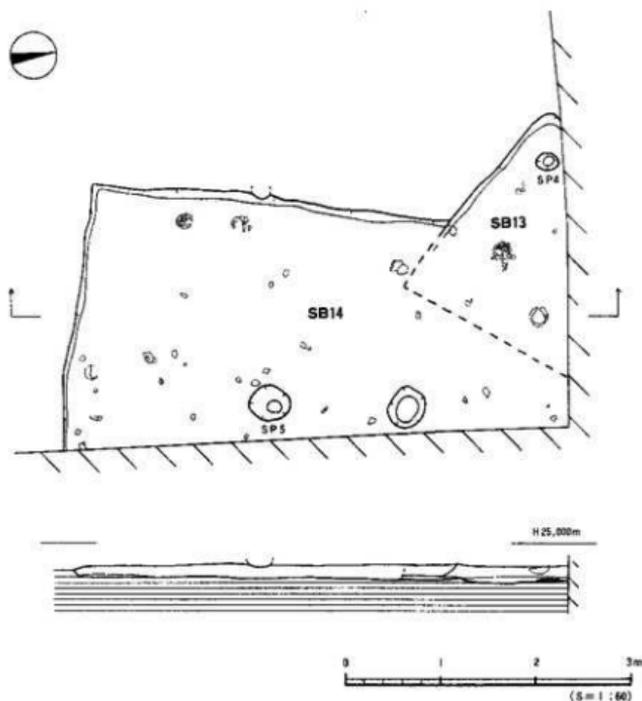
調査の概要



第47図 SBI2測量区・出土遺物実測図

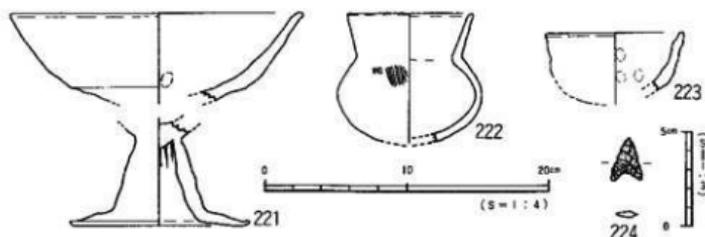
## S B 13号住居址 (第48図、図版12-1)

調査区東端中央B4区に位置する。住居址東半部は調査区外に至る。SB4、SB14を切る。ただし、SB14との切り合い部分の境は不明瞭であった(断面にて、切り合い関係を知る)。平面形は(隅丸)方形ないし(隅丸)長方形を呈すると考える。規模は北北東-南南西2.0m、東南東-西北西2.3m、壁高8cmを測る。掘り方最終面は、第VIII層の硬層および、このため同面は凸凹が著しい。礫が露頭しており、この面を床面として使用したかは判断しがたい。屋内施設は未検出であり、掘り方最終面検出のSP4はSB4の支柱穴である。埋土は、暗褐色土と褐色土で上部は第V層によって覆われている。遺物は埋土の両層で出土するが、大きな破片は上層で出土する傾向にある。上下層の遺物は接合されることはないが、上下層の時間幅は出土遺物を見るかぎりあまり無いものとする。



第48図 SB13・SB14測量図

調査の概要



第49図 SBI3出土遺物実測図

出土遺物 (第49図)

壺形土器 (222) 222は扁平の体部に外傾する口頸部をもつ。口縁部は内湾ぎみに立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。端面はわずかに内傾する。体部最大径は口径を凌ぐ。体部上半は刷毛目調整、口縁部はヨコナデである。底部はマメツにより調整は不明である。

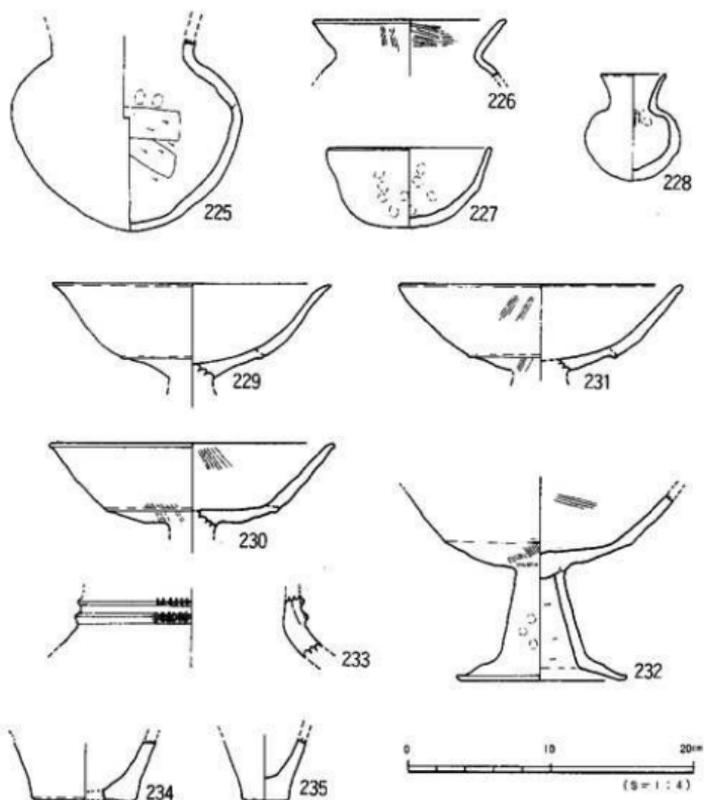
高環形土器 (221) 221は脚端を欠くがほぼ完形の高環形土器である。環部は屈曲部の稜線が不明瞭で内湾ぎみに立ち上がり、口縁端部はわずかに外反する。端部は丸く仕上げる。平底部は脚部の接合も兼ね充填法が用いられる。脚部は柱の中位がふくらみ、大きく外反する裾部をもつ。脚部内面の柱と裾部の境は明瞭な稜線がつく。柱内面はヘラケズリを行なう。ヘラケズリ後は未調整である。器表面はナデ・磨きにより仕上げる。

鉢形土器 (223) 223は底部を欠くがほぼ完形品である。体部下位でゆるやかに屈曲し、内湾ぎみに立ち上がる。口縁端部はわずかに外傾する。指押えが顕著で器壁は凹凸が著しい。特に、口縁部は強く押さえており、口縁端になるほど薄くなる。調整は内外とも強く荒いナデである。

時期：本住居址はSBI4を切るものの、出土品を見ると顕著な形式差は認められず、SBI4とは時期差が少ないものと考えられる。高環形土器屈曲部の稜が、不明瞭になりつつあることより古墳時代中期後半に時期比定を考える。出土遺物は、保存状況がよく、本住居の廃棄時に伴う遺物である可能性が高く、本住居の廃棄・埋没時期は、古墳時代中期後半に比定されよう。

SBI4号住居址 (第48図、図版12-1)

調査区東端中央部に位置する。住居址東壁は調査区外に至る。SBI4を切り、SBI13に切られる。平面形は、方形ないし長方形を呈するものと考えられる。規模は南北3.7m、東西2.9m、壁高15cmを測る。住居址の掘り方最終面は第Ⅳ層 (礫層) に至る。よって同面は凹凸が著しい。床面に4号住居址の主柱穴を検出した。この他床面にてビット1基を検出したが、



第50図 S B14出土遺物実測図

本住居域に伴うかは判断しがたい。本住居域に伴う屋内施設は木検出である。埋土は黒褐色シルト一層である。出土遺物は、完形品は床面(礫)直上より出土しており(図版12-2)、破片はやや浮いた(10cm程度)状況で出土した。

#### 出土遺物(第50図)

甕形土器(226) 226は口縁部の小片である。ゆるやかに外反する口縁部をもつ。口縁端部は、丸く仕上げやや外面に粘土がはみ出す。口縁部外面は、タテ刷毛日後ヨコナデ調整。

壺形土器(225・228) 225は口縁部を1部を欠くが体部は完存する。体部は肩が張り、逆三角形形状を呈する。内面肩部以下をヘラケズリする。外面は、ナデ調整である。228はミニチュ

## 調査の概要

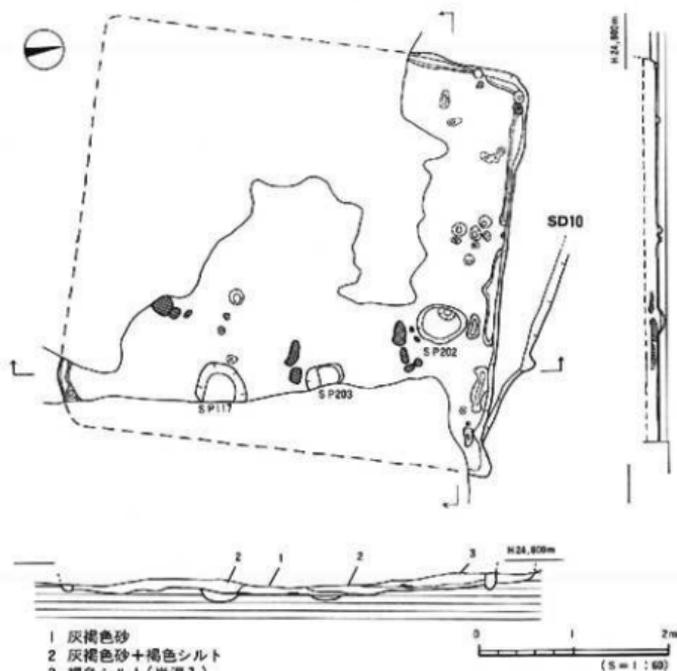
アである。やや肩が張る球形の体部に、細く長い口頸部がつく。

鉢形土器 (227) 227は口縁部の一部を欠くがほぼ完形品である。丸底の底部から内湾しながら立ち上がるものである。口縁端部は丸く仕上げる。内外面とも指頭痕が顕著に見られ、軽いヨコナデを行なう。

高坏形土器 (229~232) 229~232は坏部片で屈曲部に段をもつものである。229は口縁端部が外反し、230・231は外反しないものである。232は脚部が残存するもので、外傾する柱部に大きく外反する裾部をもつものである。柱内面はケズリ痕が著しく、裾部内面は刷毛目後ナデ調整を行なう。

弥生土器 (233~235) 覆土中に混入する破片である。

時期：壺形土器・高坏形土器等は古墳時代中期後半に時期比定されると考える。出土遺物は、雑存状況もよく、床面上で出土する遺物もあることから本住居の廃棄時に伴う遺物である可能性が高く、本住居の廃棄・埋没時期は、古墳時代中期後半と考える。



第51図 SBI6測量図

## S B 16号住居址 (第51図)

調査区北西部B 2区に位置する。東壁はなくかつ南・西壁の大半を欠く。本住居址はS D 10を切っている。平面形は方形を呈するものとする。規模は南北4.5m、東西4.3m、壁高12cmを測る。壁体溝は部分的に踏切れ、溝内には径6～25cm、深さ3～15cmの小ピットが数基ある。また、清底は平坦でなく凹凸がみられる。住居址の床面は比較的堅く、中央部がやや低い。この他床面にて数基のピットを検出したが、本住居址に伴うものかは判断し兼ねた。床面より10cm程浮いた状態で木炭片を検出した。住居址には焼土や焼火を示す資料がないことより、これ等の木炭片は本住居廃業後に生じたものであると考える。

埋土は、灰褐色砂層と褐色シルトで上部に木炭片が少量混入する。遺物は土師器の小片数点が埋土中に含まれていたが時期決定に有効な資料ではない。

出土遺物・時期：S D 10は土器片が少量出土しているが、時期決定に有効な資料ではない。本住居址は切り合い関係からの時期断定はし兼ねるが、須恵器片の未出土や住居形態より考えると中期のものである可能性が高い。

## 4) 古墳時代後期

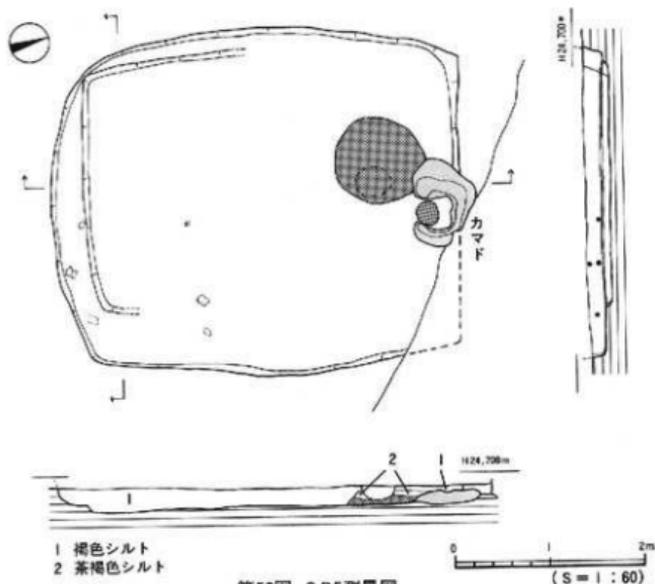
古墳時代後期の住居址は3棟(S B 5・8・9)である。第Ⅵ層上面と第Ⅶ層上面で検出した。S B 5号住居址 (第52図、図版14)

調査区西端中央部C 1区に位置する。北東隅は擾乱を受け破損している。平面形は長方形を呈する。規模は南北4.2m、東西3.6m、壁高20cmを測る。床面はやや軟質で平坦である。南側及び西側南半部に幅15～50cm、高さ(床面より)10cmを測る高床部をもつ(削り出し)。本住居址にはカマドが付設される。本住居址の壁体溝及び柱穴は未検出である。

カマド(第54図、図版14・15)は、住居址の北壁中央で検出された。擾乱のため上部及び北東部を欠く為、天井部・煙路部は未検出である。平面形は馬蹄形を呈する。カマドは、造り付けで縦・横断面の観察では、住居床面と北壁を掘り回めた後に褐色土と黄色土の混合土を敷き、灰褐色シルト、褐色シルト(炭混じり)を積み重ね、最後に粘土をのせて構築したことを確認した。粘土は火を受けて赤く焼けている。火床面の前面(焚き口部)に円形状の炭(径22cm、厚さ2cm)を検出した。カマドからの遺物の出土はない。第54図にある石は、焼土上で住居の埋土中に含まれる礫片でカマドとは直接関連はないものと考えている。また、カマドの南西部で径90×95cm、厚さ5～7cmの炭(灰混り)の集積を検出した。カマドからかき出したものである可能性が高い。

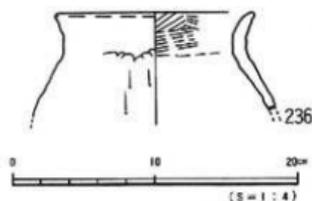
本住居址からの遺物は南壁に沿って付設された高床部上の埋土中より須恵器の破片と土師器破片が2点出土している。

調査の概要

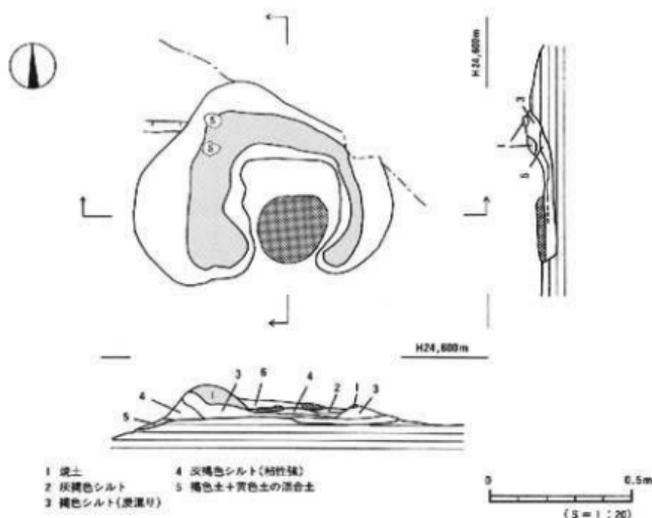


出土遺物 (第53図)

236は土師器の甕形土器である。緩やかに外反する口縁部に張りの弱い肩部をもつ。口縁端部は丸くおさめる。刷毛による調整を行っているが、力強く行なうため粒子がとび、かつ表面が摩滅しているため一見割りに間違える。内面は口縁部が刷毛目後ヨコナデで、頸部以下はナデである。須恵器は大形の甕形土器の体部片がある(図示せず)。内面に同心円文をもつ。



時期：本住居の廃棄・埋没時期は、出土遺物より古墳時代後期後半に比定されよう。



第54図 SB5カマド測量図

## SB8号住居址(第55図)

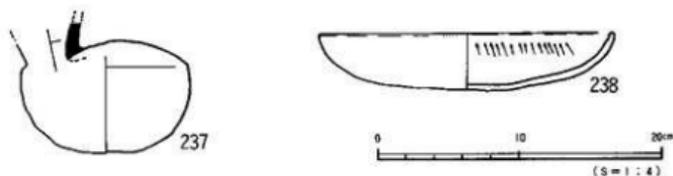
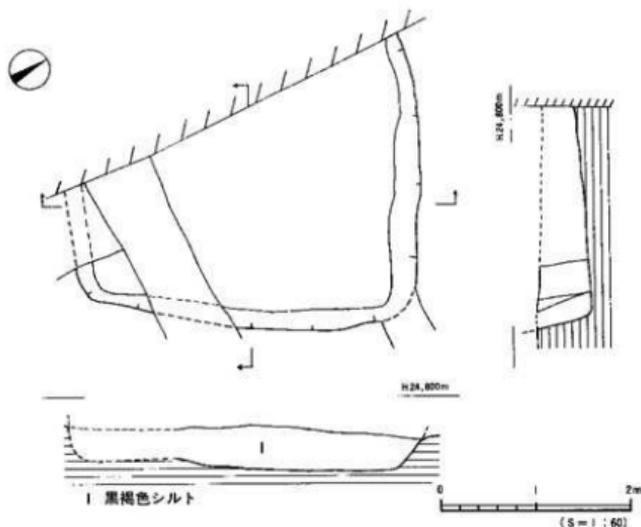
調査区西端中央部やや南C1区に位置する。住居址西半部は調査区外に至る。また、南東部は擾乱を受け破損している。平面形は方形ないし長方形になるものとする。規模は南北3.7m、東西3.1m、壁高50cmを測る。床面は北東隅付近が低く、東に緩やかに傾斜する(比高10cm)。埋土は、黒褐色シルト一層である。調査区西壁の上層観察から本住居址は、第VI層上面からの掘り込みであることを確認した(第7図、図版2-2)。柱穴、炉、壁体溝等の屋内施設は未検出である。遺物は、床面近くで須恵器の平瓶と土師器の皿が出土した。

## 出土遺物(第55図、図版29-2)

平瓶(237) 237は口縁部を欠くが胴部は完存する。胴部は丸みを持ち、肩部は僅かに稜が残る。胴部上面を粘土円盤で塞ぐ。頸部中位に一条の凹線を施す。

皿(238) 238は土師器の皿である。口縁端部が内方に肥厚し、端面は丸くつくる。器表面はマメツしているが、わずかに内面に放射状文を看取する。口径20.7cm。

調査の概要

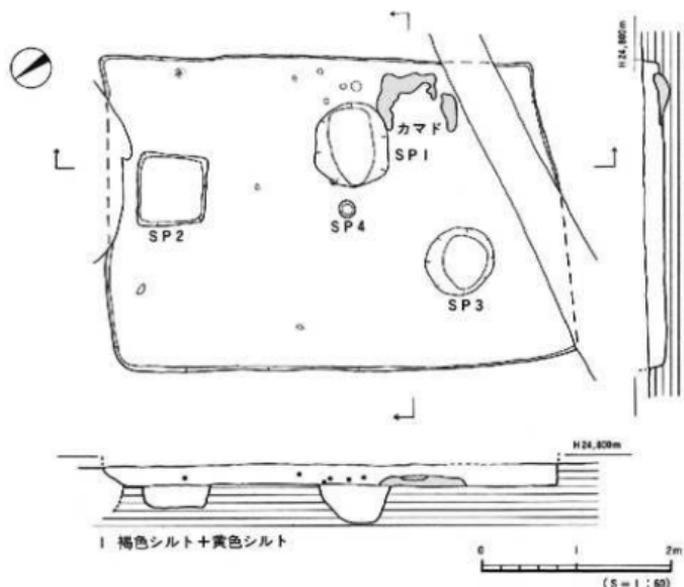


第55図 SB8測量図・出土遺物実測図

時期：平瓶は、陶邑でいうTK217-46形式に比定されるものである。土師皿は、口縁部の特徴と口径より7C後半に比定されるものである。土師皿がやや平瓶より後出時のものであり、本住居の時期は7C後半に廃棄・埋設したものと考える。

SB9号住居址（第56図、図版16-1）

調査区北西部C2区に位置する。北壁及び東・南壁の一部は攪乱を受け破損している。平面形は長方形を呈する。規模は長軸4.9m、短軸3.3m、壁高22cmを測る。床面は平坦でやや軟質である。床面にて4基のピットを検出した。SP3は攪乱堆である。SP2 SP4は遺物もなく本住居址に伴うものであるかは不明である。SP1はカマドに接している。墳中の



第56図 SB9測量図

埋土は住居址のものと同様であり、SP1は本住居址の施設である可能性が高い。

カマド(第57図、図版16-2・17)は、東壁南半の中央部に位置する。天井部と煙路部は未検出である。また、軸部燃焼部も南半部は一部欠損している。カマドは、縦・横断面の観察から住居床面を掘り凹め黄褐色土(3層)と暗褐色土(2層)を積み重ねた後、粘土(焼土)を積み重ねて構築していた。炉内燃焼部には炭が検出された。遺物は、上師器の甕と思われる小破片が2点出土している(時期決定困難)。なお、第57図4層は、住居址埋土よりやや黒っぽいが、カマドに南接する攪乱層が下水管であり、この周囲は土壌が汚染され変色していることもありカマドに関係するものかは判断できなかった。

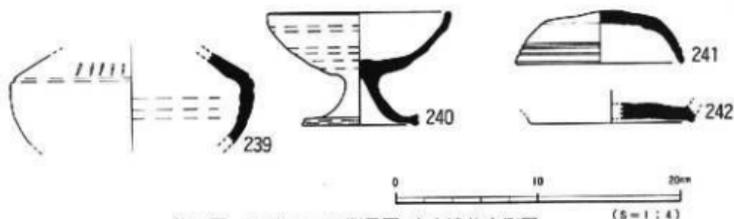
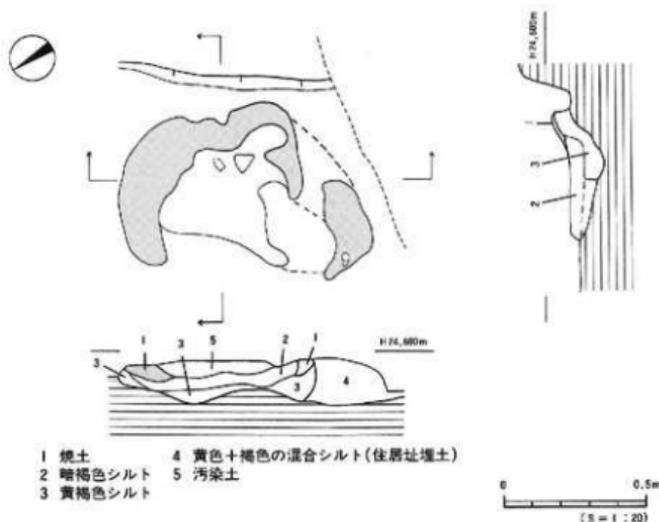
本住居址の埋土は、褐色シルトに黄色シルトが一部混入するものである。南壁床面は攪乱層による汚染のため変色土がある。

遺物は、床面上から須恵器の高杯形土器(完形品)や坏等が出土している。

出土遺物(第57図・図版29-3)

壺(239) 239は長頸壺である。肩部と胴部との境に1条の沈線を巡らし、この沈線上部に栴描き列点文を施す。

調査の概要



第57図 SB9カマド測量図・出土遺物実測図

高坏 (240) 240は無蓋高坏である。坏部は坏身の形態を備え、脚部はゆるやかで大きく開く裾部をもつ。脚端部は下方へ屈曲させ段をなす。

坏蓋 (241) 241は口径11.8cmである。天井は低く、扁平で、上面に回転ヘラきり痕を残す。口縁部外面に螺旋に巡る沈線を施す。

すり鉢 (242) 242はすり鉢の底部と考えられるものである。破片にて底部の穿孔数は不明である。

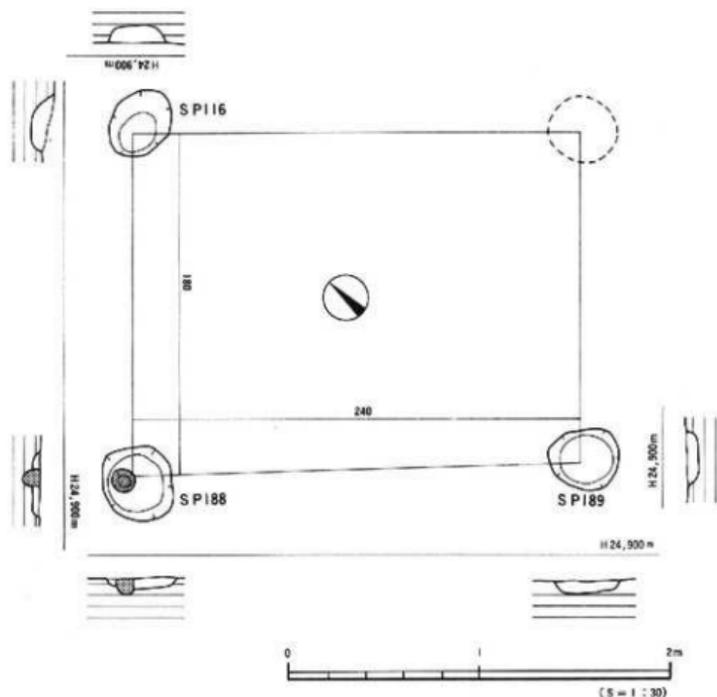
時期：高坏・長頸壺はつTK46-48に比定されるもので、古墳時代後期後半である。出土遺物は雑存がよく床面上からの出土であり、本住居の廃棄に伴う遺物の可能性が高く、本住居の廃棄・埋没は古墳時代後期後半であったと考えられる。

## 〔2〕 掘立柱建物址

本調査において確認された掘立柱建物址は1棟である。ただし、B2区に於て径25~40cmの円形ピットが集中して検出されており(第8図)、同地点に建物址が存在した可能性もある。また、SB1内にあるSP4、6、13(第38図)は建物址になる可能性がある。

掘立柱建物址1号(第58図)調査区中央やや南C2区に位置する。SB10に切られ、北東隅に位置する柱穴は擾乱により消失している。建物跡は、1間×1間で桁行長2.4m、梁行長1.8mであり、柱穴径30~40cm、深さ6~10cm、柱痕径12cmである。埋土は暗褐色シルトである。柱穴内からの遺物の出土はない。

時期:本建物は、SB10に切られることより下限を古墳時代前期におくことができよう。



第58図 掘立1測量図

## 〔3〕 溝・自然流路址 (第8図、P87-表7・8)

本調査において確認された溝は16条、自然流路址は1条である。SD16は第V層上面から掘こまれており、他はいずれも第VII層上面での検出である。

SD16 (第8図) 調査地の南東部から北西部に走る溝である。第V層とSR1を切り、第IV層が覆う。断面は舟底状を呈し、上場幅1~2m、深さ20~32cm、検出長60mを測る。埋土は砂が多く含まれる褐色シルトで、地点によってはブロック状に砂の堆積が見られる。出土遺物は、須恵器、土師器の小片少量と鉄器の小片1点(第60図256)がある。本遺構は、出土遺物と層位関係より古墳時代後期~古代に使用しかつ埋没したものである。

本調査で検出した溝・自然流路址に関する詳細は表7・8(P87)に記す。

SD5出土遺物(第59図243) 243は弥生前期の甕形土器である。ゆるやかに外反する口縁部に、わずかに張る胴部をもつものである。頸部下にヘラ描沈線4条、口縁端部に刻目を施す。

SD16出土遺物(第59図256) 256は鉄鏃で全長9.1cmである。

## 〔4〕 土壌 (P87-表9)

本調査において確認された土壌は11基である。SK1~5、SK8~11は第VII層上面の検出で、SK6・7はSB3内に伴うものである。前者は、平面形と埋土により二分類される。SK2・3・4・8は楕円形で埋土が暗褐色土であり、SK1・5・9・10は長方形ないし隅丸長方形で埋土が暗褐~黒褐色土である。ただし、この2群は、時期差として存在する可能性があるが、時期及び性格は不明である。

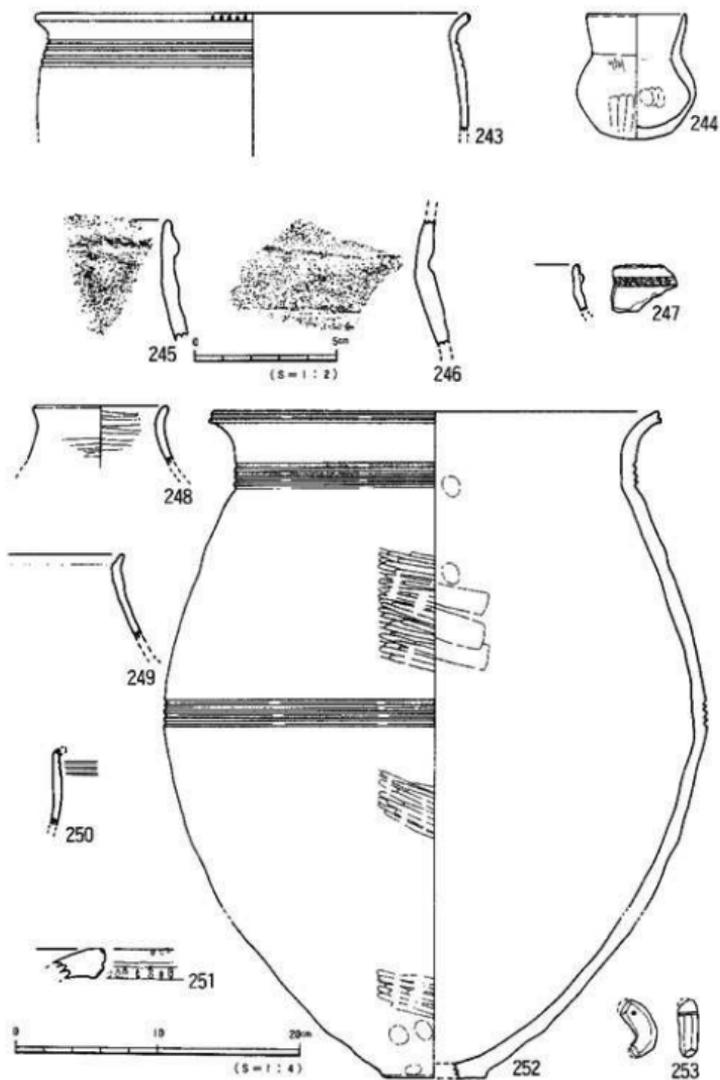
本調査で検出した土壌に関する詳細は表7・8(P87)に記す。

## 〔5〕 その他の遺構と遺物

本調査において確認されたピットは358基である。いずれも第VII層上面で検出である。ピット中からの遺物の出土はほとんどなく、わずかにSP20(第8図)よりほぼ完形の小型丸底壺が1点出土しただけである。

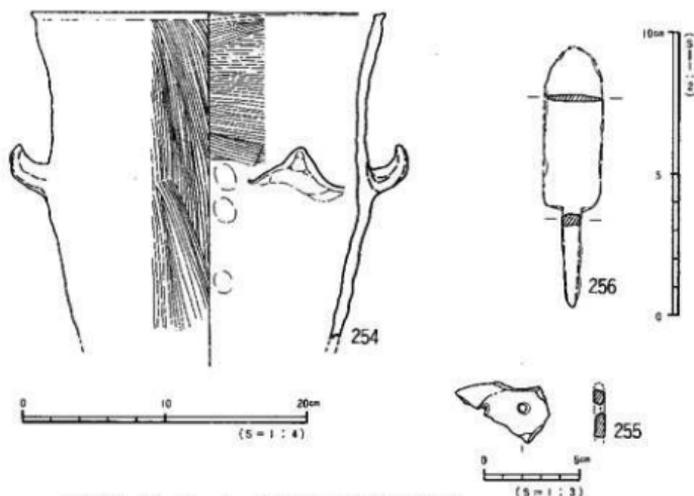
SP20(第8図・第59図244) 調査区北東隅A3区に位置する。平面形は不整形で、径23×18cm、深さ6cmを測る。覆土は暗褐色シルトである。出土遺物は、第59図244の完形の小型丸底壺1点である。244は、口径6.9cm、器高7.8cmである。口径が胴径より小さく、体部外面にヘラケズリ痕を顕著に残す。体部内面には指頭痕が顕著に残り、底部内面は未調整である。

遺構と遺物



第59図 溝・ピット・包含層出土遺物実測図①

[243: S D5、244: S P20、245-251: 第VI層、262、263: 第V層]



第60図 溝・ビット・包含層出土遺物実測図②  
 [254・255: 第V層、256: S D 16]

第V層出土遺物 (252～255) 252は、弥生前期の大形壺である。2分の1の残存である。平底の底部に、胸中位が張り肩部の張りの弱い胸部、短く直立する頸部、わずかに外反する口縁部がつく。胸中位の最大径部に4条、頸部に3条、口縁端部に1条のヘラ描沈線文を施す。頸部の文様帯下端は削り出し技法を用いる。外面はヘラ磨き、胴部内面は板状工具による調整がなされる。253は、B3区出土の上製勾玉である。頸部と端部を1部欠く。全長4.1cmで、径3mmの円孔が貫通する。254は、C2区出土のこしき形土器である。胴部は外傾し、握手部で一度内側へ屈曲させるが、口縁部は内湾きみに立ち上がる。口縁端部は面取りする。器表面は刷毛目調整で焼成がよく胎土も精良である。255は、石庖丁の破片である。石材は、結晶片岩である。

第VI層出土遺物 (245～251) 245～249は、縄文時代晩期の土器片である。245～247は、深鉢形土器である。245・247は、口縁部外面に凸帯を貼り付ける。245は凸帯上に、247は口唇部と凸帯上に刻目を施す。246は、肩部のくびれ部に段を有す。248・249は、壺形土器である。内傾する頸部に、わずかに外反する短い口縁部をもつ。250は、弥生時代前期の變形土器である。頸部に3条のヘラ描沈線文を施す。251は、弥生時代前期の大形壺の破片である。口縁端部に1条の太いヘラ描沈線文と端面上上下端に断面「V」字状の刻目を施す。

## 4. 小 結

### (1) 層 位

本調査地北東100mに南海放送遺跡、東50mに松山大学構内遺跡1次調査地点がある。(第3図)両遺跡からは、調査により中世・古墳・弥生・縄文の各時代の遺物包含層が検出されている。当地の第Ⅱ層と第Ⅲ～Ⅴ層は、南海放送遺跡の5層と6層に、1次調査地点の12層と(13～14層)に対応するものと考えられる。よって、本調査地周辺では中世と古墳時代後期以降の遺物包含層が、安定して堆積していたことが推察できる。一方、当地と両遺跡の層位には異なる点がある。当地では、弥生及び縄文の遺物包含層が単一で検出されなかったことである。この要因を考えることにする。本調査地第Ⅶ層上面の測量結果、当地は微高地上(尾根線上)に立地しており、縄文～弥生の遺物包含層が堆積し難い地形であったことを確認した。加えて調査の結果、第Ⅴ層堆積前、即ち古墳時代後期以前に既に当地が造成され、同遺物包含層が消失してしまった可能性も考えられた。しかし、当地における縄文～弥生時代中期の間の単純な遺物包含層の有無とその要因については、本調査の結果だけでは十分な説明はできない。今後、周辺地域の調査が進んだ時点において解決され、当地周辺の縄文～弥生時代中期の間の景観が復元されることを期待する。

次に、第Ⅶ層上面と縄文時代晩期の遺物との関係を考える。第Ⅶ層の堆積は、この地域の弥生遺跡の立地に大きく影響を与えていることが近年の宮本一夫氏〔宮本1990〕や谷若倫郎氏〔谷若1988〕の旧地形の復元作業と集落立地研究で明らかとなってきた。これらの研究の結果、当遺跡に東接する文京遺跡(愛媛大学構内)には、南北に各々東から西に伸びる舌状台地があり、道後城北遺跡内出上の縄文晩期～弥生前期の遺物・遺構の多くは北の舌状台地で確認されることが明らかとなっている。

当地点は、今回の調査より文京遺跡で確認した北の舌状台地上にあり、また、第Ⅶ層出上の縄文晩期後葉の土器は南海放送遺跡、文京遺跡(8次)出土のものと同時期であることが明らかになった。そして、北の舌状台地に係る縄文晩期の土器片はいずれもが、黄褐色(黄色)土地形が谷間へと移行する傾斜部(汀部)での出土であることは注目されることである。これ等の資料は、宮本・谷若各氏の論を補強するものであろう。よって、この北の舌状台地上に縄文晩期後半～弥生時代初頭の居住地が存在していた可能性は十分にあり、愛媛大学構内の北半部～松山大学構内の東部地帯は特に注意を要する地点である。

### (2) 弥生時代の遺構

竪穴式住居址4棟(SB2・3・4・7)が検出されている。

SB3は、改築と高床部をもつことを特徴とする。改築では、主柱穴と屋内施設の土壌を移築し、新たに高床部を設けたことを確認した。改築に際しては、住居の規模とがりの位置は

## 調査の概要

変更しなかった様子である。主柱穴SP4の調査では、高床部の上面及び断面には柱痕のみが検出され、床面においてはじめて掘り方と柱痕が検出された。これは、SP4を立柱した後に高床部を設置したことを示すものであり興味深い。高床部は松山平野では地山の削り出しによるものが多く、本例のごとき貼り付けによる高床部構築は例が少ない。平野内では、文京遺跡7次調査(SB7)、枝松遺跡3次調査(SB1)に検出例がある。

SB7は、本調査中最も注目される遺構である。完形品を含め約200個体の土器と、石器2点、ガラス玉14点、土製品(ミニチュア土器2点・紡錘車3点)が出土している。本住居址出土の土器は、小型品数点を除くと完形品はなく廃棄品である可能性が高い。ただし、住居址の南から出土した高環彩土器、台付意形土器、短頸壺、長頸壺等は完形品に近く、かつ形態が通常のものやや異なり、仕上がりの良い土器群である。このうち、高環彩土器147は正置の状況で出土している(第34図、図版7)。これ等のことより、この一群の土器については、意図的に据え置かれた可能性が高く、何らかの行為(祭祀?)があった可能性も考えられる。この他、注目されるものにガラス玉の出土がある。ガラス玉は14点が出土しており、先述の土器群に接する地より集中して出土している。土器群の性格とも考え合わせると意図的な行為を考える必要がないだろうか。平野内の弥生時代住居址からのガラス玉出土例は、釜ノ口遺跡1次調査(SB1:4点、SB3:3点)、同7次調査(SB1~3:各1点)、釈迦面山遺跡(SB5:18点)他があり(P103/表24)、いずれも中期末~後期後半の住居址から出土していることは興味深い。

今回検出した弥生時代の竪穴式住居址は、平面形と規模他から二分類できる。SB3、4、7のように円形プランで径6mを超える大型住居の一群と、SB2のような長方形プランで一辺が2m弱の小型住居である。前者の住居址群を分析すると、平面形と規模は先述のごときであり、屋内施設をみると主柱穴は6本であり、中央に炉を設置、壁体内側に小ピット列が走り、炉の周囲に掻きだし炭(灰)が検出される(SB4は炉の周囲の雑存が悪いため不明)などの共通点が多数ある。また、主柱穴の据えかえによる改築が行なわれた可能性もそれぞれに考えられる。さらに各々が廃棄された時期が後期中葉前後である点は、大きく目をひくことである。平野内の中期後半~後期(木を除く)の住居形態を概観すると、文京遺跡(2、3、7次)、運動公園関係遺跡群(西野遺跡、釈迦面山遺跡、谷山遺跡他)、小坂等ノ口の遺跡群等より120例におよぶ当該期の竪穴式住居址の検出例がある。これ等の資料をみると、平面形は円形(長楕円形、円形状を含む)で規模は径6m前後のものが大多数である。また内部構造をみると、中央に炉があり主柱穴を6~9本備え、まれに高床部ないし部分的に張り出しを設けるものもある。これ等のことより、SB3、4、7号住居址は後期前~中葉の松山平野の一般的な竪穴式住居の形態であるといえよう。一方、後者の小型住居SB2は未検出部分や出土品が少量であることより、構造、時期等不明な点が多いが、壁体内側の小ピット列は前者の住居址群と共通しており注目される。SB2については時期が特定できない

のでその位置づけは難しいが、松山平野で中期前半～後期前半に検出される長方形プランの  
 竪穴(状)土壇とは壁体内側の小ピット列を有する点において区別されるものである。また、  
 住居址の一辺(短辺)が2.3mと短いことは、住居址の性格に関係するものであり、注意しな  
 ければならないものであろう。

### (3) 弥生時代の遺物

第Ⅵ層及びⅤ層中より、前期と後期の上器片が少量出土しているが、大半は住居址内、特  
 にSB7に伴う出土品である。

SB7の後期土器(第19～35図)：器種は、甕形土器、壺形土器(複合口縁壺、広口壺、長頸壺、  
 短頸壺、台付無頸壺)、鉢形土器、高環形土器、器台形土器、支脚形土器、他で構成される。

甕形土器は、法量と形態に一定の規則性が考えられる(P108)。大形品、中形品は急速く  
 底部が平底化し、小形品は依然くびれの上げ底を呈する。口縁部は、中期後半～後期前半に  
 みられる口縁端部の拡張はより衰退した形態として中形品に採用され、大形品、小形品は稀  
 薄になる。

壺形土器では、大形品における確立化した複合口縁の採用は大いに注目されるものである。  
 後期前半で出現したであろう複合口縁は、本住居の時期(中葉)において積極的に大形品に  
 取り入れられる。そして、既にこの時期に複合口縁の形態が多様化(I・Ⅱ類)している。  
 このことは、複合口縁の出自や系譜および松山平野の後期社会の様相を考えるうえで重要な  
 資料となるものである。複合口縁壺が増加する一方で、中～大形の広口壺が減少(微量)す  
 ることは、複合口縁の採用と大きく係わることであろう。この関係を知るには、後期前半の  
 資料分析が必要であるが、現時点において松山平野の当該期の資料は稀薄であり、本論では  
 課題として提示することにとどめる。また、長頸壺は増加の傾向にある。この他、特異なも  
 のに、当平野では初例の台付無頸壺95がある。当平野では、現時点において前後の時期にも  
 同形態の壺形土器の出土例はない。大阪や奈良の第Ⅴ-0～1様式にみられる無頸壺ないし  
 鉢形土器や大分県多武毛遺跡SD7出土品(7025)に同様なもの(わずかに似る)が見受け  
 られるが、これ等の資料との関係は不明であり、現時点では出自等は判断しがたい。

鉢形土器は、小形品が多様化し、器種構成において一定の比率を占める。中形品は、  
 甕形土器の器形が採用される。

高環形土器は、外反する環部に円孔をもつ脚部がつくことを特徴とする。中期後半は環部  
 と脚部を連続して作製し、環底部を充填により形成するもの(所謂連続成形手法)であった  
 が、本出土品には、環部と脚部が別に作製され、接合して作りあげる所謂組み合わせ手法を  
 採用したものがあつた。ただし、この場合にも環の底部には、円板充填技法が採用されるもの  
 がある。高環形土器における形態と技法の関係については、現在は未だ個々の個体の観察段  
 階であり、今後の課題となるものである。この他、147・148は、エンタシス柱で脚部が有段で

ある点で注意をひく。この形態は、松山平野では後期後半で散見されるものであり、今回の事例は最も古い時期のものになる。これは、形態上からもいえることである。ただし、この出自については不明である。一方で、同様な形態のものが瀬戸内沿岸で散見でき、同地域の交流・交易研究の一つの資料となるものであろう。

器台形土器・支脚形土器は、器種構成に微量ながら組み込まれる。器台形土器は受部端部を下垂させる。支脚形土器は、中空で左右シンメトリーのものの中実でおもしろ形のものがある。

出土土器の調整・施文：叩き痕を壺形土器70、甕形土器26に看取した。当平野において最も古い叩き痕事例である。削り技法は、甕形土器30、37に看取したが、器面調整は刷毛目調整が主体を占める。注目されるのは、本文にて板状工具によるケズリ及びナデと呼称したものの存在である（図版26）。平野の中期中葉～後期の土器の一部に看取されるものである。一般に言う、ケズリや刷毛目調整とは異なる現象のものである。この事象については、愛媛県では中野良一氏が着目し報告している（中野1989）。土器の器表面に現われる粒子移動は、工具の原体や製作工程における土器の乾燥度等により様々であり、胎土中に含まれる混和剤粒子の移動が確認されたからといって、即断的にヘラケズリとするのは疑問である。ただし、現時点においては、この事象についての解釈や具体的試別法は確固としたものはなく、今後観察・実験を行ない解決しなければならない課題である。本文では、典型的な刷毛目調整及びヘラ削りとは異にすることを読者に注意させるために、便宜上、仮に板状工具によるケズリ、ナデと記述した。

#### (4) 古墳時代の遺構

竪穴式住居址12棟は、出土遺物より前期1棟（SB10）、中期後半9棟（SB1・6・10～16）、後期後半3棟（SB5、8、9）を検出した。

前期 SB10は1辺3.2mの隅丸方形でやや小さい感がある。中央に炉、壁体沿いに小ビットを持ち、主柱穴が未検出である点が特徴である。

中期後半 住居址はいずれも方形を呈し、規模は4.5～6.1mである。主柱穴は4本であり、壁体沿いに小ビットが巡ることを特徴とする。さらに、入口は未検出であるが、住居址の両面が全て南西方向を向いている点は興味深い。

SB1では、カマドが出現しており、さらにカマド下に土壇が検出され、カマド築造に伴う祭祀行為に使用された可能性がある。当平野のカマド検出例は、福音寺筋遺跡H調査区、久米高畑歩行遺跡、福音小学校遺跡等がある。いずれも、住居址の上部が大きく削平されており、カマドの全様を知れるものはない。

SB15では、住居址南西隅に小ビットで囲まれた0.6×2.5mの長方形を呈する空間（構築物）を検出した。この空間（構築物）の構造や利用方法等は不明であり、今後の調査・研究に期待する。

後期後半 住居址は、長方形プランでカマドをもつが、支柱穴、壁体溝(小ピット列)が未検出である。支柱穴を床面に直接据えた可能性もあるものと考え、床面を精査したが何も得られなかった。

カマドは、SB1同様造り付けるもので、裾部の基礎は炭を含むシルト上壤でつくられる点に共通点がある。この期の竪穴式住居址は、平野内では南土居町開道跡他で7棟しか検出例がない。よって、本例は同時期の当平野の住居形態が知れるものとして貴重なものと言えよう。

#### (5) 古墳時代の遺物

前期 SB10の一括遺物は、布留式でも新しい段階に比定される土器群であろう。前期の資料は、宮前川遺跡、祝谷惣部遺跡に例がある。

中期後半 この時期の土器様相が知れるものにSB1、13、14の出土品がある。SB1出土の甕形土器は、外面粗い刷毛目調整で、内面は削りの後にナデ調整をするものがみられる。壺形土器は、二重口縁ではあるが、外面に粘土紐を貼り付けてタガをつけるという点で所謂、二重口縁とは技法を異にする。小型丸底甕は、扁平な胴部で広めの小さい口縁部がつく。高坏形土器は、坏部の縁が不明瞭なものがあり、須恵器出現期の形態の様相を示す。SB13、14出土品は、高坏形土器坏部が丸みを帯びており、SB1出土品よりやや新しい形式のものであろう。SB1、13、14出土品は、当平野の須恵器定着以前(5C後半～6C初)の土器の様相を示す資料であり、編年作成の基礎資料になるものである。この他、当該期の遺物で注目されるものに、祭祀遺物があげられる。SB1では双孔円板1点、ミニチュア土器1点が出土している。双孔円板は、片面に細沈線文を格子目状に施しており、法量もやや大きい。現在までに報告された愛媛県の出土品の中では、最大級に属するものである。さらに、SB1周囲の包含層V層中に土製勾玉が出土しており、SB1に伴うものであった可能性がある。この勾玉を含めSB1の出土品は、古墳時代における集落内祭祀の様相を示すものとして興味深い資料である。

後期後半 SB9出土の須恵器の坏蓋は、高坏の坏部になる可能性もある。器形及び施文部位に特徴があり、今回の整理作業中に類例を見つけ出すことができなかった。松山平野の須恵器については、地域性を田辺昭三氏が東鷲ヶ森古墳の報告で指摘されており(田辺1986)、また、久米高畑遺跡、来住庵寺跡遺跡出土品に本例のごとき他地域に例をみない出土品があり、地域色が存在することが明らかとなってきたが、未だ、詳細な分析はなされていない。今後の調査・研究に期待する。

#### (6) 竪穴式住居址の立地と形態 (第61図)

当地点に最初に住居が出現するのは、遅くとも弥生後期(前～中葉)で、SB2、3、4、

## 調査の概要

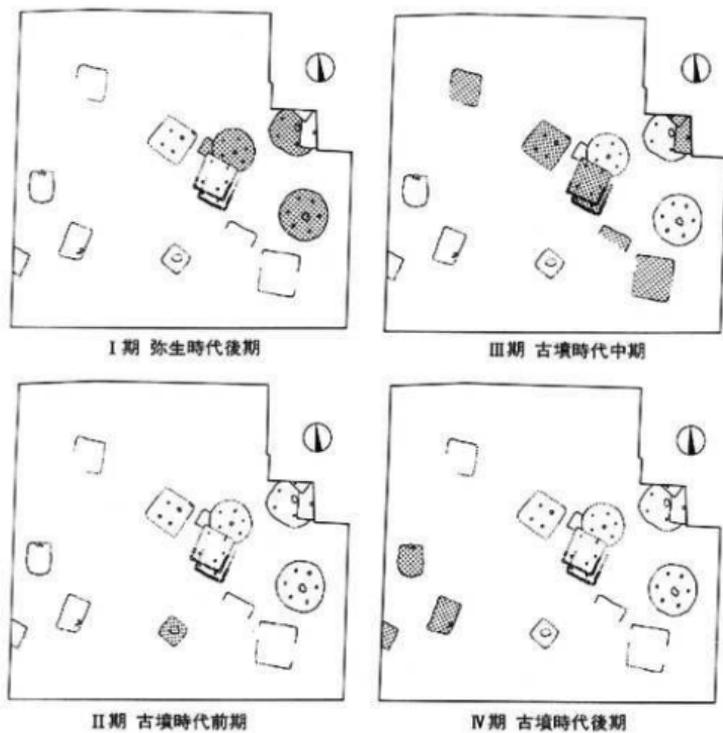
7の一群である。SB2は先述のごとく時期決定が不可能であるが、切り合い関係よりこの地点で最も古い住居と言えよう。SB2の次に、SB3、4、7が後期前葉～中葉に調査地の東側部に現われる。この時期をI期とする。古墳時代になり、前期はSB10が調査地中央の南側部に(II期)、中期後半にはSB1、6、11～16が中央部を北西から南東に縦列する(III期)。後期後半はSB5、8、9が調査区南西部に位置する(IV期)。8C以降の住居址は未検出である。以上のことから、当調査地内における竪穴式住居は出現期が遅くとも弥生時代後期であり、消失期は古墳時代後期後半であるといえる。ただし、8C以降については古代～中世に土地開発が行なわれており、その際削平されて消失した可能性もあり当地が8C以降宅地として利用されなかったとはいえない。また、第61図より住居の立地が東から西に移動していく様子がうかがえる。この要因は、本調査からの資料だけでは判定できない。だが、谷若倫郎氏の研究により道後城北遺跡は弥生時代から古墳時代前期には、集落が徐々に西に拡大されていくことが想定されており、本例は、この集落の西への拡大(移動)の一面面を現しているものではないかと考える。これ等の事象より、当地の各時代の集落範囲を推察する。検出住居の位置と集落の西への拡大(移動)より、調査地の東接地には弥生時代後期の集落が、南接地及び北西地には古墳時代前～中期の集落が、西接地には古墳時代後期の集落が、各々展開されていることが想定される。

次に、住居形態と内部施設の変遷をみる。I期は平面形態が円形(SB2は時期不明にて除く)で6～7mの規模である。II期は隅丸方形で3m台、III期は方形で5m前後の規模であり、IV期は長方形で4m台×3m台の規模である。各時期における住居の平面形態と規模には一定の法則が考えられる。さらに、その変移は、平面形態は円形→隅丸方形→方形→長方形となり、住居規模(平均床面積値)は、I期は30㎡台(SB2を除く)、III期は20㎡台、IV期は10㎡台の値となり(SB10を除く)徐々に縮小化していくことが判る。縮小化の要因は、掘立柱建物と関係するものと考えられまいだろうか。

内部施設では、土柱穴はI期6本、III期4本、IV期未検出であり減少傾向にあることが判る。

火所をみると、炉はI、II期には住居中央にあり、III期にはSB1のようにやや中央から外れるようである。IV期にはみられない。カマドは、III期に出現しIV期には確立する。炉、カマドのような火所は住居中央から住居側縁に移行する傾向にあるといえよう。

内部施設で今回最も注目されるのは、壁体内側に巡る小ピットである。平野内の検出状況は先述のごとくであり、西日本に視野を広げても壁体内側に小ピットが存在する例は各地で散見できるが、SB6、15のように密に検出される例はない。さてこの小ピット列の構造及び用途についてであるが、今回の調査ではこの施設を断定する資料は得られなかった。今後の調査・研究で明らかにしていきたいと考えている。



第61図 竪穴式住居址の変遷図(縮尺1/800)

【文 献】

- |         |      |  |
|---------|------|--|
| 谷 若 倫 郎 | 1988 | 『道後城北遺跡の展開』古代学協会西国支部シンポジウム資料                               |
| 宮 本 一 夫 | 1990 | 『文京遺跡の地形復元』『文京遺跡第8・9・11次調査』<br>愛媛大学法文学部考古学研究室、愛媛大学埋蔵文化財研究室 |
| 中 野 良 一 | 1989 | 『小山田II遺跡小山田支群』愛媛県埋蔵文化財調査センター                               |
| 田 辺 昭 三 | 1981 | 『東山郷々森古墳群発掘調査の成果—須恵器の検討—』<br>『東山郷々森古墳調査報告書』松山市教育委員会        |

## 遺構・遺物観察表

## 一凡 例一

(1) 以下の表は、本調査検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

(2) 遺構の一覧表中の出上遺物欄の略記した。

例) 縄文→縄文土器、弥生→弥生土器、土師→土師器、須恵→須恵器。

(3) 遺物観察表の各記載について。

法量欄 ( ) : 復元推定値

形態・施文欄 土器の各部位名称を略記した。例) 口→口縁部、胴中→胴部中位、柱→柱部、裾→裾部、胴底→胴部～底部。

胎土・焼成欄 胎土欄では混和剤を略記した。例) 砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。( )の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。胎土記探例)、砂・長(1~4)多→「1~4mm大の砂粒・長石を多く含む」である。焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

●表4 竪穴住居址一覧

竪穴 (S)	時 期	平面形	規 模 長さ×幅×深さ(m)	主柱穴 (本)	内 部 施 設				周壁溝	備 考
					高床	土置	炉	カマド		
2	弥生(後期)	方形	2.3×2.3×0.10						小ピット	
3	弥生前期	円形	6.2×6.1×0.25	6	○	○	○		小ピット	SK5を切る
4	弥生前期	円形	7.0×7.0×0.08	5(6)			○		溝	SB12・SB14に切られる
7	弥生後期	円形	7.1×6.9×0.28	6			○		小ピット	SD14を切る
10	古墳前期	隅丸方形	3.2×3.2×0.10				○		小ピット	
1	古墳中期	方形	5.7×5.3×0.13	4	○		○	○	小ピット	SD6・SD7を切る
6	古墳前期	方形	5.0×4.5×0.06	3(4)		○			小ピット	SB15に切られる
15	古墳中期	方形	3.1×4.9×0.10	4					小ピット	SB6を切る
11	古墳中期	方形	4.5×2.0×0.08						小ピット	
12	古墳中期	方形	6.1×5.4×0.08						小ピット	
13	古墳中期	方形	2.3×2.0×0.08							SB4を切る
14	古墳前期	方形	3.7×2.0×0.15							SB4を切る
16	古墳中期	方形	4.5×4.3×0.12						溝	SD10を切る
5	古墳後期	長方形	4.2×3.6×0.20					○		
8	古墳後期	長方形	3.7×3.1×0.50							
9	古墳後期	長方形	4.9×3.3×0.22			○		○		

●表5 竪穴式住居址付設の整体溝一覧

竪穴 (S)	時 期	総 数 (個)	直 径(cm)	深 さ(cm)	間 隔(cm)	備 考
2	弥生(後期)	28	7-14	2.5- 7		0-40 組
3	弥生前期	35	4-16	2- 14		0-39 組
7	弥生後期	58	4-17	2- 13		0-185 組
10	古墳前期	28	5.0-13.5	3- 8.5		0-26 組
1	古墳中期	25	3-14	6-12.5		0-33 密
6	古墳前期	78	3-21	2- 4		0-13 密
15	古墳中期	72	6-25	3- 13		0-194 密
11	古墳中期	36	5.8-11	2- 6		0-24 密
12	古墳中期	51	7-21	3- 11		0-30 密
16	古墳中期	7	2-7	5- 15		0-195 組

## 遺構と遺物

●表6 竪穴式住居址の炉・カマド一覧

竪穴 (SB)	時期	炉	カマド	位置	平面形	規模 長さ×幅×深さ(m)	備考
3	弥生前期	○		遺構中央やや南寄り	楕円形	1.2×0.9×0.5	炭化物混入
4	弥生後期	○		遺構ほぼ中央	楕円形	1.0×0.9×0.25	炭化物混入
7	弥生前期	○		遺構中央やや南寄り	楕円形	1.1×0.8×0.2	テラス状施設あり
10	古墳前期	○		遺構ほぼ中央	楕円形	1.0×1.1×0.08	炭化物混入
1	古墳中期	○		遺構中央やや南寄り	円形	0.2(径)×0.05	焼土あり
1	古墳中期		○	東壁コーナー	(馬蹄形)	0.45×0.45×0.15	
5	古墳後期	○		北壁中央やや南寄り	馬蹄形	0.9×0.7×0.12	
9	古墳後期	○		東壁中央やや南寄り	馬蹄形	0.8×0.6×0.18	

●表7 溝一覧

溝 (SD)	地区	断面形	規模 長さ×幅×深さ(m)	埋土 (シルト)	出土遺物	備考	時期
1	B1-C4	レンズ状	12.10×0.28×0.10	暗褐色	弥生		弥生後期以降
2	D1	舟底状	4.02×0.35×0.20	暗褐色	弥生・土師		古墳中期以降
3	A3	皿状	8.99×0.74×0.10	暗褐色	弥生		弥生後期以降
4	A3	レンズ状	7.98×0.68×0.24	暗褐色	土師		古墳以降
5	A3	皿状	4.00×0.50×0.05	暗褐色	弥生		弥生前期以降
6	B2	レンズ状	1.10×0.13×0.05	暗褐色		S B 1 に穿られる	古墳中期以降
7	B2	舟底状	2.12×0.71×0.08	灰褐色		S B 1 に穿られる	古墳中期以前
8	B2	皿状	1.48×0.32×0.06	灰褐色			時期不明
9	A2	舟底状	9.30×0.35×0.15	黒褐色	弥生・土師	S D 12 を穿る	古墳以降
10	A2-B2	皿状	9.09×0.84×0.08	黒褐色		S D 16 に穿られる	古墳中期以前
11	A2-B2	皿状	1.98×0.35×0.06	暗褐色		S D 9 に穿られる	古墳以降
12	A2	舟底状	3.60×0.35×0.12	暗褐色		S D 9 に穿られる	古墳以降
13	C4	レンズ状	6.22×0.80×0.19	暗褐色			弥生後期以降
14	B3	皿状	3.10×0.35×0.05	暗褐色		S B 7 に穿られる	弥生前期以降
15	C2	皿状	1.79×0.32×0.05	黒褐色			時期不明
16	A1-C4	舟底状	60.00×1.60×0.32	褐色	弥生・土師・須恵		古墳以降
17	B3	レンズ状	1.00×0.25×0.12	褐色		S B 2 床面検出	弥生後期以降
18	A3	舟底状	2.60×0.15×0.20	暗褐色			時期不明

●表8 自然流路址一覧

流路 (SR)	地区	断面形	規模 長さ×幅×深さ(m)	埋土	出土遺物	備考	時期 (以降)
1	B1	レンズ状	7.00×5.50×0.40	灰色砂礫	弥生・土師・須恵		古墳後期

●表9 土壌一覧

土壌 (SK)	地区	平面形	断面形	規模 長さ×幅×深さ(m)	埋土 (シルト)	出土遺物	備考	時期
1	A2	黒山方形	皿状	1.55×1.22×0.05	褐色	弥生		弥生後期以降
2	B3	黒山形	皿状	1.05×0.85×0.06	褐色	土師		古墳以降
3	A3	楕円形	皿状	1.30×0.87×0.06	褐色			弥生以降
4	A3	楕円形	皿状	1.20×0.70×0.12	暗褐色	縄文・弥生		弥生以降
5	B3	黒山方形	レンズ状	1.20×0.62×0.04	暗褐色		S B 3 に穿られる	弥生後期以前
6	B3	楕円形	逆台形状	0.84×0.63×0.40	暗褐色		S B 3 床面検出	弥生後期以降
7	B3	不整形円形	皿状	1.22×0.65×0.14	暗褐色		S B 3 床面検出	弥生後期以降
8	B3	黒山形	逆台形状	1.25×1.00×0.14	黒褐色	弥生		弥生以降
9	B3	楕円形	舟底状	1.22×1.00×0.30	黒褐色	縄文・弥生・土師		古墳以降
10	B3	楕円形	舟底状	0.98×0.48×0.10	灰褐色	縄文・弥生		弥生以降
11	B1	不整形方形	皿状	1.20×0.65×0.08	褐色	土師		古墳以降

調査の概要

●表10 SB3 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面			
1	釜	口径(13.3)	口縁部はナテにより、わずかに拡張。	㊶ヨコナテ ㊷ハケ(6-7本/1cm)	㊶ヨコナテ	石・灰(1-2) ○		
2	甕	口径(11.2)	縦線長線、口縁部「コ」字状、裾部シボリ。	㊶ナテハケ→ヨコナテ ㊷タテハケ(13本/1cm)	㊶上ヨコハケ→ヨコナテ ㊷ナテ	石・灰(1-2) 全 ○		
3	釜	底径(6.0)	底面は厚みのある平底。	㊷ハケ(6本/1cm)	㊶上ナテ(即焼止) ㊷中下ハケ	石・灰(1-2) ○	出展	
4	器内	口径(20.4)	受通部は下方へ拡張する可能性あり。裾部に一条の沈線文。		㊶ヨコナテ	青(1-2) ○	赤 色 料	
5	高杯	底径(21.2)	縦線短沈線、裾下面に縦線短沈線、裾底面は平底。	㊷ナテ	ヨコナテ	石・灰(1-2) ○	黒 曜 石	
6	高杯	底径(9.9)	口縁部はナテ囲みあり。裾部内面下方に1本の沈線あり。	㊶板ナテ ㊷ヨコナテ	㊶ナテ ㊷ヨコナテ	石・灰(1-2) ○	黒 曜 石	
7	釜	底径5.5	小さい上げ底。	㊶ナテハケ (6-8本/1cm)	㊷ヘラツズリ(下→上)	石・灰(1-4) 全・多 ○	出 展 品	
8	勾玉	全長(3.2) 厚1.4-1.8	腹面に3mm次の小円孔。	ナテ		青(石-1) ○		

SB3 出土遺物観察表 石製品・鉄製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
9	棒状打欠具	完形	鉄晶片質	14.4	4.1	2.0	166		
10	石斧	完形	粗集砂岩	14.6	6.3	3.4	524.4		
11	砥石		粘板岩	5.0	2.5	0.5	7.26		
12	磨玉片		鉄製	4.4	1.05	0.4	1.8		31

●表11 SB4 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面			
13	釜	口径(9.4)	口縁部は先細り、丸くおさめる。	ナテ ナテ	ナテか板カキ ナテか板カキ	石(1-3)多 灰(1-4) ○		
14	鉢	口径(21.2)	口縁部はナテにより、わずかに凹む。	㊶ナテハケ→ヨコナテ ㊷タテハケ(8本/1cm)	㊶ヨコハケ ㊷ヨコハケ ㊸ヘラツズリ(下→上)	石・灰(1-4) ○		
15	高杯	底径(10.2)	外周部は縦線短沈線、内面、裾部強いナテ。	ナテ ナテ	㊶ヨコナテ ㊷ヨコナテ	石・灰(1-3) ○	外 来 系	

SB4 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面			
16	高杯	口径(12.4)	縦3条×2組、横5条の縦横瓦線刻。地肌有穿孔。	ナデ	ナデ	砂・灰(1) 多	本館資料 外注?	
17	高杯	径高 3.4	浅いやや太い凹線文2条。	磨滅のため不明。	磨滅のため不明。	石・灰(1-2) ○		
18	甕	径高 3.3	口縁端部施文。凹線文1条(+a)。	磨滅のため不明。	磨滅のため不明。	黄 ○		
19	甕	口径 6.8	大きい平底。	磨滅のため不明。	磨滅のため不明。	石・灰(1-2) 多 ○		
20	甕	口径 (6.0)	小さい上げ蓋。	磨滅のため不明。	磨滅のため不明。	石・灰(1-2) ○		
21	甕	口径 (6.2)	くびれの平底。瓦線して平底とする。	磨滅のため不明。	磨滅のため不明。	石・灰(1-2) 多 ○		
22	甕	口径(11.6)	5cm入り孔3ヶ。地肌有穿孔。常用	磨滅のため不明。	磨滅のため不明。	灰 ○	外注?	

●表12 SB7 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面			
23	甕	口径23.0 器高35.3 口径 6.4	平底。口縁部の伸びは短く、内面の後けゆるやかである。	①ハケ(上・下) 磨板状工具によるナデ	①ナデ ②ハケ(左上り) ③ナデ	石・灰(1-2) 多 ○	窯	18
24	甕	口径(25.0)	ゆるやかに折れ曲がる口縁部をもつ。器底はナデにより閉む。	④ヨコナデ ⑤タテハケ	⑥ナデ ハケ(右上り)	石・灰(1-2) 多 ○	窯	
25	甕	口径(22.2)	器底がやや厚い。口縁端部はナデにより閉む。内面に割い紋。	⑦磨板状工具によるナデ ⑧ハケ(一部磨滅)	⑨ヨコハケ ⑩磨板状工具によるナデ	石・灰(1-2) (7大石) ○		
26	甕	口径(17.6)	後をもつて折れ曲がる口縁部をもつ。口縁端部はナデにより閉む。	⑪ナデ ⑫叩き(右入り) →ナデハケ	⑬ハケ(一部ヨコナデ) ⑭上部タテハケ(下→上) 下磨板状工具によるナデ	石・灰(1-2) 多 ○	窯	18 20
27	甕	口径17.0 器高22.7 口径 5.4	器底が厚い。ゆるやかに折れ曲がる口縁部。口縁端部はナデにより閉む。	⑮磨板状工具によるナデ ⑯ハケ ⑰) 板状工具によるナデ	⑱ヨコナデ ⑲) 磨板状工具によるナデ	石・灰(4) ○		
28	甕	口径(17.6)	口縁端部はナデによりわずかに施文され、製陶時2本が施される。	⑳ハケ→ヨコナデ ㉑) タテハケ ハケミガキ	㉒) ヨコナデ ㉓) ナデ	黄 ○	窯	
29	甕	口径(12.7) 器高19.9 口径 4.4	平底。胴ト平角がしまる。ゆるやかに折れ曲がる口縁部。	㉔) ヨコナデ ㉕) タテハケ	㉖) ヨコナデ ㉗) 磨滅のため不明	石・灰(1-2) ○	黒曜	
30	甕	口径19.1 器高22.2 口径 4.6	不安定な平底。口縁端部はナデにより施文され器底をもつ。	㉘) ヨコナデ ㉙) タテハケ(下→上) 器底は上・下	㉚) ヨコナデ ㉛) ヨコハケ ㉜) ヘラタズリ(左→右) ㉝) ヘラタズリ(下→上) ㉞) ナデ	石・灰(1-4) 多 ○	窯	18
31	甕	口径(16.0) 器高24.0 口径 5.0	平底。口縁端部はナデにより施文され、下方に張り出す。	㉟) ヨコナデ ㊱) ハケ→ヨコナデ ㊲) タテハケ下縁はナデ	㊳) ヨコナデ ㊴) ハケ→ナデ ㊵) タテハケ(15cm/1cm)	砂・灰(1-1) ○	黒曜	18

## 調査の概要

SB7 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面			
32	甕	口径(18.0)	器表面は凹凸が著しい。 ゆるやかに折れ曲がる口縁部をもつ。	①ヨコナデ ②タテハケ	③ヨコハケ ④ハケ(右ナリ)	石・長(1-8) 全(1-2) ○	黒 甕	
33	甕	口径(13.4)	ゆるやかに折れ曲がる口縁部をもつ。口縁端部はナデにより固む。	①ヨコナデ ②ナデ	磨滅のため不明	長(2) ○	黒 甕	
34	甕	口径(17.4)	口縁端部はナデにより拡張され、固みをもつ。	①ヨコナデ ②出削り或磨き	①ヨコナデ ③ハケ→ナデ	石・長(1-1) 全(1-2) ○		
35	甕	口径(17.0)	口縁端部はナデによりド方におずかに拡張され、蓋は固みをもつ。	①ナデ ②タテハケ	③ヨコハケ ④ナデ	甕 ○		
36	甕	口径(21.0)	おずかに折れ曲がる口縁部。口縁部はナデによりおずかに拡張。	①ヨコナデ ②タテハケ(上→ド)	①ヨコハケ ③磨滅	石・長(1-2) ○		
37	甕	口径(16.4) 器高 21 底径 6.2	くびれの上げ部。 ゆるやかに折れ曲がる口縁部。	①ナデ ②タテハケ	③ヨコハケ ④ハケ(右ナリ) ⑤ナデ(右ヘラケズリ)	石・長(1-4) 多 ○	甕	
38	甕	口径 12.6 器高 15.9 底径 5	くびれの上げ部。 頸部外側下部がやや凹む。	①ヨコナデ ②タテハケ(一部磨滅)	①ナデ ③ナデ	石(1-2)多 ○	甕	
39	甕	口径 12.5 器高 15.9 底径 6	小さいくびれの上げ部。 ゆるやかに曲がる口縁部は、端部が折れる。	①ナデ ②タテハケ(一部磨滅) ③ナデ	①ヨコナデ ③ナデ	長(1-2)多 ○	黒 甕	
40	甕	口径(19.0)	所謂如意状口縁である。口縁端部に斜口。外部にヘラ注目を施す。	①ナデ	②ナデ ③ハケ	石・長(1-2) ○		
41	甕	口径(19.0)	口縁部は短い。端部は拡張し、器底文を1条施す。頸部下部が凹む。	①ヨコナデ ③磨きの可能性あり	磨滅のため不明	石・長(1-2) 全 ○		
42	甕	口径(27.0)	口縁部は上方に粘土を粘り付けて拡張。頸部は磨滅により斜口凸部文。	④ヨコナデ	①ヨコナデ	甕 ○		
43	甕	口径(22.0)	口縁端部は拡張し、2条の沈線文をもつ。上面に沈線状の固みをもつ。	①ヨコナデ	①ヨコナデ	甕 ○		
44	甕	底径(5.4)	平底(わずかに上がる)。外傾して立ち上がる。	①ハケ→ナデ ②ハケ→ヘラミガキ ③ナデ	ナデ	石・長(1-2) 多 ○		
45	甕	底径(6.5)	平底。わずかに直立して立ち上がる。外面に短い沈線をもつ。	①ハケ(下・上) ②ナデ ③ナデ	磨滅のため不明	石・長(1-2) 多 ○		
46	甕	底径 6.6	わずかに上がる上げ底。外傾して立ち上がる。外面に短い沈線をもつ。	④ヘラミガキ ⑤ナデ	ナデ	石(1-7) 長(1-5) ○		
47	甕	底径 6.4	底部外側中央がやや上がる。外傾して立ち上がる。外面に短い沈線。	③ナデ ④ナデ	ナデ	石・長(1-2) 多 ○	黒 甕	
48	甕	底径 5.3	上げ底。 外傾して立ち上がる。	④ヘラミガキ ⑤ナデ	ヘラケズリ	石・長(1-5) ○	黒 甕	
49	甕	底径 4.6	上げ底。わずかに直立して立ち上がる。外面に短い沈線をもつ。	④ヨコナデ ⑤ナデ	割落のため不明	石・長(1-2) ○		

遺構と遺物

S B7 出土遺物観察表 土製品

(3)

番号	種類	測量(cm)	形態・施文	調 査		胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面			
50	甕	直径6.0	小さな上げ蓋。外縁して立ち上がる。外面に深い絞線をもつ。	①タテハケ(下・上)・ヘラミガキ ②ナデ	磨滅のため不明	石・灰(1-4) ○		
51	甕	直径6.2	小さくくびれ、わずかに上がる蓋部。外面に深い絞線をもつ。	①ヨコナデ、タテハケ ②ナデ	ナデ	石・灰(1-4) ○	出土	
52	甕	直径5.5	くびれの上げ蓋。外面に深い絞線をもつ。	①ヨコナデ ②ナデ	形状上によるかき上げ。	石・灰(1-4) ○	黒 瓦	
53	甕	直径4.5	胴一區部境が急激に止まる。わずかな上げ蓋。	磨滅のため不明	①ヘラミガキ(下・上) ②ナデ	砂 石・灰(1) ○		
54	甕	口径23.0	口縁位置は可成り異なる。口縁部には「コ」字状を呈する。	①ハケ ②磨滅のため不明	①ヨコナデ ②磨滅のため不明	石・灰(1-5) 多 ○		19
55	甕	残高 8.7	口縁部が割断する。縦目録を看取する。	①タテハケ	磨滅のため不明	石・灰(1-3) 多 ○		
56	甕	残高 7.7	縦目録を看取する。胴部に磨滅文(3本×2組)6条。	①ヨコナデ	磨ナデ	石・灰(1-4) 多 ○		
57	甕	口径(14.4)	磨滅文①、横線8本1組の6条。山形状5本1組の5条。磨ナデ2組の6条。	①ヨコナデ→磨滅 ②ヨコナデ→磨滅	①ヨコナデ ②ヨコハケ→ナデ	石・灰(1-4) ○	黒 瓦	25
58	甕	口径(26.2)	口縁位置部1.65cm 磨滅部8条。 平位不明。	①ナデ→磨滅 ②タテハケ→ヨコナデ	①磨滅ヨコナデ ②ハケ→ナデ ③ヨコハケ	石・灰(1-4) ○		25
59	甕	口径(18.2)	磨滅文 ①横線文(3本×2組)6条。 縦線文(3本×1組)2条。	①ヨコナデ→磨滅 ②取付工具によるナデ	①ヨコナデ ②ナデ	石・灰(1-3) ○	出土	25
60	甕	口径(20.4) 器高 53.3 直径 7.5	①(横)磨滅部。 (斜)磨3条。 磨滅部2条。 磨滅なし。木口押文。	①ナデ→磨滅 ②ヘラミガキ (下部)タテハケ	①ナデ ②ヨコハケ (下部)タテハケ	石・灰(1-3) 多 ○	黒 瓦	19 25
61	甕	残高 2.0	①磨滅山形文(4本×1組)4条。符合磨滅に磨滅部2条。	①ヨコナデ→磨滅		石・灰(1-5) ○		
62	甕	残高15.9	口縁位置部は可成り異なる。胴部に断面三角形の刻付けハケ紋。	①ハケ ②タテハケ(下・上) ③ハケ→ミガキ	①ナデ ②ハケ	石・灰(1-7) 多 ○		19
63	甕	口径19.5 器高49.4 直径 8.3	①横線(4本×2組)8条。 (斜)磨3条。 磨滅部(4本×1組)5条。 磨滅部(4本×2組)8条。	①ハケ→ヨコナデ→磨滅 ②タテハケ→磨滅 ③タテハケ→ヘラミガキ	①ヨコハケ ②ヨコハケ ③ヨコハケ	石・灰(1-5) ○	出土	19 25
64	甕	残高 7.0	台形上の凸部取り付けた凸部上ヨコナデ。	①タテハケ→磨滅	磨ヨコハケ	石・灰(1-5) ○		
65	甕	残高 3.5	凸部取り付けた上・下部を除くヨコナデする。		磨ナデ	石・灰(1-6) ○		
66	甕	残高10.2	二角凸部取り付けた大きな目録。	磨ヘラミガキ(右トリ)	割捨著しく調整不明	石・灰(1-7) ○	黒 瓦	
67	甕	口径(16.7)	口縁部中央に横線。 磨ナデによりやや凹む。	①ヨコナデ ②タテハケ→ヘラミガキ	ナデ	石・灰(1-3) ○		

## 調査の概要

SB7 出土遺物観察表 土製品

(4)

番号	品種	法量(cm)	形態・施文	調 査		胎 土 成	備 考	図版
				外 面	内 面			
68	甕	口径29	口縁部やや広が、 断面に2条の縦線文。	磨滅のため不明	◎ヨコハテ	石・灰(1-6) ○	出 典	
69	壺	口径11.3 器高27.3 底径 5.7	胴部に沈線文(縦線)2 条と肩部に斜交文2段 (下段は閉鎖せず)。	◎ヨコナテ ◎ナテ ◎ヘラミガキ(縦方向)	①ヨコナテ ◎ナテ ◎仰臥山形編目	砂(石・灰)多 ○	鑑	20
70	壺	口径13.6 器高27.2 底径 6.8	口縁部を先削りし、断面 は丸みをもつ。	◎ヨコナテ ◎ナテハテ ◎ヘラミガキ(丸上り) ◎ナテ	①ヨコナテ ◎ナテ上げ ◎縦線状工具ナテ (新ナテ)ナテ上げ	石・灰(1-6) ○		20 25
71	壺	口径12.7	口縁部は外方に折り曲げ られる。 断面は「コ」字状を立する。	①ハケ→ヨコナテ ◎ナテハテ(7本/cm)	①ハケ→ヨコナテ ◎ハケ(丸上り)	石・灰・金 (1-3) ○		21
72	壺	口径10.7 器高23.4 底径 5.6	胴部に沈線紋3条、肩部に 斜交文を施す。	◎ナテハテ(7本/cm) ◎ハテ	◎ヨコナテ ◎ヘラミガキ	砂(石・灰)多 ○	黒 灰	20
73	壺	口径(11.2)	胴部に沈線紋2条、肩部 に斜交紋を施す。	◎ヘラミガキ (ナテ方向)	①ヨコナテ ◎ナテ	石(1-4) ○		
74	壺	口径(15.7)	わずかに外反する口縁部、 口縁部はわずかに加蓋 され縁部を立を施す。		①ヨコナテ ◎ヨコハテ→ヘラミガキ	石・灰・金(1-4) ○		
75	壺	口径(15.5)	外反する口縁部をもつ。 胴部1處に斜交紋を施す。	◎ナテ ◎縦線状上蓋によるナテ上げ	①ナテ ◎ナテ	石・灰(1-4) ○		
76	壺	口径13.0	わずかに外反する口縁部 をもつ。 口縁部はナテによる固 みをもつ。	①ヨコナテ ◎ヘラミガキ(ナテ方向)	①ヨコナテ ◎ナテ	灰(灰・石) ○		
77	甕	器高7.2	断面下部に断面三角形の 取っ付けを施す。	磨滅のため不明	◎ナテ	石(1-5) ○		
78	壺	器高9.5	断面に2段の斜交紋を施す。 下段の斜交紋は閉鎖 しない。	◎ナテ一箇紋	◎ナテ ◎ヘラミガキ	石 (1-5, 砂多) ○		
79	壺	底径 5.2	大きめの不安定な平底を もつ。	◎ナテハテ ◎ナテ	①ナテ (新ナテ)ナテハテ ◎ナテ	石・灰(1-6) ま ○	出 典	
80	甕	底径 4.4	断面に斜交紋を施す。 底部は不安定なものである。	◎縦線 ◎ナテハテ	◎縦線1條 ◎ナテハテ ◎ナテ上げ	石・灰(1-2) 金 ○	鑑 黒 灰	
81	壺	口径 7.9	わずかに外反する口縁部 をもつ。口縁部は縁く 丸く仕上げる。	◎ヨコナテ ◎ハテ→ヘラミガキ	①ヨコナテ ◎縦線ケズリ	石・灰(1-2) 少 ○		21
82	壺	口径 7.4	わずかに外反する口縁部 は、断面をヨコナテし、 「コ」字状に仕上げる。	◎ヨコナテ ◎ハテ→ヘラミガキ	①ヨコナテ ◎ナテ	石・灰(1-2) 少 ○		
83	壺	底径 4.6	扁平の縁部にギン状に 突出する平底をもつ。 器壁は薄い。	磨滅のため詳細不明で ないがハケあり。	①ナテ、ヨコハテ (新)ナテハテ	石・灰(1-2) ○	出 典	21
84	壺	底径 5.8	扁平の縁部におずかに突 出する平底をもつ。	◎ナテハテ ◎ナテハテ	◎ヨコハテ ◎ナテ ◎ナテハテ(新ナテ上げ)	石・灰(1-4) ○	黒 灰	20
85	壺	口径11.8 器高26.7 底径 6.0	内結する反唇部におずか に外反する口縁部、口縁 部は先削り。	◎ナテハテ ◎ナテハテ (新)ナテハテ(ナテ)	◎ナテ (新)ナテ (新)ハテ(ナテ・ヨコ)	石・灰(1-4) ○		21

## 遺構と遺物

SB7 出土遺物観察表 土製品

(5)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土 成	備 考	図版
				外 面	内 面			
86	壺	残高 10.7	頸部部の境が不明瞭である。	磨滅のため不明	ナテ	石・灰(1-2) ○	黒 塚	
87	壺	口径(15.6)	口縁部、頸部部の境は不明瞭。 口縁部は先細りする。	磨滅のため不明	磨滅のため不明	石・灰(1-6) ○		
88	壺	残高 13.6	胴中作が大きく出る。 頸部部の境は不明瞭である。	磨滅のため不明瞭ではないが、わずかにハケタあり。	①下)ナテ上げ ②上)ナテ	石・灰(1-1) ○	黒 塚	
89	壺	口径 13.1 器高 35.3 底径 7.5	わずかに拡張された口縁部には2本の縦刻線を施す。肩部は本口の押花。	①タテハテ ②タテハテ	① ココナテ ② イコナテ ③ ナテ ④ 板ナテ ⑤ 板ヘラタズリ	石・灰(1-5) ○	黒 塚	21
90	壺	口径(15.2)	わずかに拡張された口縁部には、2本の縦刻線が施される。	磨滅のため不明	①)ココナテ ②)磨滅のため不明	石・灰(1-4) ○		
91	壺	口径(11.2)	わずかに外反する口縁部は肩部が先細りする。	①)ココナテ ②)タテハテ	①)ココナテ ②)ナテ ③)板ナテ(ココ)	砂 ○		
92	壺	口径(10.2) 器高11.2 底径 3.8	口縁部は跳ね上げ状を呈する。	①)ココナテ ②)タテハテ	①)ココナテ ②)タテハテ ③)ナテ	灰(1-7)多 ○	黒 塚	22
93	壺	口径 9.7	口縁部には「コ」字状を呈する。底部に2×1組で2組の円孔を施す。	①)ココナテ ②)ヘラミガキ	①)ココナテ ②)下)ナテ ③)ココハテ(夜、上)	灰(石・灰) ○		19
94	壺	口径12.6	口縁部には「コ」字状を呈する。	①)ナテ ②)板ナテ(1-1)	①)ナテ ②)上)ナテ ③)ヘラタズリ(下-1)	石・灰(1-7) ○		19 26
95	白付壺	口径 9.5 器高19.3 底径11.8	口縁部に円孔を穿つ。(円孔径は1×1) 脚部円孔は4ヶ所。	①)ヘラミガキ ②)ヘラミガキ ③)ココナテ	①)ナテ ②)ココハテ ③)ナテ ④)ナテ	灰(砂) ○		22
96	壺	底径 4.5	厚みのある平底をもつ。	①)ヘラミガキ (下・上)	①)ナテ上げ	砂 (石・灰1-2) ○		
97	壺	底径 8.9	丸みがあり、突出する平底をもつ。	①)ヘラミガキ(下・上) ②)ナテ	ナテ	石・灰(1-6) ○	黒 塚	
98	壺	底径(9.1)	丸みがあり、突出する平底をもつ。		ナテ	石・灰(1-3) ○	黒 塚	
99	壺	底径9.3	丸みがあり、突出する平底をもつ。	①)タテハテ	①)板)ナテ	石・灰(1-1) ○	黒 塚	
100	壺	底径(8.5)	丸みがあり、突出する平底をもつ。	①)タテハテヘラミガキ(下・上) ②)ナテ	①)ナテ	石・灰(1-5) 多 ○	黒 塚	
101	壺	底径 5.5	わずかにくびれる上げ部をもつ。	①)タテハテナテ (下・上) ②)ナテ	①)ナテ	石・灰(1-7) ○	黒 塚	
102	壺	底径 3.8	わずかにくびれる上げ部をもつ。	磨滅のため不明	板ナテ	石・灰(1-2) ○		
103	壺	口径14.6 器高24.3 底径 7.6	丸みのある平底。ココナテによりわずかに拡張する口縁部。	①)ココナテ ②)タテハテナテ(1-1)	①)ココナテ ②)磨滅のため不明	石・灰(1-3) ○	黒 塚	22

## 調査の概要

SB7 出土遺物観察表 土製品

(6)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土 規 成	備 考	図版
				内 面	外 面			
104	鉢 口径21.4 器高19.3 器径 6.1	わずかにくびれる上1/3部をもつ口縁部は体部よりやや厚い。	①ヨコナテ ②タテハケ・ヨコナテ ③タテハケ? (ワメツ)	①ヨコナテ ②ヘラツクリ(下・上)	石・長(1-3) ○	黒 灰	22	
105	鉢 口径(18.5) 器高16.6 器径 6.2	大きなくびれの上げ部をもつ。口縁部はやや広く縁部は先細りでない。	①ナテ ②板状工具によるナテ上げ	①ヨコハケ ②ヨコハケ→ナテハケ ③ナテ	石・長(2)多 全 ○	黒 灰	18 25	
106	鉢 口径(24.6)	外反する口縁部。口縁部は「コ」字状を呈する。	①ハケ→ヨコナテ ②タテハケ・ヘラミガキ	①ヨコナテ ②ヨコハケ	石・長(1-3) ○			
107	鉢 口径14.2	厚い底面。「く」字状の口縁部は端部がナテによりわずかに反曲。	①ヨコナテ ②ヘラミガキ(左上り)	①ヨコナテ ②ナテ	石・長(1-6) 多 ○	黒 灰		
108	鉢 口径(19.4)	口縁部は厚くやや大きいものである。基部に刺突痕を呈す。	①ヨコナテ ②ナテ	①ヨコナテ ②ナテ ③ヘラツクリ(左→右)	石(1-5) ○			
109	鉢 口径(22.2)	口縁部は体部よりやや厚い。口縁部は「コ」字状を呈する。	タテハケ (下→上) (10本/1.2cm)	①ヨコナテ ②ナテ	石・長(1-3) ○	黒 灰		
110	鉢 口径(21.4)	口縁部はヨコナテによりわずかに反曲。	①ヨコナテ (左・右)タテハケ→ヨコナテ ②タテハケ	①ハケ・ヨコナテ ②ハケ→ナテ	石・長(1-5) ○			
111	鉢 口径19.0 器高11.7 器径 4.5	丸みのある平底。口縁部に体部より厚い。ややひずんでいる。	①ナテ ②刺突痕のため不明 (わずかにハケあり)	①ヨコハケ ②ハケ(左・上) ③ナテ	石・長(1-5) 多 ○	黒 灰	22	
112	鉢 口径10.5	口縁部内・外縁部に刺毛目調整を行う。	①ヨコナテ ②タテハケ	①ヨコハケ ②板ナテ・ナテ	青(石・長) ○			
113	鉢 口径16.4 器高 9.1 器径 4.0	丸みのある平底。口縁部はヨコナテで「コ」字状を呈する。	①ナテ ②タテハケ	①ハケ・ナテ ②ナテ	石・長(1-2) ○		22	
114	鉢 口径(16.0) 器高 8.3 器径 2.6	平底。ゆるやかな縁をもつて外反する口縁部。端部は先細りする。	①ヨコナテ ②不明 (わずかにハケ)	①ヨコナテ ②板ナテ ③ナテ	石・長(1, 2) ○			
115	鉢 口径10.0 器高10.8 器径 3.8	平底。直立する口縁部。口縁部は先細りし丸くおさめる。	タテハケ(上→下)	①ヨコナテ ②ナテ上げ	砂 (長1-4)少 ○		23	
116	鉢 口径(10.2) 器高 7.8 器径 2.2	丸みのある平底。直立する口縁部。口縁部はつまみ出しによる。	タテハケ(上→下)	①ナテ ②ナテ上げ	石(1-3) ○	黒 灰		
117	鉢 口径4.7	やや大きめで厚い平底。わずかにくびれ部をもつ。	①ナテ ②ナテ	②ナテ上げ	長(1-7) ○			
118	鉢 口径14.8 器高 7.7 器径 4.2	くびれの上げ部。外反する口縁部は端部が先細りして丸くおさめる。	①ヨコナテ ②ハケ ③ナテ	①ヨコナテ ②ナテ(一部ハケ)	青 ○	黒 灰	23	
119	鉢 口径10.3 器高6.2 器径 4.8	丸みのある平底。直立口縁部は端部を「コ」状におさめる。	①板ナテ→ナテ (指図山)	①ヨコナテ ②ナテ (指図山)	石・長 (1-2-15) ○	黒 灰	23	
120	鉢 口径 9.0 器高 6.6 器径 3.8	突出し、丸みのある平底。内湾さみに直立する口縁部。端部やや丸い。	調整のための不明	ナテ	石(1-5) ○	黒 灰		
121	鉢 口径(12.4)	口縁部外縁部に5条と4条の刺突痕状を呈す。	①ヨコナテ ②ナテ→縁部	ヘラミガキ	青 ○			

遺構と遺物

SB7 出土遺物観察表 土製品

(7)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		胎土 焼 成	備 考	国版
				外 面	内 面			
122	脚部 (脚)	直径 (7.2)	厚手でくびれの上げ部状を呈する。外面にゆるやかな稜をもつ。	調整のための不明	調整のための不明	石・長(1-8) ○		
123	鉢	口径 10.8	大きめのくびれの上げ部状を有するものと考えらる。	⑤ハケ ⑥ナデ	調整ナデ	石・長(1-6) 多 ○	炭化物	23
124	鉢	口径 4.4	やや厚いくびれの平底。或は口縁を有するものと考えらる。	⑤ナデハケ ⑥ナデ	⑥ナデ上げ	石・長(1) ○		
125	高杯	口径(31.4)	外反する口縁部はやや短い口縁部部は「コ」字状を呈する。	ヨコナデ	ヨコナデ	石・長(1-3) ○		
126	高杯	口径 26.2	外反する短い口縁部。口縁部部はわずかに外方に突出する。	⑤ヨコナデ ⑥ハケ→ヘラミガキ (ト→上)	⑤ナデハケ→ヨコナデ ⑥ナデハケ→ナデ	石(石・長) ○		23
127	高杯	口径 (35)	外反する口縁部。口縁部部はわずかに外方に突出する。	⑤ヨコナデ ⑥調整のための不明	調整のための不明	石・長(1-3) 少 ○		
128	高杯	口径 26.7	鉢一筋端に(1.2)cmの円孔を穿つ。口縁部は長くして先開りする。	⑤ヨコナデ ⑥ハケ→ヘラミガキ ⑦ヘラミガキ	⑤ヨコナデ ⑥ハケ→ヘラミガキ ⑦しほり板	石(石・長) 多 ○		23
129	高杯	口径 18 器高 12.3 底径 10.8	柱内面底部に未貫通の小円孔(2mm)を穿つ。器内面に染み痕あり。	⑤ヨコナデ ⑥ナデハケ ⑦ナデ	⑤ヨコナデ ⑥ハケ→ヘラミガキ ⑦ナデ	石・長(1-3) ○	黒 泥	23 26
130	高杯	残高 5.7	杯底部は完成後、脚部を差し込みにより接合。	⑤ヨコハケ ⑥ナデハケ (微細に施される)	⑤ハケ	石・長(1-5) ○		
131	高杯	残高 6.3	柱内面底部に未貫通の小円孔(2mm)を穿つ。	⑥調整のための明確ではないがヘラミガキがみられる	ナデ	石・長(1-3) 少 ○		
132	高杯	残高 6.4	器み合わせ技法による接合中。やや内側の破片	ナデハケ→ヘラミガキ	ハケ	石・長(1-3) ○	炭化物	
133	高杯	残高 8.3	脚上部に細い沈み痕2条(+α)を呈す。やや器壁が薄い。	ナデヘラミガキ→調整	ナデ	多 ○		
134	高杯	残高 8.7	器み合わせ技法中。柱一筋端に外周りのヘラミガキ痕2条	ナデヘラミガキ→調整	ナデ	石・長(1-6) ○		
135	高杯	口径(12.1)	杯縁接合部に段をもつ。口縁部部は先細く丸くおさめらる。	⑤ヨコナデ ⑥ヘラミガキ	⑤ナデ ⑥ヘラミガキ	石・長(1-3) 少 ○		
136	高杯	残高 15.5	杯底部部の完成後が明確している。しほり板を器壁に残す。やや厚手。	⑤ヘラミガキ(ナデ) ⑥ヘラミガキ(ナデ)	⑤調整のための不明 ⑥しほり板、ナデ ⑦ココハケ(5-6割)	石・長(1-5) 多 ○		
137	高杯	残高 12.2	柱は断面が丸みのある二角形を呈する。大きい先細部を呈取できる。	⑤ヘラミガキ→ヘラミガキ(ナデ) ⑥ハケ、(7水/3cm)	⑤しほり板→ナデ ⑥ハケ(ヨコ)	石・長(1-3) ○		
138	高杯	残高 10.0	大きい先細部を呈取できる。やや厚手。しほり板痕あり。	⑥ナデハケ→ヘラミガキ	⑥ナデ	石・長(1-3) 多 ○		
139	高杯	残高 5.2	完成技法。器壁やや厚手。しほり板痕あり。	⑥ナデヘラミガキ	⑥調整のための不明 ⑦しほり板→ナデ	石・長(1-3) ○		

## 調査の概要

## SB7 出土物観察表 土製品

(8)

番号	器種	量量 (cm)	形態・施文	調 整		胎 土 規 成	備 考	国 産	
				外 面	内 面				
140	高杯	底径 14.4	組み合わせ技法。器壁やや厚い。	①(紅)ナテ ②ナテ	①(紅)ヘラミガキ ②(紅)しぼり飯→ナテ ③(紅)ヨコナテ	石・灰(1-5) 多 ○		炭化物	
141	高杯	底径(12.9)	完成技法。器壁はやや厚い。脚端部、やや上方に突出。	①(赤)脚端部のため不明 ②ヨコナテ	①(紅)ハケーナテ→ミガキ ②ナテ	石・灰(1-6) ○		炭化物	
142	高杯	底径(12.6)	組み合わせ技法。4条の輪線状2組。直径1.8cm大の円孔あり。	脚端部のため不明	脚端部のため不明	石・灰(1-7) ○			
143	高杯	底径(9.6)	光澤技法。直径5.5cm大の円孔1ヶあり。器壁がやや厚い。	①(紅)ヘラミガキ ②ハケーヘラミガキ	①(紅)ヘラミガキ ②ナテ	砂(前1) ○			
144	高杯	底径(11.7)	比上部が著しく厚い。脚端部はヨコナテにより組みをもち。	①ヘラミガキ	①(紅)ナテ ②(紅)ヨコナテ	石・灰(1-3) ○			
145	高杯	底径(10.6)	脚下部に直径5mm大の円孔1ヶあり。脚端部上方にやや突出する。	脚端部のため不明	①(紅)ナテ ②(紅)ヨコナテ	石・灰(1-2) ○			
146	高杯	底径(15.4)	脚下部に直径15mm大の円孔1ヶあり。脚端部ナテによる組み。	脚端部のため不明	ナテ	石・灰(1-3) 多 ○			
147	高杯	底径 19.4	光澤技法。組み合わせ技法。脚部の接合部。脚端部ナテのみ。	①(紅)ハテ(灰上り) ②(紅)ハケーナテ ③(紅)ハケーヘラミガキ(ナテ) ④ヘラミガキ	①(紅)ヘラミガキ ②(紅)ヘラミガキ ③(紅)ナテ ④(紅)ハテ(灰上)ヨコナテ	石・灰(1-3) 石(8) ○	黒 炭	23	
148	高杯	残高 14.0	厚縁状部に直径3mm大の円孔を4か所に穿つ。光澤技法。	①(紅)ナテハテ (20-25mm/1cm) ②(紅)ヘラミガキ ③ヘラミガキ	①(紅)ヘラミガキ ②(紅)ナテ ③ヨコナテ	赤 ○			
149	高杯	残高 6.2	接合部外面に凸部を貼り付ける。凸部はヨコナテにより組み。	脚端部のため不明	①(紅)ハケーヘラミガキ	赤 ○			
150	器台	口径(23.3)	器面下方に拡張。器面に平縁竹管を上下2段で「S」字状に施す。	①(紅)ヨコナテ→施縁	②ヘラミガキ	赤(石・灰1) ○			
151	器台	口径(20.0)	器面と上面に縁状の放射状と沈線状を。器面に凹形浮線を残す。	①(紅)ヨコナテ→面状縁 →凹形浮線		石・灰(1-4) ○			
152	器台	口径(31.4)	器面は貼り付けにより下方に系下(拡張)させる。	①(紅)ヨコナテ	①ヘラミガキ	石・灰(1-3) 石(8) ○			
153	器台	口径(22.6)	器面下方に拡張。器面に2条の放射線状を残す。	①(紅)ヨコナテ		赤 ○			
154	支脚	口径(7.2) 器高 11.4 底径 9.7	足部縮部。ナテにより「コ」字状となす。柱部が著しく厚い。口縁<底縁	脚端部取部	ナテ 佐原氏取部	石・灰(1-5) 多・金 ○		24	
155	支脚	口径 9.5 器高 11.6 底径 10.8	受・脚端部をナテにより「コ」字状となす。口縁<底縁	ナテハケーナテ	ヘラケズリ	石・灰(1-3) ○		黒 炭	24
156	支脚	上部径 5.1 器高 4.8 底径 6.0	上・下部の中央が直径3-4mmの大きさでわずかに凹む。側面取部。	ナテ		赤(砂) ○		黒 炭	24
157	支脚	上部径 4.6 器高 3.4 底径 6.0	台形状を呈する。下部中央が直径2.2mmの大きさで凹む。側面取部。	ナテ		赤(砂) ○			24

遺構と遺物

SB7 出土遺物観察表 土製品

(10)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		胎 土 成	備 考	図版
				外 面	内 面			
158	皿	口径 11.4	小門孔(径2mm大)が穿れる。端部は上方やや突出する。	ナテヘラミダキ	ヨコナテ	石・灰(1) ○		
159	ミナヤ	残高 3.5	手造ねじ。塗彩土器のミニチュア品であろう。くびれの上げ底をもつ。	ナテ		石・灰(1-4) ○		
160	紡錘車	直径 4.4 厚さ 0.8 重さ 23g	焼成前穿孔。門孔直径7.5mm。中央がやや突出する。	ナテ		石・灰(1-2) 金 ○		24
161	紡錘車	直径 4.7 厚さ 1.1 重さ 21.1g	焼成前穿孔。門孔直径6.5mm。中央が突出する。	ナテ		心・灰(1-2) 金 ○		24
162	紡錘車	直径 3.5 厚さ 1.1 重さ 13.9g	焼成前穿孔。門孔直径6.5mm。平孔。	ナテ		石・灰(1-3) ○		24

SB7 出土遺物観察表 石製品・ガラス製品

番号	品 種	残 存	材質・色	法 量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (mm)	重さ (g)		
163	紡錘車	完 形	黒 青	5.6	5.7	0.7	41.6		24
164	石布下	ほぼ完形	緑色片岩	12.0	3.9	0.6	50.3		24
165	ガラス玉	完 形	ブルー	0.3	0.6	0.2	0.1		25
166	ガラス玉	完 形	ブルー	0.35	0.5	0.2	0.1		25
167	ガラス玉	完 形	ブルー	0.3	0.5	0.2	0.1		25
168	ガラス玉	完 形	ブルー	0.3	0.4	0.2	0.1		25
169	ガラス玉	完 形	ブルー	0.3	0.45	0.25	0.1		25
170	ガラス玉	完 形	ブルー	0.3	0.4	0.15	0.1		25
171	ガラス玉	完 形	ブルー	0.3	0.45	0.25	0.1		25
172	ガラス玉	完 形	ブルー	0.35	0.45	0.2	0.1		25
173	ガラス玉	完 形	ブルー	0.3	0.45	0.2	0.1		25
174	ガラス玉	完 形	ブルー	0.3	0.45	0.15	0.1		25
175	ガラス玉	完 形	ブルー	0.3	0.35	0.2	0.1		25
176	ガラス玉	完 形	ブルー	0.3	0.4	0.2	0.1		25
177	ガラス玉	完 形	ブルー	0.3	0.5	0.2	0.1		25
178	ガラス玉	完 形	ブルー	0.4	(0.4)	0.2		分析中	25

●表13 SB10 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		胎 土 成	備 考	図版
				外 面	内 面			
179	皿	口径(10.4)	口縁端部傾く外反。端部丸い。腹面直線ナシ。	① ナテハケ・ヨコナテ ② ハケ(10本/1cm)	① ヨコハケ→ヨコナテ ② ヨコハケ ③ ヘラクスリ	石・灰(1-3) ○	思 慮	
180	皿	口径 16.0	口縁部やや内傾。端部丸みのある「コ」字状。若い様。	① ヨコナテ ② 収収工具によるナテ上げ	① ヨコナテ ② ヘラクスリ(ヨコ)	石・灰(1-3) 多 ○	思 慮	27
181	皿	口径 (6.8)	口縁部やや内傾。端部丸い。	① ヨコナテ	① ヨコナテ ② ヘラクスリ	砂 多 ○	思 慮	

## 調査の概要

SB10 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		胎 土 成	備 考	図版
				外 面	内 面			
182	壺	口径 16.8	口縁部「コ」字状をなす。	① ココナテ ② ハテ (右ドリ)	① ココナテ ② ナテ (磨削し)	石・灰(1-6) 全 ○		
183	壺	口径(12.0)	口縁部やや内湾。口縁内面にやや凹凸。	① ココナテ ② ナテ	① 削磨して不明 ② ヘラケズリ	伊(灰1) ○		
184	小型丸底壺	口径 9.0 高さ 7.3	口縁部内湾。口縁部丸い。施文に施あり。	① ココナテ ② ナテ	① ココナテ ② ナテ	砂 ○		27
185	小型丸底壺	高さ 7.2	口縁部内湾。腹等に施あり。	磨滅のため不明	磨滅のため不明	石・灰(1-4) ○		
186	高杯	口径(18.4)	杯部の嵌合部が外面で露出される。	① ココナテ	① ココナテ	石・灰(1-3) ○		
187	高杯	残高 5.4	組み合わせた技法。口上部に4mm穴開孔施。	① ヘラミダキ	① ココナテ	石・灰(1-3) ○		
188	高杯	口径(10.6)	杯部形痕あり。	ナテ	① ヘラケズリ(ヨコ) ② ココナテ	石・灰(1-4) ○		

●表14 SB1 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		胎 土 成	備 考	図版
				外 面	内 面			
189	壺	口径 13.6 器高 21.3 口径 19	口縁部わずかに内湾。口縁部部分的に面をなす。	① ココナテ ② ナテ(横上り) (7割) ③ 磨滅のため不明(1割)	① ココハテ ② ヘラケズリナテ ③ ナテ	石・灰(1-2) ○	黒河原	28
190	壺	口径(15.5)	口縁部、内面への突出あり。残部形痕あり。	① ココナテ	① ココナテ ② ココナテ ③ ココハテ	砂(灰1) ○		
191	壺	口径(12.0)	口縁部わずかに内湾。口縁部丸みをなす。	① ココナテ ② ココハテ(7割/1割)	① ココナテ ② 磨滅したナテ ③ ヘラケズリ	石・灰(1-4) ○	黒河原	28
192	壺	口径 18.2	口縁部わずかに内湾する。口縁部丸みをなす。	① ココナテ ② ココナテ	① ココナテ(横下)ヘラ ② ココナテ ③ ナテミダ	砂(石・灰1-2) ○	黒河原	27
193	壺	口径 14.4	口縁部内湾へ突出する。口縁外面片断形付。	① ココナテ ② ココハテ	① ココナテ ② ココナテ ③ ナテ(磨削)	砂灰多 ○		27
194	小型丸底壺	口径(10.5) 器高 6.4	口縁部わずかに内湾。口縁部丸みをなす。	① ナテハテ ② ハテ	① ココナテ ② ナテ	砂 ○		27
195	高杯	口径 16.0	嵌合部痕をなす。	① ココナテ ② ココナテ	① ココナテ ② ココナテ	砂(石・灰1) 全 ○		
196	高杯	口径(17.2)	嵌合部、突出する。嵌合部わずかに施をなす。	① ココナテ ② ココナテ	① ココナテ ② ナテ	砂 ○		
197	高杯	口径(17.6)	嵌合部痕をなす。断面指し込み。	① ココナテ ② ココナテ	① ココナテ ② ナテ	石・灰(1-6) ○		28

## 遺構と遺物

SB1 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		胎 土 焼 成	備 考	図版
				外 面	内 面			
198	高杯	残高 8.2	甍し込み式。甍口縁巻取。 肩はしぼり。	ナテ	磨滅のため不明	甍 ○		
199	高杯	残高 (11.6)	甍部、甍しく厚い。 肩・甍部端に木白威貫筋。	ナテ	ケズリ	石・長(1-2) ○		
200	高杯	残高 6.7	甍上部巻取筋。	ナテ	(甍)へラナキリ(肩以上) (甍)へラナズリ(ココ)	甍 ○		
201	小型丸壺立	口径 (7.4) 器高 9.9	口縁巻取丸みをなす。	磨滅のため不明	(胎)ナテ (胎)ナテ	甍(石・長1) ○		27
202	甍	器高 (8.8)	丸底。	甍いハケ(3本/1cm)	ナテ (甍部は顔面貫)	砂 ○	黒 曜	
203	甍	器高 (8.0)	口縁巻取筋。へうじ筋。 甍部。甍部下縁は折り返し状。	磨滅のため不明	ナテ	砂 (1-3) ○		
204	甍	器高 (6.4)	甍部はカキ取りによる上げ筋。	磨滅のため不明	磨滅のため不明	砂(石・長1) ○		
205	甍	器高 7.8	甍部はカキ取りによる上げ筋。	胎へラミカキ	磨滅のため不明	石・長(1-3) ○		
206	ミニナテ	口径 4.3 器高 3.6	平底甍。	ナテ	ナテ	甍(砂) ○	甍	

SB1 出土遺物観察表 石製品・鉄製品

番号	器種	残 存	材 質	法 量				備 考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
207	双孔円板	ほぼ完形	滑石	4.8	4.3	0.6	19.6		28
208	石釦丁	約片残	緑色片岩	4.6	4.7	0.8	26.9		
209	鏃	約片残	鉄 製	3.3	2.8	0.4	6.0		31

●表15 SB6出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		胎 土 焼 成	備 考	図版
				外 面	内 面			
210	甍	口径 (11.3)	口縁部はすかに内凹。口縁巻取丸みのある「コ」字状。	ソコナテ	ソコナテ	石・長(1-4) 全 ○		
211	小型丸壺立	口径 (2.4)	子製わか。拵鉄工具によるカキ取り。	ナテ	ナテ (甍部は顔面貫)	石・長(1-0) ○		
212	高杯	残高2.9	甍し込み式。甍口縁巻取。 甍部は折返あり。	磨滅のため不明	磨滅のため不明	甍(石・長) ○		
213	高杯	残高2.7	甍し込み式。シボリ状筋。	磨滅のため不明	磨滅のため不明	石・長(1-3) ○		

## 調査の概要

SB6 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎土成	備考	図版
				外 面	内 面			
214	高坪	高さ6.1	光澤なし。シボリ技法。	磨滅のため不明	しぼり紙	石・長(1-2) ○		
215	高坪	高さ6.1	社部中よこぐみ。	磨滅のため不明	ヨコナア	石・長(1-4) ○		

SB6 出土遺物観察表 鉄製品

番号	器種	残 存	材 質	法 量				備考	図版
				長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
216	刀子		鉄 製	9.9	0.95	0.6	10		31
217	鏃		鉄 製	4.4	1.5	0.4	3.7		31

●表16 SB11 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎土成	備考	図版
				外 面	内 面			
218	高坪	口径(18.4)	底合部著しい段がつく。	ナテ(一部磨きか?)	磨滅のため不明 (おすかにヘケあり)	砂・石 ○		

●表17 SB12 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎土成	備考	図版
				外 面	内 面			
219	高坪	口径 18.1	底合部に段がない。組み合わせ技法。	①ナテ 磨ナテ	②ナテ 磨ナテ(ヨコ)	石・長(1-2) ○		
220	高坪	口径(12.9)	返し込み技法か。	③ヘラミカキ 磨ナテ	④ナテ(ヨコ) 磨ナテ	石・長(1-2) ま ○		原 理

●表18 SB13 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎土成	備考	図版
				外 面	内 面			
221	高坪	口径 23.0 口径 12.5	底合部わずかに段をもち、光澤技法。組み合わせ技法。	ナテ・ミカキ	⑤磨滅のため不明 磨しぼり紙、ヨコナテ	石・長(1-4) ○		28
222	小 型 人形蓋	口径 6.7 高さ 9.0	口縁部内凹。調整せらる。	⑥ヨコナテ 磨ナテ(7本/1cm)	⑦磨滅のため不明 磨ナテ	砂・石・長 ○		28
223	鏃	口径 9.4	子鼠おか。底面あり。	⑧ナテ (指環平底調整)	⑨ナテ (指環平底調整)	砂・石・長 ○		28

SB13 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残 存	材 質	法 量				備考	図版
				長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
224	鏃	ほぼ全形	ヤメカイト	2.3	1.5	0.4	0.6		

遺構と遺物

●表19 SB14 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形 態・施 文	調 整		胎 土 成 成	備 考	図版
				外 面	内 面			
225	壺	器高 13.0	文様状の丸足。	ナテ	㉑ ナテ ㉒ ヘラタズリ	石・灰(1-2) 金	黒 珉	29
226	壺	口径(13.6)	口縁部外面の 周に粘土の張り出しを帯取。	㉑ タテハケ・ココナテ	㉑ ココハケ	石・灰(1-2) 金		
227	鉢	口径 11.5 器高 5.6	手捏ね鉢。	㉑ ココナテ ㉒ ナテ (指図平底器表)	㉑ ココナテ ㉒ ナテ (指図平底器表)	石・灰(1-2) 多・金	黒 珉	
228	コナテ	口径 (4.2) 器高 7.5	手捏ね鉢。	㉑ ココナテ ㉒ ナテ	㉑ ナテ ㉒ しばり底 ㉓ ナテ上げ	砂 石・灰(1-2) 金	黒 珉	
229	高杯	口径 19.6	完成技法。接合部わずかに段をもつ。	磨滅のため不明	磨滅のため不明	骨(1・石・灰) 金		
230	高杯	口径 20	組み合せ技法。接合部わずかに段をもつ。接合部外面に工具痕を帯取。	(注1)ハケ→ココナテ (注2)ココナテ	磨滅のため不明	石・灰(1-2) 多 金		
231	高杯	口径 20	染し込み技法。接合部段をもつ。杯上部、わずかに内湾する。	(注1)ハケ→ココナテ (注2)ハケ→ココナテ	磨滅のため不明	骨(砂) 金		29
232	高杯	口径(11.9)	完成技法。組み合せ技法。接合部わずかに段をもつ。	㉑ 磨滅のため不明 ㉒ ナテ	(注1)ハケ→ナテ (注2)ハケ→ナテ (注3)ヘラタズリ(ココ) ㉓ ハケ→ココナテ	石・灰(1-2) 金		
233	壺	器高4.3	赤土土器片。足付付六等。凸帯上にへうによる刻目(2段)を施す。	㉑ ココナテ	磨滅のため不明	石・灰(1-2) 金		
234	壺	器高 (7.3)	わずかに上打座。	磨滅のため不明	磨滅のため不明	石・灰(1-2) 多・金 金		
235	コナテ	口径 3.2	小さい手鉢。 裏形土器(ミニチュア)。	ナテ	ナテ	石・灰(1-2) 金	出 表	

●表20 SB5 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形 態・施 文	調 整		胎 土 成 成	備 考	図版
				外 面	内 面			
236	壺	口径(13.6)	口縁部を張りする。幅面丸みをもち。頸部内面、接合部帯取。	㉑ ココナテ ㉒ ハケ	㉑ ハケ→ココナテ	石・灰(1-2) 金		

調査の概要

●表21 S B 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土 成	備 考	図版
				外 面	内 面			
237	丁板	底径 4.0	伴証上面開口部は円板でうめる。口縁部に凹線1本。	②ヨコナテ ③ナテ ④ヨコナテ	②ヨコナテ ③ナテ ④ヨコナテ	赤 ○		29
238	皿	口径 20.7 器高 4.0 底径 5.5	口縁内面には丸みをもって製り出す。施による放射状の線文。	①ヨコナテ ②ナテ	ナテ	白 ○		29

●表22 S B 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土 成	備 考	図版
				外 面	内 面			
239	壺	残高 6.4	肩部に彫刻と何点又と1本の凹線を施す。	①自然付着 ②加彩ヨコナテ	回転ヨコナテ	赤 ○		
240	高杯	口径 13.9 器高 7.8 底径 8.2	脚部底部を下方へ凹曲させ段をなす。	①製造のため不明 ②回転ヨコナテ	①回転ヨコナテ ②製造のため不明	赤 ○		29
241	壺口	口径 11.8 器高 3.6	口縁外面に環状状の凹線を3本施す。	①回転ヘラケズリ ②回転ヨコナテ	回転ヨコナテ	赤 ○		29
242	すり鉢 (作)	底径 11.4		回転ヨコナテ	ナテ	赤 ○		

●表23 溝・ビット・包含層 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土 成	備 考	図版
				外 面	内 面			
243	皿	口径(30.6)	口縁面にヘラ工具による刻入「V」字状。浅いヘラ掻き痕あり。	製造のため不明	製造のため不明	石・黒(1-3) C		
244	小型丸底壺	口径 6.9 器高 7.8	肩部凹曲部外面に木口状の工具痕あり。口縁部やや内湾する。	①ハテ ②ヘラケズリ	ナテ	赤 ○		黒 境
245	深鉢	残高 4.2	口縁部外面に断面二等形の凸帯を貼り付ける。	ナテ	ナテ	石・黒(1-3) 黒・全 ○		30
246	深鉢	残高 4.5	深角部に段を有する。	①ナテ ②赤灰 ③赤灰 ナテ出し	ナテ	石・黒(1-2) 黒・全 ○		30
247	深鉢	残高 3.3	口縁部に施して凸帯を貼り付ける。内面上は大きい「V」字状の刻目。	黒ナテ		石・黒(1-2) ○		

## 遺構と遺物

溝・ピット・包含層出土の遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面			
248	壺	口径 19.2	おすかに外反する口縁部を有する。	横ミガキ→ナテ直し	横ミガキ→ナテ直し	石・灰多 金 ○		30
249	壺	残高 6.9	おすかに折り曲げられる口縁部を有する。	ナテ	横ミガキ→ナテ	石・灰・金 ○		30
250	甕	残高 5.3	「V」字状でやや細いへう 縁沈みを有する。	ナテ→沈没	ナテ	石・灰 ○		30
251	壺	残高 2.1	口縁部にへうによる横沈 施文と大きな「V」字状 の刻目を施す。	ナテ	ナテ	石・灰多 金 ○		
252	壺	口径 31.2 器高 47.6 残高 6.8	口縁部置、折・傾斜にへう 沈没文。頸部・胴部又 器唇に折り出し・刻文。	①ヨコナテ ②ヘラミダキ(ヨコ)	③ヨコナテ ④横ナテ(ヨコ)	石・灰(1-3) 金 ○		30
253	陶瓦	寸長 4.1	径3cmの凹孔が貫通。	磨滅のため不明		石・灰(1-2) 多 ○		
254	甕	口径 25.0	口縁部置平端で、外方に やや突出する。腹下は「 」角影を呈する。	等タテハケ	①ヨコハケ ②ナテ上テ	砂(石・金) ○		30

溝・ピット・包含層出土の遺物観察表 石製品・鉄製品

番号	器種	残 存	材 質	法 量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
255	石瓶丁	約1/2残	結晶片岩	4.7	2.8	0.6	10.71		
256	鋸	ほぼ完形	鉄 製	9.1	2	0.3	8.1		31

## IV 科学分析と保存処理

本調査では、ガラス製品と赤色顔料について、科学分析を実施した。本章では、本調査出土の赤色顔料と平野内出土資料の分析と鉄製品の保存・処理過程についての報告を行う。

ガラス製品については、現在分析中であり、かつ、平野内の出土資料(表24)との比較研究をも行っているため、本書では未掲載である。報告は、別時にて行う。

●表24 松山平野における弥生時代の竪穴式住居址出土のガラス玉一覧

遺 跡 名	住居番号	平面形	規模(m)	出土個数	色	共伴遺物	時期	備考
松山大学構内2次	7号	円 形	7.1×6.9	14	青	石瓶丁・磨鏡車	後期中至	
※ / 11次	1号	円 形	7×8	4	緑青		後期後葉	
※ / 1次	3号	円 形	7×8	3	青	土玉・石珠・硬石	後期後葉	※
※ / 3次	1号	楕円方形	4.5	(1-2)	(黄)	モモの種子	後期後半	
※ / 7次	1号	円 形	5.1×5.3	1	青	石珠・石瓶丁・石斧	後期前-中葉	疑義時
※ / 7次	2号	楕円方形	(6.2)	1	青		後期前-中葉	※
※ / 7次	3号	楕円方形	(5.0)	1	青		後期前-中葉	
野 邊 山 山	4号	円 形	6.8	15	青黄	石珠・石瓶丁・石斧	中期後葉	

※( )は検出数

## IV-1 古代松山平野の赤色顔料

— 弥生時代編 (I) —

福岡市埋蔵文化財センター 本山 光子

宮内庁正倉院事務所 成瀬 正和

松山大学構内遺跡2次調査、斎院烏山遺跡、浮穴小学校遺跡3次調査、山越遺跡2次調査出土の上器等に認められる赤色が何によるものかを、顕微鏡観察及びX線分析（蛍光X線分析・X線回折）を行い調査した。

### 試料

X線分析の測定は非破壊を原則とし、土器片そのものを測定試料として用いた。検鏡においても試料採取は行わなかった。試料の一覧とX線分析（蛍光X線分析・X線回折）及び顕微鏡観察の結果と、それによって明らかとなった顔料の種類を第25表に示す。

### 顕微鏡観察

実体顕微鏡、光学顕微鏡により反射光で検鏡した。検鏡の目的は、赤色顔料の有無・状態・種を判断するものである。土器の赤彩に用いられる顔料はベンガラ（酸化第二鉄）と朱（硫化水銀）であるが、両者は特に微粒のものが混在していなければ検鏡により見極めがつかない。また検鏡が焼成前後であるかについて肉眼ではわかりにくいものも、当然よりはっきりとわかる。ただし、鉄分の「焼け」による発色や、スリップ等との差異は判断付かない場合も多い。No. 1、2、6には焼成前塗彩で観察される状態のベンガラが認められ、No. 7には焼成後塗彩のベンガラ粒子（パイプ状粒子を含まない）が認められた。No. 3にはいわゆるベンガラは認められなかったが、なんらかの塗膜のようなものがある。No. 4、5は赤色顔料としてのベンガラか「焼け」か判断できなかった。

### 蛍光X線分析

赤色顔色の主成分元素の検出を目的として実施したものである。宮内庁正倉院事務所設置の理学電機工業(株)製蛍光X線分析装置を用い、X線管球：クロム封陰極、印加電圧：40kV、印加電流：20mA、分光結晶：フッ化リチウム、検出器：シンチレーション計数管、ゴニオメーター走査範囲（2θ）：10～65°の条件で行った。その他の諸条件は適宜設定した。赤色顔料の主成分元素としては鉄のみが検出された。その他にマンガン、ストロンチウム、ルビジウムなどの元素が検出されるが、それらはみな主として胎土部分に由来するものなので、省略し、水銀及び鉄の有無のみ表中に記してある。但し鉄は胎土部分にも必ず含まれ、顔料の採取を行わない今回の分析では赤色顔料由来のものとの区別は困難である。

### X線回折

赤色の由来となる鉱物成分の検出を目的としたものである。宮内庁正倉院事務所設置の理学電機(株)製文化財測定用X線回折装置を用い、X線管球：クロム封陰極、フィルター：

古代松山平野の赤色顔料

バナジウム、印加電圧: 25kV、印加電流: 10mA、検出器: シンチレーション計数管、発散及び受光側スリット; 0.34°、照射野制限マスク (通路幅) ; 4mm、グニオメーター走査範囲(2θ); 30-66°の条件で行った。その他の諸条件は適宜設定した。赤色の由来となる鉱物成としてはNa7のみに赤鉄鉱を検出した。表には辰砂 (硫化水銀)、赤鉄鉱の有無のみについて記した。この他、石英、長石などが確認されたが、それは主として粘土部分に由来するものなので省略している。

●表25 松山平野の赤色顔料分析一覧

No.	出土遺跡	蛍光X線分析		X線回折		顕微鏡観察	赤色顔料の種類	備考
		鉄	水銀	赤鉄鉱	辰砂			
1	松山大学Ⅱ	+	-	-	-	ベンガラ	ベンガラ (焼成前)	P 26-16
2	松山大学Ⅱ	+	-	-	-	ベンガラ	ベンガラ (焼成前)	P 23-4
3	松山大学Ⅱ	+	-	-	-	?	?	図示せず
4	畷院鳥山	+	-	-	-	ベンガラ?	ベンガラ (焼成前)?	図示せず
5	畷院鳥山	+	-	-	-	?	焼成による発色?	図示せず
6	浮穴小 三次	+	-	-	-	ベンガラ	ベンガラ (焼成前)	P 114-⑧
7	山越 二次調査	+	-	+	-	ベンガラ	ベンガラ (焼成後)	図示せず

※+ = 検出、- = 未検出

まとめ

以上の結果から推定される赤色顔料の種類を表中に示した。今回はNa7以外は赤鉄鉱が同定されなかったが、一般に赤色顔料の付着量が少ないものや焼成前丹塗りに関しては、X線回折では赤色顔料に由来する鉱物が検出できない場合も多い。その場合は水銀、鉛が検出されていないことと検鏡結果を併せてベンガラと推定した。ただし、焼成前塗彩では、焼成前に用いられた塗料がいわゆるベンガラであるかどうかはわからない。現在、ベンガラとよんでいる赤色顔料はその発色が酸化鉄に由来するものすべてであり、火まかにいえばスリップでも鉄分を多く含めばベンガラ様の発色をみせるわけである。しかし、丹塗、丹塗磨削とスリップはあきらかに違うものであり、さらに焼成後塗彩もまったく異なる技法である。焼成後塗彩の遺物については、周知のように朱とベンガラの使い分けが意味を持つので細かい自然科学的調査が有効である。しかし、焼成前塗彩土器については自然科学的方法による「いわゆるベンガラ」よりも一定地域内での細かな考古学的観察を積み上げる方がより実りがあるのではないだろうか。ただし、これらの赤彩技法が混在する縄文晩期から弥生時代前期についてはより一層の自然科学的調査が成果をあげるであろう。

## N-2 松山大学構内遺跡出土の鉄器処理

池山 学

松山大学構内遺跡 2 次調査出土の鉄製品は 7 点である。217、209、236、12 は鉄鏝で、216 は刀子状のものであり、No.1、No.2 は性格不明の鉄塊である。以下、本出上品の処理過程を記述する。小型の遺物 5 点は表面には膨張は見られないが、小砂を含んだ錆が詰っている。第一回の樹脂含浸処理前にこれらの錆落しを考え、エアブラシで錆取りを行った、しかし、錆は頑固で落ちないためミニターグラインダーを使用した。217～216 は鉄部に折損が感じられ、No.1～2 は鉄部の崩壊の危険性があり作業を中止し、第一回樹脂含浸後に錆落し作業することにした。乾燥作業では、遺物を電気恒温器 65℃ に 3 日間入れた。其の後、乾燥剤シリカゲルのはいた大型デシケーターに 1 日入れた。取り出し後重量の測定、遺物処理記録カードの作成、記録の記入、今回の遺物処理に、減圧含浸装置大型デシケーターを使う。樹脂含浸デシケーターに、樹脂パラロイド NAD-10 30% 溶液を注入し、減圧は 30mHg を保持し一晩おいた。樹脂含浸後、表面に付着している樹脂をナフサを浸透させたガーゼにて拭き取った。自然乾燥、電気恒温乾燥後、錆落しを行なった。この鉄部の強化により、錆落しが容易に進んだ。以上を繰返し、3 回の樹脂含浸処理を終った。樹脂含浸率、乾燥率を表にまとめたが、数値が高いのは処理遺物が小型であったための結果の現われだろうと見ている。

●表 26 松山大学構内遺跡出土の鉄製品処理一覧

処理 番号	第 1 回		第 2 回		第 3 回		完了 重量(g)
	樹脂含浸率(%)	減量率(%)	樹脂含浸率(%)	減量率(%)	樹脂含浸率(%)	減量率(%)	
217	0.96	4.70	3.00	1.94	1.48	1.46	10.10
209	4.50	5.20	5.50	3.68	3.82	2.63	1.83
236	5.26	8.75	4.10	2.63	2.70	2.10	3.72
12	4.00	1.39	4.50	2.58	2.65	1.72	5.70
216	2.89	9.70	3.36	2.40	2.46	2.16	8.12
No.1	2.04	0.81	1.70	1.13	1.29	1.02	270.20
No.2	5.05	1.68	3.15	2.29	2.80	1.95	325.80

## V-1 松山平野の弥生後期土器

—編年試案—

梅木 謙一

### 1. はじめに

松山平野の弥生式土器編年の研究は、昭和13年小林行雄編『弥生式土器聚成図録』にはじまる。以後、松岡文一「弥生式土器聚成」や、岡本健児氏の「考古学講座」、『日本農耕文化の生成』、「考古学ジャーナル」等の研究がある。いずれも、北四国ないし愛媛県という広域を対象とする編年作業であった。松山平野を対象としたものは、長井数秋氏が『愛媛県史 考古・古代I』「弥生時代編」中にて編年案を提示したほか、十亀幸雄氏による「道後平野北部における弥生時代の地域社会の研究」〔十亀1971〕の研究があげられる。長井氏の編年案（以下、長井編年と記す）は、現在の愛媛県の弥生土器の一つの基準編年として、県内外の報告書・研究に引用されている。長井編年は、県下を三地域に区分した上で、弥生時代を五様式15型式に区分した。編年は、小林行雄の五様式編年を基準におき、各様式の細分に制限が置かれたものである。だが、編年研究時は、資料の量的不足と良好な出土品（一括遺物等）に恵まれなかったこともあり、器種構成や形式変化等に不明瞭な部分を多く残した。さて、今回の松山大学構内遺跡SB7出土品や筋違F遺跡SB5、中村松田遺跡SB4出土の土器群のように近年は良好な資料に恵まれ、特に後期中～後葉は充実し、同時期の土器様相が判明しつつある（P118）。本論は、資料が充実している後期中～後葉を中心に松山平野の後期土器の様相を明らかにするため、一括遺物資料を基礎に器種構成と形式変化に視点をおき、松山平野の弥生後期土器の編年試案を提示するものである（P115、第66図）。

### 2. 編年

I式（第62図）「く」の字状口縁帯と複合口縁帯の出現と擬凹線文を施すことを特徴とする。この時期は良好な資料に恵まれず器種構成、器形等に不明な点が多い。品種構成は、甕形土器、壺形土器、鉢形土器、高坏形土器、支脚形土器があり、器台形土器の存在は不明である。調整は、甕形土器の一部にヘラ削りが見られる。外面調整は、ヘラ磨きが減少し刷毛目調整が主体となる。施文は、擬凹線文が施される。この時期の標準的な資料は、水田遺跡II区4号土壇〔岡山1980〕があげられ、この他、西野III遺跡第3号住居址〔長井1979〕、天山天ヶ森遺跡トレンチ出土品、文京遺跡2次調査SB5がこの時期に比定されよう。

甕形土器 「く」字状口縁で肩部の張りが弱いもの①、③と、肩部が強く張り出すもの②、④他がある。前者には、口径が25cmを越える大形品がある。後者は、古い段階のものでは口縁端部を拡張し、擬凹線文を施するものがある。この時期の甕形土器には、上げ底⑤、

⑦他と平底③がある。調整は、外面は刷毛目調整で、内面は刷毛目調整ないしへら（板状工具）によるケズリが行われる。施文は、口縁端部が拡張されるものには端面に擬凹線文が施される⑬。この他、大形品には肩部に「ノ」の字状のへらないし板状工具による押圧文が施されるものもある。

壺形土器 短頸壺、広口壺、長頸壺があり複合口縁壺が出現しているものと考えられる。短頸壺は所謂、短頸壺②と筒状で短い頸部を持つ大頸壺と呼べるもの②がある。広口壺は長頸で大きく開く口縁部をもち、口縁端面に擬凹線文が施される②。稀に、口縁端面に山形紋を施すのが見られる。長頸壺は、大頸壺の頸部がやや長くなった形態のものと、細頸壺の形態のもの②がある。複合口縁壺は出土例が少ない。文京遺跡2次SB5出土品のような、短い拡張部がつくもの⑥がある。

鉢形土器 甕形土器の形態を持つもの⑦と、口縁部を折り曲げず直口ないし外傾するもの⑨が見られる。また、台付のもの⑨がある。

高環形土器 環部は、屈接部は稜をなし、口縁部が直立ないしわずかに内傾するものである。口縁部端面と口縁部外面に擬凹線文を施すことが多い⑩。脚部は、脚柱部及び裾部の施文が擬凹線文と細沈線文となる。

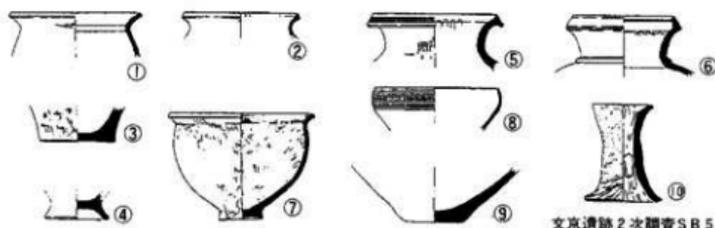
支脚形土器 中空で、左右シンメトリーのもの⑩がある。受部径は底径よりやや小さい。

Ⅱ式 長頸壺、複合口縁壺、器台、小形鉢が盛行する時期である。器種構成は、甕形土器、壺形土器、鉢形土器、高環形土器、器台形土器、支脚形土器である。調整は、刷毛目調整が主体で、壺形土器、甕形土器に叩き痕が看取される。施文は、複合口縁壺の拡張部・頸部、器台形土器の受部・脚端部、高環形土器の脚部に施される。器形の変化と各器種内の器種構成の変化より細分される。

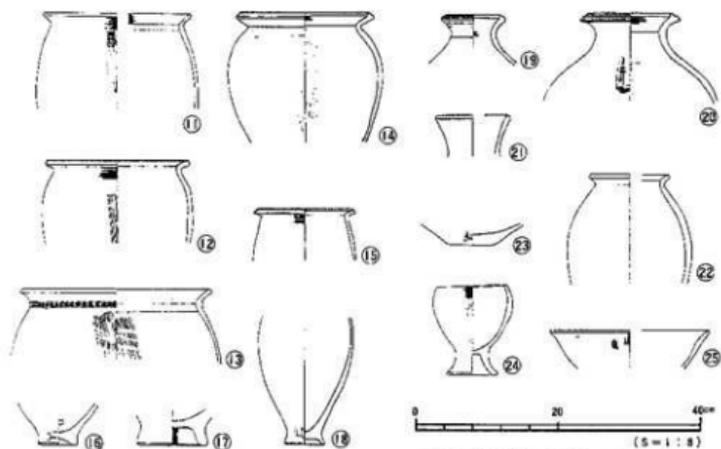
Ⅱ-1式（第19-34図） 複合口縁が大形壺に採用され、拡張部に山形紋・格子目紋が施される。高環形土器脚部の凹孔は一段である。この時期の標準的な資料は、松山大学構内遺跡SB7があげられる(P117、補遺)。

甕形土器 「く」の字状口縁で肩部の張りが弱いもの23と、肩部の張りが強いもの30がある。前者は大形品と小形品に多く、後者は中形品に多くみうけられる。この時期より、大形品の口径は25cm未満となる。底部の形状は、小形品は依然くびれの上げ底37であるが、中形品・大形品は上げ底か平底である23・30。成形・調整は、刷毛目調整が主体であり板状工具ないしへら工具による削りもなされる。なお、この時期のものに叩き痕を看取できるものがある26。

壺形土器 短頸壺、長頸壺、広口壺、複合口縁壺がある。短頸壺は、口縁部が外反するもの91・92と、直立し口縁端面を面取りするもの93・94がある。長頸壺は、頸部がやや伸びるもの70・71、扁平な体部に細く長く伸びる頸部を持つもの81・83・84、内傾し長く伸びる頸



文京遺跡2次調査SB5



伊予郡砥部町水満田遺跡Ⅱ区4号土壺

第62図 松山平野の弥生後期土器Ⅰ式

部にわずかに外反する口縁部をもつもの85がある。広口壺は、大形で筒状の頸部に大きく開く口縁部を持つもの68が知られる。複合口縁壺は、接合部が逆「く」の字状を呈するもの54・57と、タガ状を呈するもの60・63がある。施文は、拡張部には山形紋・斜格子目紋が施され57・60・63、頸部には擬凹線紋・沈線紋が施されるもの60・63がある。

鉢形土器 甕形土器と同様の形態を呈する103と104がある。小形品には、外反口縁のもの113・114と、直立口縁のもの115・118・119がある。この時期より小形品が多くみられる。

高坏形土器 中形品と小形品がある。中形品は、坏部の口縁部外反が弱く坏部が深いもの126と、外反が大きく坏部が浅いもの128がある。脚部は、筒状の柱部に外反する裾部を持つもの128と、内傾する柱部にわずかに広がる裾部をもつもの129がある。坏部と脚部の接合には、

尤塚法137と組み合わせ法130とがある。後者には、坏部を充填法により作るもの135もある。この他、異形品としてエンタシス状の柱に、口縁部が大きく外反する坏部と有段の裾部がつくもの147がある。施文は、脚部に円孔が施される128がある。

器台形土器 未だ完形品に恵まれず、全様が不明である。受部は、口縁端部を垂下させる152。端面には擬凹線紋・波状紋・円形浮紋、半截竹管紋が施される150・151他。

支脚形土器 中空のもの154と中実のもの157が知られる。中空のものは、器体が左右シンメトリーで、口径が脚端部径よりやや小さい傾向にある。中実のものは、上・下面にわずかな凹みを持つもの156もある。

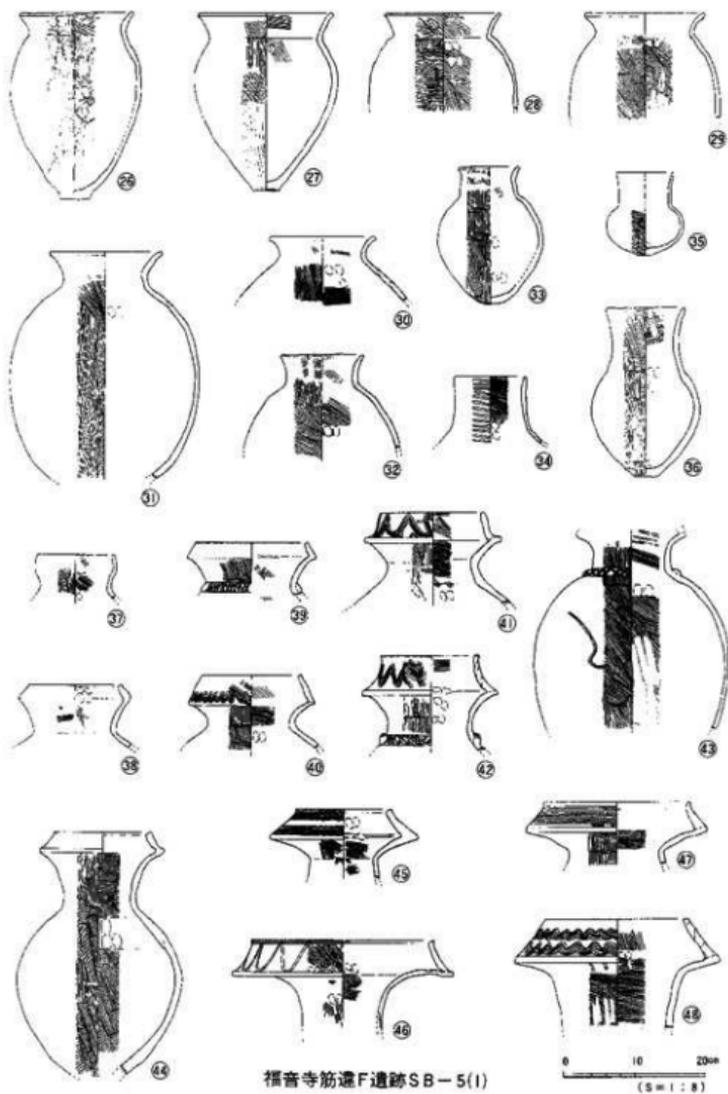
Ⅱ-2式 (第63・64図) 複合口縁壺と器台形土器の多様化、大形鉢の出現、施文における描波状紋の盛行に特徴づけられる。標準的資料は、福音寺筋遺跡SB5 (池田・宮崎 1989)、中村松田遺跡SB4 (鳥瀬 1989) があげられる。

甕形土器 Ⅱ-1式の形式を踏襲し肩部が張るもの㉒、張りの弱いもの㉓がある。器形は、口縁部は長く上方に伸び、胴部は長胴化し、底部は平底化が進んだものとなる。一部に叩き痕が看取されるものがある㉔。

壺形土器 短頸壺、長頸壺、複合口縁壺がある。短頸壺は広口壺と呼べるもの㉕と太頸壺と呼べるもの㉖がある。長頸壺はⅡ-1式の器形を継承するが、口縁部の境が不明瞭となる傾向にある㉗・㉘。小形品は、扁平の体部に直立する頸部、わずかに外反する口縁部をもつもの㉙がある。中形品は、頸部が10cm以下のやや短いもの㉚と10cm以上に長く伸びるもの㉛がある。複合口縁壺は、中形品にも複合口縁が採用され、壺形土器内における構成比率は高くなる(50%にせまる)。Ⅱ-1式と同様、複合口縁の形態は多様である。口縁接合部が「く」の字状を呈するもの㉜・㉝、タガ状を呈するもの㉞・㉟、この他、袋状を呈するもの㊱もある。拡張部の形態も内湾するもの㊲・㊳、弓状にそるもの㊴・㊵がある。口縁端面は「コ」の字状を呈する㊶、端部外面が突出するもの㊷・㊸、丸く仕上げられるもの㊹がある。頸部形態も外反するもの㊺・㊻、筒状を呈するもの㊼・㊽がある。以上のように多種多様の形態のものが存在する。施文は、頸部と口縁拡張部に施される。頸部には、凸帯が張り付けられ、凸帯上をヘラないし刷毛目調整工具と同一の工具や板状工具により押圧され斜格子状の文様を施す。なお、この時期の口縁拡張部は無文のものもある。

鉢形土器 底部の平底化が進む。大・中・小形品がある。口径30cm前後、器高30cm前後の大形鉢が出現する㊿。中・小形品は、口縁部が外傾ないし直口するもの㋀・㋁、と外反するもの㋂・㋃、「く」の字状に折り曲げられるもの㋄、頸部が締りつば状に長い口縁部を持ち底部が突出するもの㋅・㋆がある。直口口縁状の鉢形土器は、口縁端面が「コ」の字状に面取りされ、底部が突出㋇ないし、くびれの上げ底(台付状)のものがある。なお、体部形態は不明であるが台付き(脚付)の鉢形土器がある㋈。台部は低く、大きく開く形状を呈し、

松山平野の弥生後期土器



福音寺筋遺F遺跡SB-5(1)

第63図 松山平野の弥生後期土器Ⅱ-2式(1)

円孔が施される。器壁が薄く、焼成が良好である場合が多い。

高坏彩土器 坏部の外反が大きくなり脚部は長脚化し⑬、大・小の別がある⑭・⑮・⑯。小形品は、長脚化せず円孔を穿たないものもある。大形品は、口縁部が長いもの⑰と、短いもの⑱がある。脚部は、内傾する柱部に緩やかに開く裾部をもつもの⑲と、筒状の柱部に大きく開く裾部をもつもの⑳と、少数であるが柱部は薄手で細長い筒状で緩やかに開く裾部をもち、やや大きめの円孔が施されるもの㉑がある。脚部は、円孔以外に施文はなく円孔は二段で多数施されるようになる。この他、II-1式で出現した異形の高坏彩土器147が継続して存在し、口縁部と裾部の広がりさらに大きくなる器形をとる。施文は、裾部と柱部に円孔を穿ち、坏部の口縁端面が拡張され沈線文や浮紋（円形、S字状等）が施され、加飾が著しくなる。

器台彩土器 大・中・小形品があり、筒状の柱部に大きく開く受部と裾部を持つ。受部口径が裾部底径をわずかに凌ぐ傾向がある。中・大形品は、受部の端部が拡張される傾向にあり、拡張したのものには沈線紋、浮紋（円形、S字状）、波状紋、竹管紋が施されることが多い㉒。大形品は、柱部がエンタシス状を呈することが多い㉓。施文は、受部端面以外に柱部に円孔が多数施される。

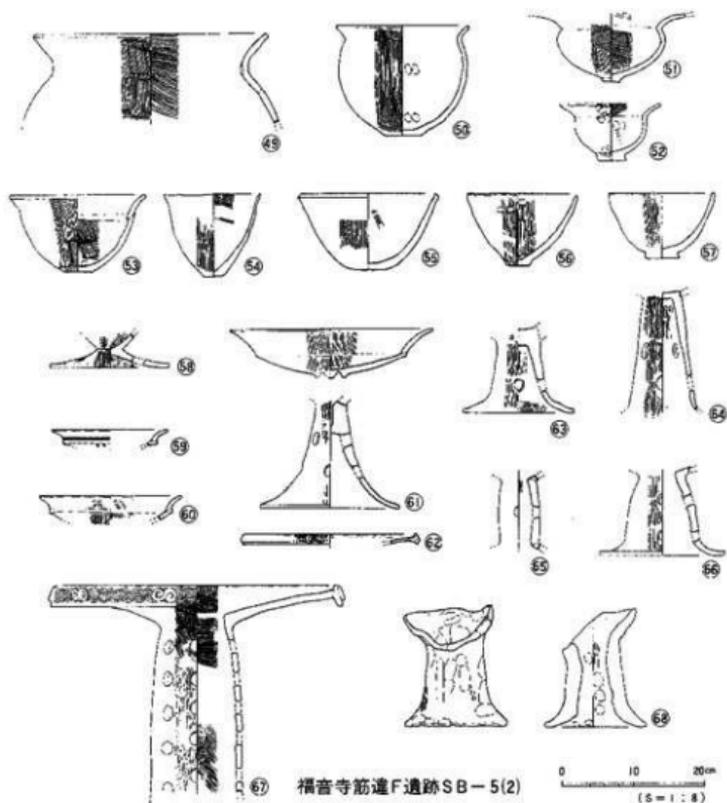
支脚 新しく受部を斜めにカットした形状のものが出現する㉔。

Ⅲ式（第65図） 各器種とも体部が丸形化し、底部が丸みのある平底へと移行することが特徴である。この時期は良好な資料に恵まれず、器種構成、器形等に不明な点が多い。器種は、袋形土器、壺形土器、鉢形土器、高坏彩土器、支脚彩土器があり、器台は現時点において出土例がみうけられない。この時期の基準的資料は、浮穴小学校3次SD2（松山市 1988）があり参考資料として道後姫塚13号土壘（坂本 1979）があげられる。

袋形土器 肩部の張りが強いもの㉕・㉖と、張りの弱いもの㉗がある。小形品のなかには、口縁部が長く口径が胴部径を凌ぐもの㉘がある。口縁端部は先細りするもの㉙・㉚もみうけられる。底部は小さい平底か丸みのある平底がつく㉛。叩き痕を顕著に残すものがあり、叩き痕は胴上半は顕著で、下半は荒く刷毛目調整で消される㉜。内面は、刷毛目調整が主要で、ナデもしくはケズリのものは少ない傾向にある。

壺形土器 長頸壺、広口壺、複合口縁壺がある。長頸壺は、口縁部が外傾ないしゆるやかに外反するものがある㉝・㉞。広口壺は、口頸部が大きく開くもの㉟と筒状の太い頸部に大きく開く口縁部をもつもの㊱がある。口縁端部は、垂下するものがあり端面に波状紋を施すことがある㊲。複合口縁壺は、拡張部が直立化および短くなる傾向を示すものがある㊳。施文は、頸部と口縁端部に施される。頸部には、凸帯を貼り付けへらないし刷毛目工具、板状工具で凸帯上部を押し斜格子紋が施される。口縁拡張部は波状紋が施される。

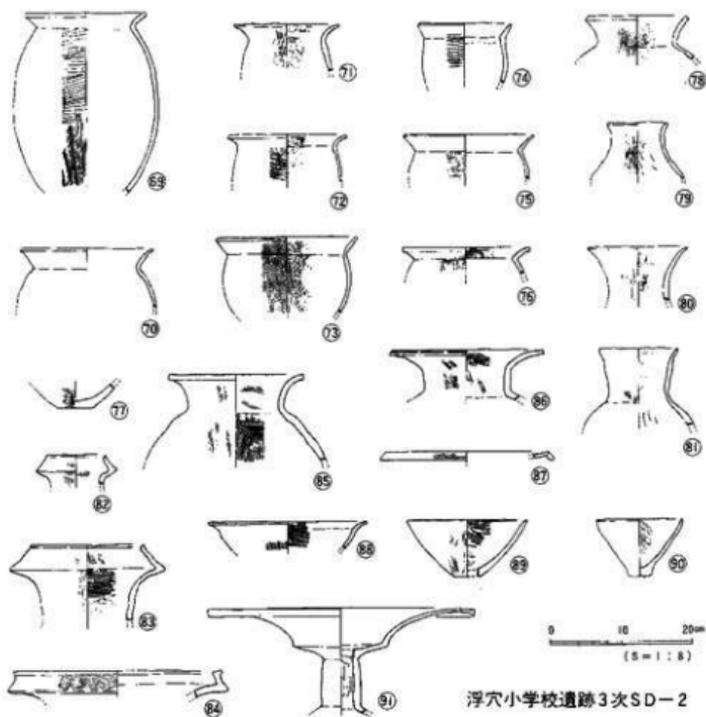
鉢形土器 外傾して立ち上がる口縁部をもつもの㊴と、外反する口縁部のもの㊵がある。



第64図 松山平野の弥生後期土器Ⅱ-2式(2)

高坏形土器 Ⅱ式の糸罫を引くものが散見できるものの、器形の全様が判る資料に恵まれない。ただし、口縁部形態は前式Ⅱ式の口縁部外反がより大きくなる傾向にあることが想定される㊸。

支脚形土器 中空のものと中実のものがある。中空のものでは、受部が角状の突起をもつもの㊹が出現する。支脚は、総じて調整が雑で叩き痕や指頭痕が顕著に残る。



第65図 松山平野の弥生後期土器Ⅲ式

### 3. 結び

本論では、器種構成と各器種の形式変化の(大)画期を前～中葉の間と後葉～末の間に求め、後期をⅠ～Ⅲ式の三様式に区分した。Ⅰ式は後期前葉に、Ⅱ-Ⅰ式は中葉、Ⅱ-Ⅱ式が後葉、Ⅲ式は末に時期比定を考えている。長井編年では、第Ⅴ様式が後期に比定されている。第Ⅴ様式は、細分され第1～5型式の五小期が提示されている。本編年試案と長井編年の対応関係を示すと、Ⅰ式が長井編年第Ⅰ型式中の天山天王ヶ森遺跡出土品、Ⅱ-Ⅰ式が第Ⅰ型式の天山北遺跡十塚出土品に当たる。天山北遺跡十塚出土品は、高坏形土器の坏部の外反が大きく、細頸長頸壺の頸部の伸びが進行している点等においてⅡ-Ⅰ式に当たる。Ⅱ-Ⅱ式は、第2～3型式に対応する。Ⅱ-Ⅱ式に比定した各遺跡の出土品には、各器種において、若干の形態変化が認められるが、本編年試案では、器種構成を主要な基準にしているため、形態変化だけによる細分は本論ではあえて行わなかった。よって長井氏の第2～3型式はⅡ-Ⅱ

# 松山平野の弥生後期土器編年(試案)図

時期	壺形土器	壺形土器	鉢形土器	高坏形土器	器台形土器	支脚形土器	
I (前期)							遺跡・遺物 大溝田遺跡T 区4号土層 ①-③-④-⑤ ⑥-⑧-⑨-⑩ ⑪ 文室遺跡 2次S B5 ⑫-⑭-⑮ 天山天王ヶ森 遺跡トレンチ 土土層 西野田遺跡 S B3 ④
II-1 (中期)							

式に包括されるが、何ら問題のないものとする。ただし、Ⅱ-2式の各器種は若干の形態変化があり細分も可能であるが、現時点においては有効な細分類は行えず、また細分類に文化的変化(意義)をみいだせないと考えている。Ⅲ式は、第5型式に対応するものである。

本試案は、Ⅰ・Ⅲ式に一部課題を残したが、松山平野の弥生後期土器の様相は概観できたものとする。松山平野では、後期前～中葉の間と後～末葉の間に、日常雑器において大きな変化(画期)がある。特に前者の画期は、松山平野の分銅形土製品(銅器)の消失、日常雑器の一括(地点)投棄、壺棺墓の多用化の開始時期にほぼ同調する。この画期時には、松山平野において文化的変移・変動があったと考えられまいだろうか。なお、本論では松山平野の後期土器を平野内に限って分析しており、搬入品と在地土器との共存関係や近隣地域との編年の対応関係についてはあえて触れなかった。

松山平野は瀬戸内海沿岸では最大の平野であり、瀬戸内航路の重要地であったことは疑う余地はないだろう。今後は本試案を充実させ、また前後の土器編年や近隣地域との併行関係を明かにし、さらには、弥生時代における松山平野の社会的位置付けを上器を素材として追究していかねばならないと考えている。

#### 【文 献】

- |             |      |   |
|-------------|------|---|
| 十 亀 幸 雄     | 1971 | 「道後平野北部における弥生時代の地域社会の研究」『愛媛大学歴史学<br>研究月報』第59号       |
| 長 井 敏 秋     | 1979 | 「西野田遺跡」『愛媛県総合運動公園関係埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』<br>愛媛県教育委員会         |
| 岡 田 俊 彦     | 1980 | 「水満田遺跡」『一般国道33号砥部道路関係埋蔵文化財発掘報告書Ⅰ』<br>愛媛県埋蔵文化財調査センター |
| 松山市史料集編集委員会 | 1980 | 『松山市史料集 第1巻 考古編』                                    |
| 池田 宇・宮崎泰好   | 1989 | 「筋違F遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』                              |
| 島 瀬 美 穂     | 1989 | 「中村松田遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』                             |
| 松山市史料集編集委員会 | 1987 | 『松山市史料集 第2巻 考古2編』                                   |
| 阪 本 安 光     | 1979 | 「道後壺塚遺跡(史料編)」愛媛県教育委員会                               |

#### 〈 補 遺 〉

松山大学2次調査S B 7出土土器の器種構成は以下である。なお、個体認定は、口縁部を対象に行った。資料総数は、166点である。

甕形土器52点(31.3%)、壺形土器48点(28.9%)、鉢形土器22点(13.3%)、高環形土器27点(16.3%)、器台形土器9点(5.4%)、支脚形土器4点(2.4%)、その他4点(2.4%)である。また、壺形土器48点中、複合口縁壺は10点で、壺形土器の20.8%を占める。

考 察

●表27 松山平野における弥生後期土器の主要出土遺構一覧

番号	遺跡名	所在地	立地	種類	遺構名	時期	備考
1	水調田遺跡	伊予郡松前町南生4番地	河原段丘	集落・墓	Ⅱ区第4号土壇状	I	文献①
2	愛媛大学文京3次調査	松山市文京町3番地	扇状地	集落		I	
3	天川・天正・森遺跡	松山市天川町	丘陵地	集落		I古	文献②
4	愛媛大学文京16次調査	松山市文京町3番地	扇状地	集落	SK-14円形明溝状	I新-(II古)	
5	松山人字橋内2次調査	松山市文京町	扇状地	集落	SB7	II-1古	
6	西野田遺跡	松山市上野町乙13番地	丘陵地	集落・墓	第3号土壇	I	文献③
7	天山北遺跡	松山市天山町294	丘陵地	集落	社六(土壇状)	II-2	文献④
8	般若寺・菩提F遺跡	松山市般若寺428番地	沖積地	集落	SB3	II-2新	文献⑤
9	中村・松田遺跡	松山市中村丁185-2	扇状地	集落	SB4	II-2	文献⑥
10	桑原田中遺跡	松山市桑原町	扇状地	集落	SK1	II-2	文献⑦
11	土壇原F遺跡	松山市土壇町土壇原	河原段丘	集落	快飯土器群	II-2	文献⑧
12	浮小小学校3次調査	松山市藤松町832番地	沖積地	集落	SD3	III	文献⑨
13	道後姫塚遺跡	松山市道後姫塚118-2	丘陵地	集落	第12号土壇	III	文献⑩
14	松山北校1次調査	松山市文京町4番	扇状地	集落	SB5	III新-(古墳)	文献⑪
15	津田鳥越江遺跡	松山市北東町	沖積地	集落	土器群F	III新-(古墳)	文献⑫
16	若草町遺跡	松山市古草町	沖積地	集落・墓	SB5	III新-(古墳)	

【文 献】

- ① 岡 田 俊 彦 1980 『水調田遺跡』『一般国道33号紙部道路関係埋蔵文化財発掘報告書Ⅰ』愛媛県埋蔵文化財調査センター
- ② 松 山 市 1980 『松山市史料集 第1巻 考古編』
- ③ 長井数秋・土居隆子 1979 『西野田遺跡』『愛媛県総合運動公園関係埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』愛媛県教育委員会
- ④ 大山正風・長井数秋 1973 『天山・桜谷古墳発掘調査報告書』松山市教育委員会
- ⑤ 池田 学・宮崎泰好 1989 『筋達F遺跡』『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』松山市教育委員会
- ⑥ 鳥 瀬 美 穂 1989 『中村松田遺跡』『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』松山市教育委員会
- ⑦ 池田学・松村淳・宮崎泰好 1989 『桑原田中遺跡』『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』松山市教育委員会
- ⑧ 長 井 数 秋 1977 『愛媛県土壇原北遺跡出土の弥生式土器』『ふたな』創刊号
- ⑨ 松 山 市 1980 『松山市史料集 考古編』第2巻
- ⑩ 阪 本 安 光 1979 『道後姫塚遺跡(史料編)』愛媛県教育委員会
- ⑪ 長井数秋・河野藤吉 1981 『愛媛県立松山北高等学校遺跡埋蔵文化財調査報告書』愛媛県教育委員会
- ⑫ 森 光 晴 1986 『鳥越遺跡(第1-2次)』『愛媛県史 資料編 考古』

## V-2 道後平野における古墳時代の集落内祭祀

日本考古学協会員 相田 則美

### 1. はじめに

道後平野における近年の発掘調査において、松山大学構内遺跡をはじめとして古墳時代の集落遺跡から滑石製模造品の出土が確認されつつある。そこで、滑石製模造品出土資料を整理しつつ、道後平野における古墳時代の集落内祭祀を考える基礎的作業を実施したい。

滑石製模造品には、武器・武具（刀子・剣形品・鎌・甲冑・斧）、服飾具（鏡・有孔円板・勾玉・管玉・白玉・櫛・銅・履）、農工具（鏝・鉋・鍬・鋤）、厨膳具（埴・甗・坏盤・槽・粗案・白・杵）のほか、家形、舟形、馬形、人形、鐙形などがある。今回取り上げるのは、道後平野における集落関係遺跡と祭祀遺跡出土の滑石製模造品であり、古墳出土の滑石製模造品は含まない。

石材の名称については、滑石製とされるなかには、滑石岩あるいは滑石片岩のほか、緑色片岩、石英片岩、黒色片岩、蛇紋岩、緑色凝灰岩などの石材があることが指摘されているが、本稿においても、これ等のものも滑石材として理解しておくことにする。

### 2. 滑石製模造品出土遺跡の類例（第67図、表28）

現在、道後平野において滑石製模造品を出土する遺跡は9遺跡を集成することができる。

以下、それらの遺跡の概要を述べておくことにする（註1）。

#### 1 松山大学構内遺跡2次調査SB1号住居址（本書、P54）

弥生時代の中心的大集落である文京遺跡に継続して営まれた集落である。SB1号住居址は、一辺5.7×5.3mの方形プランの竪穴式住居址で、主柱穴は4本、住居址北東においてカマドが確認されている。有孔円板は、住居址中央よりやや北西部の床面において出土している。円板は4.8×4.5cmの大きさで、2孔があり、片面に斜格子日文を施す特異なものである（本書、第42図）。松山平野出土の有孔円板のなかでは大型品に属する。共存遺物には土師器の壺形土器・甕形土器・高環形土器・手づくね土器・鉄鍬などがある（P58・59）。

#### 2. 樽味四反地遺跡【梅木 1989】

松山平野の北東部を流れる石手川の中流域左岸に位置する遺跡である。調査により、古墳時代以降の遺物包含層と集落関連遺構が確認された。このうち、古墳時代遺物を主体とする遺物包含層より有孔円板1点が出土している。円板は、3.0×2.8cmで、小孔が2ヶ穿たれている双孔円板である。

## 3. 桑原本郷遺跡〔栗田 1987〕

古墳時代中期から後期にかけて経石山古墳、三島神社古墳と首長墓の承藩がたどれる地域である。包含層より須恵器の有蓋高坏数点と共に白玉約100点が出土している。明確な遺構から検出されていないこともあり、調査者は古墳との関係を考えている。本資料については、今後、具体的な検討を加えねばならないが、本稿では参考資料としてあげておく。

## 4. 福音寺11号バイパス調査〔森 1983〕

筋違A区のSB4掘立柱建物の柱穴より双孔円板1点が出土している。SB4は、1辺7.45mの方形竪穴住居址SB04と切りあい、桁行全長6m、梁間4.5mの3間×3間の掘立柱建物に伴う滑石製模造品は初例である。

## 5. 福音小学校遺跡〔武正 1991〕〔註2〕

古墳時代後期になって、二つ塚古墳、星岡西山古墳など首長墓の1承藩がたどれる地域である。遺跡は、洪積台地の先端部に立地する中・後期の大規模集落である。検出された竪穴式住居址は110棟で、掘立柱建物址は71棟確認されており、このうち滑石製有孔円板4点、勾玉1点、白玉17点、紡錘車3点の模造品が、竪穴式住居址、土塚、ピット、包含層から出土している。そのほか子持勾玉1点がSB121から扁平勾玉と共伴している。また、SB65・97・136出土の紡錘車は有段の優品で、貴重な資料である。集落址からの多量の滑石製模造品の検出は、道後平野において極めて注目される遺跡である。

## 6. 福音寺筋違H遺跡〔武正 1991〕

福音小学校遺跡に隣接する。本報告であるが、SP430と称するピットより滑石製扁平勾玉が1点が出土している。遺跡は、方形竪穴住居址、掘立柱建物など古墳時代の遺構・遺物が多数検出されている。

## 7. 出作遺跡〔相田 1983〕

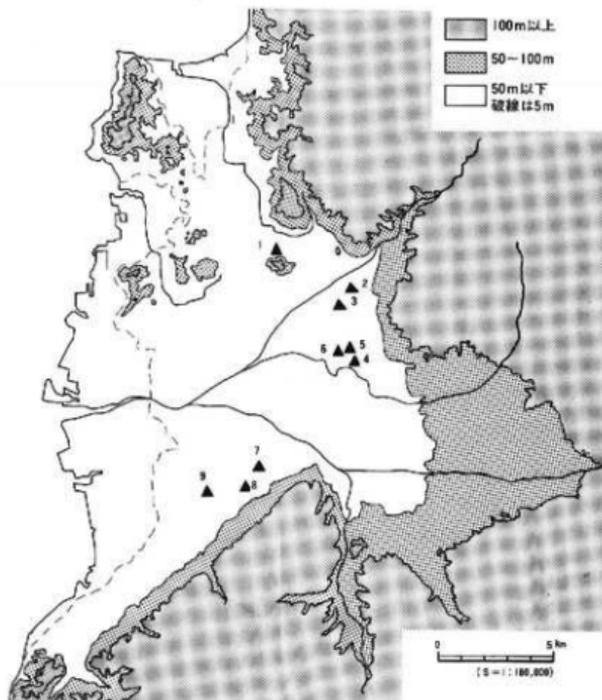
松山平野南部の標高15m内外の氾濫源に立地する。検出した遺構は、調査地中央を西流する「自然流跡」とその周辺に分布するSX01～SX03と称している主要な祭祀遺構、小規模な土器群や焚火跡、竪穴式住居址1棟などである。

SX03は全長約3m、幅約1.5mの規模で、完形の土師器約200個体と碧玉製勾玉1点を含む滑石製・鉄製模造品などで構成される。

SX02は全長約2m、幅0.5mの規模で、数点の完形の須恵器以外は土師器や須恵器の破砕片と若干の鉄製品や石製模造品で構成される。

SX01は全長約9m、幅約4mの大規模なもので、土師器のほか蓋環・高坏・甕・把手付

道後平野における古墳時代の集落内祭祀



第67図 道後平野における滑石製模造品出土遺跡分布図

埴・壺・甕・器台などの初期須恵器を含む。これらの土器群に混在して、数千の勾玉・円板・剣形・白玉・紡錘車などの滑石製模造品や未製品・剥片のほか、鉄鉾・馬鞍・鋤・鎌・斧形・鉄鎌・刀子などの鉄製模造品、そのほか土製品や砥石などの膨大な遺物で構成される。

8. 徳丸遺跡〔大野 1901〕

伊予郡伊予村（当時：明治）から大塚又兵所有になる子持勾玉1点の実測図が公表されている。厳密な出土地の確定は困難だが、出作遺跡を中心とする現在の松前町神崎・出作地域からの出上である可能性が高い。所在は、不明である。

9. 横田遺跡〔後藤 1933〕

文化13（1816）年、伊予郡横田村（当時）の農夫が井戸を掘ったところ、子持勾玉1点が採集されている。長さ12.9cm背に4個、腹に1個、側に3個の子を伴う。所在は、不明である。

## 2. 滑石製模造品の盛行年代

道後平野における集落遺跡や祭祀遺跡出土の滑石製模造品は、有孔円板、勾玉、白玉が石製模造品の中心をなしていることが知れる。まれに、子持勾玉、剣形品、管玉が存在する。これらの資料の大部分が未公表となっているが、現状での滑石製模造品の開始、盛行、終末年代について検討しておきたい。

松山大学構内遺跡S B 1出土の滑石製有孔円板と共伴する土師器をながめると、変形土器は長胴化の傾向をみせ、口縁部内面の肥厚部の上面が大きく内傾する。内面ヘラケズリは存在するが、その範囲は狭く、省略の方向にある。変形土器は二重口縁をもつものであるが、外面のミガキは省略する。小型の変形土器は外面を刷毛目調整する。高坏形土器は坏部の屈曲の稜が鈍い。S P 12出土の遺物では、小型丸底壺は須恵器の甗を模した形態である。良好な資料とはいいがたいが、以上の諸特徴は、小型三種土器が減少し、煮沸用土器の新器種が加わり、かつ初期須恵器が出現する年代にあたる。すなわち、畿内の土師器編年に対応させるならば布留式の新相から小若江南式への移行段階に位置づけられよう。

年代を把握するうえでも重要な資料は、松前町出土の大規模な祭祀遺跡である。S X 01は、土師器に共伴して蓋環・甗・器台・壺・甕など主要器種を含む大量の須恵器が出土している。このS X 01出土の須恵器の年代は、陶邑古窯址群のT K 208からT K 23型式に並行する。このS X 01には第28表のごとく円板、勾玉、剣形、白玉、紡錘車などの滑石製模造品が伴出する。さらに、S X 01に先行するS X 03には、須恵器を共伴せず、土師器と碧玉製勾玉と滑石製有孔円板と白玉で構成される。S X 03には、須恵器そのものは共伴しないが、甗を模した小型丸底壺が存在することなどから、T K 73からT K 208の初期須恵器の段階に並行するものと考えられる。

これらのことから、道後平野における滑石製模造品の出現は、初期須恵器が出現するところに有孔円板をはじめとする滑石製模造品が祭祀遺跡だけでなく、集落内においても使用されていたことがうかがわれる。さらに、T K 208段階以降、滑石製模造品は盛行をきわめたものと考えられる。これらの詳細は、未報告に属する福音寺の各遺構の検討により判明する可能性が高く、早い機会に報告が期待される。

ところで、三島神社古墳の中・四国における最古の畿内型横穴式石室から、滑石製有孔円板、白玉が検出されている。この三島神社古墳はT K 48新相からM T 15古相段階に比定される須恵器が出土している。三島神社古墳を参考にすれば、この時期まで滑石製模造品が使用され、衰退するものと考えられる。

以上のような滑石製模造品の年代観は、すでに亀井正道氏〔亀井 1966〕をはじめ、近年では白石太郎氏〔白石 1985〕によって論考され、道後平野出土の滑石製模造品の盛行年代は全国的動向と大幅な差異がないことが判明する。

道後平野における古墳時代の集落内祭祀

●表28 道後平野における滑石製模造品出土一覧

番号	遺跡名	遺構名	有孔円板	勾玉	刻形	管玉	白玉	紡錘車	共伴・備考
1	松山大学跡内2次調査	SB1	1(取)						
2	神時四反地遺跡	包含層	1(取)						
3	森原本郷遺跡	包含層					約100		環状部(宮坂)
4	福寿寺11号バイパス跡	SB4	1(取)						
5	福寿小学校遺跡	SR1A	1(取)				1		
	"	SB62	1(取)						
	"	包含層	1(取)						
	"	SB7		1					
	"	SR121		1(7辨)					
	"	包含層		2					
	"	SK111		1					
	"	SB95				1		1	
	"	SB66					2		ガラス玉1
	"	SB6					1		
	"	SR11					2		
	"	SB78					1		
	"	SK209					2		
	"	SP234					1		
	"	SP465					1		
	"	表採					6		
	"	SB97						1	
	"	SB136						1	
6	福寿寺新遺址遺跡	SK3		1(?)					
	"	SP430		1					
7	赤作遺跡	SX-01	205	10	2		1928	2	
	"	SX-02					1		
	"	SX-03	4	1			31		勾玉1点は模玉
8	徳丸遺跡	表採		1(7辨)					
9	緑川遺跡	表採		1(7辨)					

3. 滑石製模造品の生産と流通をめぐって

集成されたように道後平野の滑石製模造品は、古墳時代の中期から後期にかけて集落遺跡や祭祀遺跡において豊富に発見されている。これらの滑石製模造品の生産と流通については、いまだ全く考慮されていない。

それらの問題を解明するうえで、出作遺跡のSX01を中心に滑石製の有孔円板、勾玉、白玉が多量に出土しているだけでなく、石核、未製品、剥片が砥石を伴って出土していることは注目に値する。各種の滑石製模造品の製作工程の復元については今後の課題であるが、出作遺跡あるいは周辺の工房において滑石製模造品の生産がおこなわれていた可能性が極めて高い。その場合、問題となるのは石材の確保についてである。

いわゆる滑石材については、道後平野周辺にその生産を求めるとすれば、松山平野南部を走行する中央構造線以南の三波川変成岩類のなかに、緑色片岩が産出し、伊予郡海部町高見

には蛇紋岩の存在が唯一知られている(註3)。肉眼的観察からは、今のところ採集地を特定することができないが、少なくとも道後平野出土の滑石製模造品の石材は、その大半が松山平野南部の中央構造線以南から採集された可能性が高い。このことが事実ならば、畿内からの流通だけでなく、道後平野出土の滑石製模造品のうち、有孔円板・勾玉・白玉については、作出遺跡あるいは周辺の工房で生産され、祭祀遺跡をはじめ集落遺跡や古墳の副葬品として流通しているのではないだろうか。その意味でも石材の岩石学的検証が求められる。

#### 4. 小 結——集落跡出土の滑石製模造品

以上のごとく、道後平野における滑石製模造品は、有孔円板・勾玉・白玉を基本的祭祀具として古墳時代中期に出現し、集落遺跡や祭祀遺跡に普及することが確かめられた。

そのなかで、福音小学校遺跡は滑石製模造品を対象とする集落内祭祀を考察するうえにおいても重要な位置を占める。道後平野の古墳時代集落の展開については今後多くの課題を残しているが、福音小学校を含む久米地域については、緊急調査の急増によって集落形成の一端が判明しつつある。それによれば福音小学校遺跡は、古墳時代中期から後期にかけて突然形成され、かつ大規模な集落として出現するようである。この集落形成の背後に大きな政治的要因が働いている可能性を強くうかがわせるものである。滑石製模造品の出土状態やそれらの遺構の集落内における位置づけをふまえて詳細に検討する機会を報告書の刊行をまっとうしたいが、福音小学校遺跡に滑石製模造品の集中化は集落形成の要因とも密接に関連しているものと考えられる。現状での限られた資料から、道後平野における古墳時代の集落内祭祀について整理を試みた。滑石製模造品を中心とした集落内祭祀のものについては追求できない点は残念であるが、別の機会を待つことにしたい。

#### (註)

- (1) 集成にあたっては、宮崎泰好(伊予郡高岡町教育委員会)、梅本謙、武正良浩の各氏の御協力を得た。感謝申し上げます。
- (2) 1989～1990年に松山市教育委員会・同市立埋蔵文化財センターが調査した。現在、整理中にて、遺跡名は仮称である。
- (3) 岩石の問題については、愛媛地理学会松山支部松山地学会編『松山市付近の地質図』を参照した。さらに、愛媛県立博物館の高橋学芸員に御教示を得た。感謝申し上げます。

#### [文 献]

- |          |      |  |
|----------|------|--|
| 梅 本 謙 一  | 1989 | 『博味四反地遺跡』松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ、松山市教育委員会                      |
| 大 野 雲 外  | 1901 | 『子持曲勾玉』東京人類学会雑誌、第17巻第188号                            |
| 亀 井 正 道  | 1966 | 『雄神山—福島県衣笠村古代祭祀遺跡の研究—』古川弘文館                          |
| 栗 田 茂 敏  | 1989 | 『桑原本郷遺跡』松山市埋蔵文化財調査年報Ⅰ、松山市教育委員会                       |
| 後 藤 守 一  | 1933 | 『子持勾玉の新例』考古学雑誌、第23巻第7号                               |
| 白 石 太 一郎 | 1985 | 『神まつりと古墳の祭祀—古墳出土の石製模造品を中心として—』<br>『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集 |
| 榎 田 則 美  | 1983 | 『愛媛県出作遺跡』季刊考古学、第2号 雄山閣                               |
| 武 正 良 浩  | 1991 | 『松山市埋蔵文化財年報Ⅲ』松山市教育委員会・同市立埋蔵文化財センター                   |
| 森 光 晴    | 1983 | 『国道11号バイパス 埋蔵文化財発掘調査報告書』松山市教育委員会                     |

## v-3 松山平野の竪穴式住居址(I)

—平面形態変遷の予備考案—

梅木 謙一

はじめに

松山平野の竪穴式住居址の研究は、長井数秋氏が「愛媛県史 原始・古代I」で各時代を概観したほか、市内遺跡調査の報告書にて考察したものが幾つかある。いずれも、平面形態、柱の配置と数量、高床部（ベッド状遺構）形態に着目し、その変遷が論ぜられている。ただし、その内容は概略的であり、個別具体的な追求に至らなかった。加えて、論は平野内の動態に限られ、西日本社会における当平野の住居諸形態の位置付けや評価をするに至らなかった。また、西日本の竪穴式住居址研究においても、当平野の住居址について論ぜられることは少ない。この様な、当平野の竪穴式住居址研究の沈滞は、資料の稀薄さが最大の要因であった。今回の松山大学構内遺跡では16棟の住居址を検出しており、本例のように近年はその検出例も激増し、多くの竪穴式住居址資料を得ている。資料が増加した現在、松山平野の竪穴式住居址の再検討を行う時期に機しており、本論はその序の部分として、現時点における当平野の竪穴式住居址資料の収集と平面形態における若干の考察を行うものである。なお、本論では平面形態にのみ触れ、内部施設等については必要以上の論を避ける。

### 1. 松山平野の竪穴式住居

現時点における松山平野の竪穴式住居址検出数は、約260例である(註1)。このうち、弥生時代住居址は150例、古墳時代住居址は82例である（28棟は時期不明）。以下、時代ごとに概要を記述する。

弥生時代 150例の住居址中、平面形態が円形プラン（楕円・隅丸多角形状）を呈するものは62例、四角形（方形・長方形）プランを呈するものは78例、不定形及び形態不明のもの10例がある。

前期—確実な資料は1例で、文京遺跡4次調査の円形住居址があげられる(註2)。

中期—52例があり、円形プラン32例、四角形プラン16例、不定・不明4例である。前葉は不明である。中葉は、大峰ヶ台遺跡、祝谷六丁場遺跡で直径5mを越える円形プランが検出されており、さらに大峰ヶ台遺跡では短辺が1.7～3mの長方形プランものが検出されている。後葉は、平野内の各地で住居址が検出されており、円形プランものは直径5～7mのものが多い。四角形プランは長方形を呈しており長辺が5mを下るものが多く、例外として文京遺跡7次に3例(註3)、西野II遺跡に1例が6m以上となる。中期は、円形プランのものは規模が大きく、四角形（長方形）プランのものは規模が小さいものである傾向にある。こ

の大・小の関係が集落においてどの様に構成されるかは定かでない。

後期—78例があり、円形プラン22例、四角形プラン50例、不定・不明6例である。前葉は良好な資料に恵まれず、中葉以降の資料が多い。円形プランは6mを超えるものが大多数であるが、桑原高井遺跡、若草町遺跡(註4)等の末葉のものでは4m台のものがみられる。四角形プランは、1辺が3—5m台で隅丸方形プランが主流となる。この時期は、隅丸方形プランが急増し、円形プランは減少傾向にあり、円形プランは末葉には直径4m台と小型化する。

時期不明—19例があり、円形プラン7例、四角形プラン12例である。

古墳時代 82例の住居址中、円形プランは4例、四角形(方形・隅丸方形・長方形)プランは74例、不定・不明は4例である。

前期—19例があり、円形プラン2例、四角形プラン16例、不定・不明1例である。円形プランは、若草町遺跡、筋違C遺跡で検出されている。直径は4—6m台であり、小—中型住居である。

中期—21例があり、四角形プラン20例、不定・不明1例で、円形プランの検出例はない。四角形プランは、隅丸ないし方形プランを呈しており、1辺は3—5m台である。松山平野においては、この時期には円形プランが消失しており、四角形プラン(隅丸方形・方形)に完全に移行する。

後期—8例があり、方形ないし長方形プランのものである。1辺は3—5mである。

時期不明—34例があり、円形プラン2例、四角形プラン30例、不定・不明2例である。

## 2. 平面形態の変遷(表29参照)

弥生時代には円形プランが大型住居に、四角形プランが小型住居に採用される傾向がうかがえる。また、各形態の検出数をみると、(前)・中期は円形プランが主で、四角形プランは従であるが、後期になると円形プランの絶対数には変化はないが、四角形プラン特に隅丸方形プランが増加することで、円形プランと四角形プランの比率が逆転することが判る。

古墳時代になると、円形プランはやや規模を縮小し前期まで存在する。しかし、中期以降は、完全に四角形プランに移行する。四角形プランは、前期には隅丸方形プランの小型住居が多くみられ、中期以降は1辺が3—5m台、特に5m前後の方形プランが主流をしめる。後期は検出例が少ないが、長方形プランのものがみられることは注意を要することであろう。

## 3. 小 結

松山平野の竪穴式住居址は、弥生時代においては円形プラン・四角形プランが併存し、そこに規模の大小による規則制がみられる。古墳時代になると、前期まで少数ながら円形プランが残り、中期以降は四角形プランに完全に移行する。この住居形態の採用の変遷は、長井氏の論と大筋において同じくするものである。ただし、長井氏の論では円形住居址の発生を

松山平野の竪穴式住居址(1)

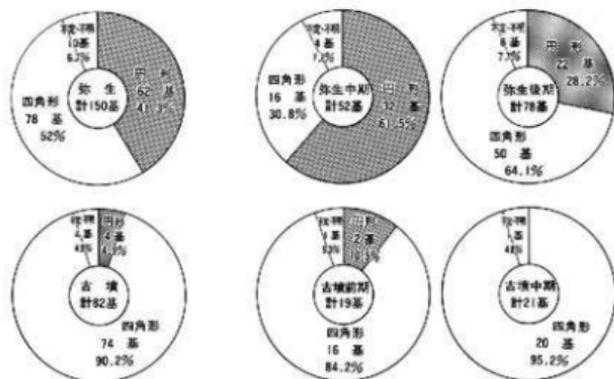


表29 松山平野の竪穴式住居址の平面形態

中期に求め、古墳時代の円形住居址の存在を明言していない。本論は、この点に関し長井氏の論を修正し、円形プランは弥生前期前半に既に出現し、古墳時代前期まで採用されることを新しく提唱するものである。

次に、円形プランの消失期を他地域と比較することにする。西日本では九州以外は弥生時代末まで円形プランが主流となる。北部九州は後期に既に完全に四角形プランに移行している。古墳時代になると、近畿も四角形プランに完全移行する。ただし、九州と近畿の中間地帯の中国地方は、古墳時代前期において、依然円形プランが一定の比率を占めている。そして中期になり四角形プランに完全移行する。松山平野の円形プランの動態は中国地方のものと同調するものである。このことは、円形プランの古墳時代前期における採用は中国地方だけの特色でなく九州と近畿の狭間にある地域の特色として考えられることができる可能性が高い。西日本の弥生時代末～古墳時代前期の社会構造解明の一資料として、重要なものとなるであろう。

本論では、竪穴式住居址の特に円形プランについて論じることになった。だが、松山平野の竪穴式住居址の平面形態変遷の傾向性やその特色（特徴）を一部であるが明らかにすることができたと考える。今後、資料の分析を進め、当平野の竪穴式住居址の様相を明らかにし、さらに弥生～古墳時代の当平野の西日本における歴史的な位置付けや評価を行っていかねばならないと考える。

〔註〕

(1) 平成元年7月～平成二年3月に市内福音寺町で23,000㎡の調査を松山市埋蔵文化財センターが実施した(福音小学校)。この際、弥生時代～古墳・古代・中世の集落関連遺構を検出した。竪穴式住居は弥生時代7

棟、古墳時代Ⅱ4棟を検出している。ただし、現在整理中で、数値に多少の変更があることより、本論では資料に載せなかった。また、現在整理中の他の遺跡のものも同様である。

(2) 久米窪Ⅲ・Ⅴ遺跡に前期木・中期初頭の長方形を呈する竪穴状遺構がある。一部に当例を住居址として認定し論述したものがあるが、当遺構には不明瞭な点が多いことより、今回は資料として使用しなかった。

(3) 愛媛大学考古学研究室が1986年に調査。

(4) 松山市教育委員会が1988～89年に調査。

※ なお、本稿に使用した資料は、未報告資料が大多数を占める。このため、資料収集に際しては、調査担当者には、多大のご協力とご教示をいただいた。記して感謝するしだいである。

### 【参考資料】

- |           |      |  |
|-----------|------|--|
| 石野博信      | 1975 | 『考古学から見た古代日本の住居』『家』社会思想社                       |
| 石野博信      | 1975 | 『弥生・古墳時代住居の屋内区分施設』『権原考古学研究所論集』<br>奈良国立権原考古学研究所 |
| 栗田茂敏      | 1987 | 『筋違C遺跡』『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅰ』松山市教育委員会                 |
| 栗田茂敏      | 1989 | 『大峰台遺跡』『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』松山市教育委員会                 |
| 土居駿子・長井敬秋 | 1979 | 『西野田遺跡』『愛媛県営総合運動公園関係埋蔵文化財調査報告Ⅰ』<br>愛媛県教育委員会    |
| 長井敬秋      | 1982 | 『農耕文化形成と発展』『愛媛県史 原始・古代Ⅰ』愛媛県史編さん<br>委員会編        |
| 西尾幸則      | 1989 | 『文京遺跡』『愛媛県史 資料編 考古』愛媛県史編さん委員会編                 |
| 宮崎泰好      | 1989 | 『祝谷六丁場遺跡』『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』<br>松山市教育委員会           |
| 森光晴・大山正風  | 1976 | 『文京遺跡』松山市教育委員会                                 |
| 森光晴       | 1981 | 『桑原高井遺跡』『松山市文化財調査年報Ⅳ』松山市教育委員会                  |

## V-4 道後城北遺跡群の変遷

—立地とその画期—

梅木 謙一

### 1. はじめに

道後城北遺跡は、弥生時代の松山平野における主要な集落であったことが、これまでの調査・研究により明らかとなってきた。遺跡内からは、平形銅剣22口、青銅鏡4点（船載鏡1面、船載破鏡1点、偽製鏡2点）が出上しているほか、文京遺跡、若草町遺跡他からは、集落関連遺構が多数検出されている。また、祝谷六丁場遺跡では平形銅剣の埋納壙が銅剣1口を伴って検出されている。1988年古代学協会四国支部のシンポジウムは「道後城北遺跡をめぐって」と題し、当遺跡の地理的環境、土器変遷、集落内構成、集落変遷、青銅器の保有と埋納形態が論じられ、道後城北遺跡の平野内・外における評価と集落研究における資料性の高さが確認され、遺跡群の重要性を再認識させた。

このシンポジウムで谷若倫郎氏は道後城北遺跡の集落変遷を発表した。氏は遺跡内を三地区に分け、さらに丘陵地と低地に区分し、各時期における遺物、遺構の分布を解説し、集落変遷に三つの画期があることを提唱した。第1の画期は、前期末である。前期後半まで低地に限り集落経営を行ってきたものが、前期末になり丘陵部へと集落が進出していくのである。第2の画期は、中期後葉にある。中期になり三つの地区が各々に安定して存在して、後葉以降は城北地区が台頭することになる。第3の画期は、後期中葉にある。集落が南・西へと拡大・移動するものである。これ等三つの画期の要因は、自然及び政治的な事象が考えられるとしながらも明言するには至らなかった。ただし、文化的諸産物の変化を取り上げ—例えば、第2の画期では鉄器の出現、凹線紋の採用・発達、第3の画期では凹線紋の消失—社会的な転換があったことを指摘し自説を補強した。この発表は、道後城北遺跡の集落変遷にとどまらず、西日本社会の集落構造の変遷にも通じる事象であり注目されるものである。また、愛媛県の考古学的な集落研究にとっても一つの重要な提案をしたものとして評価されるものである。

本論は、道後城北遺跡の集落構造を解明することを目的とするものであり、その序とし居住地の立地変遷について考察するものである。論述に際しては、谷若氏の方法論を踏襲し、近年の調査事例を補充して私論を展開するものである。

### 2. 地区割り（第68図、第2図参照）

谷若氏の地区割り（グルーピング）に順じ、遺跡内を三地区に区分する。

城北地区 低地には文京遺跡、松山大学橋内遺跡、松山北高遺跡、若草遺跡が、丘陵地には東雲（神社）遺跡がある。

道後地区 低地には道後公園遺跡、道後今市遺跡が、丘陵地には道後姫塚遺跡、冠山遺跡等がある。

祝谷地区 低地には十居窪遺跡、道後緑台遺跡が、丘陵地には祝谷六丁場遺跡、祝谷六丁日遺跡、祝谷大地ヶ田遺跡、祝谷アイリ山がある。

### 3. 遺構、遺物の分布 (第2図、表30)

縄文後・晩期～弥生前期前半 城北地区一文京遺跡4、8、9、11次調査地点、松山大学構内遺跡2次調査地点がある。文京遺跡11次調査地点では縄文後期の炉址二基と、後・晩期の土器が出上している。同8、9次調査地点からは、縄文晩期～弥生前期前半の土器と旧河川を確認した。同4次調査地点では、弥生前期前半の竪穴式住居址が検出されている。道後地区一道後今市遺跡I次調査地点で縄文晩期の土器片と弥生前期のビット、土器が出土している。持田町からは木葉紋をもつ弥生前期前半の壺形土器が1点出土している。祝谷地区一現時点では、御幸山東麓出土の壺形土器(板付II a式か)1点が確認されているだけである。

この時期は、御幸山東麓出土品1点を除くと遺構、遺物の分布は扇状地の低地に限られる。そして、現時点において道後城北の出現は縄文時代後期にはじまることが知られる。また、弥生時代前期前半には恒常的な(定住的)集落が経営されていたことは確実であろう。これ等、道後城北遺跡の出現期の問題は宮本一夫氏他により考古学及び自然地理学的見地から考察され明らかとなっている〔宮本 1990〕。

弥生前期後葉～中期前葉 城北地区一現時点においては確認事例はない。道後地区一低地の道後今市遺跡V次調査地点に前期後葉の一括資料がある。丘陵地には道後姫塚遺跡、冠山遺跡、道後鶯谷遺跡(SK06)等の遺跡が知られている。祝谷地区一低地の十居窪遺跡からは包含層中より中期前葉の遺構、遺物が出土しており、丘陵地の祝谷六丁場遺跡、同本村遺跡からも遺物の出土がある。

この時期は、葉落関連遺構の検出が各地区とも少ないが、遺物は低地、丘陵地とも出土が確認されている。

中期中葉～後期前葉 城北地区 文京遺跡1～7、10、11次調査地点で遺構、遺物が多数検出されている。文京遺跡1～5、6、7、10次調査地点は隣接地であり、この地域からは、竪穴住居址、小竪穴(長方形の土壇)、竪立柱礎物址、周溝状遺構他が検出され、鉄斧、分銅形土製品、石製紡錘車他が出土している。これ等は、出土土器より中期後葉～後期前葉に比定され短期間のものである。この他、低地では松山大学構内遺跡2次調査地点で後期前葉の竪穴式住居址2棟が検出され、松山北高校遺跡からは中期中葉(新)の土壇1基(一括資料)を検出している。祝谷地区一低地には十居窪遺跡で遺物が出土している。丘陵地

## 道後城北遺跡群の変遷

●表30 道後城北遺跡群の概要一覧(P10, 第3図参照)

番号 P10 第30	道 跡 名	立 地 (標高:m)	種 類	縄文・統期	弥 生							古 墳	
					前期		中 期		後 期				
					前	後	前	中	後	前	中後		末
22	文京1次	扇状地 (28)	包	○					○				
23	文京2次	" (27.9)	包					○					
24	文京3次	" (29.0)	包					○					
25	文京4次	" (32.0)	包					○					
26	文京5次	" (29.0)	包					○					
27	文京6次	" (29.0)	包					○					○
28	文京7次	" (29.0)	包					○					○
29	文京8次	" (50.5)	包					○					○
30	文京9次	" (27.5)	包					○					○
31	文京10次	" (28.0)	包					○					○
32	文京11次	" (28.5)	包					○					○
M	受蔵大学上学部	" (28.0)	包					○					○
33	日赤病院	" (29.5)	包					○					○
12	松山大学構内1次	" (25.0)	包	?				○					○
I	松山大学構内2次	" (25.5)	包	○				○					○
4	南海放	" (26.0)	包	○				○					○
41	松山北高1次	" (24前後)	包					○					○
41	松山北高2次	" (24前後)	包					○					○
41	松山北高3次	" (24前後)	包					○					○
34	平和通	"	包					○					○
2	芥ヶ原	沖積地	包					○					○
38	力軍	丘陵地	包					○					○
42	キツバ	丘陵	包					○					○
A	一万銅刺出土	扇状地	包					○					○
B	又一万銅刺出土	"	包					○					○
C	海一万銅刺出土	"	包					○					○
14	道後今市I次	扇状地	包					○					○
15	道後今市II次	"	包					○					○
16	道後今市III次	"	包					○					○
17	道後今市IV次	(33.8~	包					○					○
18	道後今市V次	34.5)	包					○					○
19	道後今市VI次	(31.0)	包					○					○
20	道後今市VII次	(31.0)	包					○					○
J	岩崎町	扇状地 (37)	包					○					○
K	神山	" (35)	包					○					○
L	道後公園	" (40)	包					○					○
36	道後公園	丘陵 (49.0)	包					○					○
P	伊佐爾波神社	" (75)	包					○					○
37	道後冠鷲山	" (50.0)	包					○					○
7	道後鷲山	谷 面 (42.0)	包					○					○
13	居	扇状地 (32)	包					○					○
8	祝谷大地ヶ	" (42.0)	包					○					○
5,9	祝谷六丁	丘 陵 (60.0)	包					○					○
40	祝谷六丁	" (69.0)	包					○					○
11	長谷アイリ	丘 陵 (78.5)	包					○					○
O	祝谷山池	" (65)	包					○					○
D	祝谷山田	丘 陵 (80)	散					○					○
HE	祝谷丸山	" (55)	"					○					○
F	祝谷本村	" (60)	"					○					○
N	御幸山	丘 陵 (7)	"					○					○
G	道後北代	扇状地 (34)	"					○					○
H	道後緑	" (35)	"					○					○
I	道上	丘 陵 (55)	"					○					○

\*1986古代学協会全国支部シンポジウム資料一部改定掲載

では、祝谷六丁場遺跡で竪穴式住居址6棟と多数の上器が包含層中より検出されている。中葉の資料は多いが、後葉～後期前葉の資料が少ない。道後地区～低地は前時期の分布域と変化がない。丘陵地では中期後葉の資料が伊佐爾波神社遺跡、道後鷺谷遺跡（人面彩土製品）で確認されている。

この時期は、各地区とも前時期の分布域と同様な様相を示すが、城北地区において文京遺跡の充実が目される。文京遺跡では各種の構造物はその配置において、ある一定の規則制を示しており集落内構成の復元を可能とする資料である。

後期中葉～後期末 城北地区一若草遺跡、カキツバタ遺跡で住居址、帯棺が検出されている。道後地区・祝谷地区一遺構検出数は少ないが、低地・丘陵地ともに遺物確認事例は多い。

この時期は、城北地区の西への集落拡大、移動と墓の確認が目される。道後、祝谷地区は、その分布に集中的傾向がうかがえる。

古墳時代前～中期 城北地区 松山大学構内遺跡、松山北高校で集落関連遺構が検出された。道後・祝谷地区～丘陵地での分布が稀薄で、道後今市遺跡周辺の低地に集落関連遺構が集中して検出されている。

この時期は、集落が丘陵地から低地に移動し、さらに特定地域に分化・集中(集約)される。城北地区では文京遺跡西端～松山大学構内遺跡、松山北高校遺跡の地域と若草の地域に、道後地区では、道後今市遺跡周辺の地域に集落が形成される。祝谷地区の様相については不明である。

#### 4. 立地の変遷 (第68図)

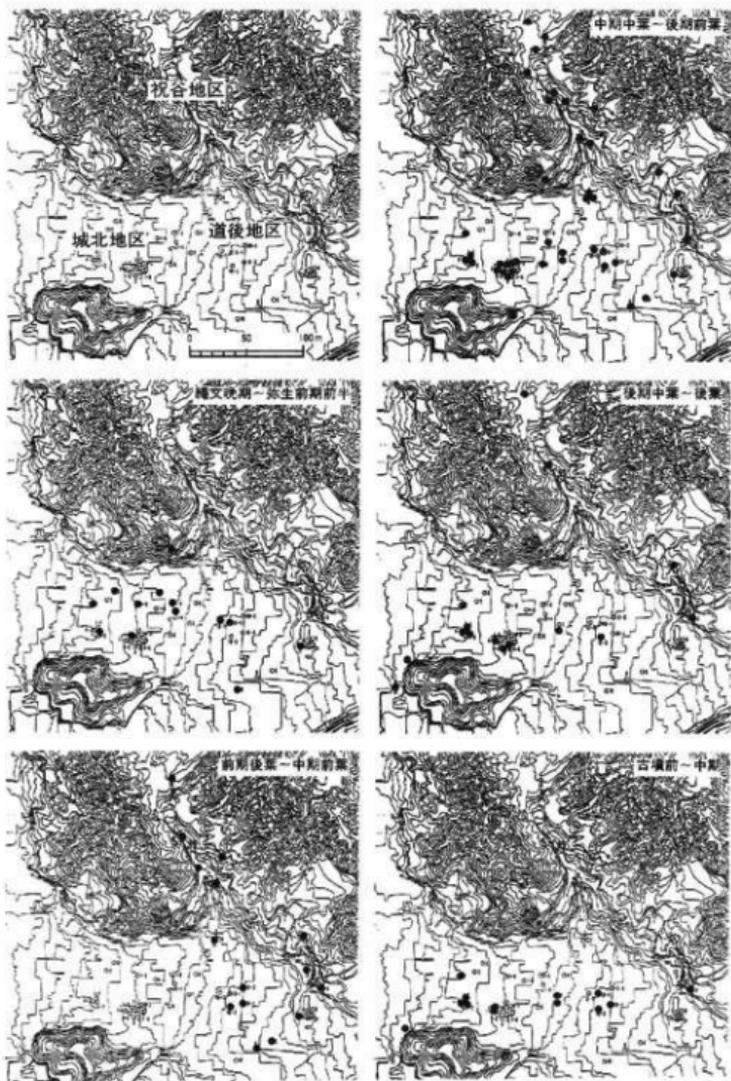
縄文時代後期～晩期に城北地区低地に出現した集落は、弥生前期前半まで低地に立地しつづける。前期末になり集落の丘陵地への進出が突如として開始される。しかし、集落全体が丘陵地に移動せず、低地と丘陵地に并存する。中期中葉～後期前葉は各地区で集落内が充実し特に城北地区の文京遺跡南部の充実が著しい。後期中～後葉は各地区で集落の集中・集約化の傾向が強くなる。城北地区は西への集落の拡大・移動が生じる。古墳時代になると、特定地域での集落経営が行われる。

低地の集落経営は継続的に行われ、丘陵地は前期後半(末)に進出し、後期後半までつづき、古墳時代になると減少化する傾向にある。

#### 5. 小結

本論では道後城北遺跡群の遺構と遺物の分布より集落立地の推移をおった。この結果、丘陵地での集落経営と各地区内の充実度と拡大、移動に着目すると立地の両期を求めることができた。第1両期は、集落が丘陵地へ進出する前期後半(末)、第2両期は各地区が充実する中期中葉、第3両期は集落が拡大・移動し、かつ特定地域に集中(集約)化する後期中葉、

道後城北道跡群の変遷



第68図 道後城北遺跡の遺構・遺物分布図

第4両期は特定地域に集中・集約化される古墳時代前期(中葉)である。この四画期は谷若氏が提示したものとほぼ同様であるが、第2画期の開始を中期中葉の新段階に求める点に違いがある。これは、谷若氏の発表以降新たに確認した事例が加えられたことによるものである。加えて、集落立地と同様鉄器、分銅形土製品の出土も同時期に活発化する。ただし、谷若氏が画期の要因に社会的変化をあげ集落画期の論理を補強した点については何ら否定するものではない。よって本論は、谷若氏の論を一部修正したにすぎないものである。

本論では、集落立地、変遷とさらにその画期を求めたが充分に追究されたものとはいえず概観するにとどまった。道後城北遺跡の集落立地は、特に弥生時代後期において平形銅剣埋納の選地と深く係るものであり重要な研究といえよう。今後は、本論を新資料で補強しつつ各地区内における各々の集落(単位的集落)の動態を明らかとし、その変遷を考えていかなければならないであろう。

## 【文 献】

- 宮本 夫 1990 「文京遺跡の地形復元」『文京遺跡8・9・11次調査』  
愛媛大学法文学部考古学研究室、愛媛大学埋蔵文化財研究室

## 【参考資料】

- |                 |      |                           |
|-----------------|------|---------------------------|
| 古代学協会 四国支部      | 1988 | 『道後城北遺跡をめぐって』シンポジウム資料     |
| 松山市教育委員会        | 1976 | 『文京遺跡』                    |
| 松山市教育委員会        | 1987 | 『松山市埋蔵文化財年報Ⅰ』             |
| 松山市教育委員会        | 1989 | 『松山市埋蔵文化財年報Ⅱ』             |
| 松山市             | 1980 | 『松山市資料集一考古編Ⅰ』             |
| 松山市             | 1987 | 『松山市資料集一考古編Ⅱ』             |
| 愛媛県教育委員会        | 1979 | 『道後郷塚遺跡(資料編)』             |
| 愛媛県教育委員会        | 1981 | 『愛媛県立松山北高等学校遺跡埋蔵文化財調査報告』  |
| 愛媛県埋蔵文化財調査センター編 | 1985 | 『道後今市遺跡』                  |
| 愛媛県埋蔵文化財調査センター  | 1990 | 『一般県道「菅沢—松山線」埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』 |
| 愛媛県埋蔵文化財調査センター  | 1990 | 『一般県道「菅沢—松山線」埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』 |

## VI 松山大学構内遺跡2次調査の成果と課題

梅木 謙一

松山大学構内遺跡2次調査は、道後城北遺跡群の弥生時代～古墳時代の集落構造解明を主目的として実施した。調査・研究の結果、(1)道後城北遺跡群の集落様相と評価、(2)松山平野の弥生後期土器の様相、(3)松山平野の弥生～古墳時代の集落様相を追究するものとなった。

(1) 道後城北遺跡群は沖積扇状地上を主体に集落が形成されていた。その萌芽は、縄文時代後期に遡る。集落の定着は、縄文時代晩期～弥生時代前期であろう。以後、弥生時代の中期(中期)において丘陵地上を居住地とする集団が多くみられるものの、弥生時代～古墳時代には扇状地(低地)を主体に居住地と為し、集落範囲を西及び南へ拡大しつつ、居住地が固定化するといった通跡及び(単位的)集落の変様の概要が明らかとなった。特に、本調査により、城北地区の古墳時代中期以降の居住地と住居形態が明らかとなったことは、注目されることである。ただし、文京遺跡より西の地域に集落が存在することは、予てより想定されていたことであり(註1)、本調査はこの想定を実証するものとなった。

次に、道後城北遺跡群は弥生時代の松山平野において主要な地域であったことを再確認した。さらに、西日本における松山平野の評価を行うことで、道後城北遺跡群は当平野内に限らず、瀬戸内地方において評価される集落であることが明らかとなった(付論 下條信行)。

今後は、道後城北遺跡群の各地区(城北・道後・祝谷)の詳細な変遷を明らかとし、同遺跡群の集落論を充実しなければならない。また、本論で採用した集落分析の方法を平野内の主要な遺跡群——例えば久米地域・砥部地域等——に用い各地域の集落変遷をも追究しなければならないだろう。

(2) 本調査のSB7出土の一括遺物は、松山平野の弥生後期土器編年において標準資料となるものである。今回、近年の調査資料を加え、当平野の弥生後期土器の編年試案を提唱し得たことは当平野の弥生土器研究に大きく寄与するものであろう。編年試案は、器種及び各器種内における構成の変化を時期区分の基準とし、後期をⅢ区分(Ⅰ～Ⅲ式)した。さらにⅡ式については細分を行った。本調査のSB7出土品は後期Ⅱ-1式(後期中葉)に属し、中・大形甕の平底化と大形壺の確立化した複合口縁の採用に大きな特徴をもつ。また、支脚形土器とエンタシス柱を有する高杯形土器の出現、叩き技法の看取はこれまで後期後葉(Ⅱ-2式)に比定されていたが、SB7出土品に既に現われていることより、これ等の器種の出現は、後期中葉に遡ることを確認した。

編年試案は、後期の土器様相を概観し、変化の過程を明らかにしたが、後期前葉と末葉の動向に不明な点が間々あり、課題を残すものとなった。また、今回は平野内の搬入品の分析や隣接地域との対比・併行関係については未着手であった。今後は、これ等の課題を明らかにし、編年の充実と土器様相からみた西日本における松山平野の位置づけと評価を追究しなければならぬだろう。

(3) 本調査検出の竪穴式住居址は松山平野の竪穴式住居址の形態や内部施設研究の基礎資料となるものである。特に、弥生時代後期～古墳時代中期の住居址の壁体内側を巡る小ピット列は注目されるものである。類似例は、平野内では福音寺遺跡・梅味高木遺跡に同様なものがあり、平野外では類似例はあるが、同様なものはない。今回の調査では小ピット列を検出したものの、その構造や構築法についての資料は不得であり、その性格を判断するに至らなかった。この小ピット列については施設の特定や分布域について今後、大いに追求していかなければならない遺構であるといえよう。

次に、本調査のSB7よりガラス玉、SB1より有孔円板・ミニチュア土器・(土製勾玉)が出土した。これ等は、集落のウチにおける祭祀行為に関連する遺物であろう。今回、特に、松山平野の古墳時代における集落祭祀遺物の基礎資料収集と考察を行った(V-2相田則美)。これまで、本県における古墳時代の研究は墳墓に関するものが大多数であり、集落に関連する研究は稀薄であった。このような状況下において古墳時代集落の基礎的研究は重要な意味をもつ。貴論は、基礎資料を収集しかつその成果と課題を提示したものであり、本県の古墳時代の祭祀研究に大いに寄与し、さらに、弥生～古墳時代の集落研究の好刺激剤となるものであり評価されるものである。今後は、集落の立地変遷はもとより、集落関連の遺物・遺構の資料を充実させ、多様な視点からの集落論を展開しなければならぬだろう。

以上、松山大学構内遺跡第2次調査より弥生時代～古墳時代の道後城北遺跡群の動向を考察した。そして、さらに、松山平野の各種遺構・遺物の基礎資料の収集と考察を行い、松山平野の弥生時代～古墳時代の社会・文化の様相を追求した。

本書では、一貫して論考の範囲を松山平野に限った。これは、当地域の考古学研究にとつて、現時点においては他地域との関係を求めるより、まず当地域内における基礎資料の整理と分析が必要であると考えたからである。今後は、この基礎的作業を各種の遺構・遺物に対しても行い、その上で他地域の関連を求め、各時代の西日本における松山平野の歴史的役割について論考していかなければならぬだろう。

〔註〕(1) 若谷倫郎氏が1988年古代学協会西支那シンポジウム「松山道後城北の弥生遺跡をめぐって」にて発表。

# 〈付論〉 松山平野と道後城北の弥生文化

—西瀬戸内の対外交流—

愛媛大学法文学部教授 下條 信行

## I. はじめに

標題の松山平野とは、東西に長い愛媛県（伊豫）を地形的・文化的まとまりから東より、東予、中予、南予三地域に区分した時、中予の主体を占める平野である。この平野は愛媛県内のみならず、山口、広島、愛媛県のいわゆる西瀬戸内の中にあっても最も広大である。

平野には、人口40数万人の県都松山市を始め、伊予市、温泉郡重信町、川内町、伊予郡松前町、砥部町の二市四町の行政区があり、松山市が行政的、経済的に首座を占めている。

約15kmの南北に長い海岸線は西に開け、北および南からせりだした山塊が東に進むに従って、平野を漸次狭小にしている。平野の中央には、東から西に重信川が流れ、現在ではそれに東北から流下して石手川が流れ、河口付近で合流して、平野の幹流となっている。

各行政区は西の海岸線沿いに、北から南へ松山市、松前町、伊予市があり、重信川中流南岸に砥部町、その上流が重信町で、最奥には川内町がある。海岸から平野奥までの長さは20 kmである。

この広大な平野には、弥生時代の遺跡群が地形的完結性と遺跡の密集度を単位として、6つに分かれて存在する。それを以下に記す。

### I、和気遺跡群

平野の西北にあって宍灘に面し、南北6～7 km、東西2 km弱の小海岸平野の中に展開する。船ヶ谷、大洲遺跡その他がある（松山市）。

### II、三津遺跡群

海岸線の北半に位置し、西に海が開ける。背後の丘陵上や自然堤防上に遺跡が分布する。津田鳥越、宮前川、鶴が峠、烏山遺跡その他がある（松山市）。

### III、道後城北遺跡群

標題の遺跡群で、本報告書の遺跡はこれに属す。現石手川中流の北岸に位置する。旧石手川が造った石手川扇状地上に広がり、文京、視谷、一万遺跡など著名な遺跡が多い（松山市）。

### IV、久米遺跡群

平野の北半に属し、石手川の左岸（東側）の丘陵麓沿いに長く展開する。釜の口、福音寺、筋達、久米窪田、久米高畑などの弥生遺跡が密集している（松山市）。

### V、砥部遺跡群

重信川中流左岸の砥部町にあり、重信川の支流の砥部川、御坂川が形成した河岸段丘上に展開する。西野、高尾田、水満田、釈迦面山などの遺跡がある（砥部町）。

## VI、伊予遺跡群

重信川南岸の伊予市、松前町、砥部町西部にかけて分布する。南から北への扇状地上にあることが多い。遺跡の詳細が不明なものが多い。

Ⅶの候補として、重信川上流の重信町、川内町の遺跡が考えられる。数箇所遺跡があるがまだ散発的で詳細の不明なものも多く、その評価は今後の調査にかかっている。

さて、弥生時代の松山平野の評価を行なうには、一つにはこの平野がもつ、地政的位置からして、どのように外的文物を受容・掌握しえたかという視点が必要であり、二つには、この平野の内部が、どれほど社会的、政治的に成熟していたかという観点が必要である。本稿では、主として、第一の視点からこの平野の動向を伺い見してみたいと思う。次いで松山大学構内遺跡が属する道後城北遺跡群がそうした松山平野の中で、どのような位置を占めていたかについて記することにする。

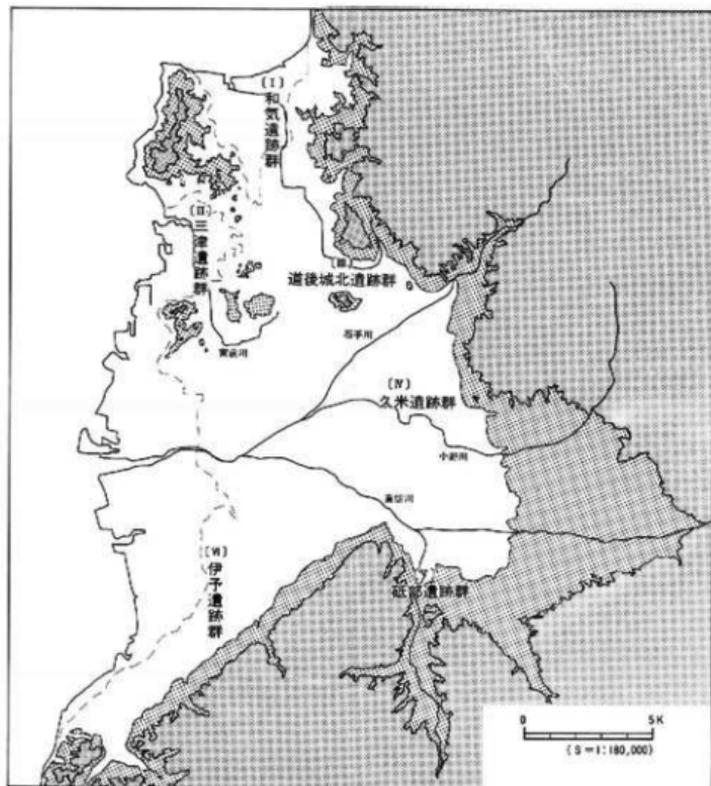
## 2. 松山平野

西は周防灘、別府湾、東は大阪湾を遡るとする、東西約390kmの瀬戸内海は、時には西から東に、時には東から西に流れる文化伝導の大動脈であった。この動脈の南岸を限っているのが北四国で、愛媛県松山平野はその西端に位置している。平野から西に直進すれば、東九州の海岸に到り、四国において最も九州に近い位置にある。その北岸は山口県東部の周防・広島県西部の安芸が開け、弥生時代、松山平野は、この両地域と密な関係をもって展開している。

松山平野の弥生前期に於て、最も顕著に出現する外来系文物は有柄式磨製石剣である。この石剣は、朝鮮半島南部に発達し、稲作農耕の北部九州への伝来と共に、農耕文化複合の一環として同地に伝わり、やがて西瀬戸内のこの有力平野にも、稲作文化の拡大と共に伝わってきた。国内におけるこの石剣の集中出土地は、対馬～北部九州（玄界灘沿岸）～遠賀川下流（福岡県東部）にあり、次いで集中するのが松山平野である。朝鮮海峡～対馬海峡を南下して、玄界灘沿岸に到達した石剣はそこから右転して玄界灘を東に走り、関門海峡を抜けて松山平野にもたらされた可能性が高い。この海路コースは、前期の弥生文化の伝播の道であり、玄界灘～西瀬戸内を繋ぐ特徴的な管状錘（有溝管状錘）も分布している。

こうしたコースを辿って、西瀬戸内にもたらされた有柄式磨製石剣の分布は、周防灘沿岸の京都平野に1、別府湾沿いの大分県千歳村に1〔清水 1978〕、伝山口県徳山1、松山平野5本〔愛媛県史編纂委員会 1986〕（明らかに国産のものは除く）で、圧倒的に松山平野に集中している。瀬戸内での初期大陸系文物の伝播は、四国西部の松山平野を一大拠点としていたことが判る。その後、この石剣は、四国北岸を東漸し、香川県高松市東方の庵治町沖に到る（現香川県大川郡白鳥神社蔵）。松山以東での出土はこの1点のみで、松山平野が瀬戸内海における外来系文物受容の基地であったことを示している。

朝鮮半島や北部九州でこの石剣と共伴出土し、社会的ランクが有柄式磨製石剣より下位に



第69図 松山平野の主要遺跡群

位置する柳葉形磨製石鏃もこの平野に出土する。だがこの磨製石鏃は、松山平野のみならず、山口、愛媛、香川、高知と広域に分布し、有柄式磨製石剣のように限定された地域に集中出土することはない、その分布の在り方に特異性はない。

松山平野出土の有柄式磨製石剣は、いずれも表採品で、その出土時期や出土状態を明確にするものはない。けれども、これらにはいくつかの形式があって、その変遷は、時期の明確な北部九州のそれと対応しており、このことよりおよその年代観を個々の有柄式磨製石剣に与えることは可能である。

銚、鏑、柄部の特徴から、松山平野の有柄式石剣は3式に分類することができる。最古式

のⅠ式は伊予郡松前町宗剣田例、Ⅱ式は伊予市宮下寺山例、Ⅲ式は伊予市宮下東谷・松山市石手寺蔵例で、伊予郡砥部町田ノ浦はⅡ式～Ⅲ式である〔愛媛県—1986〕。Ⅰ式は縄文晩期後半～末にさかのぼる可能性を持ち、Ⅱ式は晩期末～板付Ⅱ式で、Ⅲ式は板付Ⅱ式にほぼ相当する。このように見ると松山平野の有柄式磨製石剣は、縄文晩期から板付Ⅱ式の間、継ぎ的に出現しており、そのことはまた、この間北部九州と恒常的な連繫関係を持っていたことを示している。そしてまたこれらの石剣は特徴的な残存状態と出土立地を示している。上記5例のうち田ノ浦例が剣身上半を欠失しているが、他の4例は身の中央部を部分的に欠くものがあるものの、ほぼ完器として残っているなど、残存状態は族群に良好である。北部九州の玄界灘沿岸地域の包含層、貯蔵穴からの出土例や採集例は、完器にほど遠く、柄部を中心とした部分か、その片端であることが多い。それに対し、対馬石棺墓や北部九州の墳墓（福岡県前原町宇田川塚、佐賀県鳥栖市永古）、遠賀川下流域での石剣と柳葉形磨製石鏃を一括出土（福岡県中間市垣生）し、墳墓と想定される例は完器に近い残存状態を示し、松山平野出土例もこれに近い。

しかし、その出土立地を見ると単純に墳墓の副葬品と断定し難い面を持っている。宝剣田例は、自然堤防上にあつて墳墓の可能性を持つが、寺山、田ノ浦、東谷例は、丘陵の中腹にあつて同期の墳墓地を含めた農耕集落立地との隔絶感が強く、祭器を埋納するような特殊な出土地であることを意識させる。この点、今後の詳細な詰めを必要とするが、松山平野の有柄式磨製石剣は副葬品ないし埋納品として取り扱われた可能性が高いことを指摘しておきたい。

前期末～中期中葉の間には、また、新たな外的文物が、瀬戸内につたわってくる。その1つは、青銅器や鉄器などの金属器の伝来で、その2は、福岡県東部の遠賀川以東から周防灘沿岸で隆盛した各種の石器の伝達である。

前者のうち青銅器は南部朝鮮半島より伝わった各種青銅器が、北部九州の勢力の手によって選別され、その一部が瀬戸内に伝わるようになる。具体的に言うと、南部朝鮮半島より、細形銅矛、銅戈、銅劍（時には銅銃も）がまず北部九州にもたらされ、ここで①銅矛、②銅戈、③銅劍の価値序列がつき、価値が最も高い銅矛は北部九州の玄界灘沿岸で、先取保有され（銅戈、銅劍も保有される）、次の価値を持つ銅戈は、銅劍と共に北部九州（福岡県西・南部、佐賀県、熊本県北部）から東部九州（別府湾沿岸）の九州島内に限って配される。そして、序列の低い銅劍が瀬戸内にも配されるのである。これらの青銅器の中にはすでに国産品が一部加わっている可能性がある。

九州島以東の細形銅劍は、山陰地方（松江市竹矢1本）、南海地方（高知県5本）にも配されているが、瀬戸内に最も多く出土し、有柄式石剣と同じく瀬戸内が東西文化流通の幹線になっている。瀬戸内の細形銅劍（一部、古式中細銅劍）は、山口県下関市梶栗浜2本、愛媛県今治市新谷1本（東子）、愛媛県宇摩郡十居町西番掛2本以上（東子）、香川県観音寺市藤の

谷3本、岡山市豊浦1本以上の出土で、現在のところ松山平野には出土していない。しかしながら、後述のように瀬戸内の細形銅剣は北部九州と異なって墳墓の副葬品ではなく埋納品として納められるため、その検出は偶然性が高いこと、これらに雷同したと考えられる鉄器が瀬戸内の他地域よりも早く松山平野に出土していること、松山平野が一貫して九州と交通関係を保持していることから考えて、将来この平野に細形銅剣が出土する可能性は極めて高いものと見られる。

瀬戸内の細形銅剣は、愛媛県西番掛出土例に見られるように、武器形青銅器をいち早く祭器として扱い、それを土中に埋納している。西番掛例では、関の両端に各一の孔を穿って祭器化し、残存する2本共棟より片側のみを表裏とも錆化が進行した残存状態を見せるのは、刃を立てて埋納したことを示している。こうした埋納法は、後出する銅鐔、平形銅剣、銅矛などの青銅祭器の埋納法の先駆をなすものである。武器形品の埋納の可能性がすでに有柄式磨製石剣にあることを先に示唆したが、そのことと無関係とは必ずしも言い切れまい。

鉄器は、長さ6.7cm、幅2.5cmの小形の片刃板状鉄斧が中期前～中葉段階に松山市祝谷六丁場遺跡より一点出土している。わが国の弥生時代の鉄器化は、朝鮮半島より製品または鉄素材を入手することによって可能となったが、それが顕著となり始めるのは、弥生前期末～中期中葉で、鉄斧、ことに加工用鉄斧を主体とするものであった。この段階のその中心は、北部九州にあって、九州の周防灘沿岸にも光被し始めているが、瀬戸内・畿内はまだ微々たる出土状況である。その段階に、いち早く、板状鉄斧が松山平野に伝わっている。細形銅剣も鉄器も朝鮮半島に出自を持つものであり、前者は政治上の、後者は生産上の、共に社会の表裏をなす新兵器として、瀬戸内にも伝わり始め、それらの瀬戸内における先取入手権は松山平野にあったものと見られ、この点からも細形銅剣の出土の可能性がある。瀬戸内ではこの段階、大陸系文物の入手が、その入手者の社会的、政治的ステータスを大きく左右していたのである。

しかし一方、汎西日本的な前期土器の「齊一性」を脱し、この段階に一定の領域性を持った地域文化圏が形成される。松山平野が、基層文化の次元で、帯関係を形成するのは、山口県東部の周防地方で、一海を越えて両者は結びついていく。それを特徴的に表現したのか、垂下口縁の壺形土器であるが、これに留まらず、楕円形状の石包丁、方形タイプの分銅形土製品(谷若 1989)など生産具や土着祭祀の次元でも周防と中予は地域文化圏を形成していく。

こうした中で、北部九州とだけではなく、遠賀川以东から周防灘沿岸の東北部九州(北九州市、福岡県京都平野、山口県長門部)とも直接か、周防を通して間接に連繋を持つてくる。それを示すのが、次に記す石弋、石鎌、大形石庖丁である

弥生前期末・中初以後、福岡県はその東部の遠賀川を分水嶺として、東西に独自の文化圏が形成される。甕形土器においては、西の北部九州圏は、貼付口縁(甕の甲式、城ノ越式、須玖式)を主にするのに対し、遠賀川より東の東北部九州(山口県の長門を含む)は「く」

の字屈折口縁を主体としている。石器のみならず、石器にも相違が見られ、東北部九州には、より多くの石戈、石鎌が出土し、大形石庖丁も独自の形態となる〔下條 1977〕。

松山平野はこの東北部九州系の三種の石器をセットとして受容し、この石器文化の東限地域となる。

石戈は、松山市祝谷六丁場と同平井町古市〔十亀 1986〕に出土例がある(第70図)。前者は下垂口縁壺と伴い、筆者分類のB式に相当し〔下條 1982〕、北部九州の年代関係とも符合する。古市出土例も同型式である。B式は周防灘沿岸、別府湾沿岸にも出土するが、下垂口縁上器分布の主体地である周防の防府市井上山〔乗安 1979〕にも広がっており、両地域か、どちらかとの交流が想定される。

石鎌は、松山市竹ノ下、畑寺竹ヶ谷、久米窪田の三遺跡から3点出土している(第70図)。形質的特徴から見て、前末・中初以降のものと考えられるが、拠点の東北部九州より以東の地域では多量の出土地といえ、本平野の出土量は定着的な出土状況であったと言えよう。瀬戸内ではこれより東にほとんど出土例はなく、わずかに徳島市南庄遺跡に1点を見るだけである。周防部においても、中期後半に岡山遺跡で2点見るもの〔前田ほか 1987〕、該期の出土例はなく、現在の出土状況からすれば、東北部九州との関連が強い。

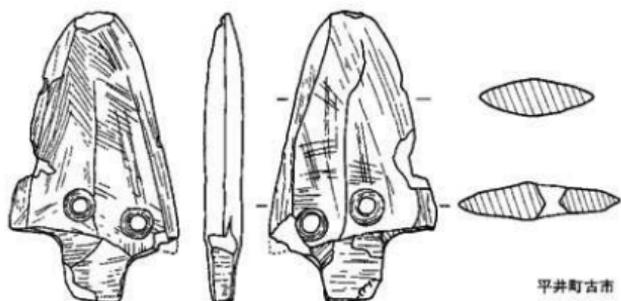
大形石庖丁は祝谷六丁場、祝谷六丁目遺跡から各一点出土している(第70図)。大形石庖丁は形態分化が著しく、それが地域差と関連するので、その概略を以下に記しておく。

A型—外湾刃半月形石包丁を大形にしたもので、刃部両側の上端に挟りを入れるか挟りのないものは、孔を穿つ。大形石包丁の初現形でおそくとも板付I式には出現し、北部九州(遠賀川以西)に分布する。

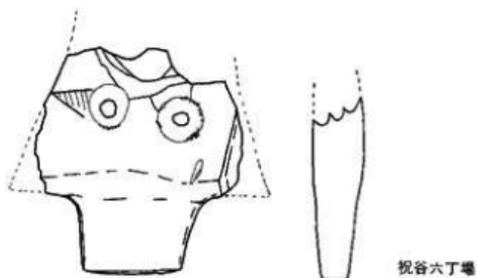
B・C型—杏仁形の体部の上端に明確な紐掛用の鈕(突起)を造りだし、遠賀川以東の東北部九州に分布する。これには、いくつかの変化形があり、B型の幅広の鈕の基部に明確な湾入した挟りを入れるもの、基部に挟りをもつもの、鈕が狭くなるものと、C型の幅広の鈕をもつが、鈕の形態が幅広の凸字ないし台形状となって、基部に紐掛のための挟りを持たなくなり、かわりに鈕下部に二孔を穿つものがある。B型は主に遠賀川流域に多く、C型は北九州市中央の紫川から周防灘沿岸に分布する。

D型—鈕は消失し、台形状になる。両側上部に弱い挟りを入れ(無挟りのものもある)、体上部に二孔を穿つ。刃部は緩い外湾、直刃、内湾と多用である。周防灘沿岸に展開し、C型の退化形と相まって、日本海沿いにも伝わっている。以上のB～D型は遠賀川以東に前期後半から末期に伝わり、早い段階に形態分化を興しているようである。

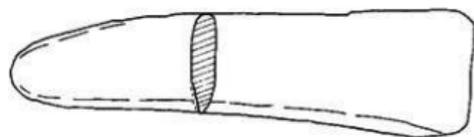
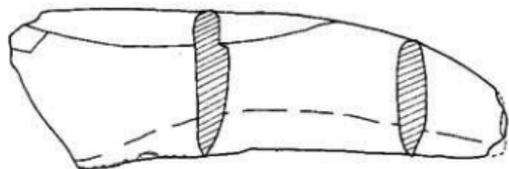
祝谷六丁目出土例(註1)は、幅広の台形鈕で、鈕下部に二孔(一孔は未貫通)が穿たれておりC型に属する。祝谷六丁場出土例は、上部の側を残すだけで、全形の復元は微妙である。これに有鈕形の鈕とみなすなら、幅広の背部が湾曲した例のないもので、その基部の挟りは浅くて小さく、有鈕形の退化したものとなり、あるべき位置に孔がない。D型と見なす



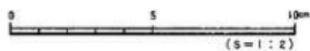
平井町古市



祝谷六丁堀



久米窪田



第70図 松山平野の石戈・石鏃

なら、台形上辺から、側辺への転換部に弱い抉りを入れたもので、周防灘沿岸の福岡県行橋下稗田遺跡に出土例がある〔永嶺ほか 1985〕。この場合、孔はさらに下部にあってもよく、D型の方に該当性が高い。こうみるならば、松山平野の大形石庖丁はC型とD型であり、この両者が存在するのは周防灘である。

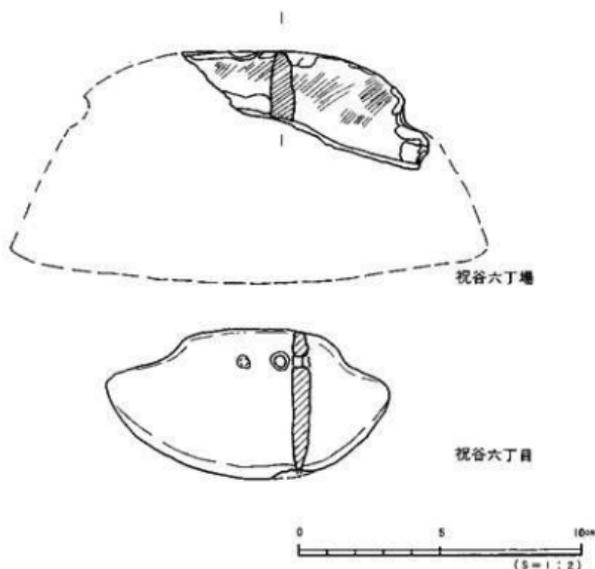
以上のように、石文、石縁、大形石庖丁の三種の各形式が現在同時に存在するのは、周防灘沿岸であり、とりあえずこの地方との交通関係を認めておきたい。以上のように前期末—中期中葉までの松山平野の対外関係は、1つには金属器をもって間接的であれ北部九州と関係をもち、2つには石器文化をもって東北部九州と交流を結び、3つには、土器や土着祭祀など基層文化のレベルで周防と一帯化するなど重要な構造で対外交流を形成している。

中期後半は、また時代の転換期である。瀬戸内の東西に凹線文土器が広がり、松山平野はその西端となって、在地の変形土器と凹線文変形土器が併存する。周防には凹線文土器は入らず、下重口縁土器が存続し、土器だけ見れば一見周防と中予は断絶した関係のように見える。しかし、分銅形土製品、石庖丁の形態などは前代以来の基層文化の共通性も存続し、両者の関係はなお継続している。

凹線文土器の広がりは、瀬戸内の東西にわたる文化交通路を示し、それによれば、西瀬戸内では、四国北岸（愛媛県）がそのルートに乗っている。このルートを利用するかのように北部九州を発進した金属器は、松山平野に出現してくる。

その一つは、鉄器の増大である。中期後半の時期は、伐採石斧、加工石斧ともまだ有力に存在するが、汎西日本的に鉄斧、刀子、鉄槌などが普及する時期である。松山平野においても、片刃板状鉄斧、鉄鎚、刀子などの加工具、鉄製鍬先の農耕具、鉄製の武器など実用具を中心とする各種の鉄器が出現するようになり、目下のところ、この時期これほどの種類の鉄器を出土する平野は、瀬戸内においても類は少ない。

また、北部九州、福岡平野産の中細銅矛も松山平野にある(川内町宝泉)。瀬戸内には、他に広島県尾道市大峰山、香川県善通寺市瓦谷、岡山県治町山に中細銅矛が広がり、北部九州産の青銅器が瀬戸内に深く進出する時期であるが、その進出の橋頭堡の役割を果たすように松山平野にも出現する。先記の鉄器のうち、鉄製鍬先(鉄刀農具)などは、北部九州の発明と製作にかかるものであり、これを始めとする各種鉄器は(少なくとも鉄素材は)中細銅矛などの武器形青銅器と表裏をなして伝えられたものである。この頃北部九州においては小平野・小盆地を単位に「国」と「王」が出現し、それらの間の階層的系列編成が進行していた。それを主導したのは北部九州中核国の一つである奴国(福岡平野)であるが、奴国は、この時期、北部九州の内陸路によって瀬戸内の周防灘沿岸に通じる道を拓いた。その時の手段が、中細銅矛、小形前漢鎧と鉄器の付与である〔下條 1991〕。



第71図 松山平野の大形石塚丁

松山市若草町遺跡の包含層から、小形前漢鏡である「日光鏡」が一面出土している。鏡には朱が付着しており、現在一部を欠いているが、本来は完形の状態で墳墓に副葬されていたと考えられる。包含層は凹線文土器、弥生終末～古墳初頭、古墳後期の土器が含まれ、共存関係を明示しないが、北部九州の進出の情況と松山平野と北部九州との歴史的交流関係を考えると、凹線文期にこの完形の小形前漢鏡が伝わった可能性は十分に有り得ることである。

この時期、東予、西讃など燧灘を中心とした地域に在地の武器形青銅祭器である中細形銅剣が出現してくるが、この松山平野には出土していない。在地青銅器文化と北部九州青銅器文化のはざまに松山平野は置かれていたのであろうか。

この他、詳細な時期比定に問題を残すが、九州系の文物にイモ貝の縦形貝輪が二個みられる(祝谷六丁目遺跡・第72図)。壺棺からの出土で、棺内から歯牙と貝輪が出土したという(松山市史料集編集委員会 1980)。性別、年齢も判らないが、着装ないし副葬品として棺内にあったものと考えられる。この貝輪は、イモ貝の殻軸に近い部分を利用し、前溝部(図の下辺)に殻軸を残しているために上辺(殻頂部)は水平となり、肩が張って、横断面は立ち上がりの強い「八」の字状になっている。内孔4.5×2.9cmとこの種のイモ貝縦形貝輪では最も小さく、その割には側辺での高さ1.4～1.52cmと幅広のものとなっている。木村はイモ貝

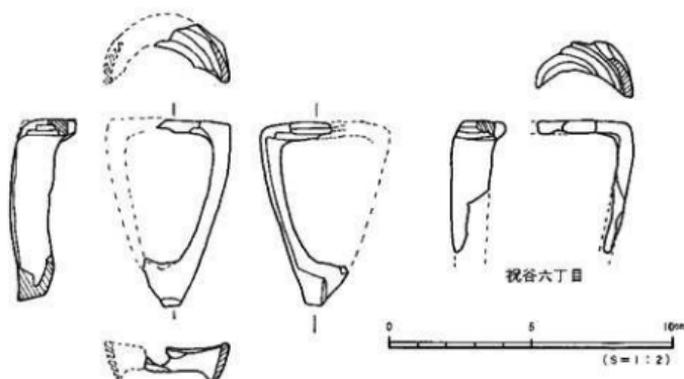
縦形貝輪をⅠ・大友a型、Ⅱ・大友b型、Ⅲ・二塚山型、Ⅳ・道場山型に分け、Ⅰ→Ⅱ→Ⅳの変遷を考えている。そしてその変遷の原則は、ゴホウラ製貝輪の変遷と同じく、幅広のものから、細身のものに変遷するという〔木村 1981〕。本例は、内孔や幅（高さ）が小さいが、木村のⅠ・大友a型に近く、古式のタイプのものとなる。内孔は小形とはいえ、幅（高さ）は中期後半の福岡県道場山のものより大きく、本例は木村がいうほどに古くなる（前期）とは考えられないが、道場山より古式のものである。北部九州において、中期後半には、基本的にイモ貝製貝輪は横型に変わるが、瀬戸内においても、この種のを分厚く切る点に置いて初源性を残し、これを一つの地域性〔木下 1982〕と言いうるが、中期後半にはやはり横型に変化している点と同じである（広島市丸子山遺跡）。先記したように、中期後半の松山平野と北部九州とのルートが立岩を重要な中継点とする内陸交通路を經由したものであるならば、立岩のイモ貝製貝輪は、横型であることからすると、厚み（幅）はともかく当然松山平野にもイモ貝横型貝輪として伝わったであろう。この点、本例貝輪の先記の古式性と合わせ考えるならば、中期後半以前の段階に置かれたのを糧とする貝輪型式からみた所見となる。西瀬戸内における本例の出土は、イモ貝縦型貝輪の分布が言われるように地域的に限られたものでないことを示している。

大友a型は五島列島（大浜遺跡）と西北九州東部の佐賀県大友遺跡に出土している。これらと本例の間を結ぶ資料は現在出土していない。同様の例は、ゴホウラ製貝輪の大友型が大友遺跡と中を空白にして、広島県中山貝塚に出土して〔木村 1980〕いるのにも見られるが、にもかかわらず前期段階に両者を結ぶルートがあったことが知られる。前期から中期にかけて、土鍾、結合式釣針など玄海灘と西瀬戸内を結ぶ道具の共通性が知られており、弥生時代の前半段階は、拠点間をつないで行く、海上交通が彼我の間の主要交通であったであろうか。本例貝輪が、中期中葉以前にのぼせうるものであるならば、他の文物と共にこのルートで伝わったものと考えられる。

弥生後期になると、凹線文土器は退潮し、その前半期はよく判らないが、遅くとも中葉以後には複合口縁壺形土器が出現定着し、松山平野、周防、東北部九州、東部九州（別府湾沿岸）の西瀬戸内圏で地域文化圏が形成される。各小地域の複合口縁壺は個性をもち、他の小地域と複雑に入り組んでいるが、松山平野のそれは、周防に親縁性をもっている。

北部九州からの文物の東伝は難起され、板状鉄斧や瀬戸内では出土例がまだない鉄鎌（松山市福音小学校遺跡）、鉄鎌などの鉄器が伝えられる。

船載鏡は、朝鮮・中国での社会的混乱によって日本への鏡の供給が困難となり、そのため北部九州では、少数の完鏡を分割して各地に配するようになるので、瀬戸内は分割鏡の分布地帯となる。松山平野でも3例の分割鏡が出土し（松山市文京遺跡、祇部町水満田遺跡、松山市上野土壇原Ⅳ 385 壺）ている。瀬戸内において、平野3例の出土数は日を引く出土最で、大陸文物の先取の人手地帯の座を確保しつつづけている。北部九州では船載鏡の入手不足



第72図 松山平野の貝製腕輪

を播うため、福岡平野で小形仿製鏡を生産、配布するが、BⅡ式の弥生小形仿製鏡が松山市居相遺跡に出土している。このような舶載分割鏡主、国産仿製鏡従の組成での出土は、北部九州の東部外縁地である東北部九州、東部九州と同様で、これらの延長上に鏡が伝わったことを示している。

このほか、弥生か古墳かは特定できないが、貸泉（松山市樽味立浜）も出土している。

以上のように松山平野は、弥生後期にいたるも、瀬戸内における西側文化受容の門戸として、大陸系、北部九州系の文物を先取的に確保しつつけてきた。

そうした一方、後期後半から終末にかけて瀬戸内在地文化の急速な抬頭に伴って、瀬戸内の地域色も鮮明にしてくる。それが平形銅剣の出現で、松山平野には平形銅剣最終段階の平形銅剣新式が瀬戸内では最も多く集中出土する（22本）。一方それ以前の、北部九州系の中広銅矛は、香川県高松市付近まで展開していたが、平形銅剣新式段階に伴行する広形銅矛は、松山平野に1本残すだけの（伊予市上野）退潮である。そしてそのころ、北部九州は周防灘・別府湾沿岸に逆に広形銅矛を集中させており、西部瀬戸内において、広形銅矛と平形銅剣が対抗的動きを示すようになる。このように、弥生終末期においての松山平野は、一方において大陸・北部九州系の文化・文物受容の門戸として、他方において瀬戸内文化圏（青銅祭器にもとづく政治圏）の西端にあって九州文化圏と対峙する二律背反の情況の中に置かれているのである。この弥生後期の瀬戸内文化圏の形成をどの地域が主導したのか、平形銅剣の密集地がただちに生産地とは言えず、その生産地を示す鋤型の出土が期待されるのである。

### 3. 道後城北遺跡群

文頭に記したように、松山には6つの遺跡群がある。Ⅰ・和気遺跡群、Ⅱ・三津遺跡群、Ⅲ・道後城北遺跡群、Ⅳ・久米遺跡群、Ⅴ・砥部遺跡群、Ⅵ・伊予遺跡群である。

縄文晩期後半の初期稲作伝来期の遺跡は、Ⅰ（大瀧遺跡）、Ⅲ（文京遺跡、南海放送）、Ⅳ（片廻り遺跡）に出現し、それに後続する板付Ⅱ式は、全貌が把握しえていないⅥを除くと、すべての群に広がっている。

この時期にあって注目すべきことは、有柄式磨製石剣が連在的に出上ることである。朝鮮半島や北部九州にあって、この時期唯一の副葬品として、被葬者の優位性を示すこの石剣は、松山平野においても、副葬品または埋納祭器として特殊な価値をもち、これらはⅥの伊予遺跡群に集中して出上る。この群が、集落実態をほとんど明らかにしていないのは遺憾の限りであるが、縄文晩期後半～弥生前期段階の松山平野内の先進遺跡群として今後、さらに注目すべきであろう。他の遺跡群には、石剣より社会的価値が低い柳葉型磨製石鎌（ⅠまたはⅡの山越遺跡、Ⅱの道後城北遺跡、Ⅳの来住遺跡）が出上り、Ⅵ遺跡群と対称をなしている。

前期末～中期後葉になると、前期的体制に変動が生じ、Ⅲ・道後城北遺跡群に外来系遺物が集中するようになる。これを代表するのが、祝谷六丁場遺跡で、片刃板状鉄斧、石戈（B型）、大形石庖丁（D型）があり、この遺跡の直近の祝谷六丁目遺跡にも大形石庖丁（C型）が出上っている。ことに、鉄器は、この段階の出土例は本遺跡のみである。型式からのみ判断すれば、この期に属するかと考えられる。祝谷六丁目のイモ貝椗型貝輪も道後城北遺跡群に属し、道後城北遺跡群が、この時期の主導的立場を占めるようになる。

この群に次ぐのが、Ⅳ・久米遺跡群で、松山市竹ノ下、同畑寺竹ヶ谷、同久米窪田に石鎌各1が出土し、同平井占市には石戈1（B式）が出土するなど、周防瀬沿岸系の文物が出上っている。

中期後半も道後城北遺跡群の優位性は動かず、文京遺跡では板状鉄斧、鉈、鉄鎌が出土し、形態は不明であるが、多くの遺構に鉄器が伴うなど、新来の文物がこの群に集中している。また当時の最高の政治的威信財である前漢鏡（「日光鏡」）が出土したのも、この群に属す松山市若草遺跡である。多くの鉄器を出土した文京遺跡では、壑穴式住居址が密集するのはもちろん、大型掘立柱建物、方形周溝状特殊遺構が出上っている。

鉄器は、平野全体にも浸透を始め、Ⅴ・砥部遺跡群の松山市釈迦面山遺跡はこの期にはまだ全国的に珍しい鉄刃農具と刀子をもつにいたっている。

この他、中細銅矛の中でも後出の銅矛が平野最奥の川内町泉原に一点ある。所蔵者である渡辺家の小銅内より見つかったもので、その由来は明らかでない。中細銅矛は、前記のようにこの時期瀬戸内の両岸に、点々と出上り、松山平野に出上ることは奇異ではない。ただし、この川内町にはわずかに回線文期の土器が出上っているものの、遺跡群として設定できるような時間的・空間的遺跡遺物の展開は見られず、今後の解明を待たなければならない。

としても、こうした現状からすれば、この中細銅矛が、川内町から出土したものと断定するには、今一つ躊躇せざるを得ない。平野内の他の有力遺跡群からの出土の可能性も考慮に入れておいた方がよいかも知れない。

後期前半期は平野全般においてよく判っていない。その中において、Ⅲ・道後城北遺跡群の文京遺跡は、この期の直径12mの三段床をもつ人型の竪穴住居址(文京7次)、祭祀的土器を多数間溝内に残す円形間溝状遺構(文京10次)など特殊な遺構を出土して、突出した集落の様相を想定させる。

後期中葉から終末にかけては、やや出土資料は豊かになり、各遺跡群の性格と平野内の位置はやや明確になる。

Ⅲ・道後城北遺跡群には、前漢末かと考えられる小形中国鏡の分割鏡(鏡片)が文京10次に出土し、中期後半の若草遺跡出土の完形日光鏡に次いで、船載鏡の先取の入手地の位置を継起している。

一方、この期の瀬戸内海からは、先記のように、突線鈕式銅鐸や広形銅矛などの外來形の国産青銅祭器は後退し、代って瀬戸内産の平形銅剣が瀬戸内の東・西・北に広く拡張分布し、内海の西端に位置する松山平野も当然その圏内に含まれて行く。こうした平形銅剣拡散の中において、最も多量に出土するのが松山平野で、合計22本を数える。その内訳は、松山市道後一万10、道後樋又8、道後湯築3、祝谷六丁場1で、これらはすべてⅢ・道後城北遺跡に集中している。これらの青銅祭器出土地の政治的立場は、マクロ的には平形銅剣生産地との関係で決まるが(現在のところ厳密には不明)、いずれにしろ地政学的な要衝地に出土し、その中でも有力集落と深い関係をもつものと考えられる。こうした考え方からすると、中期以後、この平野の先進集落の位置を伴ってきた道後城北遺跡群は、なおこの期平野の中核的立場を占めていたものといえる。

他方、他の遺跡群も、群ごとの定着的集落が確立し、群ごとの政治的な結集も進行して行く。Ⅳ・久米遺跡群においては、船載分割鏡より政治的価値は一ランク下降するとはいえ、居相遺跡より仿製小形連弧文鏡BⅡ式一面を出土している。近年の調査では、福音寺小学校遺跡から、後期中葉～後葉の長さ120m以上のV字形条溝が出土し、瀬戸内初出の大形鉄鎌を供えた大形祭祀遺構も出土している。こうした集落実態と遺跡の密集度からすると、将来、この群にも分割鏡の出土が期待される。

V・砥部遺跡にも、方格乳文鏡(土壇原Ⅳ・38号墓)と前漢末鏡か小形長寛子係系連弧文鏡の鏡縁の分割鏡二面が出土し、この群も一定の政治的レベルに高まった集落群に成長していることを示している。

Ⅱ・三津遺跡群は、上記のような政治的文物の出土をみないが、津田島越遺跡では、終末期～古墳初期の土器に伴って、石製・土製の大型有溝石鎌が一定量出土し、この群の海洋的性格を顕わにしている。この群には、古墳初頭期の多量の畿内系・山陰系の外來系土器と在

地土器を出土する宮前川遺跡や鏡二面、柳葉形銅鏃多量を副葬した初期古墳の朝日谷前方後円墳など古墳時代前期に遺跡・遺構が顕著となる地域で、立地の海洋的性格と絡んで、初期古墳時代解明の要衝地となっている。

集落実態はほとんど不明であるが、興味ある文物を出土したのがVI・伊予遺跡群である、伊予市上野の広形銅矛1の出土がそれで、山塊の中腹より出土した。この地は松山平野の中にあって、平野西南で、西九州より来航すれば出入口にあたる。この時期、広形銅矛と平形銅劍は、その分布領域をめぐって拮抗関係にあり、瀬戸内において退脚する広形銅矛の内海唯一の砦となっている。広域的には、周防灘・別府湾と松山平野において、広形銅矛と平形銅劍は対峙するのであるが、ミクロ的には、松山平野の南と北において両者は対置する状況を示している。稲作伝来期に、大陸・北部九州系の祭器である有柄式磨製石劍が、この広形銅矛と同様の立地でまず集中出土したのがこのVI・伊予遺跡群であることを思い起こせば、西方文化の進出期と後退期にこのVI・伊予遺跡群が深く関係しており、ここに本遺跡群の歴史的役割を伺覚する思いがする。このことは、単に松山平野のみならず、内海における北部九州と瀬戸内文化の消長を占う鍵を握っており、今後より一層重視しなければならない遺跡群といえよう。

## 〔註〕

- (1) 型態は大形石慮丁であるが、実寸は通常の石慮丁に近い。

## 【文 献】

- |             |      |   |
|-------------|------|---|
| 愛媛県史編さん委員会  | 1986 | 『愛媛県史 資料編 考古』                               |
| 木下尚子        | 1982 | 『弥生時代における南海産貝製輪軸の生成と展開』森貞次郎博士古稀記念「古文化論叢」    |
| 木村 幾多郎      | 1980 | 「所謂広田型貝輪の細分について」九州大学文学部史淵117輯               |
|             | 1981 | 『装身具』『大友遺跡』呼子町文化財調査報告書第1集                   |
| 清水宗昭        | 1988 | 『大分県大野郡千歳村出土の磨製石劍について』九州考古学53号              |
| 下條 信行       | 1977 | 『九州における大陸系磨製石器の生成と展開』九州大学文学部史淵114輯          |
|             | 1982 | 『武器形石製品の性格』平安博物館研究紀要第7集                     |
|             | 1991 | 『北部九州弥生生中期の「国」家問構造と立岩遺跡』児島隆人先生古寿記念論叢「古文化論叢」 |
| 十 亀 幸 雄     | 1986 | 『松山市平井町古土出土の石代』古代学研究112                     |
| 谷 芝 倫 郎     | 1989 | 『分銅形土製品にみる地域相』花園史学10号                       |
| 永 嶺 正 秀 ほか  | 1985 | 『下神田遺跡』行橋市文化財調査報告書第17集                      |
| 乘安和 二三      | 1979 | 『井上山』防府市土地開発公社                              |
| 前田 耕次 ほか    | 1987 | 『岡山遺跡』山口県埋蔵文化財調査報告書第99集                     |
| 松山市資料集編集委員会 | 1980 | 『松山市史料集。第1巻考古編』                             |

# 圖 版



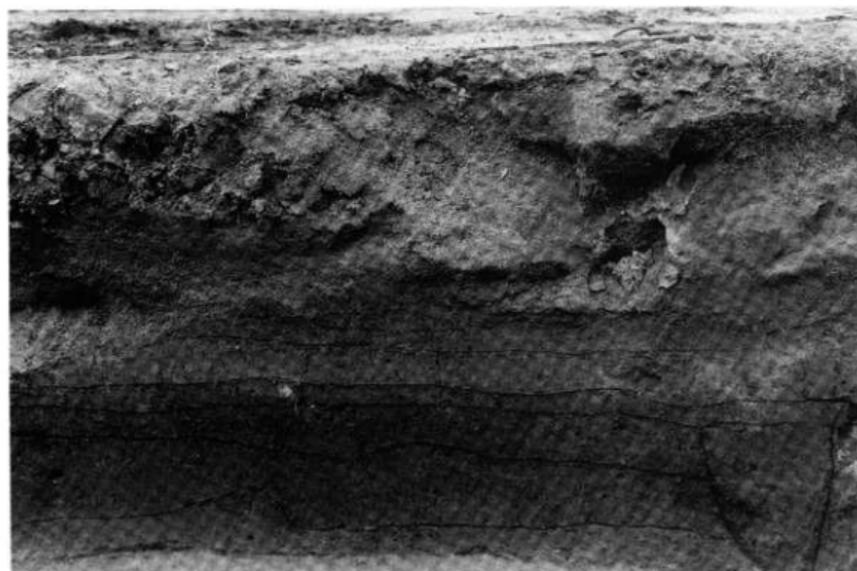
1. 松山大学構内遺跡全景 (南より)



2. 調査区全景 (北東より)



1. 遺跡遺存状況（北東より）



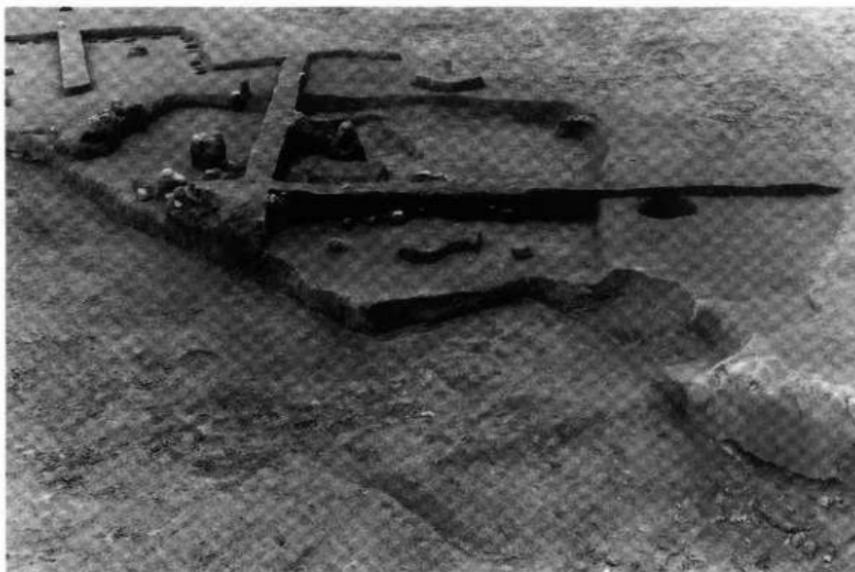
2. 西壁土層（東より）



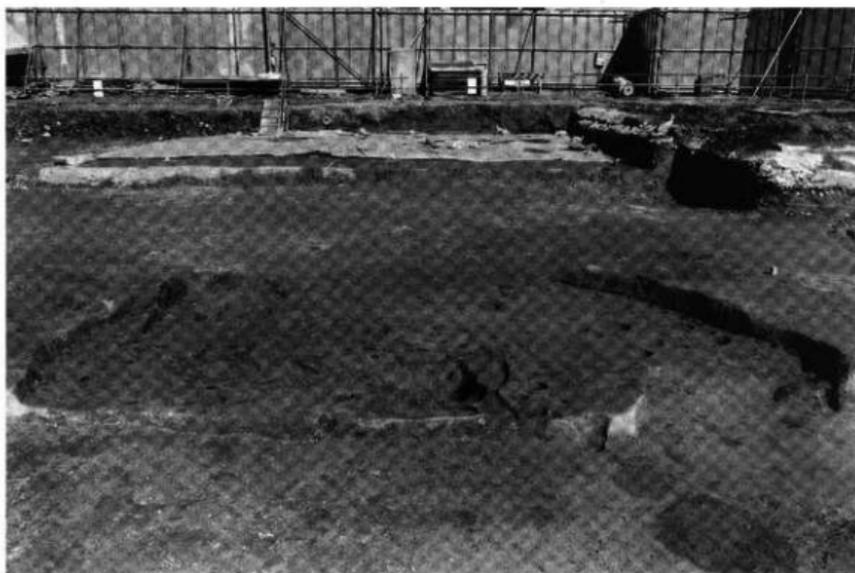
1. 遺構検出状況（東より）



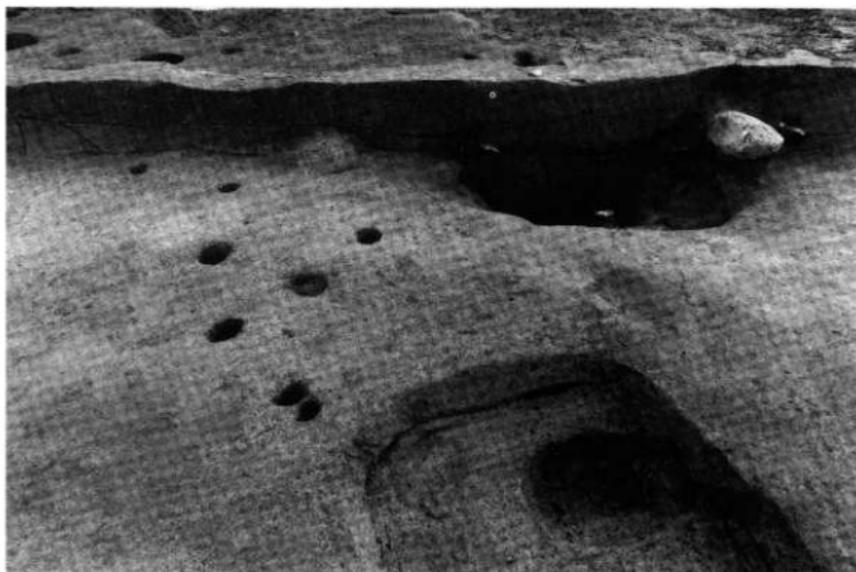
2. 遺構検出状況（北東より）



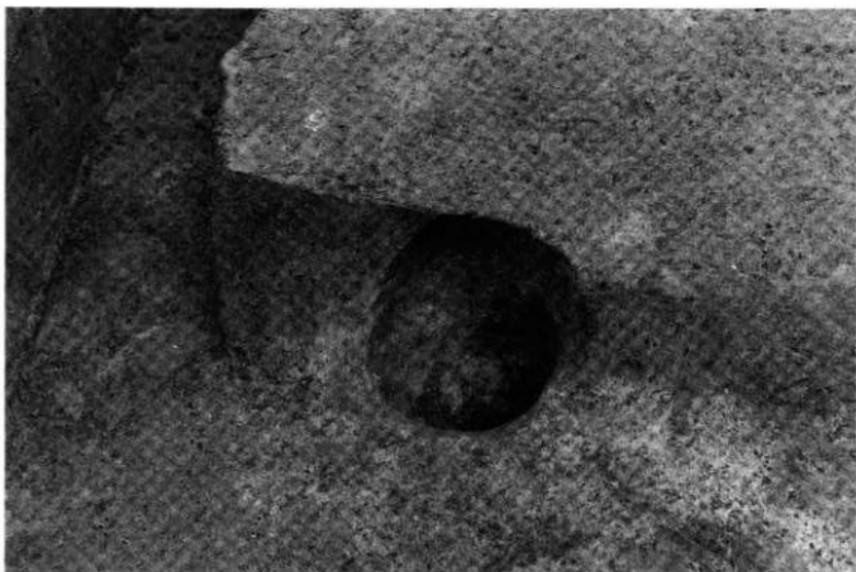
1. SB2 (左)・SB3 (右) 遺物出土状況 (南西より)



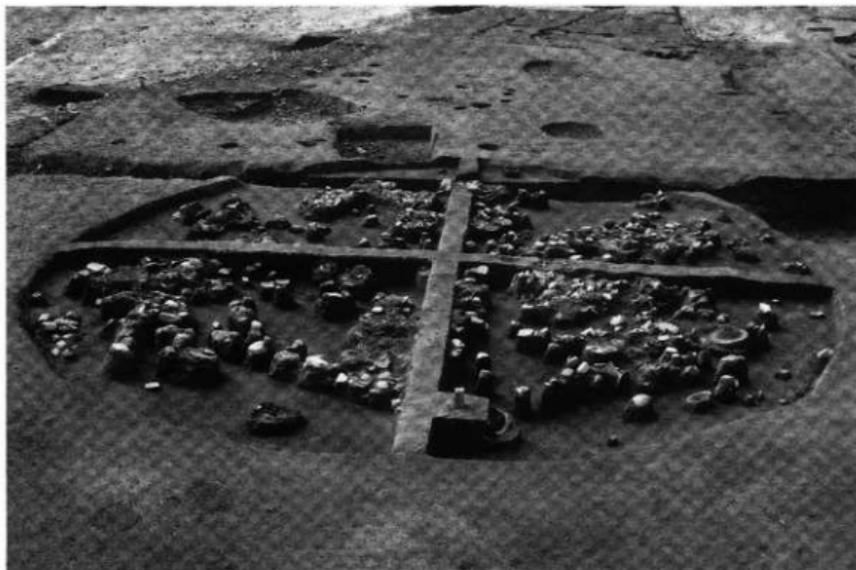
2. SB3 (南より)



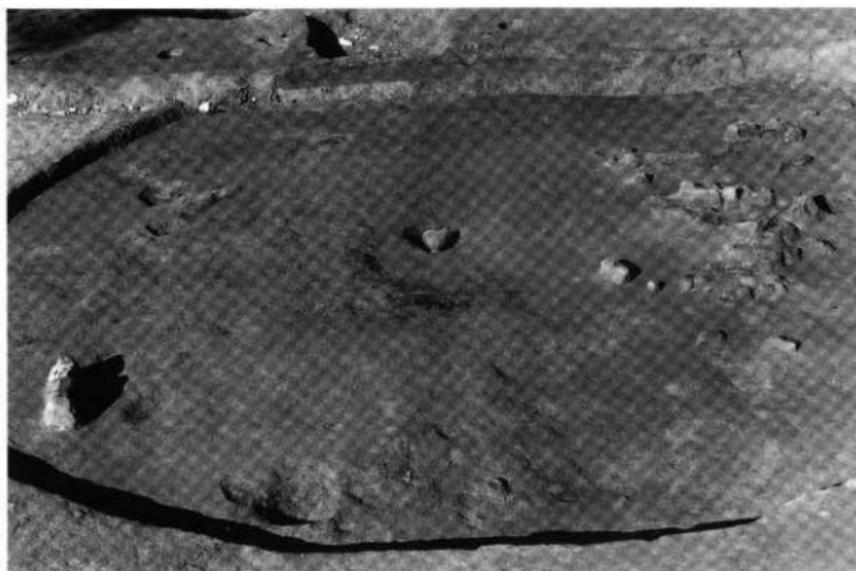
1. SB3 断面土層 (南東より)



2. SB3 柱穴 (南より)



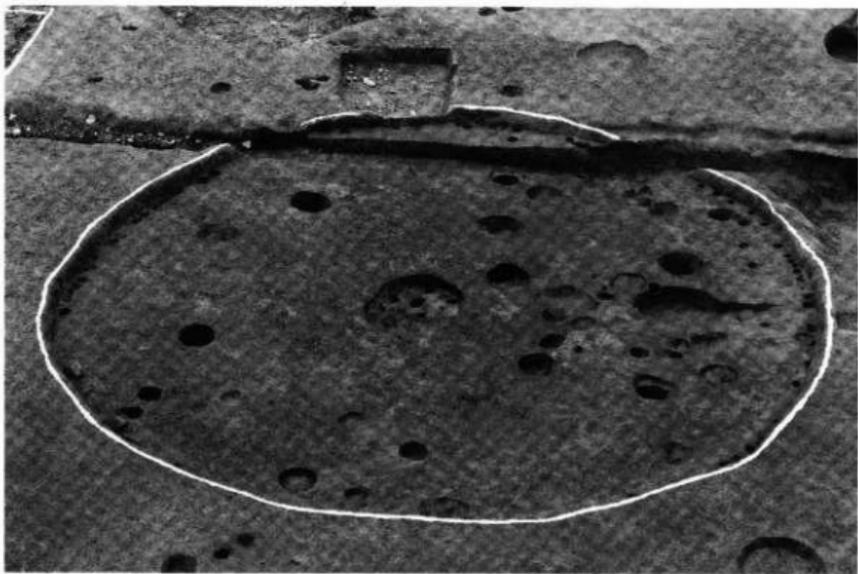
1. SB7 遺物出土状況〔遠景〕（東より）



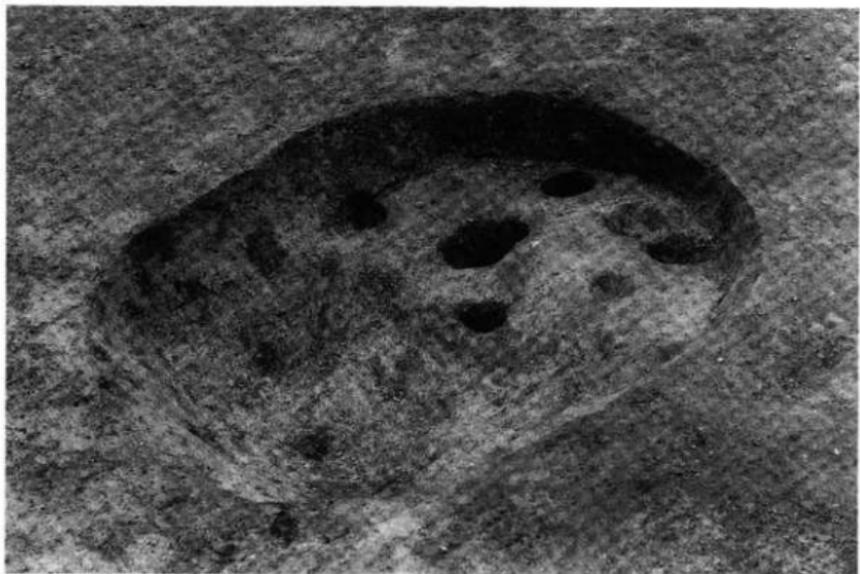
2. SB7 炭検出状況（東より）



1. SB7 遺物出土状況（近景）（南西より）



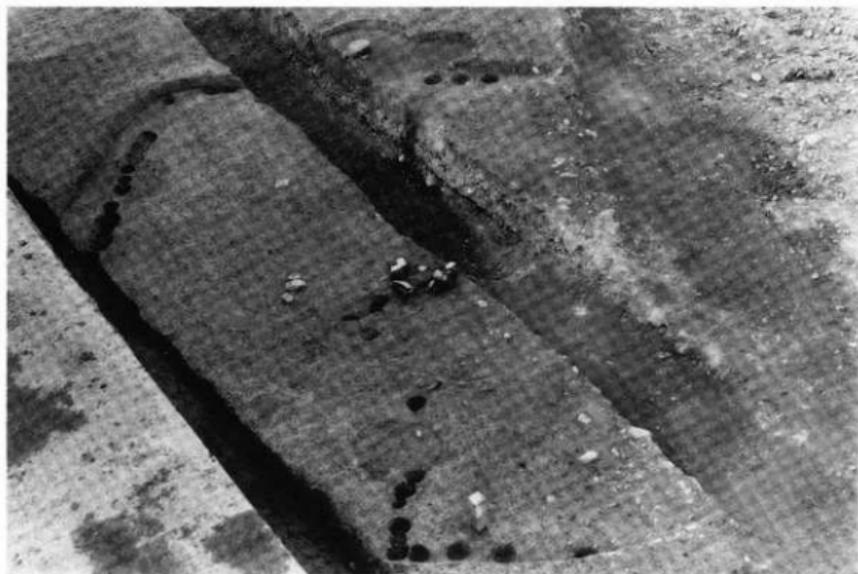
1. SB7 (東より)



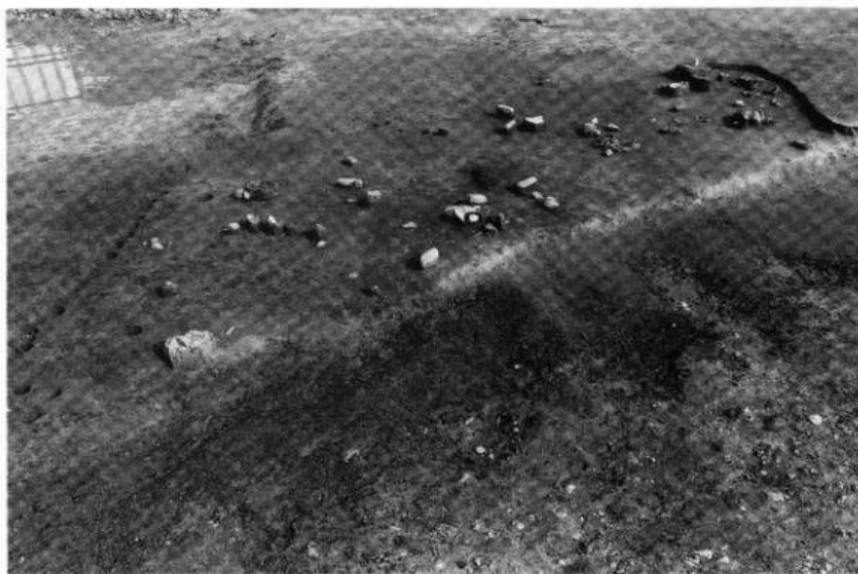
2. SB7 炉 (北東より)



1. SB10 遺物出土状況（北東より）



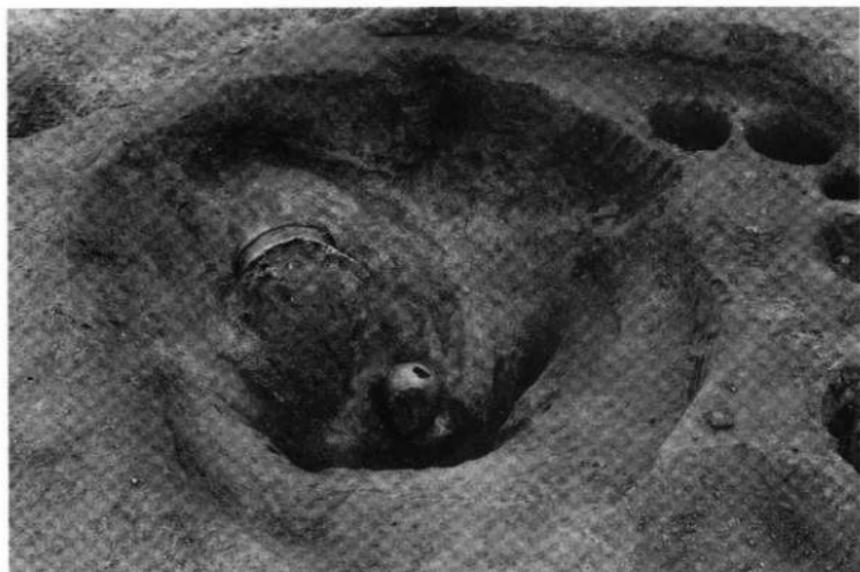
2. SB10（南東より）



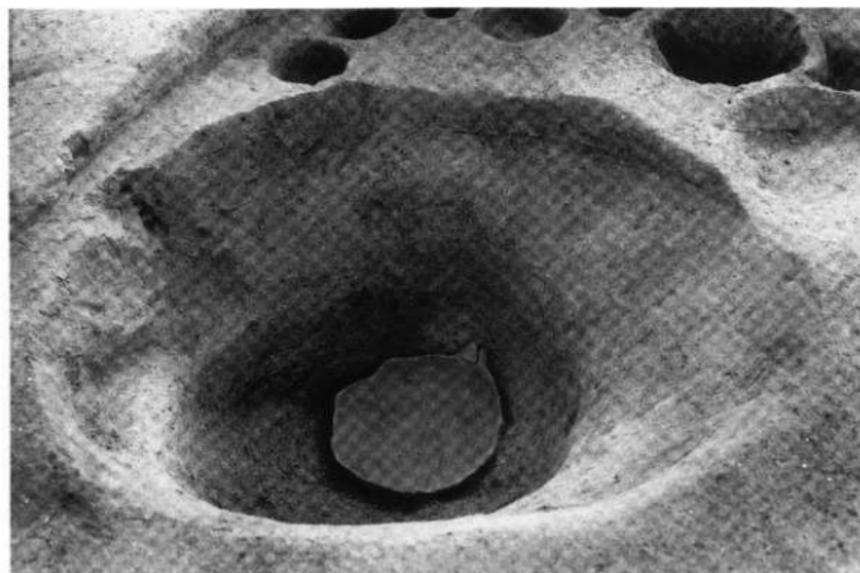
1. SB1 遺物出土状況 (南西より)



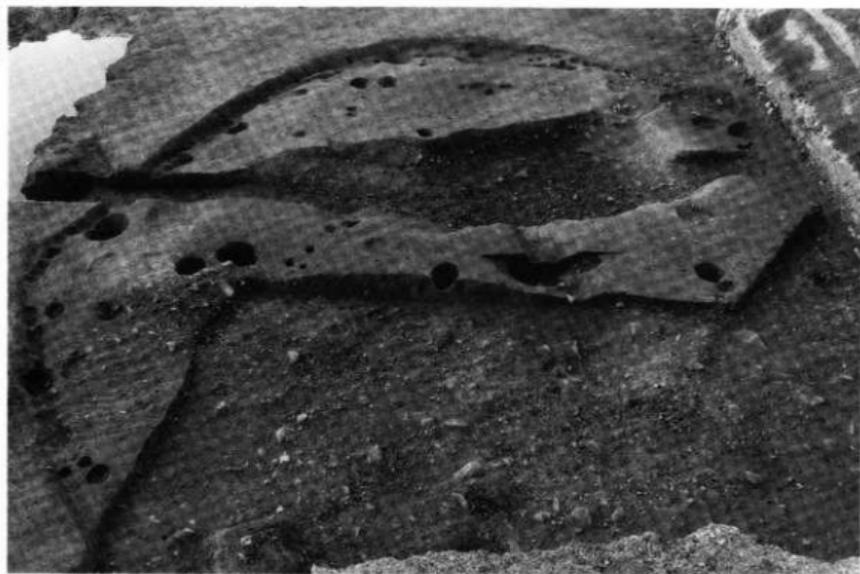
2. SB1 (南西より)



1. SB1内 SP12 遺物出土状況 (南より)



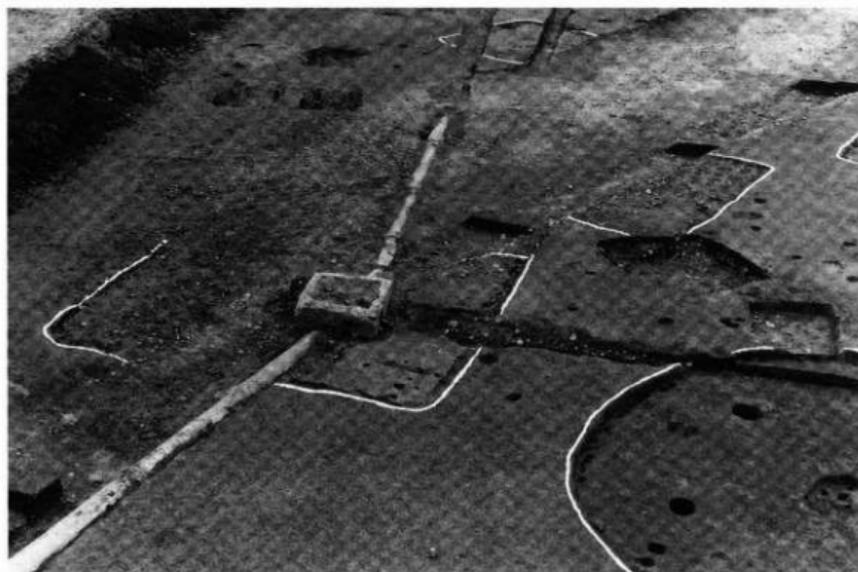
2. SB1内 SP12 (南西より)



1. SB4 [上] SB13 [右] SB14 [左] (東より)



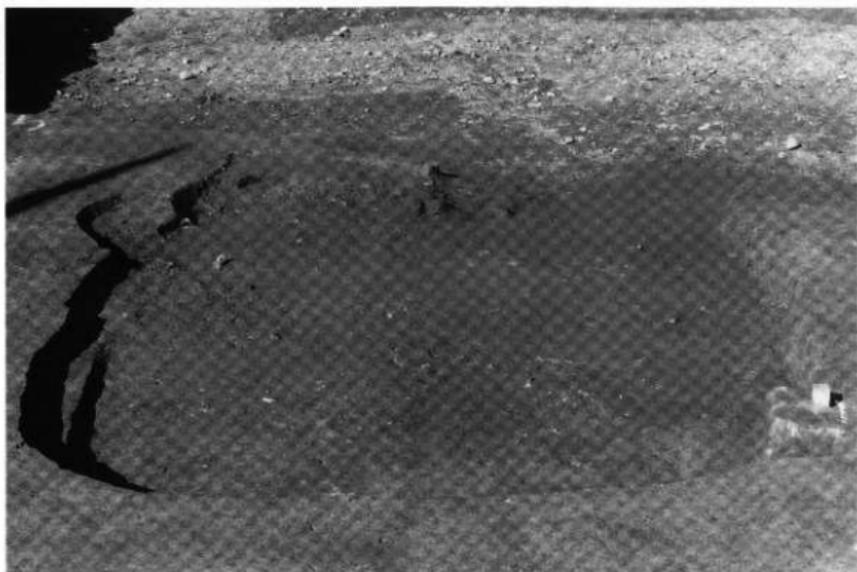
2. SB14 遺物出土状況 (東より)



1. SB11 [右] SB12 [左] (東より)



2. SB6 [左] SB15 [右] (北東より)



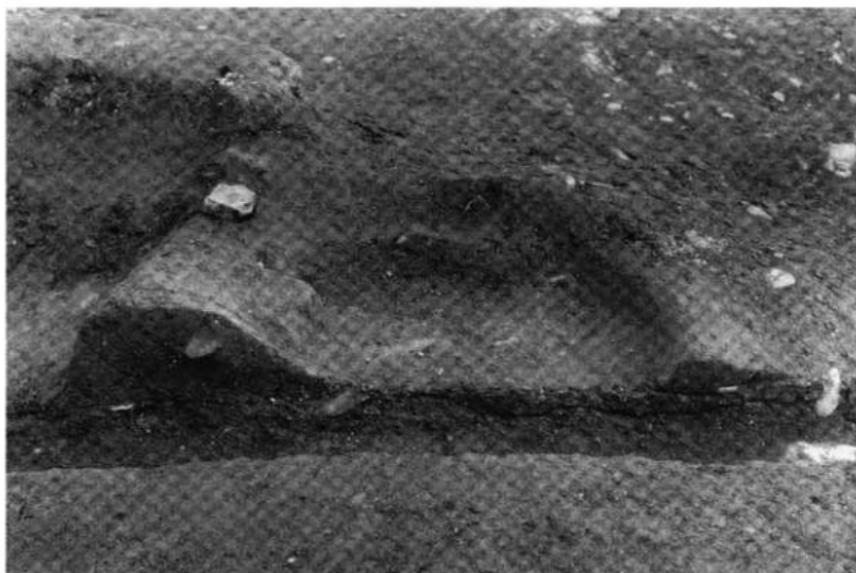
1. SB5 (南より)



2. SB5 カマド① (南より)



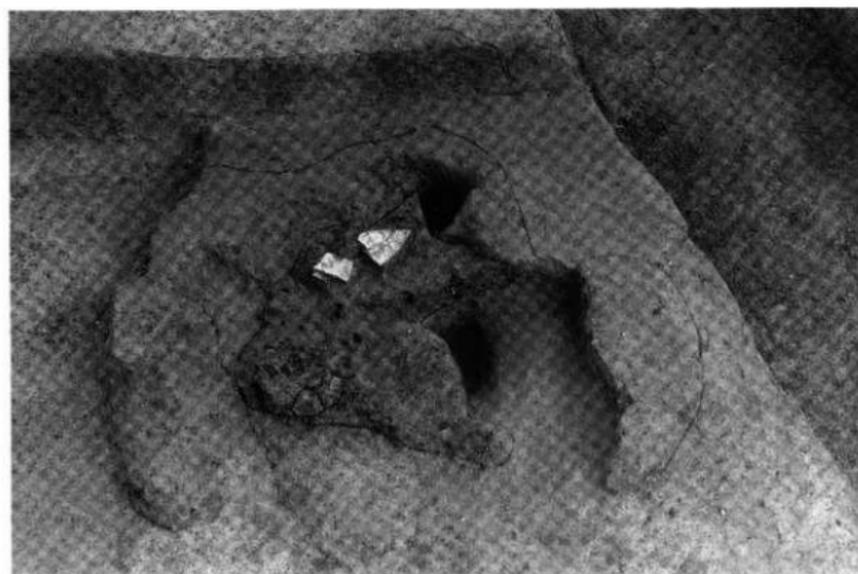
1. SB5 カマド② (南より)



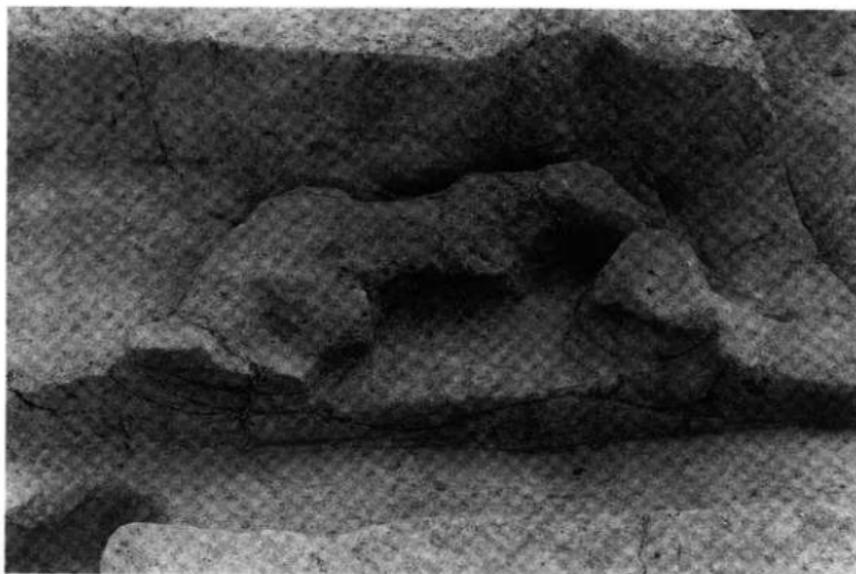
2. SB5 カマド断面 (南より)



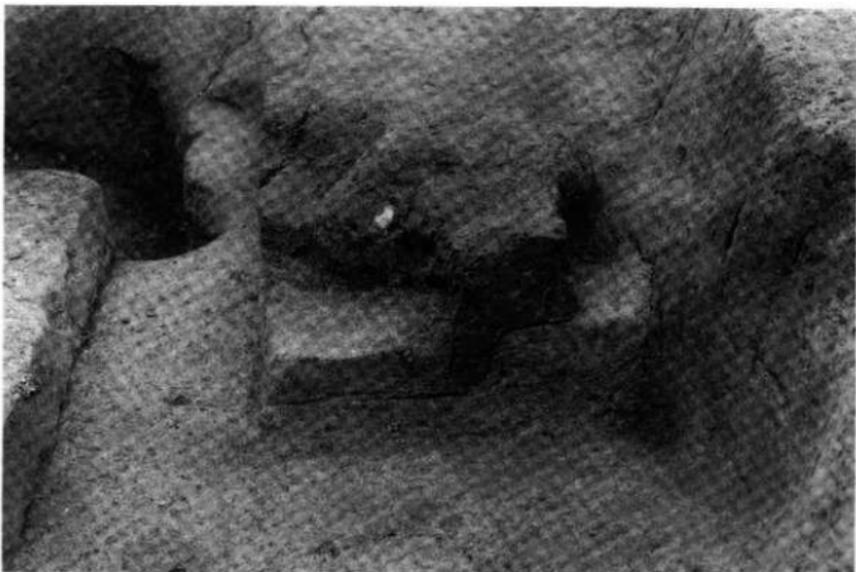
1. SB9 (北西より)



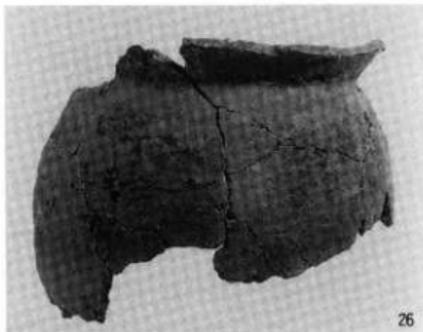
2. SB9 カマド (西より)



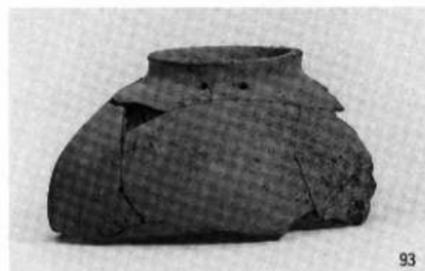
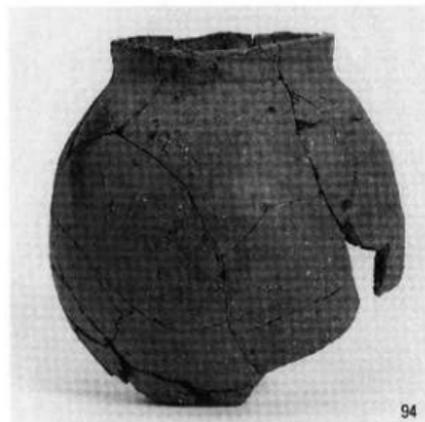
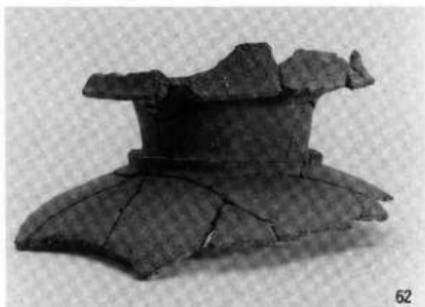
1. SB9 カマド横断面 (西より)



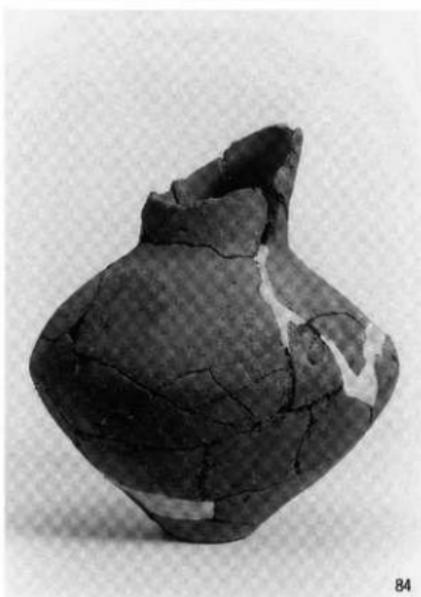
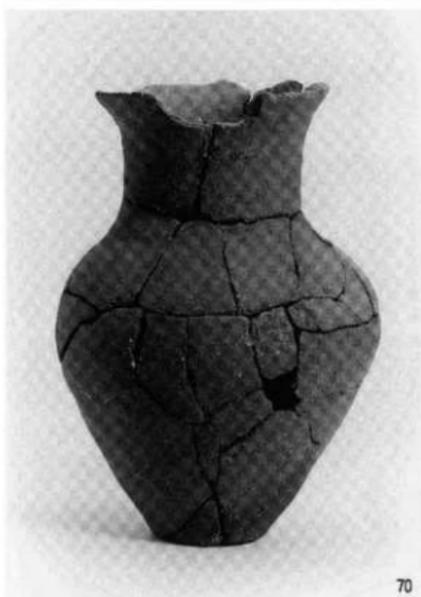
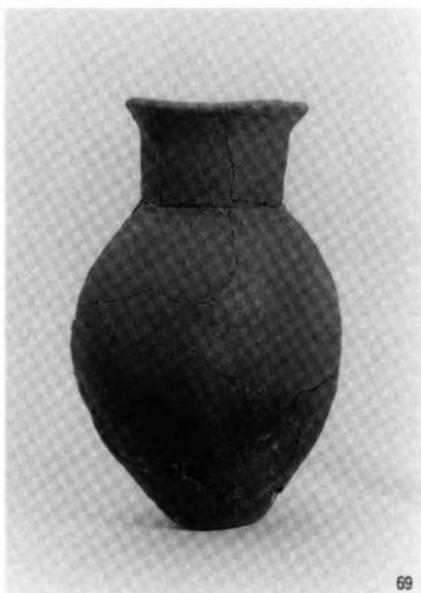
2. SB9 カマド縦断面 (南より)



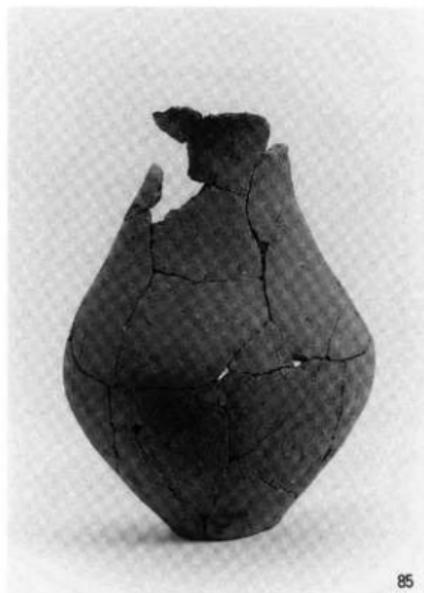
1. SB7 出土遺物(1)



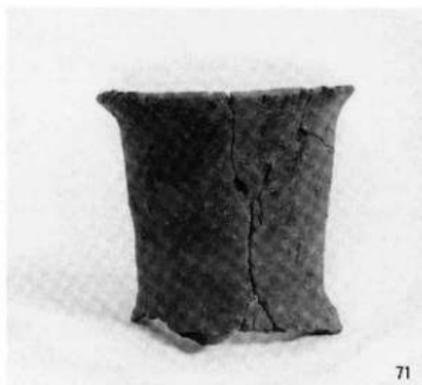
1. SB7 出土遺物 (2)



1. SB7 出土遺物 (3)



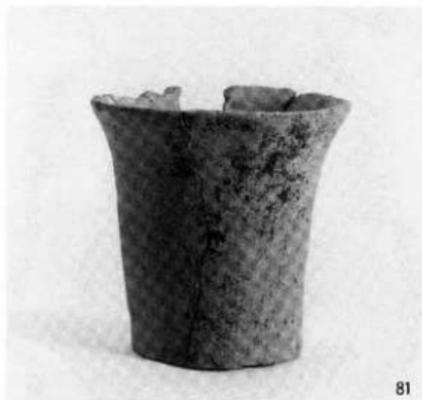
85



71



89

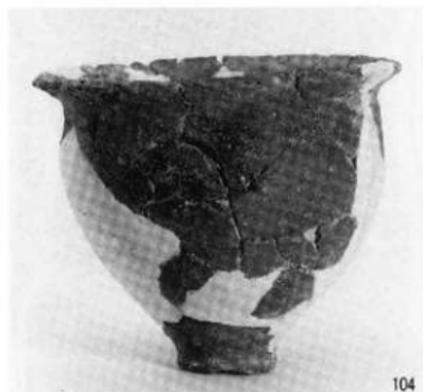
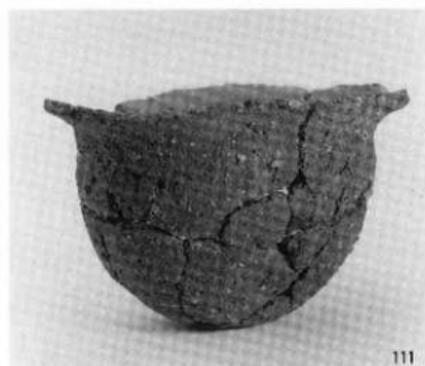
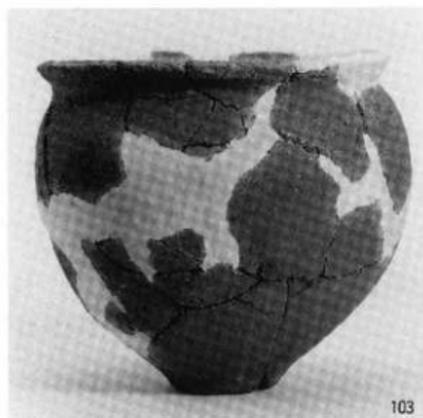


81



83

1. SB7 出土遺物 (4)



1. SB7 出土遺物 (5)



115



119



123



118



126



129

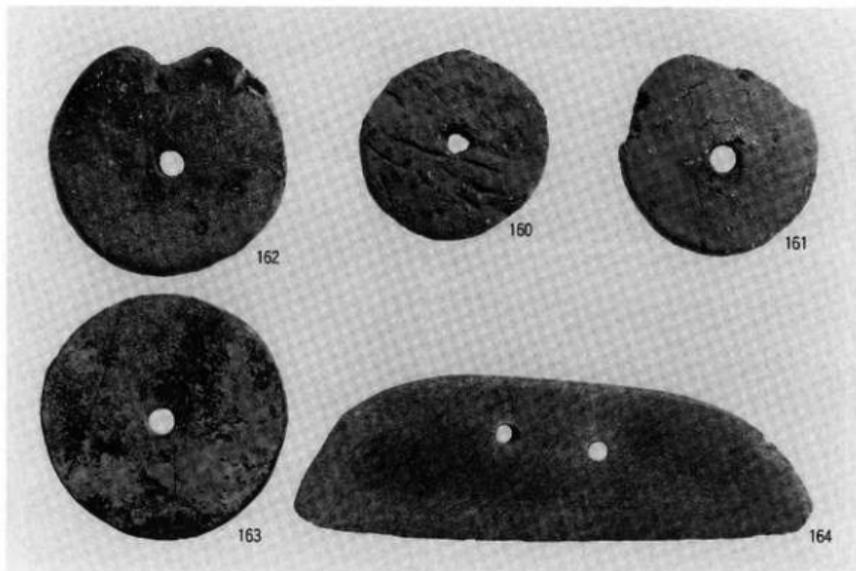
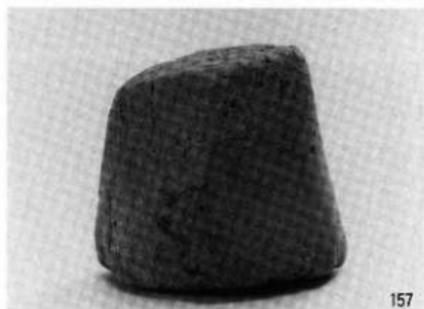


128

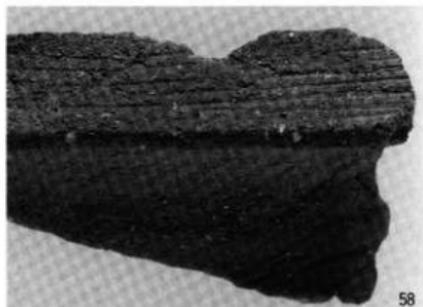
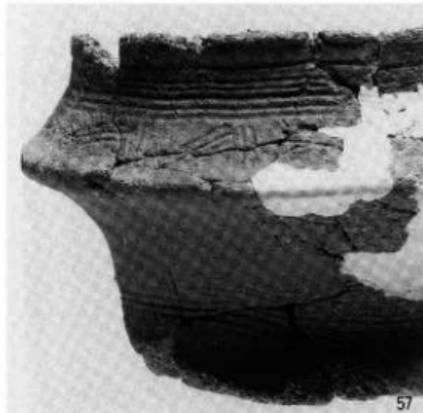
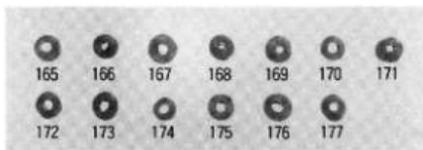


147

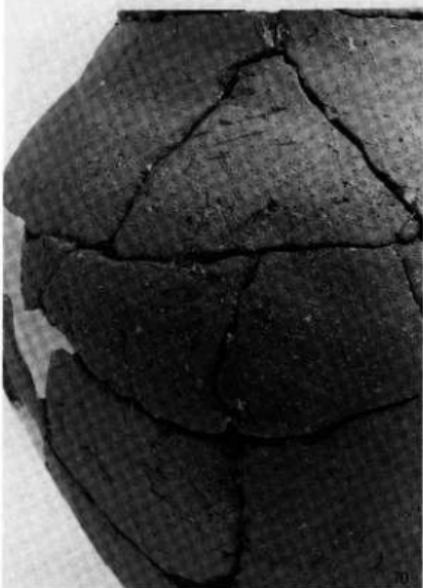
1. SB7 出土遺物 (6)



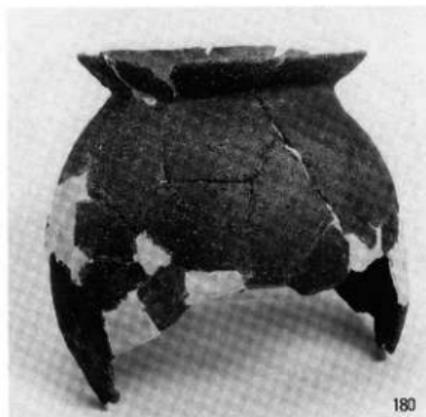
1. SB7 出土遺物 (7)



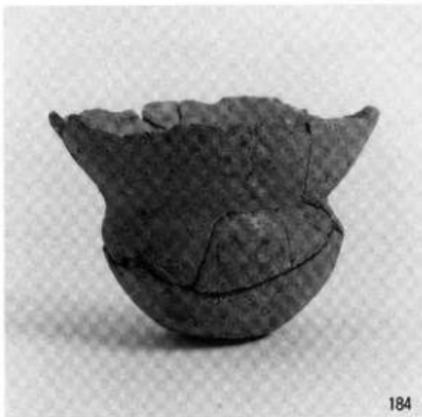
1. SB7 出土遺物(8)



1. SB7 出土遺物(9)



180



184

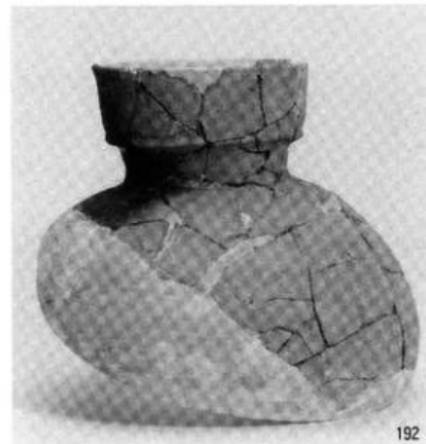
1. SB10 出土遺物



193



201

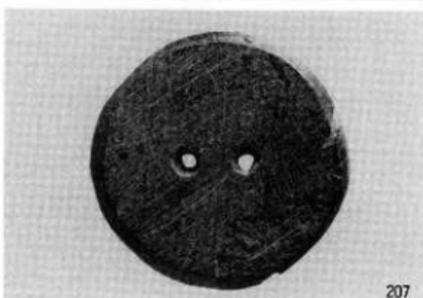
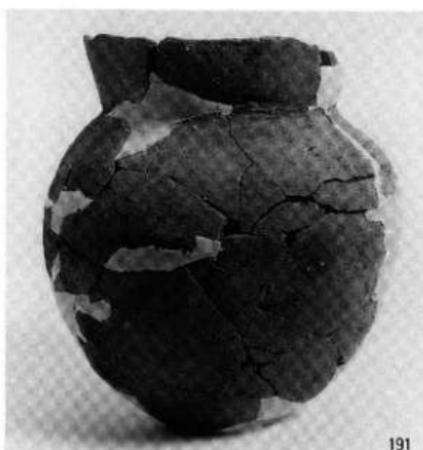
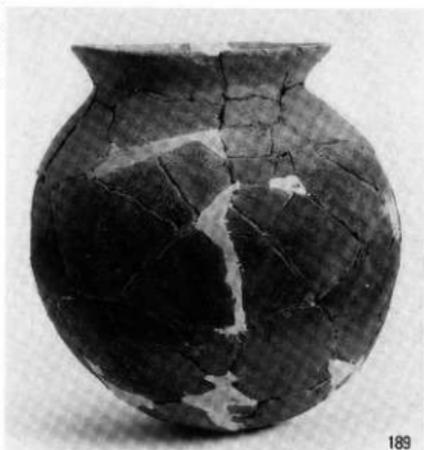


192

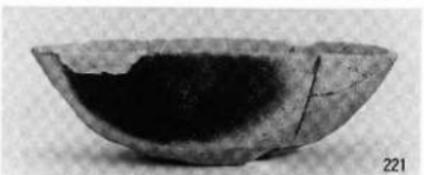


194

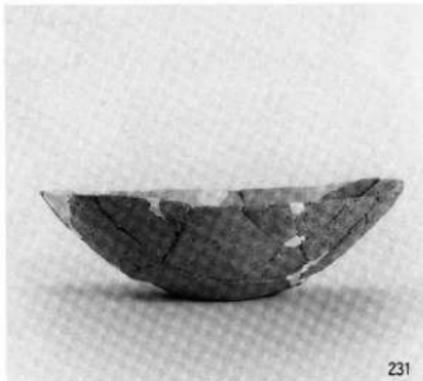
2. SB1 出土遺物 (1)



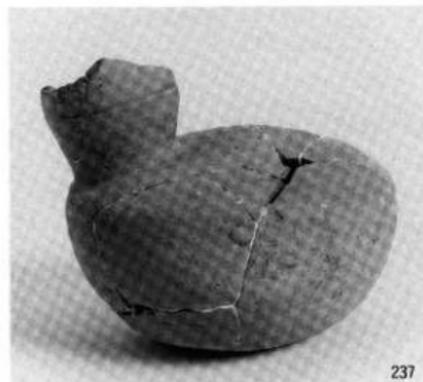
1. SB1 出土遺物 (2)



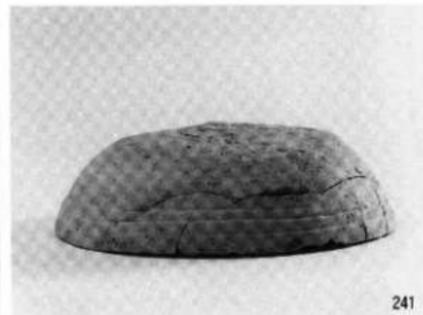
2. SB13 出土遺物



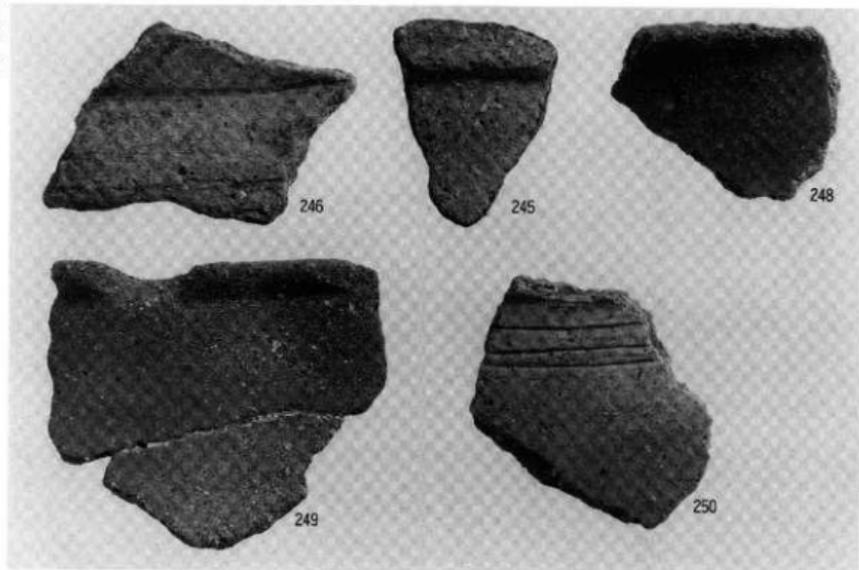
1. SB14 出土遺物



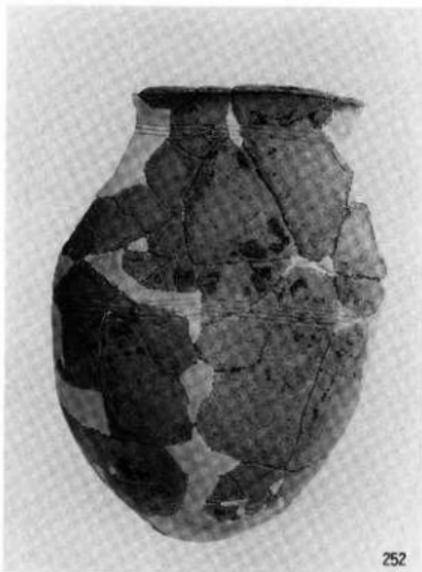
2. SB8 出土遺物



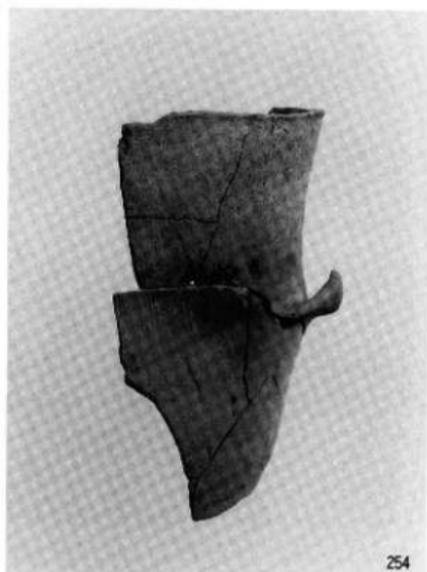
3. SB9 出土遺物

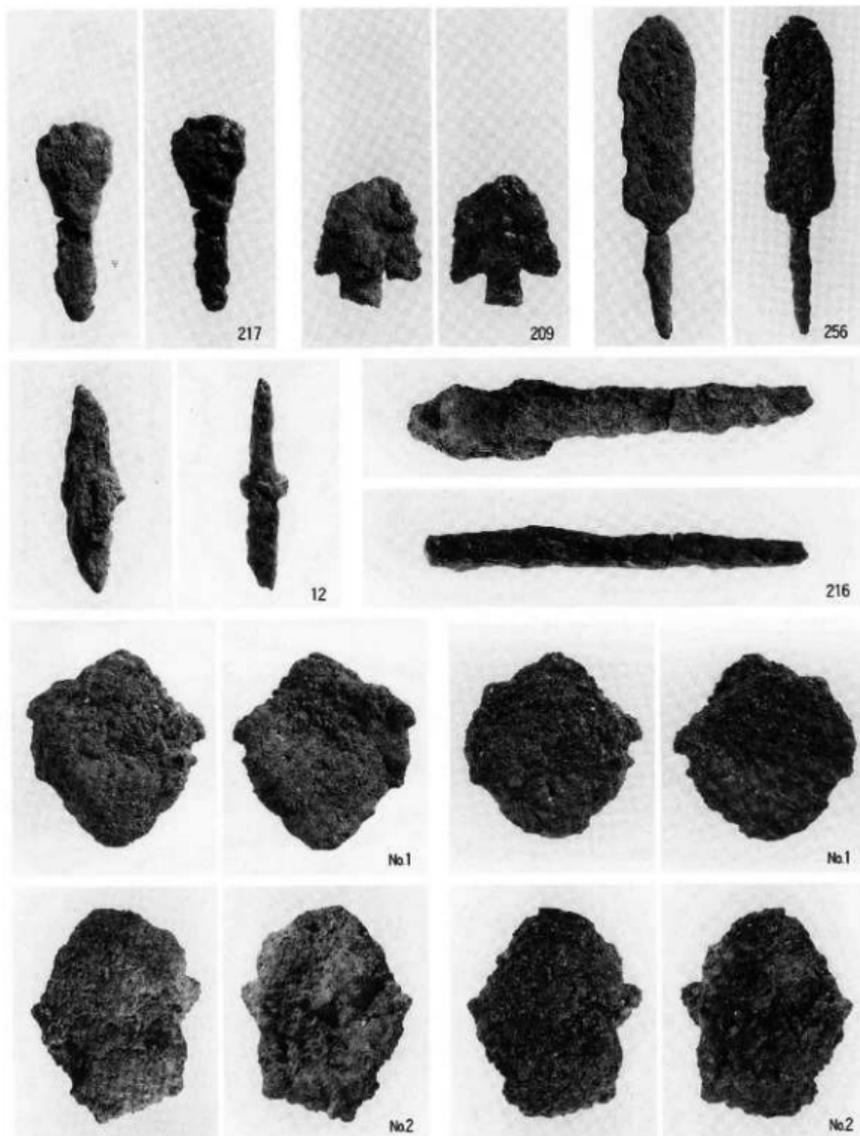


1. 第VI層出土遺物



2. 第V層出土遺物





1. S B 6 出土遺物 (216・217) S B 1 出土遺物 (209) C 3 区出土遺物 (256)  
 S B 3 出土遺物 (12) S B 9 出土遺物 (No.1, No.2) [左: 処理前、右: 処理後]

松山市文化財調査報告書 第20集

---

## 松山大学構内遺跡

---

平成3年3月31日 発行

編集 松山市教育委員会 文化教育課  
松山市立埋蔵文化財センター  
〒791 松山市南斎院町乙67番地6

発行 学校法人松山大学  
〒790 松山市文京町4番地2

印刷 原印刷株式会社  
〒791 松山市山越4丁目8-15  
TEL (0899) 24-8823

---